SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

研究開発実施報告書

平成27年度指定　スーパーグローバルハイスクール　第4年次

平成31年3月

学校法人 創価学園
関西創価高等学校

2018年度SGH研究開発成果集発刊にあたって

関西創価高等学校校長　杉本 規彦

2015年にSGHの指定を受け４年、多くの皆様のご支援とご協力のおかげで、着実に研究開発を進めることができ、2018年度成果集を発刊する運びとなりました。関係する皆様に心より感謝を申しあげます。

本校では開校以来、「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」との信条を、教育の根幹としてきました。SGH事業においても、この信条を基点として「世界市民教育プログラム」の研究開発に取り組んでまいりました。

研究開発構想名は「TRY人の郷・交野から　平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム」です。その概要は、「Active Learning の土台の上に、国連が提起している地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての使命感、共感力、問題解決への創造力を育む教育活動を高大連携して開発する」というものです。

メインプログラムは全校生徒を対象にした探究型総合学習GRIT（Global Research and Inquire Time）と、その集大成たる学年模擬国連です。またSDGｓをより専門的に学ぶため、希望者による課題探究授業として高大連携のUP（University Partnership）クラス、さらに選抜された生徒が全て英語で行うLearning Clusterがあります。国内外のフィールドワークも回を重ねるごとに交流先も広がり、充実した内容となっています。

GRITで取り組んでいる「環境・開発・人権・平和」の4分野は、調べるほど難問ばかり。しかし、一つ一つの課題に真剣に向き合い格闘する生徒の姿に、私たちは大いなる希望を抱いています。世界各地の紛争地帯で活躍された著名な看護師であり、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院のクレア・バーチンガー博士は「グローバルに考え、地域で行動することによって、私たち一人ひとりが変化を生み出すことができます。誰もが山々を動かし、世界を変革する力を持っているのです」と語られています。私たちのSGHでの学びが、自身を、地域を、そして世界を変革していくと信じます。

最後に、本校SGH運営指導委員である梶田叡一先生、米田伸次先生、朝野富三先生、また提携していただいております大学、国際機関、研究機関、企業、地元・交野市教育委員会の皆様、ユネスコスクールの皆様、そして多くのSGH校の皆様に深く感謝申しあげます。

2019年3月16日

報告書　目次

Ⅰ　【別紙様式５】平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要
・・・・・・・・・・・・　4

Ⅱ　実施報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

１　研究開発の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

２　各研究の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
２－１　ＧＲＩＴ（Global Research and Inquiry Time）
２－２　Global Citizenship Seminar
２－３　ＦＷ（Fieldwork LC 東京・東京・広島・アメリカ・東北）
２－４　ＬＣ（Learning Cluster）
２－５　ＵＰ(University Partnership)
２－６　各教科における探究的な取り組み

３　成果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

Ⅲ　関係資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
１　ＳＧＨ中間研究発表会・第一回運営指導委員会議事録
２　ＳＧＨ最終研究発表会・第二回運営指導委員会議事録
３　ＳＧＨ最終研究発表会・第三回運営指導委員会議事録

【別紙様式５】

平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

<table>
<tr><td>指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="4">かんさいそうかこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">大阪府</td></tr>
<tr><td>27～31</td><td>①学校名</td><td colspan="4">関西創価高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">普通科　生徒数 1075 名（2014 年度）
同キャンパスに中学校を併設</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>359</td><td>357</td><td>359</td><td></td><td>1075</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>⑥研究開発構想名</td><td colspan="7">TRY 人(じん)の郷・交野から
平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム</td></tr>
<tr><td>⑦研究開発の概要</td><td colspan="7">Active Learning の土台の上に、国連が提起している地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力を育む教育活動を高大連携して開発する。</td></tr>
<tr><td>⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1 全体</td><td colspan="6">(1) 目的・目標
1600 年前に日本に技術を伝えた渡来人が住み着いたとされる交野。21 世紀はこの交野より世界へ飛び立ち、地球的課題の解決に果敢に挑み、世界の平和に貢献するグローバルリーダーを育成することを目的とする。
SGHA として 2014 年度に取り組んだプログラムをさらに発展させ、創価大学･アメリカ創価大学･オタゴ大学等の高大連携を強力に推進し、UNDP 等国際機関とも提携して、地球の今を学び、体験し、問題解決へ発信する新教育プログラムを作り上げる。

(2) 現状の分析と研究開発の仮説
最近 5 年間における海外大学進学者数の累計は 53 名であり、本校から創価大学に進学した者の 40%は留学等海外経験を行うなど意識は高いが、さらなる語学力の向上や主体的な学びの姿勢を育む授業改革が必要であり、高大連携しての Active Learning、ICT 教育に取り組むことで大きく改善が期待できる。
生徒自ら地球的課題に挑み解決しようとする「使命感」は、第一に世界の現状を知り、苦しみを分かち合う「共感力」の向上の中で培われるものであると信じる。
世界が課題とする「環境・開発・人権・平和」の４分野について、大学、国際機関、企業と提携し、国連が具体的に提起している諸問題を探究し、生徒たちがチームとして新たな視点からその解決を目指すプロセスを確立することとする。
そのため、教育の根幹たる授業において、友と協力し自ら学ぶ学習スタイルを確立することが今後のグローバルリーダー育成の取り組みの土台となるので、Active Learning を全教科にわたり積極的に導入するべきである。その基礎の上に、全員で取り組む探究型総合学習 GRIT での「環境・開発・人権・平和」の 4 分野の学びはより進むものと確信する。さらに興味関心を抱く希望者には、高大連携プログラムとして、SP（SOKA Progress）クラスと呼ばれるグローバルイシューの基礎講座を実施。そこで学びを深めた生徒からさらに選抜して、国際機関と提携しての LC（Learning Cluster）プログラムを行う。

(3) 成果の普及
専用 WEB サイトでの発信とともに、他の指定校と連携しながら、SGH 教育報告会を開催。またオープンキャンパスにおいて、内外に向けた取り組み成果の報告を行う。新たに開発した教材はデジタル化し、広く公開していく。</td></tr>
</table>

	⑧-2 課題研究	(1) 課題研究内容 グローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力の育成を図るため、**「環境・開発・人権・平和」の４分野について国連が具体的に提起している諸問題を探究し、チームとして解決方法を目指すプロセスを確立する。** ※コアとなるグローバルイシューは、「ポスト 2015 開発アジェンダ」の検討内容を中心として各チームがテーマを設定し探求する。 (2) 実施方法・検証評価 **①探究型総合学習 GRIT（Global Research and Inquiry Time）** ○土曜日に実施　○全校生徒を対象　○「環境･開発･人権・平和」の４分野について大学･国際機関･企業と提携し探究活動　○大学院生を各クラスに TA として配置 ○1 年生「環境･開発」 2 年生「人権･平和」 3 年生では模擬国連と論文作成 ○GRIT 講演会 Global Citizenship Seminar を学期毎に開催 ○全員が EarthKAM を体験し、宇宙から地球を見つめる視点を育成 ○「天の川ホタル復活プロジェクト」で自然との共生の心を育む **②高大連携プログラム SP（SOKA Progress ）Class** ○希望者を対象　○グローバルリーダーの資質向上に資する連続講座 ○提携大学･国際機関から講師を招き実施する UP(University Partnership)Class ○2016 年度から単位を付与　○GRIT を推進し、LC へつなぐ **③国際機関と提携して行う先進的な特設プログラム LC（Learning Cluster）** ○2・3 年生の希望者から最大 32 名（2015 年度は 20 名を予定）を選抜 ○4 名 1 チームで 4 分野からコアとなるテーマを設定　○活動の全ては英語 ○創価大学と提携した東京・アジアフィールドワーク ○アメリカ創価大学と提携したカリフォルニア環境人権平和フィールドワーク ○UNDP と提携した開発フィールドワーク **④高大連携で授業改善 ― 友と協力し自ら学ぶ Active Learning を強力に展開** ○全ての課題研究の推進の土台として、主体性あふれる学びの姿勢を築く ○**ICT 教育も同時に研究、推進**　○創価大学教育学部と提携し全教科で導入 **検証評価** 学年･学期毎に SGH 委員会が作成したルーブリック評価を導入し、生徒の変容を評価するとともに、提携大学関係者を交えた評価委員会により行う。 (3) 必要となる教育課程の特例等　なし
	⑧-3 上記以外	(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 **①留学生と地球的課題を語るプログラム Global Camp** **②語学力向上の取り組みを強化** ○Critical Writing Center の設置　外国人講師が face to face で添削指導他 **③世界に、社会に目を向ける NIE（Newspaper in Education）** **④日本人としての identity を育成する Feel Japan Program** ○海外高校生徒との共同生活体験　○留学生への古都案内 ○国語の授業、図書館、クラブでの「日本文化」の深化など **検証評価**　教養とリーダーとしての資質向上を期し、授業連携や読書教育をさらに進める。各種コンテストの参加数、生徒へのアンケートをもって検証評価を行う。 (2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等　特になし。 (3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法 ①校長を長とする SGH 委員会等教職員体制の整備、強化　②保護者の意識変革 ③専用 WEB サイトの開設 ④図書館に「環境・開発・平和・人権」「グローバルビジネス」専用書架の設置　⑤SGH カリキュラムを含め研究開発計画に沿って実施
⑨その他特記事項		提携校の創価大学は SGU であり、本校の研究開発を効果的に進めることができる。

研究開発の概要

（１）研究開発の概要

関西創価高校がＳＧＨを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。Active Learningの土台の上に、全校生徒を対象とした「環境・開発・人権・平和」の４分野について学ぶ探究型総合学習GRIT（Global Research and Inquiry Time)やGlobal Citizenship Seminar、希望者を対象とした知的好奇心を高揚させる高大連携プログラムのUP(University Partnership)Class、希望者から選抜された生徒がオールイングリッシュで徹底した探究を行うLC（Learning Cluster）で、確かな知識と広い教養の涵養を目指す「世界市民教育」の教育課程を研究開発する。

（【別紙様式５】平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要を参照）

（２）本年度の研究開発の経緯

GRIT（探究型総合学習、「環境・開発・人権・平和」について探究）については3年間で行うプログラムをさらに精査し、主体的で対話的な深い学びの中で、世界市民としての使命感・共感力・問題解決への創造力を培う学習内容へと発展させることができた。具体的には、1年生ではSDGsの内容を「地理」で、環境分野の「校内フィールドワーク」は「生物」の授業で行うことにより、より深い学びとなった。また、論理的思考を養ったり、言語技術的な内容を教えるための5行エッセイを「国語」と「英語」で同時に行った。2年生では、プレゼンテーションで必要な「いかに伝えるのか　どのように伝えるのか」という知識と技術を習得するための講義を実施。3年生では「模擬国連」の内容を深めるためのリサーチの時間をGRITの時間だけでなく、「政治・経済」の授業の中で、各自の担当国のリサーチする時間を確保し、政治や経済についてのプレゼン発表を行った。「数学」の授業では、データ分析やエビデンスを示すのに必要な数値を読み取る、統計学を用いた分析の力の育成を行った。「現代文」の授業においては、本校SGHの根幹となる、創立者の平和提言を用いて、論説文の読解力と、表現力を育成する授業を行った。論文作成を踏まえ、アカデミックライティング講座の前には「現代文」の授業でも論文作成の授業を行った。昨年に引き続き、GRITを深めるための教科横断の授業が大きく進んだ。学習評価においても、「政治・経済」の授業の中で、GRITで各国大使としての視線で作成した論文を、ルーブリックを用いて生徒と教師で評価し、成績に反映した。そして作成した論文を基に、「英語」の授業では英語サマリーの作成を行い、その内容を成績として評価した。このように各教科の中でGRITの取り組みを評価できたことで、GRITに取り組む生徒の意識がさらに向上した。

（３）本年度の具体的な取り組み内容

①GRIT

・アクティブラーニングを中心に、本校SGHのテーマである「環境・開発・人権・平和」４分野についてSDGsに照らして全校生徒で探究し、３学期に生徒による成果発表会を行う。

②Global Citizenship Seminar

・国内外の国際機関や大学等の学術機関、社会で活躍する著名人から直接講演を受講。

③LC（Learning Cluster）

・希望者から選抜し、オールイングリッシュによる探究・調査・提言作成を行う。

④SP(Soka Progress)classならびにUP(University Partnership)Class

・希望者を対象にした高大連携プログラム国内外の大学教授などから受講。

⑤FW（Fieldwork　東京・広島・アメリカ・東北）

⑥各教科における探究的な取り組み

GRIT（Global Research and Inquiry Time）

1　２０１８年度 GRIT 概要

２０１４年度に SGH として採択されてから、登校する土曜日を利用し、総合学習 GRIT の授業を行っている。GRIT では、関西創価高校の SGH テーマ「環境・開発・人権・平和」の４分野についての基礎知識をビデオやプリントで学び、フィールドワーク、体験学習を行ってきた。GRIT は全員が４分野について学ぶ、本校の SGH プログラムの根幹となるものである。

１年生では、「環境・開発・人権・平和」の４分野について、概要と体験型授業をもとにグローバルイシューを体感できるようにした。

２年生は、６月に行われる創価大学での研修において、４分野に関する課題研究の研究計画を各分野の専門の教授の前で行った。これは２０１５年度より始めたものである。今年度はさらに、その研究を年間通したものとし、２月に保護者に向けて発表会を行うこととした。その発表をよりよいものとするために、大学院生からのアドバイスをいただく機会を２回持ち、クラスをシャッフルした発表も行った。

３年生では、今まで学んだことを利用し、全クラスを９２ヶ国に分け、模擬国連の形式で交渉を行い、水問題に対する解決案を考案しまとめた。そして、その内容を一人一人が論文にし、英語でサマリーを書いた。

２０１８年度の変更点としては、１年生では「アースカム」「沖縄戦」についての GRIT、２年生の「課題研究」での流れをリニューアルした。

2　GRIT 授業までの流れ

GRIT は土曜日に全学年同時で開催する。授業の担当は、担任もしくは学年担当の教員である。授業考案者や専門の教員が実施しないため、どの教員でも担当できるよう準備に時間をかけている。

流れとして、まず GRIT 担当の教員が授業内容を考案し、SGH 委員会で検討して修正を加える。その後職員会議（学年ごとに内容が違うときには週１回行われる学年会）で、授業を実施する教員に説明し、質問を受けた。その際、授業の内容をまとめ、流れがわかるような指導案も作成した。

指導案を用いて授業を行う中で、担当者がこうしたらいいのではないかと改良をし、フィードバックをすることにより PDCA サイクルが行われ、よりよい授業になっていっている。

3　GRIT リーダー

GRIT の１年生の授業において、フィールドワーク、ディスカッション、体験学習などを行う際には、授業担当者の教員のみではなく、生徒に進行役をさせることがある。この役割を担うのが GRIT リーダーと呼ばれるメンバーである。GRIT リーダーが必要な授業の前に、クラスで募集をし、事前に授業内容に関する研修を受け、生徒が進行を行う。

1　GRIT 授業内容詳細

①　2018/4/14　GRIT ガイダンス

1.1　　１年生　テーマ：「環境」「開発」「人権」「平和」概要

SGH 校に採択されたことを受け、関西創価高校の SGH 構想の説明と、GRIT の意義、４テーマの概略を放送システムで説明した。１年生にはこれからの３年間で学ぶこと、２・３年生には改めて GRIT を学ぶ意味を説明し、考える時間とした。

日付	回	テーマ	詳細
2018/4/14	1	ガイダンス	FW報告・ガイダンス
	2	環境	アースカム
	3	環境	アースカム
4/28	4	環境	アースカム
5/26	5	GCS	夏目 勝弘氏講演
	6	GCS	夏目 勝弘氏講演
6/2	7	人権	ビデオ・世界の人権問題
	8	人権	ポスターツアー
6/9	9	開発	世界が50人の村だったら
	10	開発	SDGs
7/13	11	人権	シナリオディベート
	12	人権	シナリオディベート
7/18	13	GCS	医師　新井 勝大氏講演
	14	GCS	医師　新井 勝大氏講演
9/15	15	FW	インタビューポスター発表
9/22	16	平和	被爆体験朗読会
	17	平和	沖縄戦・米スミソニアン展示
10/6	18	開発	GOODEARTH　藤原 広宣氏講演
	19	開発	GOODEARTH　藤原 広宣氏講演
10/27	20	平和	核兵器禁止条約
	21	平和	核兵器の問題点
11/10	22	開発	貿易ゲーム
	23	開発	貿易ゲーム
12/15	24	プレゼンテーション	プレゼンテーション立ち上げ
	25	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
2019/1/12	26	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	27	FW	九州大学　久保 友明教授講演
	28	FW	九州大学　久保 友明教授講演
1/19	29	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	30	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	31	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
2/2	32	平和	平和提言学習
	33	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	34	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
2/9	35	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	36	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
2/16	37	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	38	プレゼンテーション	発表
	39	プレゼンテーション	発表

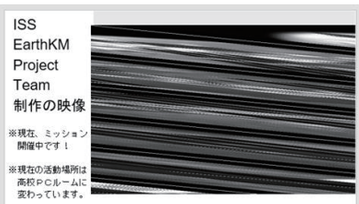
②～④　EarthKAM

「環境」をテーマにEarthKAM体験を行った。EarthKAMとは、NASA（アメリカ航空宇宙局）が主催する教育プログラムである。『Earth Knowledge Acquired by Middle School Students』という英語の頭文字をあわせたもので、「小中学生による地球学習」という意味である。

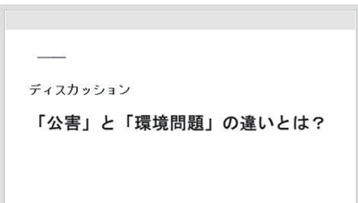
現在は宇宙にあるISS（国際宇宙ステーション）のデジタルカメラを地上から操作し、地球を撮影している。4月14日はEarthKAMのミッション中で、各人がタブレットでEarthKAMのウェブサイトから国際宇宙ステーションの軌道を確認。一人一か所の撮影をリクエストして、4月28日、撮影された写真を撮り出して「環境」の視点から考察を加えた。



1



2



3



4



5



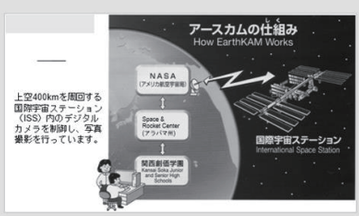
6



7



8



9



10



11



12



13



⑤⑥　5/26 夏目　勝弘氏　講演

○生徒の感想

・様々な視点から、多くのことを教えていただいて、すごくためになりました。日本人の英語力がアジア最低だと知ってびっくりすると同時に、少しショックではありますが、SGH の高校で十分に英語を学べている今の環境に感謝し、これから自分たちがグローバルな人材になっていこうと思いました。

・日頃思索していた、国際協力の哲学・思想・心構えといったものを伺うことができて良かったです。自分自身も、世界の人々と交流したときに「自分のこと」「日本のこと」を発信する力が必要であると考えるようになりました。

⑦⑧　5/26　テーマ：人権「世界の人権問題ポスターツアー」

GRIT 人権の初めは世界の人権問題のインプットを行うことを目的とした。ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさん紹介ビデオと、国連でのスピーチを視聴した。

次に、人権問題に関して多くのテーマを生徒が学べるよう、ジグソー法を発展させたポスターツアーの形式で発表を行うことにした。

まず、少人数のグループに分かれ、国際 NPO「アムネスティ」のホームページに掲載されている人権問題を、グループごとに違うテーマで読ませた。次にポスターを作り、発表ができるようにした。ポスターといっても、項目ごとに付箋を使い、内容をまとめたものである。ポスターが完成したら、グループを作り直し、新しいグループには最初とは違うグループのメンバーが集まるようにした。時間を区切って、ポスターを回り、自分の作成したグループのポスター前ではそのグループ員が発表するようにした。

したがって、全員が必ず発表を行うようにした。

○GRIT 用 PowerPoint：人権問題ポスターツアー（抜粋）



⑨　6/9　テーマ：開発　「世界が５０人の村だったら」

現在の世界の状況をクラス内の人数で体現するとどうなるかをモデル化した「世界が５０人の村だったら」のプログラムを行った。開発教育協会が発行している教材を中心に学んだ。

クラスごとに生徒に役割カードを配布して、そのカードにかかれた人種・言語などによってグループ分けをし、世界の状況をモデル化した形で確認した。

例えば、カードに書かれているネパール語「座ってください」を、全員が起立した状態でプロジェクタに表示して、座る人が何人いるか。つまり世界の識字率が何%あるのかを確認し、読めない人はもしかすると薬と間違えて、毒を飲んでしまう可能性があるということを考えた。

最後に「世界が５０人の村だったら」の文章を全員で読んで、気づいたことを話し合わせた。

○GRIT 用 PowerPoint：世界が５０人の村だったら（抜粋）

GRIT　開発①　世界の現状を知ろう

1

GRIT 「環境」の次は？

- 4テーマのうち「開発」を学びます！
- 「開発」とは？
  - 都市開発？新製品の開発？
  - そうではありません。
- 「開発教育としては、当然、飢餓や貧国の撲滅の問題であります。世界の約3分の2の貧困国、約5億人の栄養不良者、こうした現実に目を向けさせ、人類の経済福祉をどう確立すべきかを考える。」(1987年SGI提言)

2

今日のGRITは？

- まずは、世界の状況を実際に動いて、確認してみましょう。
- そのあと、国連が打ち出している目標について、見てみたいと思います。

（プリント①を配布してください）

3

「世界が50人の村だったら」



- 世界が100人の村だったらという本を知っていますか？
- 全世界の人口を100人に例えて、様々な世界情勢をわかりやすく例えている本です。
- 今回は、「50人」の村として再構成し、実際に村民になって、世界の情勢を確認してみましょう！

4

役割カード確認

- 今から役割カードを配布します。
- そこに書かれている内容がみなさんのこの村での役割・立場です。
- 裏面のまま配布してください。
- 決して、カードの内容を他人に見せないようにしてください。
- （余りや欠席分は学級委員さんが変わりにPowerPoint上に表示される欠席欄に人数を書いてあげてください）

5

このあとの流れ

- PowerPointの説明が出ます。
- その説明の通り、クラスのみんなで協力して動いてください。
- 村人として、全員協力で指示にしたがってください！！
- そして、その中で気がついたことを、ワークシートにメモしてください。「○○が多い」「○○はほとんどいない」など、見ればわかる、数えればわかることをたくさん書いてください。
- 席を動く場合があります。そのときは、筆記用具とワークシート(役割シートも)を持って、移動してください。

6

クイズ第1問

世界の人口は現在約何億人（推定）でしょうか？（一番近いのは？）

A. 63億人
B. 73億人
C. 83億人

7

第1問答え！

- 答えは　B. 73億人（世界人口白書）！です。
- 「皆さんは、人類73億人の中から、不思議にも集い合った仲間です。」と、昨年（2016年）の入学式のメッセージにもありました。

8

クイズ第2問

1960年の世界の人口は約何億人（推定）だったでしょうか？

A. 20億人
B. 30億人
C. 40億人

9

第2問答え！

- 答えは　B. 30億人（世界人口白書）！です。
- 56年で43億人の増加。倍増以上になっています。

10

クイズ第3問

2050年の世界の人口は約何億人（推定）になると予測（国連予測）されているでしょうか？

A. 75億人
B. 95億人
C. 115億人

11

第3問答え！

- 答えは　B. 95億人です。
- 実際には97億人と予測されています。さらには2100年には112億人になると予測されています。

12

クイズ第4問

現在の世界の人口において、男性と女性どちらが多いでしょうか？

A. 男性
B. 女性
C. ほぼ同じ

13

第4問

- 実際に、この村の中で数えてみよう！
- 男性は右、女性は左（役割シート上）へ移動！

数えた数を書いてみよう

	男性	女性
欠席者		
合計		

実際には男性50.4%、女性49.6%でC（2010年国連人口推計）

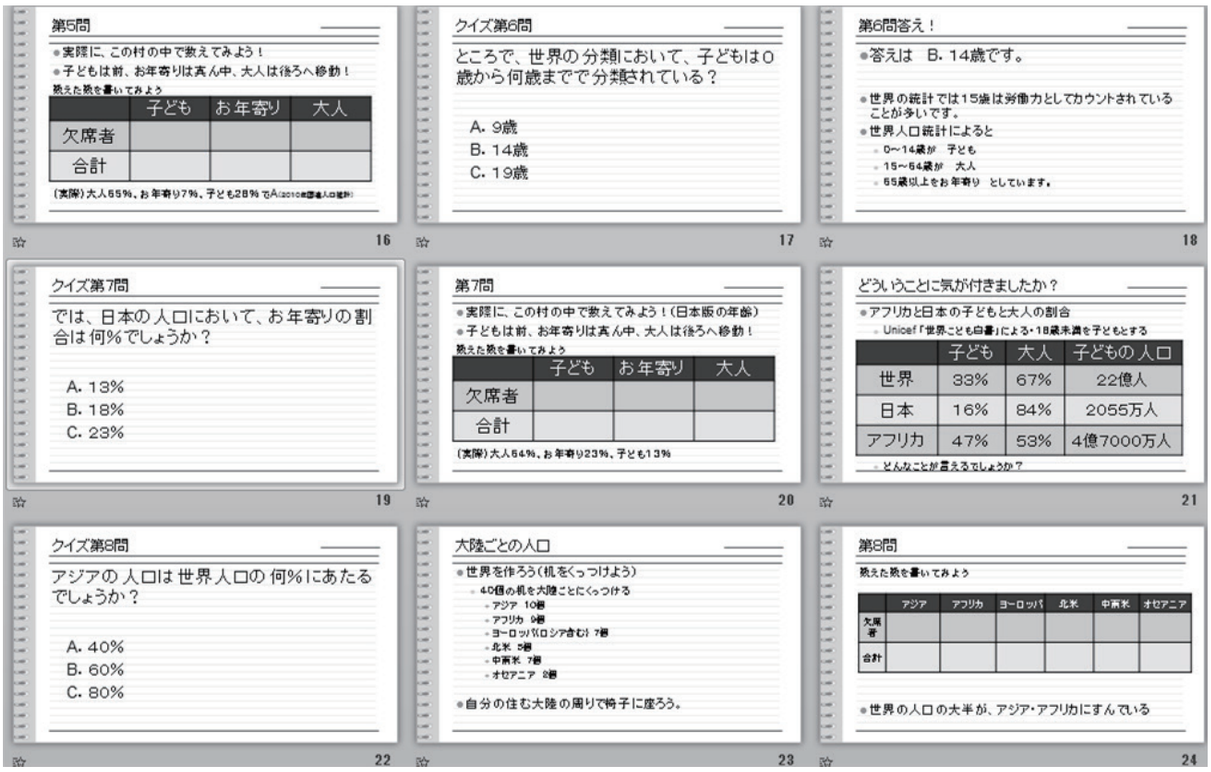
14

クイズ第5問

現在の世界の人口において、お年寄りの割合は何%でしょうか？

A. 7%
B. 17%
C. 27%

15



⑩　6/9　テーマ：開発　「SDGs 学習」

２時間目の GRIT では、一昨年９月に国連で採択された SDGs「持続可能な開発目標」の概要を学んだ。国連が SDGs を考えた背景のビデオを視聴し、新たな国連による指標を学んだ。そして、その目標を達成させゆくために自分たちがもっとも重要視すること、そのためにできることを考えるキックオフの授業とした。

○生徒の感想

・今回の GRIT で、私たちにできることは自分が行動していくことだと思った。SDGs の目標がすべて達成できることを祈りたい。

・SDGs は遠い目標ではなく、僕たちのような一般人でも身近なところから変えていける素晴らしい目標だと改めて思った。

⑪⑫　7/13　テーマ：人権　「シナリオディベート：いじめといじり」

日々当たり前に使っているあだ名も、エスカレートし本人が嫌がるといじめにつながる。「いじり」と「いじめ」の境界線を考え、今近くにいる友達の人権を考えるためにディスカッションを行った。

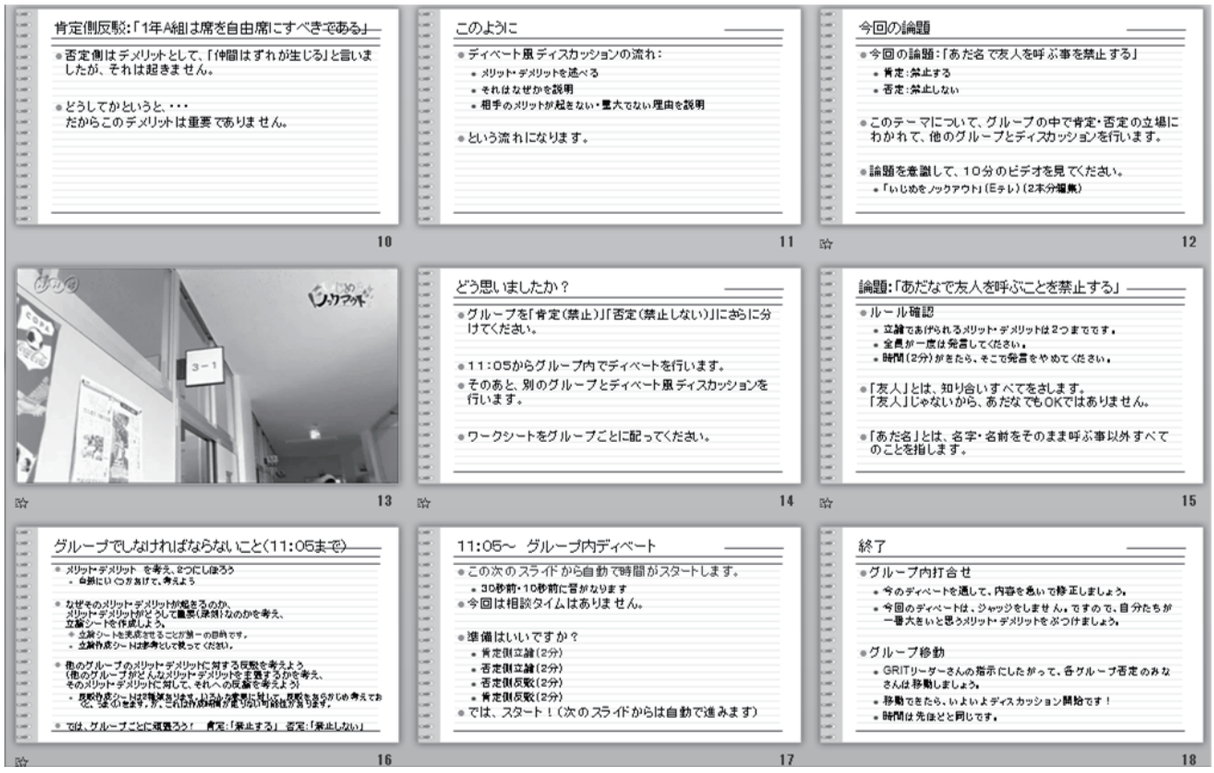
まずは、NHK「いじめをノックアウト」あだ名は禁止するべきですか？」の回を視聴し、あだ名を嫌がっている子、あだ名は禁止すべきであるという意見を紹介した。その後、個人でメリット・デメリット・あだ名がいじめにならないための解決策３か条を考えた。そして、グループごとにディスカッションし、解決策を考え、クラスでの発表を行った。最後は、再度グループでディスカッションし、クラスのルールを１つ作成した。

ワークシートは、スムーズにディベート風ディスカッションができるよう、穴埋め形式のシナリオとした。

できる限り全員一致でルールを作りたいと考え、GRIT リーダーに進行役を依頼した。

◯GRIT 用 PowerPoint：「いじり」と「いじめ」ディスカッション（抜粋）





○生徒の感想

・相手の気持ちを尊重することが大切だと感じました。本人が嫌だと言わないから大丈夫といった外側だけを見るのではなく、相手が何を感じているのか、どういうサインを出しているのかを読み取ることが必要だと思います。

・本人の意思というのは一番大切なことだと思います。普段の会話では仲が良くても気づけないこともあるので、「自分だったらどう感じるか」」と相手の気持ちになって気を付けることが大切だと思います。

⑬⑭ 7/18　医師　新井　勝大氏　講演

〇生徒の感想

・僕も WHO の職員という夢を持っています。しかし、最近周りと比べると劣っていると感じて、ずっと自信をなくしていましたが、今日の講演を聞いて、もっと頑張ろうと決意を新たにすることができました。

・自分の中で、医者は病気を診るものと思っていました。ですが、医者の本当の役割はその人間を診ることなんだと知り、どこまでいっても世界は人と人との心の結びつきが重要なんだと改めて知ることができました。また、自分自身で、自分の可能性を消すことは絶対にしないで、すべてにおいて不動の信念で立ち向かっていこうと思いました。

⑮ 9/15　フィールドワーク（インタビュー）

本年も高校１年生全員が探究活動の課題として夏休みにインタビューに取り組んだ。フィールドワークリサーチとして、「環境、開発、人権、平和」の４分野の中からテーマを選び、身近でその分野で働く人々にインタビューを行うことにより、現実の中でどんな活動が行われているのかを学ぶことを目的とした。

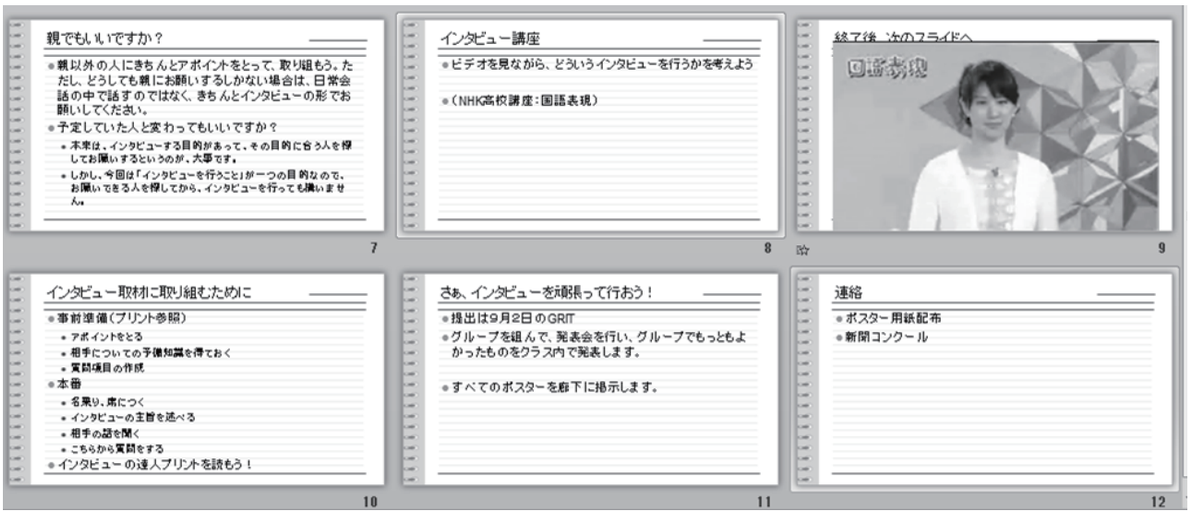
ＮＨＫの高校講座「国語表現」から「インタビュー」の回を抜粋して視聴し、その後、課題を説明。

生徒はそれぞれ夏休みに身近な人にインタビューを行い、内容を、Ｂ４のポスターとしてまとめた。

９月のＧＲＩＴの時間に、ポスター発表会として、グループで自分のポスターを見せ、内容を発表していき、優秀作品をグループでひとつ決め、代表はクラスみんなの前で発表。更に、クラスで最優秀作品も決め、全作品を廊下に掲示した。

〇GRIT 用 PowerPoint：インタビュー説明（抜粋）





⑯⑰　9/22　「被爆体験朗読会」、「沖縄戦・米スミソニアン展示」

核兵器について学ぶために、広島フィールドワークの際に国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で行われている「被爆体験朗読会」を行った。広島フィールドワークに参加した生徒が全クラスを分担して担当し、フィールドワークの報告を行った。その後、原爆被害の概要をまとめた「被爆の爪痕」のビデオを視聴。その後 GRIT リーダーが被爆体験を２つ朗読した。

次に４つの原爆詩を全員で音読、その後グループごとに１つずつ音読した。そして、その様子を思い浮かべながら、感想を話し合った。

休憩時間に、沖縄戦の様子が描かれた絵を展示し、次の沖縄戦についての導入とした。２時間目には、最初に沖縄戦についてのビデオを視聴。その後、朝日新聞社発行「知る沖縄戦」と「知る原爆」を使用し、沖縄戦の歴史、被爆者の声、原爆のことを歌った歌などを学んだ。さらに NHK スペシャル「スミソニアン展示」を視聴し、アメリカの意見を学んだ。

進行は GRIT リーダーにお願いした。

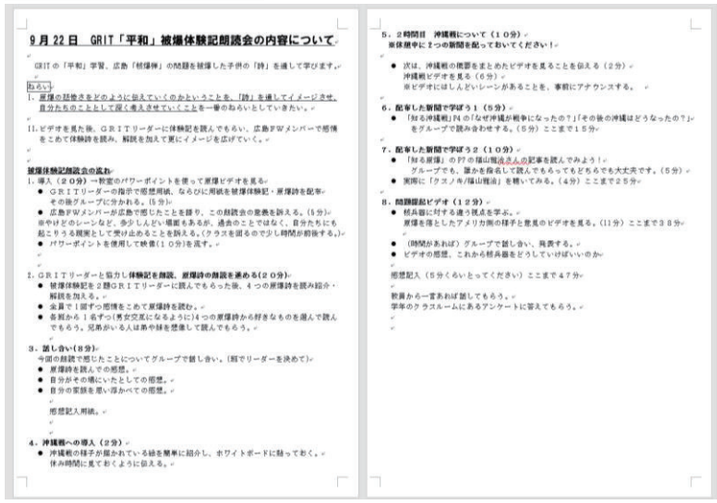
◯GRIT 用 PowerPoint：被爆体験朗読会、沖縄戦・米スミソニアン展示（抜粋）



○GRIT 生徒用プリント：原爆詩朗読会（抜粋）

GRIT 平和　ワークシート

① ビデオ１の感想
② 朗読会をしてみて思ったこと
③ 自分たちの班の内容を１分で発表できるようにまとめよう
④ 他の班のメンバーの発表をメモしよう
⑤ 学んだこと・感想



9月22日　GRIT「平和」被爆体験記朗読会の内容について

GRITの「平和」学習、広島「被爆体」の問題を被爆した子供の「詩」を通して学びます。

ねらい
Ⅰ．原爆の話をさどのように伝えていくのかということを、「詩」を通してイメージさせ、自分たちのこととして深く考えさせていくことを一番のねらいとしていきたい。

Ⅱ．ビデオを見た後、ＧＲＩＴリーダーに体験記を読んでもらい、広島ＦＷメンバーで感情をこめて体験詩を読み、解説を加えて更にイメージを広げていく。

被爆体験記朗読会の流れ
1．導入（２０分）→教室のパワーポイントを使って原爆ビデオを見る。
● ＧＲＩＴリーダーの指示で感想用紙、ならびに用紙を被爆体験記・原爆詩を配布。その後グループに分かれる。（5分）
● 広島ＦＷメンバーが広島で感じたことを語り、この朗読会の意義を訴える。（5分）※やけどのシーンなど、少し人がい場面もあるが、過去のことではなく、自分たちにも起こりうる視覚として受け止めることを訴える。（クラスを固るので少し時間が前後する。）
● パワーポイントを使用して映像（１０分）を流す。

2．ＧＲＩＴリーダーと協力し体験記を朗読、原爆詩の朗読をあめる（２０分）
● 被爆体験記を２題ＧＲＩＴリーダーに読んでもらった後、４つの原爆詩を読み紹介・解説を加える。
● 全員で１回ずつ感情をこめて原爆詩を読む。
● 各班から１名ずつ男女交互になるように４つの原爆詩から好きなものを選んで読んでもらう。兄弟がいる人は弟や妹を想像して読んでもらう。

3．話し合い（８分）
今回の朗読で感じたことについてグループで話し合い。（班でリーダーを決めて）
● 原爆詩を読んでの感想。
● 自分がその場にいたとしての感想。
● 自分の家族を思い浮かべての感想。

感想記入用紙。

4．沖縄戦への導入（２分）
● 沖縄戦の様子が描かれている絵を簡単に紹介し、ホワイトボードに貼っておく。休み時間に見ておくように伝える。

5．２時間目　沖縄戦について（１０分）
※休憩中に２つの質問を配っておいてください！
● 次は、沖縄戦の概要をまとめたビデオを見ることを伝える（２分）
沖縄戦ビデオを見る（６分）
※ビデオ中にはしんどいシーンがあることを、事前にアナウンスする。

6．配布した質問で学ぼう１（５分）
● 「知る沖縄戦」P4の「なぜ沖縄が戦争になったの？」「その後の沖縄はどうなったの？」をグループで読み合わせする。（５分）ここまで１５分

7．配布した質問で学ぼう２（１０分）
● 「知る原爆」のP7の福山雅治さんの記事を読んでみよう！
グループでも、誰かを指名して読んでもらってもどちらでも大丈夫です。（５分）
● 実際に「クスノキ/福山雅治」を聞いてみる。（４分）ここまで２５分

8．問題提起ビデオ（１２分）
● 被爆者に対する違う視点を学ぶ。
原爆を落としたアメリカ側の様子と意見のビデオを見る。（11分）ここまで３８分
● （時間があれば）グループで話し合い、発表する。
● ビデオの感想。これから被爆をどうしていけばいいのか

感想記入（５分くらいとってください）ここまで４７分
質問から一言あれば話してもらう。
学年のクラスルームにあるアンケートに答えてもらう。



〇生徒の感想

・アメリカと日本の考えの違いで、どうして反省しないんだ等、いろいろ思う人とかが両国にいると思いますが、それよりも私は「このような戦争を二度と起こしてはならない」というのを、みんなが思うことが大切だと思います。

・“歴史は繰り返される”と言われているが、現状、世界のリーダーが全く自国以外に目を向けていないなと思う場面もあります。だから今の私たちが変えていかなければならない、“私たちにかかっている”と本当に思った GRIT でした。

⑱⑲　10/6　テーマ：開発　「グッドアース藤原さん　講演」

〇生徒の感想

・アフリカの人たちに支援されているのは、逆に自分たちであるということを知った。日本人は感覚だけで物事を決めがちだと言うのは今までの私たちの生活からも実感できる方だったので自分の目で見て感じるまでは勝手な想像だけで物事を決めつけないでおこうと思った。この学園で過ごす 3 年間を消して無駄にせず 1 日 1 日を価値のあるものにしていこうと思った。

・「主体性を持って」との言葉や「支援ではなく返している」という言葉、たくさんの言葉が心にとても響きました。SDGs やこういう講演を受けることができている学園生は、将来必ず社会のために戦っていかなければならないと強く感じました。少しの勇気と少しの優しさで世界を変えていくことができる。創立者からの期待を胸に、多くの人の笑顔を作り、世界の人々と関わっていきたいです。

⑳㉑　10/27　テーマ：平和　「核兵器禁止条約」「核兵器の問題点」

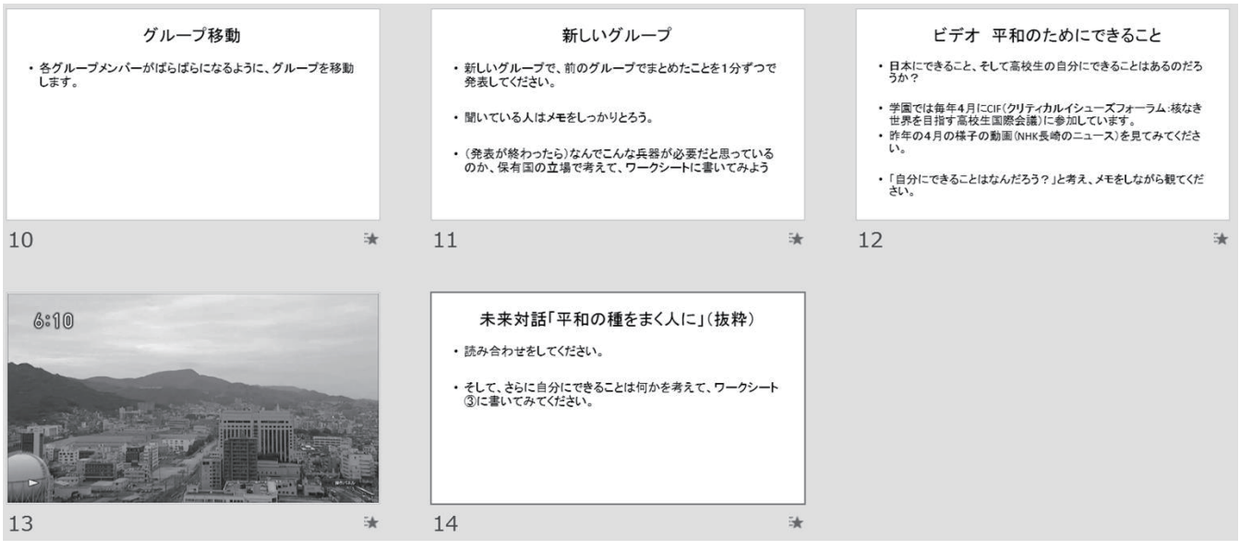
前回の平和の回では、核兵器・戦争について学んだため、今回は「核兵器禁止条約」について、高校生として平和のために何ができるのかを考えた。

まず日本が核兵器禁止条約に反対した理由をグループごとに読み、疑問点や理由を考えた。その後、日本が国連に提出した決議案について取り上げているニュースを視聴。さらに、クローズアップ現代「シリーズ トランプのアメリカを行く 中満泉・国連事務次長に聞く」の回を視聴し、核兵器禁止条約に対して一人ひとりの考えを深められる形とした。

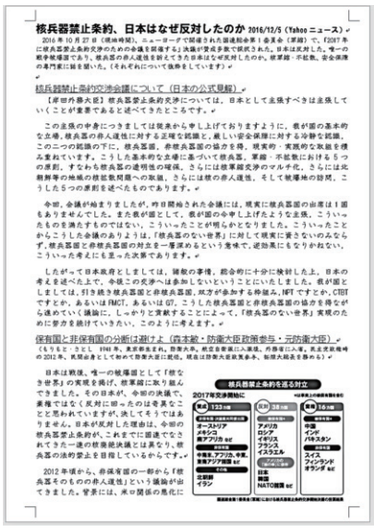
休憩をはさんだあとは、核兵器の問題点がかかれたプリントを学び、ジグソー法をつかって、新しいグループでそれぞれが発表した。次に、学園で毎年参加している CIF（Critical Issues Forum）の様子を視聴し、自分にできることは何かを考えた。

○GRIT 用 PowerPoint：核兵器禁止条約（抜粋）





○GRIT 生徒用プリント：核兵器禁止条約（抜粋）



核兵器禁止条約、日本はなぜ反対したのか 2016/12/5（Yahoo ニュース）

2016 年 10 月 27 日（現地時間）、ニューヨークで開催された国連総会第 1 委員会（軍縮）で、「2017 年に核兵器禁止条約交渉のための会議を開催する」決議が賛成多数で採択された。日本は反対した。唯一の戦争被爆国であり、核兵器の非人道性を訴えてきた日本はなぜ反対したのか。核軍縮・不拡散、安全保障の専門家に話を聞いた。（それぞれについて強弱をしています）

核兵器禁止条約交渉会議について（日本の公式見解）

【岸田外務大臣】核兵器禁止条約交渉については、日本として主張すべきは主張していくことが重要であると述べてきたところです。

この主張の中身につきましては従来から申し上げておりますように、我が国の基本的な立場、核兵器の非人道性に対する正確な認識と、厳しい安全保障に対する冷静な認識、この二つの認識の下に、核兵器国、非核兵器国の協力を得、現実的・実践的な取組を積み重ねていく、こうした基本的な立場に基づいて核兵器、軍縮・不拡散における 5 つの原則、すなわち核兵器の透明性の確保、さらには核軍縮交渉のマルチ化、さらには北朝鮮等の核廃棄問題への取組、さらには我の非人道性、そして戦略神の confidence、こうした 5 つの原則を述べたものであります。

今回、会議が始まりましたが、昨日開始された会議には、現実に核兵器国の出席は 1 国もありませんでした。また我が国として、我が国の中申し上げたような主張、こういったものを満たすものではない、こういったことが明らかとなりました。こういったことからこうした会議のありようは、「核兵器のない世界」に対して現実に資さないのみならず、核兵器国と非核兵器国の対立を一層深めるという意味で、逆効果にもなりかねない、こういった考えにも至った次第であります。

したがって日本政府としましては、諸般の事情、総合的に十分に検討した上、日本の考えを述べた上で、今後この交渉へは参加しないということにいたしました。我が国としましては、引き続き核兵器国と非核兵器国、双方が参加する枠組み、NPT でありますとか、CTBT ですとか、あるいは FMCT、あるいは GT、こうした核兵器国と非核兵器国の協力を得ながら進めていく議論に、しっかりと貢献することによって、「核兵器のない世界」実現のために努力を続けていきたい、このように考えます。

保有国と非保有国の分断は避けよ（森本敏・防衛大臣政策参与・元防衛大臣）

（もりもと・さとし　1946 年、東京都生まれ。防衛大学、東京都立大学、米国ジョージタウン大学大学院修士課程、外務省に入省。外務事務次官、内閣官房副長官補を歴任。2012 年、民間出身として初めて防衛大臣に就任。現在は防衛大臣政策参与、駐理大臣客員教授）

日本は戦後、唯一の被爆国として「核なき世界」の実現を掲げ、核軍縮に取り組んできました。その日本が、今回の決議で、賛成ではなく反対に回ったのは考えられないことと思われますが、決してそうではありません。日本が反対した理由は、今回の核兵器禁止条約が、これまでに国連でなされてきた一連の核廃絶決議とは異なり、核兵器の法的禁止を目指しているからです。

2012 年頃から、非保有国の一部から「核兵器そのものの非人道性」という議論が出てきました。背景には、米ロ関係の悪化による保有国間の核軍縮の停滞があり、非保有国の不満が高まっていったので。2015 年に開かれた NPT 再検討会議では、中東問題を巡る非保有国と保有国の激しい対立の中で、残念ながら一切の合意ができませんでした。

対立を考えるとき、重要なことは、NPT は 5 大国の核兵器保有を認めることを前提としたものであり、5 大国には核兵器の保有が国際法上認められていることです。一方、非保有国が進めようとしている核兵器禁止条約は、法的拘束力を持つものになることが予想されます。そうした場合、この条約に署名するすべての国に核兵器の禁止、少なくとも保有の禁止が義務付けられるでしょう。ここに深刻な亀裂が生じます。この条約が成立すると、非保有国と保有国の対立を決定的なものにしてしまうのです。

核なき世界は、保有国と非保有国の現実的な協力のプロセスを踏て実現されるべきです。核兵器禁止条約の成立を許せば、亀裂が入るだけです。そのプロセスが実現できなくなります。

国連総会の決決は拒否権が発動できないし、コンセンサス（全会一致）方式でもありませんから、120 カ国以上の賛成を集めている以上、今回の決議案は可決されてしまうでしょう。今の状況で進めば、核保有国は参加せず、非保有国だけが加入する条約になります。核兵器を現実的に減らしていくためには、このことによって高こう得る亀裂を何としても避けなければならないのです。

「核保有の不平等」こそが不安定化の要因（川崎哲・核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）国際運営委員・NGO ピースボート共同代表）

（かわさき・あきら　1966 年東京都生まれ。ピースボート共同代表、核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）の国際運営委員。2008 年から広島・長崎の被爆者と世界を回る「ヒバクシャ地球一周　証言の航海」プロジェクトを実施。2009～10 年、非核兵器国主席の「軍縮諮問（核軍縮に関する国際委員会）」で NGO アドバイザーを務めた）

これまで国際社会は核軍縮・廃絶に向けてさまざまな取り組みをしてきましたが、核兵器を法的に禁止する条約が実現すれば、これほど画期的なことはありません。今回の決議は、その条約の内容についての交渉を開始しましょう、という決議です。交渉することを指導して、どのように核廃絶を実現するのでしょうか。

「アメリカの核の傘の下にいる以上、日本の安全保障の観点から核兵器禁止に賛成することができない」という声があることも承知しています。しかし、日本にとっての脅威とされる北朝鮮は、2006 年に最初の核実験を行って以来、核実験を繰り返し、ミサイルの開発を続け、わずか 10 年で事実上核保有国になりました。その間、米国の傘がなかったわけではありません。

ある国の核に対抗するために他国の傘が必要だという議論を認めたら、北朝鮮が言う、なぜ彼ができることを許されず厳しい制裁下に置かれているのか、不平等ではないか、という議論を認めることになります。核軍縮は、核兵器の削減と拡散の抑止を目指す NPT 体制の下で進めるべきだという議論もありますが、核保有を大国に強制する規定をなければ、罰則もありません。NPT 体制には限界があります。

核兵器禁止条約によって、保有国と非保有国の分断を深め、国際情勢が不安定になるという意見がありますが、逆です。核兵器が一部の国に認められている仕組みがあるために国際情勢が不安定化している事実とどう向き合うか、です。核兵器の使用の危険性が現実的に指めて高い状態にあるならば、「どの国にも平等に核兵器は違法である」というルールをつくることは、実は安全保障上もプラスに働くはずです。



〇生徒の感想

・「核兵器廃絶」というとても大きな課題に感じるが、決して私たちに関係のないことではないので、無関心にならず、これからの GRIT にも取り組んでいきたいと思いました。

・現在の核についての現実を私たち次の世代の人から理解をして、私たちが後の世代に伝えていくことが大切だと思いました。難しい内容が多くありましたが、とてもためになる GRIT だったと思います。１人が動けばみんなの行動に繋がり、大きな力になると思いました。これからもっと核の問題について知っていきたいです。

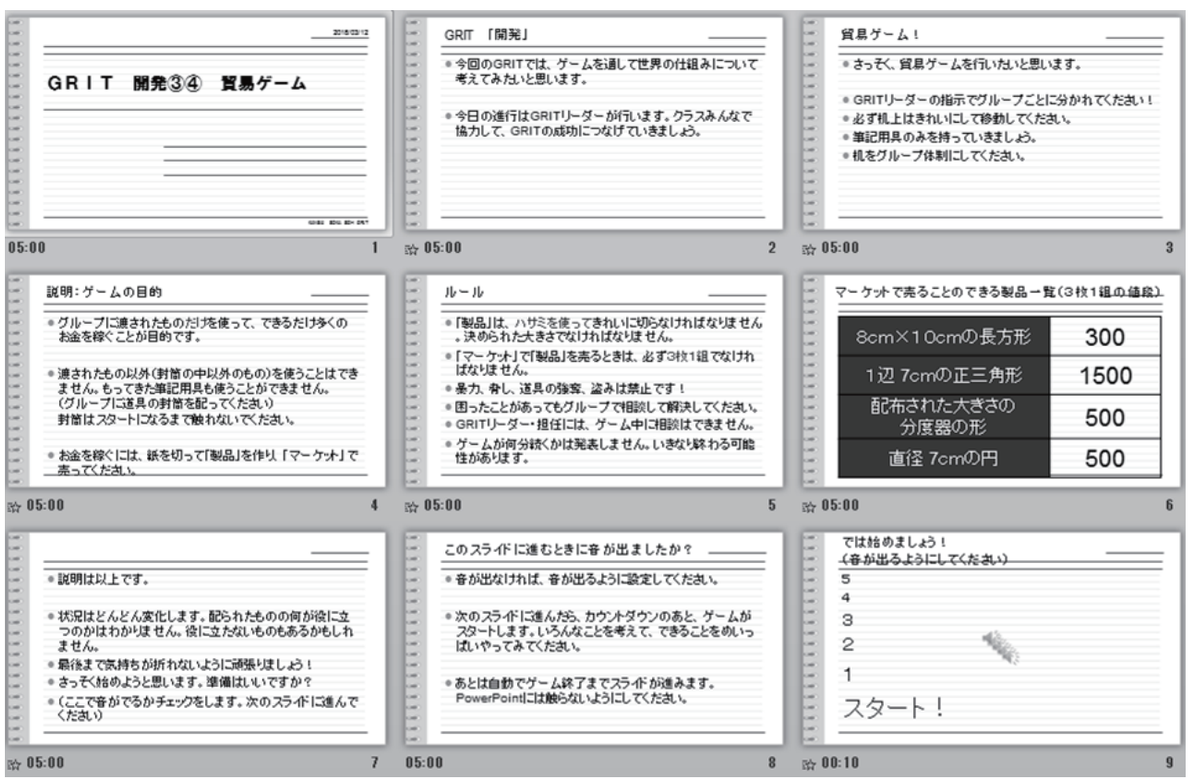
㉒㉓　　11/11　テーマ：開発　「貿易ゲーム」

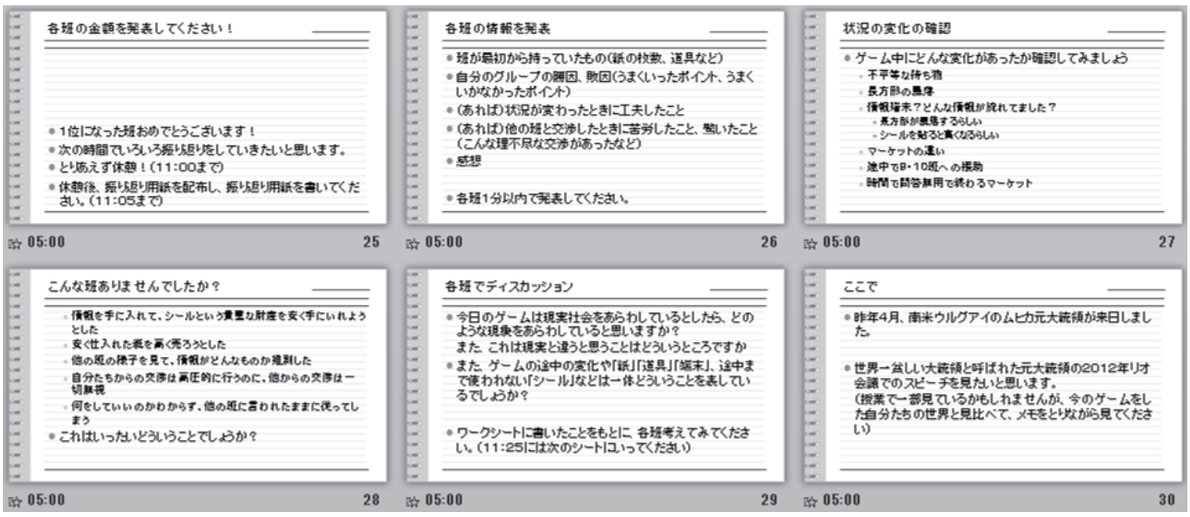
この日は貿易ゲームを通して、フェアトレードについて学ぶ時間とした。この日の進行は GRIT リーダーに依頼した。この GRIT は毎年好評を得ており、全員が大きな学びとしている。

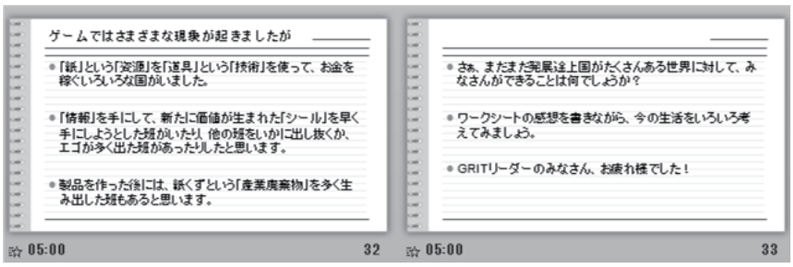
「フェアトレード」とは、公正な国際貿易のこと。途上国の原料や製品を、適正な価格で継続的な購入を通じて、立場の弱い人たちの自立と生活を改善することを目指す取り組みであることを理解するとともに、現実の国際社会では、経済的に豊かな力の強い国に有利な不公平・不公正な貿易が行われており、貿易ゲームを通じて、世界の不公平な貿易の状況を学んだ。

さらに、２０１６年に来日したウルグアイのムヒカ元大統領の紹介ビデオとスピーチ動画を視聴した。このビデオは「世界で最も貧しい大統領」として知られており、資産の８０％を寄付、個人資産は約１８万円の車のみ、月に約１０万円強で生活をされており、そのビデオを見て、開発の必要性、などを考えた。

〇GRIT 用 PowerPoint：貿易ゲーム（抜粋）







〇生徒の感想

・平和や持続可能な社会を考える上ではウルグアイの大統領のような考えや心を持てるが、実際に自分たちが貿易ゲームをすると、そのような大切なことが頭から消えてしまうことに気づきました。

・世界で起こっている発展途上国の問題や、国同士の関係など、交渉の難しさも感じ、これが現実社会で起こっていると考えると、とても大変なことだとわかりました。

㉗㉘　1/12　九州大学　久保　友明教授　講演

〇生徒の感想

・最初地球の内部構造から始まってとても興味を持ちました。深層部にはかんらん石やダイヤモンドがあることにもびっくりして相転移と言う言葉も初めて聞きました。温かい氷と呼ばれるものが気圧でできるのもすごく面白かったです。自分の使命をみつけて、貢献できる人材に成長していきたいと思いました。

・「目の前の課題に取り組むこと」や「失敗しても可能性を見出すこと」「最後は必ず勝つこと」を学びました。これから勉強で落ち込むこと、挫けることも多くなると思いますが、今日学んだことを胸にこれからも頑張って努力を積み重ねていきます。

㉜　2/2　平和提言学習

・創立者の第 44 回「SGI の日」記念提言「平和と軍縮の新しき世紀を」を 1 週間朝の読書タイムで読み、読み切れていない箇所をグループなど形態を変えながら学んだ。

12/15〜2/16　プレゼンテーション準備・発表

７つのグループを作成し、１年間学んできたことをまとめ、学園生からの提言という形でまとめて、保護者の前で発表した。この発表では、寸劇・紙芝居・模造紙によるまとめ・パネルディスカッションなどの手法を使うことにより、どう発表したいことをまとめるのか、表現するのかを学んだ。







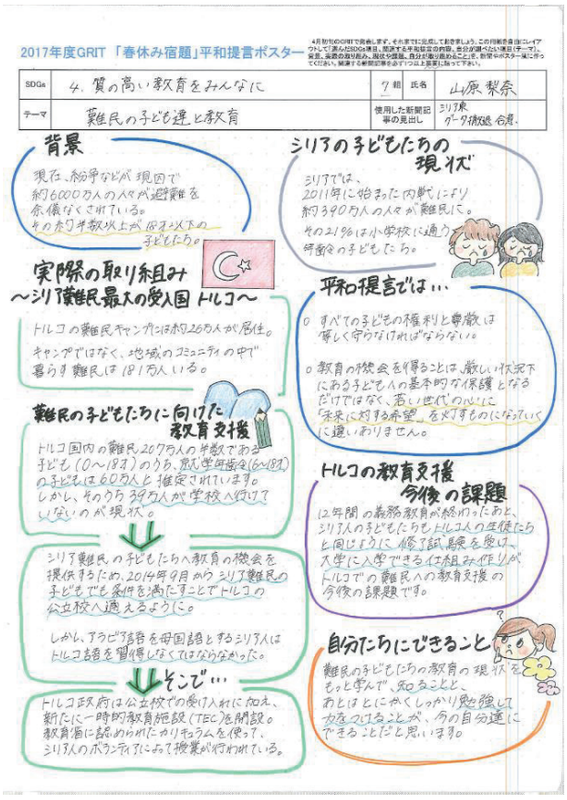


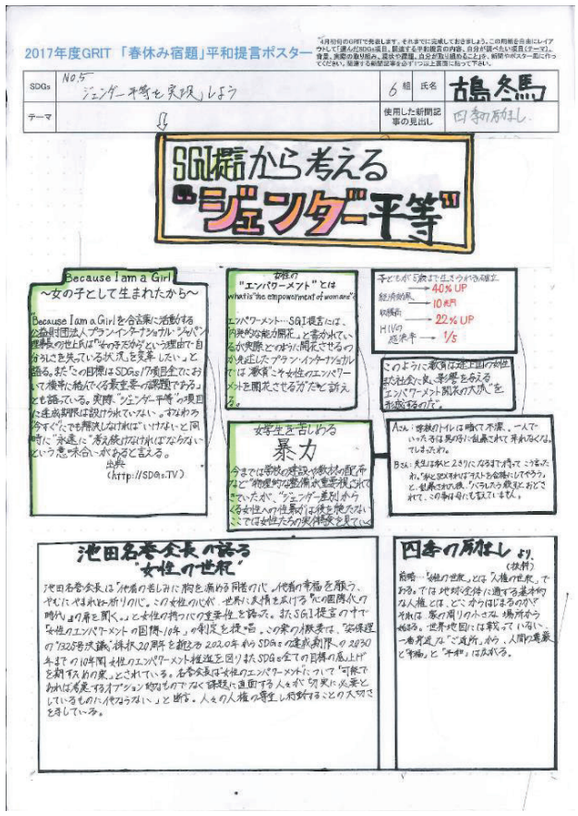
2 年生　テーマ：「課題研究」

2 年生の GRIT では、1 年間を通して、グループによる課題研究を行った。SDGs（持続可能な開発目標）を達成するために、私たちに何ができるのかを考え、行動に移すことに主眼に置き、研究を行った。

4 月 7 日　平和提言ポスター発表

自分の興味がある SDGs を選び、本校創立者が毎年 1 月に世界に発表されている平和提言と関連している内容について調べ、春季休業期間にポスターを作成し、グループで発表を行った。





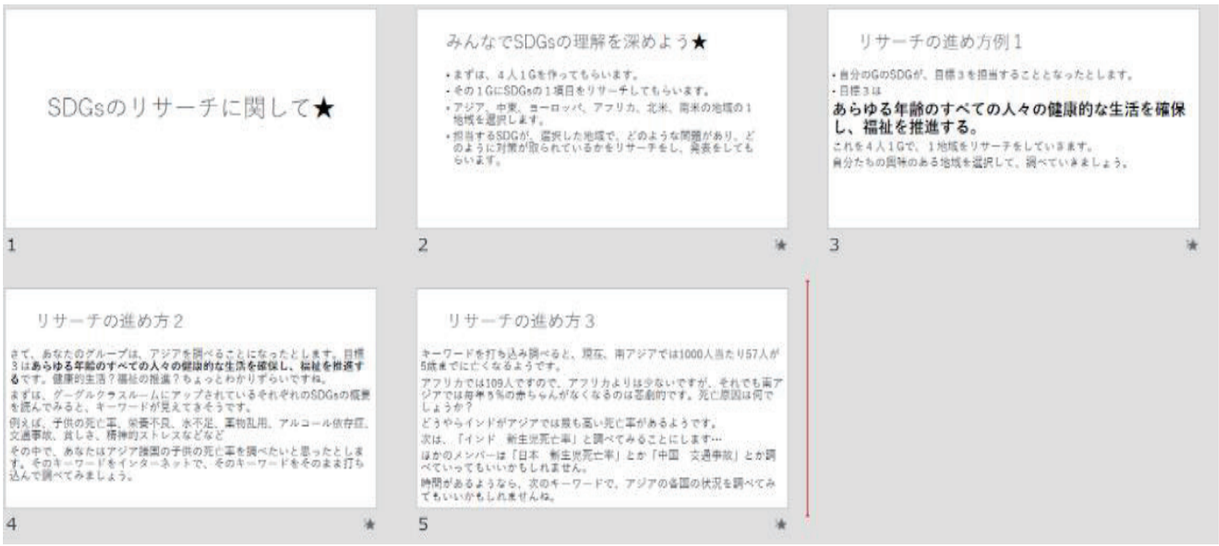
4 月 14 日　課題研究立ち上げ・グループ決め・SDGs 学習

1 年間の課題研究の立ち上げを行い、グループを決定した。1 年間の GRIT 課題研究の成否を決めるグループの決定の為、男子で 1G2 名～4 名を作り、女子で 1G2 名～4 名を作り、教員側で男子・女子のグループの組み合わせを行い、次回の GRIT の授業で発表した。1 クラス 8G(各 G6 名～7 名)の体制を作った。

SDG s の全体像を学ぶために、国際連合広報センターが作成した「SDGs を広めたい・教えたい方のための『虎の巻』」を使用。

https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

数時間の授業で、全ての SDG s を深く知ることはできないため、生徒たちが春休みに学んできた SDG s ポスターを見て、特にテーマとして多く取り扱われていた 5 つの SDG s をピックアップし、それぞれの SDG s を各 G でリサーチをし、全体でそれをジグソー法で共有した。



【目標 4】　質の高い教育をみんなに
【目標 5】　ジェンダー平等を実現しよう
【目標 10】　人や国の不平等をなくそう
【目標 13】　気候変動に具体的な対策を
【目標 16】　平和と公正をすべての人に

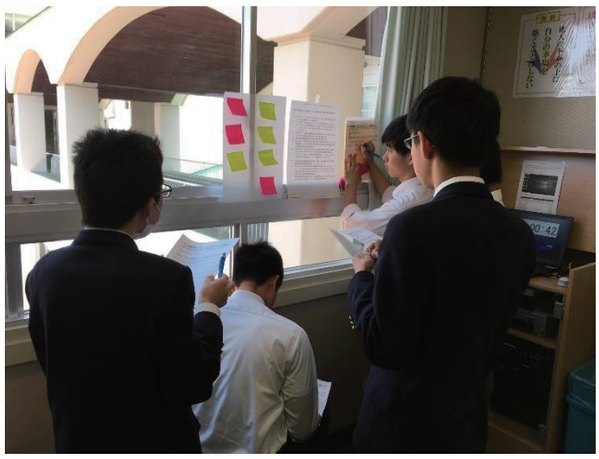


4 月 18 日　SDGs・4 分野決め

グループで 1 年間研究する SDGs と 4 分野（環境、開発、人権、平和）を決定し、リサーチクエスチョン作成のためのリサーチを開始した。

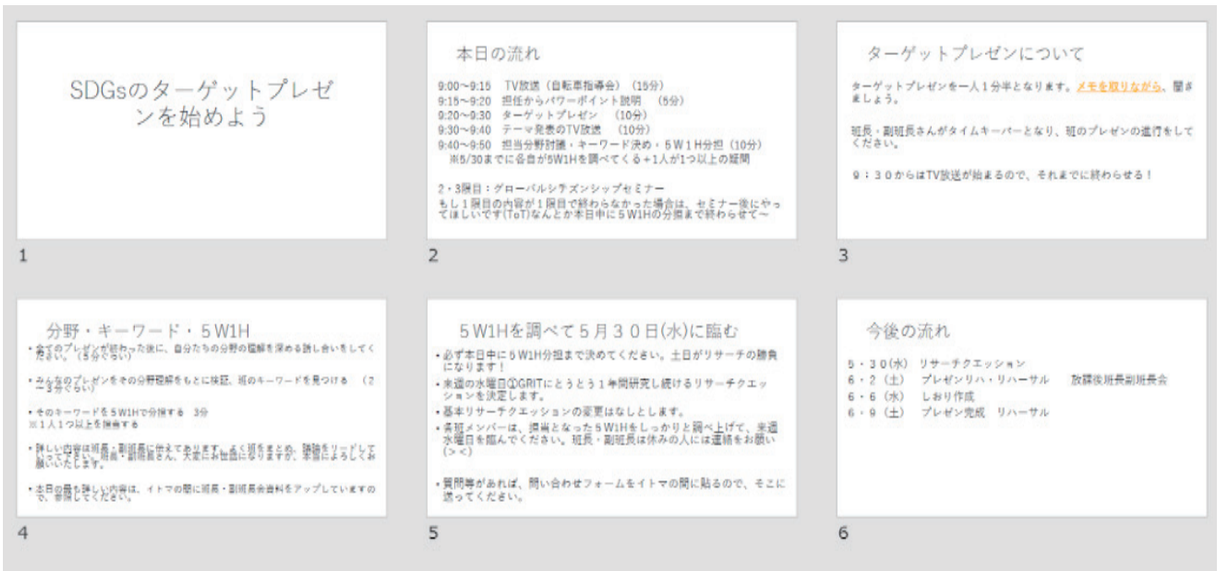
4 月 28 日　リサーチ

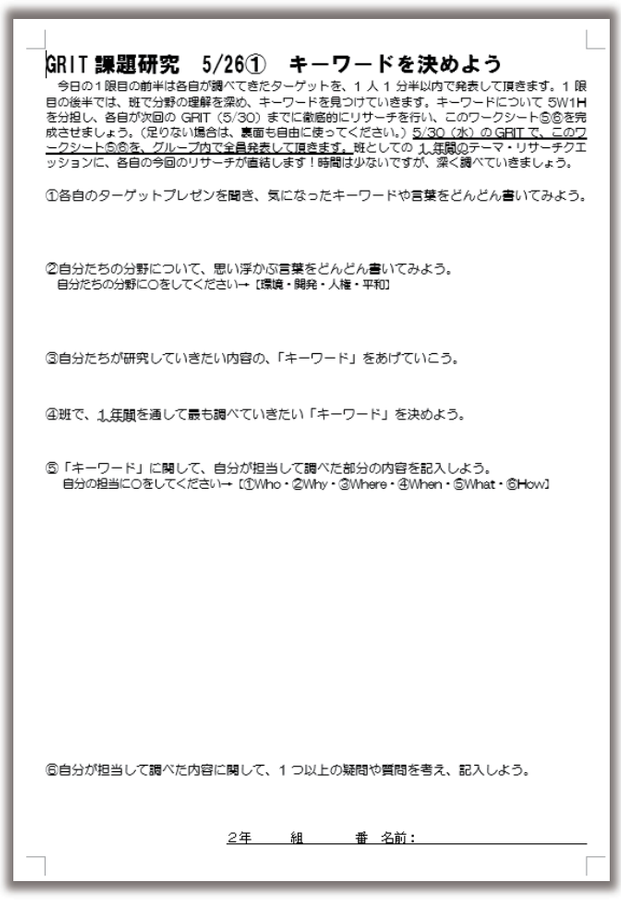
1 年間学びを深めていく SDGs について、グループでリサーチを行い、ポスターを作成。新たなグループでポスターツアーを行った。



5 月 26 日　ターゲット決め

　各自が調べてきた SDGs のターゲットについて発表を行い、グループで研究を進めていくターゲットを決定した。





GRIT 課題研究　5/26①　キーワードを決めよう

今日の１限目の前半は各自が調べてきたターゲットを、１人１分半以内で発表して頂きます。１限目の後半では、班で分野の理解を深め、キーワードを見つけていきます。キーワードについて 5W1H を分担し、各自が次回の GRIT（5/30）までに徹底的にリサーチを行い、このワークシート⑤⑥を完成させましょう。（足りない場合は、裏面も自由に使ってください。）5/30（水）の GRIT で、このワークシート⑤⑥を、グループ内で全員発表して頂きます。班としての 1 年間のテーマ・リサーチクエッションに、各自の今回のリサーチが直結します！時間は少ないですが、深く調べていきましょう。

①各自のターゲットプレゼンを聞き、気になったキーワードや言葉をどんどん書いてみよう。

②自分たちの分野について、思い浮かぶ言葉をどんどん書いてみよう。
自分たちの分野に○をしてください→【環境・開発・人権・平和】

③自分たちが研究していきたい内容の、「キーワード」をあげていこう。

④班で、1 年間を通して最も調べていきたい「キーワード」を決めよう。

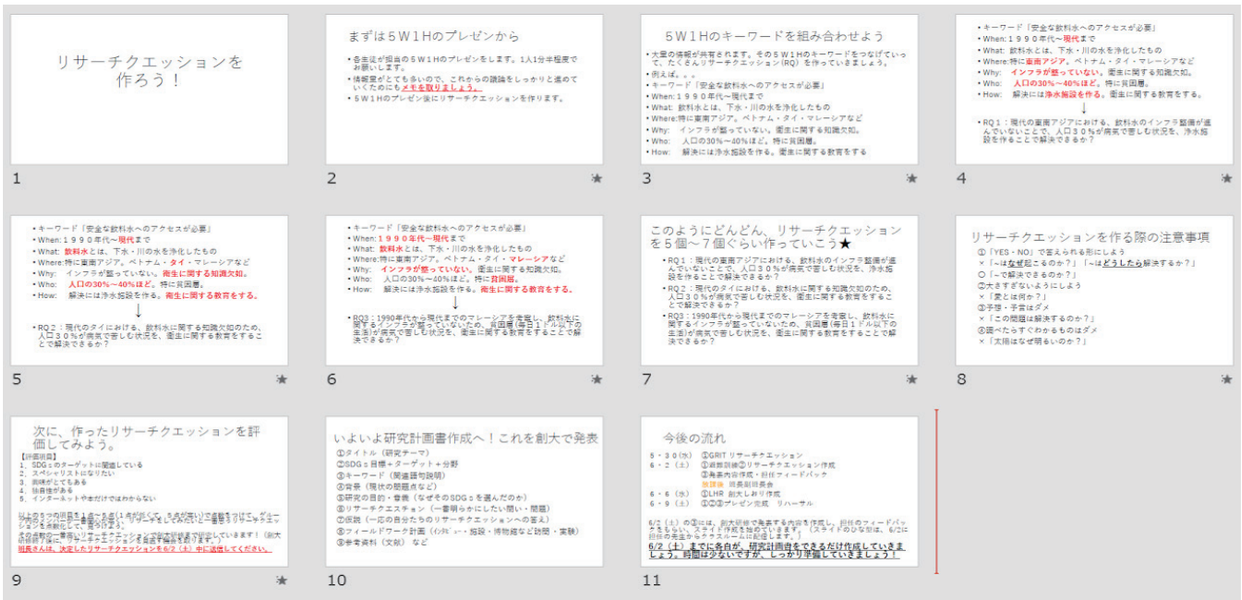
⑤「キーワード」に関して、自分が担当して調べた部分の内容を記入しよう。
自分の担当に○をしてください→【①Who・②Why・③Where・④When・⑤What・⑥How】

⑥自分が担当して調べた内容に関して、１つ以上の疑問や質問を考え、記入しよう。

２年　　組　　番　名前：

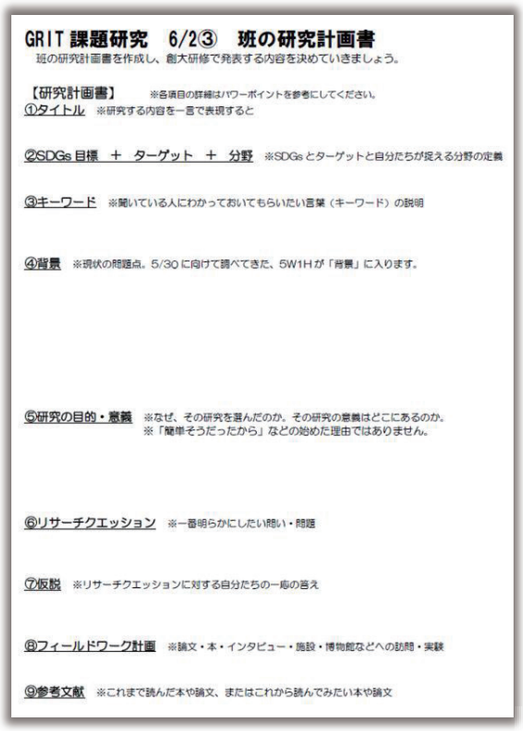
5 月 30 日　リサーチクエスチョン作成

リサーチクエスチョンの概要を説明した後、リサーチクエスチョンを各自が 5W1H をもとに作成し、プレゼンテーションを行った。また、各自が次回の GRIT までに研究計画書を作成することになった。



6月2日　リサーチクエスチョン完成、研究計画書作成

班としてのリサーチクエスチョンを1つ完成させた。創価大学研修で発表を行う、研究計画書の内容（①タイトル②SDGs目標＋ターゲット＋分野の説明③キーワード④背景⑤研究の目的・意義⑥リサーチクエスチョン⑦仮説⑧フィールドワーク計画⑨参考文献）を作成した。



GRIT課題研究　6/2③　班の研究計画書

班の研究計画書を作成し、創大研修で発表する内容を決めていきましょう。

【研究計画書】　※各項目の詳細はパワーポイントを参考にしてください。

①タイトル　※研究する内容を一言で表現すると

②SDGs目標　＋　ターゲット　＋　分野　※SDGsとターゲットと自分たちが捉える分野の定義

③キーワード　※聞いている人にわかっておいてもらいたい言葉（キーワード）の説明

④背景　※現状の問題点。5/30に向けて調べてきた、5W1Hが「背景」に入ります。

⑤研究の目的・意義　※なぜ、その研究を選んだのか。その研究の意義はどこにあるのか。
※「簡単そうだったから」などの始めた理由ではありません。

⑥リサーチクエッション　※一番明らかにしたい問い・問題

⑦仮説　※リサーチクエッションに対する自分たちの一応の答え

⑧フィールドワーク計画　※論文・本・インタビュー・施設・博物館などへの訪問・実験

⑨参考文献　※これまで読んだ本や論文、またはこれから読んでみたい本や論文

6月9日　創価大学研修プレゼンリハーサル

創価大学研修で行うプレゼンテーションのリハーサルを、分野別に集まり、行った。

6月13日～15日　創価大学研修にてプレゼンテーション

創価大学研修では、大学教授を前に、各Gが発表を行った。大学教授には事前にプレゼンデータを共有し、質疑応答や様々なアドバイスを頂いた。





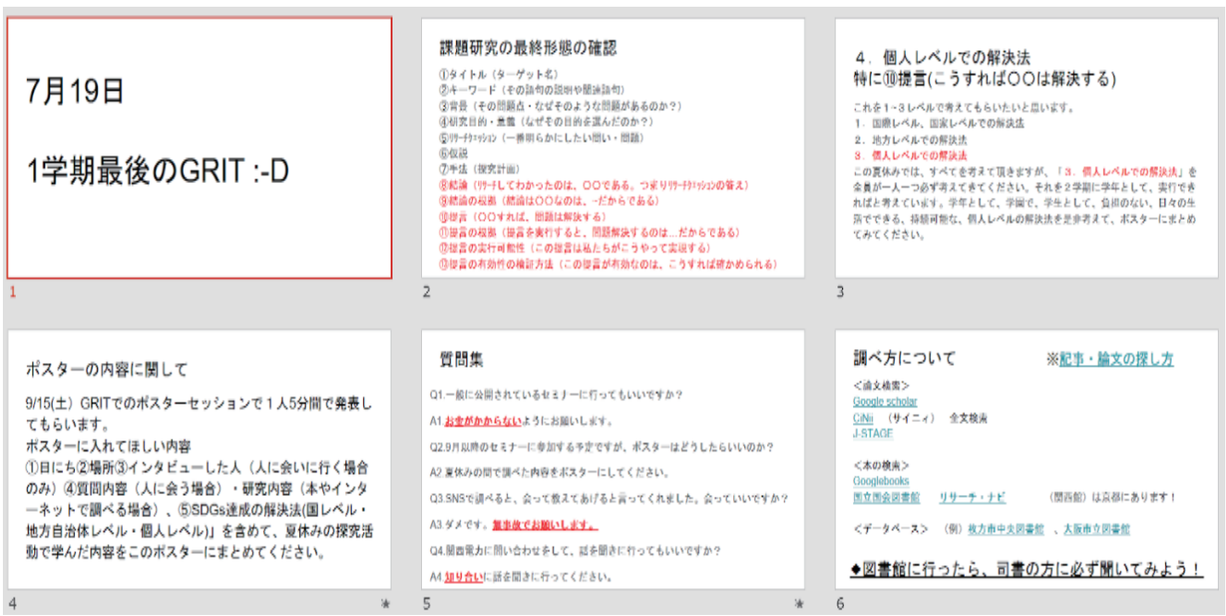
7 月 13 日　プレゼン振り返り、フィールドワークの計画書(探究計画書)作成

　創価大学研修で教授から頂いたコメント等を参考に、課題研究のリサーチをもっと深められる点をあげ、その内容をもとに探究計画書を作成した。

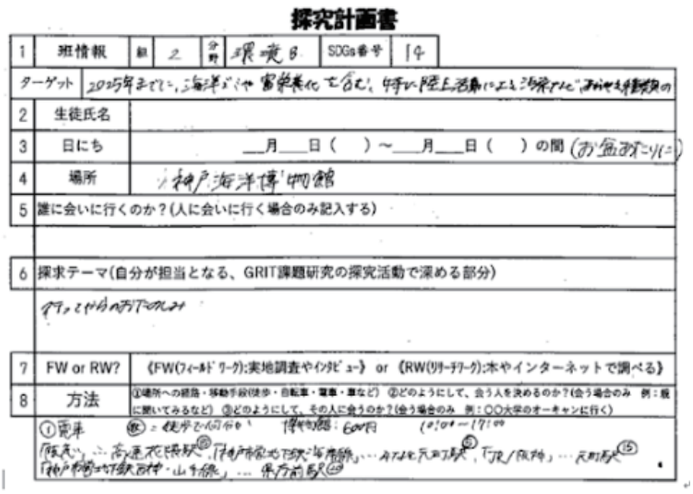
7 月 19 日　ポスター作成に関する指導

　特に個人レベルでの提言を発表させた。またフィールドワークの際の注意事項を説明した。そして、リサーチを深める際に使える有効な方法を紹介した。

　インタビューや現地調査ができない問題や生徒に関しては、リサーチをして探究ポスターを作成するように指示した。



探究計画書を提出させ、生徒たちが安全なフィールドワークをしているかどうかを確認した。
記述例を下に掲載する。

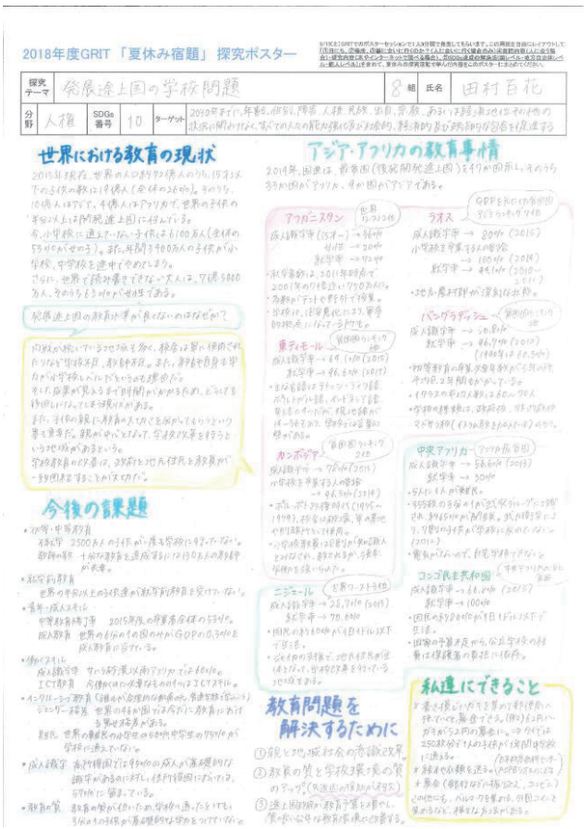

探究計画書

1	班情報	組 2 番号 環境B SDGs番号 14
ターゲット	2050年までに、海洋ゴミや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など海洋汚染の	
2	生徒氏名	
3	日にち	＿月＿日（　）～＿月＿日（　）の間 (夏休み)
4	場所	神戸海洋博物館
5	誰に会いに行くのか？(人に会いに行く場合のみ記入する)	
6	探求テーマ(自分が担当となる、GRIT課題研究の探究活動で深める部分)	
7	FW or RW?	《FW(フィールドワーク):実地調査やインタビュー》 or 《RW(リサーチワーク):本やインターネットで調べる》
8	方法	①場所への経路・移動手段(徒歩・自転車・電車・車など) ②どのようにして、会う人を決めるのか？(会う場合のみ 例：親に聞いてみるなど) ③どのようにして、その人に会うのか？(会う場合のみ 例：○○大学のオープンキャンに行く)

①電車 ㊀ = 徒歩と同じ 時間：60分 (9:00～10:00)
「阪大」…高速で15分 ⑩「神戸海洋博物館」…みなと元町駅 ⑨「JR/阪神」…元町駅 ⑮
「神戸海洋博物館」…山手線」…東方前駅 ⑪

9 月 15 日　探究ポスター発表、プレゼン講座（GOODEARTH 代表取締役 藤原宏宣氏）

夏季休業期間に宿題となっていた、探究ポスターを発表した。各班でそれぞれのポスターを発表し、リサーチを大きく進めた。





ポスター発表の様子





その後にGOODEARTHの代表取締役である、藤原宏宣氏に来ていただき、プレゼンテーションの仕方に関する講義をしていただく。





藤原宏宣氏より以下のアドバイスをいただく。

★プレゼンテーションを作る際の注意点

①準備：表現：話し方＝７：２：１

②「シンプル性」「意外性」「具体性」「信頼性」「ストーリー」

③スライドに説明を載せない。映像や絵などを使った方が、伝わりやすい。

★プレゼンテーションをする際の注意点

①人を指名する場合は遠い席の人を優先的に。

②質問するときは一言で答えられる質問にしましょう。

③原稿を読まない。

④話し手と聞き手の一体感を生むためにも、スライドを読まない。

⑤原稿を読まない。

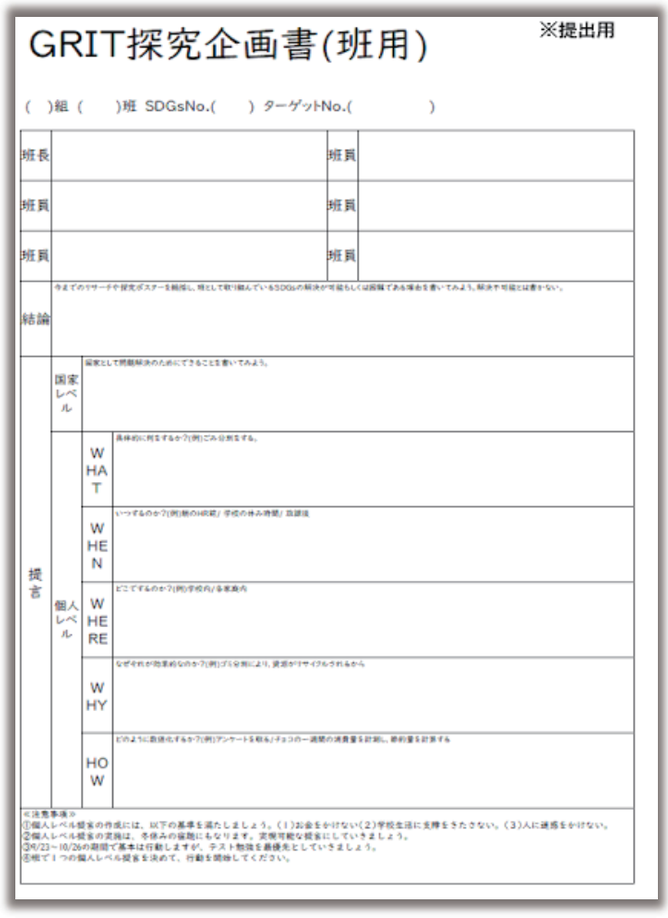
など

9月22日　探究企画書作成のスタート

生徒たちにGRIT課題研究の後半部分の作成のスタートとなる、「探究企画書」の作成を指示。これは、夏季休業期間までの１学期間中は、リサーチクエスチョン・仮説を立てることを目標として行われ、２学期以降からは、実際に自分たちがどのようにこの問題を解決していけるかを個人レベル・国家レベルでの解決策を考える期間としての位置づけとなる。

この探究企画書は、誰が、どのように、何を、いつ、どこでするものなのかを明確ししていく作業である。生徒たちに以下の「GRIT探究企画書」を記入させて提出させた。実質的な解決のための行動を提案する場合は、学年・学校と相談して、生徒たちの安全を確保できるように注意して行った。

身近な問題を取り扱っている生徒たちにとっては、比較的簡単に見つけることもできたのだが、日本国外で起こっている問題に対しては、生徒たちは、問題解決策を考えるのに苦慮していた。



GRIT探究企画書(班用)

※提出用

(　)組(　　)班 SDGsNo.(　　) ターゲットNo.(　　)

班長		班員	
班員		班員	
班員		班員	
結論	今までのリサーチや探究ポスターを観察し、班として取り組んでいるSDGsの解決が可能もしくは困難である理由を書いてみよう。解決不可能とは書かない。		
提言 国家レベル	国家として問題解決のためにできることを書いてみよう。		
提言 個人レベル WHAT	具体的に何をするか?(例)ごみ分別をする。		
提言 個人レベル WHEN	いつするのか?(例)朝の10分間/ 学校の休み時間/ 放課後		
提言 個人レベル WHERE	どこでするのか?(例)学校内/各家庭内		
提言 個人レベル WHY	なぜそれが効果的なのか?(例)ゴミ分別により、資源がリサイクルされるから		
提言 個人レベル HOW	どのように具体化するか?(例)アンケートを取る/チョコの一週間の消費量を計測し、節約量を計算する		

<注意事項>
①個人レベル提言の作成には、以下の基準を満たしましょう。(1)お金をかけない(2)学校生活に支障をきたさない。(3)人に迷惑をかけない。
②個人レベル提言の実践は、冬休みの宿題にもなります。実現可能な提言にしていきましょう。
③9/22～10/26の期間で基本は行動しますが、テスト勉強を最優先としていきましょう。
④他で1つの個人レベル提言を決めて、行動を開始してください。

10月27日　企画書発表＋大学院生よりアドバイスをもらう

生徒たちに探究企画書を発表させた。一か月間、リサーチを行い、実際に自分たちに何ができるかを考えさせ、その結果を大学院生に発表し、アドバイスをもらう機会を設けた。企画書の発表と共に、どうしてそのような問題があるかを発表する際は、問題の考察が大切であり、その部分での指摘も得ることができ、実りの多い時間となることが出来た。





＜大学院生からのフィードバック＞

■人権と開発が混ざってしまっているのでテーマをひとつに絞った方がやりやすいし伝えやすい。水よりも教育の方が日本と結びつけやすいので環境よりも人権で考えた方がいいかもしれない。

■飢餓がなぜ起きているのかという原因を深掘りしたらいい。数値化はできていて良い。

＜生徒たちの感想＞

■自分たちでは得られなかった見方や、考えが及んでなかった点を見つけれてとてもよかったです。

■ある分野について探求している人は、それ以外の分野にも詳しいことがわかりました。きっと、全てのことがいひとつの物事に関わっているからだと思います。様々な知識、視点を持ち合わせている大学院生の方のアドバイスはとても新しくてワクワクしました！本当にありがとうございました！

11 月 10 日　学年プレゼンテーション大会

ここでは、生徒たちは、各クラス内において、クラスの生徒たちの前でパワーポイントのプレゼンテーションを発表させた。リサーチだけでは、生徒たちのプレゼンテーション作りが煮詰まるので、定期的に、他の生徒たちの進捗状況や他の生徒たちからのフィードバックをもらうことで、リサーチを進める手助けをしていった。

12 月 15 日　学年のグループ代表プレゼン大会

環境・開発・人権・平和の分野にはそれぞれ 16 グループ存在するので、それぞれの分野のグループを 2 班に分けて、1 班 8 グループ（合計 8 班 16 グループ）体制を作り、それぞれの班の中より、１グループ代表を選出するプレゼンテーション大会を行った。プレゼン大会後に、学年として８つ代表グループが選出され、その中より、4 つの代表グループを選ぶ選考会を、冬季休業期間後の最初の GRIT の時間で行う予定とした。

選考の際は、生徒へ点数をつけるルーブリックを配布し、それぞれの項目を点数化し、それぞれの班の１位を客観的に決めた。

2019 年 1 月 12 日　学年代表 4 グループ選考プレゼンテーション大会

2 月 23 日に行われる SGH 最終報告会で発表する学年代表 4G を公開プレゼンテーション大会で、学年の生徒全員からの投票で決めた。前年の 2018 年 12 月 15 日に行われた各クラスで行われたグループ発表にて学年代表 8 グループが選考され、その代表 8 グループから学年の生徒全員出席のもと、学年代表 4 グループ選考プレゼンテーション大会を行った。

各グループとも、見事なプレゼンテーションを行い、投票集計されたものは、全て甲乙つけがたい結果となっていた。

結果として、LDC・ジェンダー平等・外来魚駆除をテーマとしてプレゼンテーションを作ったグループが代表に選出された。

2019 年 1 月 19 日　ポスター作成開始

生徒たちは、最後の段階として、今後行われる授業公開で行うパワーポイントでのプレゼンテーションのブラッシュアップ、そして、一般公開されるポスターセッションの作成を行うことになる。５時間ほどの時間を割り当て、ポスター作成を行った。

必要事項として、①テーマ②SDG s ③リサーチクエスチョンを入れるように指示。その他の内容は自由裁量とした。

昨年度と同じように２年生のポスターセッションを経験している分だけ、ポスターに書く字の大きさ、構成、色合いなどは、細かく指示をしなくとも、ある程度イメージが出来ていたため、比較的にスムーズに作成をすることができた。



2019 年 2 月 9 日　ポスターツアー

今まで生徒たちは、班で協力してプレゼン発表をしてきたが、今回は、それぞれのプレゼンを一人で発表する機会を与えた。どれだけ班で探究しているテーマを自分の力にしているかを実感できる場とした。また、将来、自分たちが e-portfolio などで、高校時代の探究学習をまとめる際に、自分の調べた内容を自分一人で作成しなければならない為、その将来の作成の為にも、一人発表の実施を行った。

ジグソー形式で、各班のポスターを壁に貼り、各班より１名が集まり、新しいグループを形成。１人１０分発表、５分質疑応答の時間とした。生徒たちは苦心しながら、プレゼン発表に取り組んだ。

2019 年 2 月 16 日　授業公開

生徒たちは、保護者を招いての授業公開を行い、そこで一年間の成果を発表する機会を作った。自分たちだけの発表をしていると、緊張感がだんだんと薄れてしまいがちになるため、このように、観衆を変えてプレゼンする機会は、生徒たちにとって非常に有益な機会となった。

＜保護者の感想＞

■みなよく調べて発表されていました。おにぎりアクションに参加したいと思いました。

■様々な世界の問題に今、自分が出来る事を考え話し合い、素晴らしい発表でした。私自身今日教えてもらった事を今日だけでなく、SDG s 達成のために行動していきたいと思います。

■実際に大きく行動を起こしていて、感動しました。世界に向けて頑張り生徒たちを尊敬しました。

■発表原稿が紙ではなくタブレットであることに驚きました。興味深いテーマで私たちができることのヒントを具体的に考えていたり、夢のある発表で、あっという間の時間でした。

2019 年 3 月 7 日(木)　ポスターセッション一般公開

一般公開を学校のホームページで呼びかけ、お知らせを全国の SGH 校に郵送した。結果としては、交野第四中学校の教員の方が２名来てくださった。また高校１年生を全員招待して、ポスターセッションを実施した。

学年の全員が、自分たちの１年間の成果をポスターにまとめて、10 分間のプレゼンテーション、5 分間の質疑応答で行った。高校１年生からは、様々に質問が飛び、高校２年生も今までリサーチしてきた内容を元に、真剣に質問に答えていた。





＜高校２生徒の感想＞

■発表は聞き手が興味を持てるように常に考えて作っていかなければならないと思った。

■簡単に分かりやすく文をまとめる力、必要な情報だけを集めてまとめる力が付きました。

■発展途上国の人々のことを考えるようにしている。考える先にできることを、これからやていきたいと思いました。

＜高校１年生の感想＞

■合理的配慮と差別の違いがよくわかった。意識的にこれからもっと考えていきたい。

■外国人労働者の労働環境を学ぶことができ、旅行等で日本に来る外国人の方は多いけれど、労働としてくるのが少ないのは何故かと思っていたから、解決できて良かったです。

■節電の仕方が色々あって、節電しようと思いました。

■フェアトレードチョコで児童労働を無くせるかもしれないとのプレゼンを聞き、フェアトレードのものをたくさん買おうと思った。

■日本での LGBT の割合は少ないと思っていたが、実際の人数を聞いてみると、たくさんの人が LGBT であるということを知って驚いた。

■外来魚の駆除の為に、ブラックバスを釣り、実は食べることもできることを聞き、驚いた。

３年生　テーマ：「模擬国連」「論文・英語サマリー」

○テーマ：平和「核軍縮交渉シミュレーション」

模擬国連を行うにあたり、昨年度までに引き続き核軍縮交渉シミュレーションを行った。生徒を各クラス１２のグループにわけ、架空の国という設定で、模擬国連風の交渉を行った。広島女学院高等学校の教材を教えていただき、時間数などにアレンジを加え、授業をさせていただいた。

１２のグループにはそれぞれの立場と指令が配られ、自分たちが果たしたい目的が示される。それを利用し、交渉と作戦をたてて交渉していく。

クラスによっては、１国の力が強く、交渉をリードするところもあれば、同盟を組んで、交渉を行ったクラスもあった。

進行の様子などは 2016 年度報告書を参考にしてください。

○アカデミックライティング

講師：創価大学士課程教育機構 三好 香里さんをお迎えし、論文作成のためのリサーチ・ライティングのための講座を開催した。

内容：相手に伝わるライティングスキル（構成・パラグラフライティング）を身に付ける。

一貫性とは何かを理解し、一貫性のあるレポートのアウトラインを考える。

○論文・英語サマリー

【　趣旨　】GRIT 学年模擬国連で学んだこと、調べたことについて自分自身のクローズ（提言）を考え論じる

【　論文タイトル　】『安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス』

上のテーマを前提として、そのテーマと各国がどのように関わっていくか、課題解決のための提案を論じる。（模擬国連部の生徒は、『学年模擬国連における課題と展望』をテーマとする）

【　作成日程　】２学期授業　現代文（佐藤先生）の授業でアカデミックライティング事前準備

12 月 15 日（土）②③限「アカデミックライティング講座」　※問いたて、アウトライン作成、実作

※冬休みを使って、論文作成する（宿題）

【論文について】　①文字数：2000 字程度（文字カウントで）

②グーグルドキュメントやワープロソフトなどに入力。（手書き不可）

1 月 11 日（金）この日までに作成を終わらせる

1 月 12 日（土）GRIT　※提出〆切　各国で意見交換し、チェックを行い提出

1 月 19 日（土）GRIT　グループを作り、発表をしあって再度論文検討。修正。よい論文を選ぶ

※1 月 19 日（土）までに修正を含めて完成

【他の授業との連携】※３学期の成績に反映された

・政治経済：GRIT の論文を含めて、さらに論文を追加作成ものが評価される

・TEⅢ：論文をもとに、英語サマリーを作成・完成し、評価される

2018 年度
高校 44 期
学年模擬国連総会

テーマ
「安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス」

関西創価高等学校
11 月 10 日（土）

1．2018 年度スケジュール

2018年度　高校3年生模擬国連大会　スケジュール

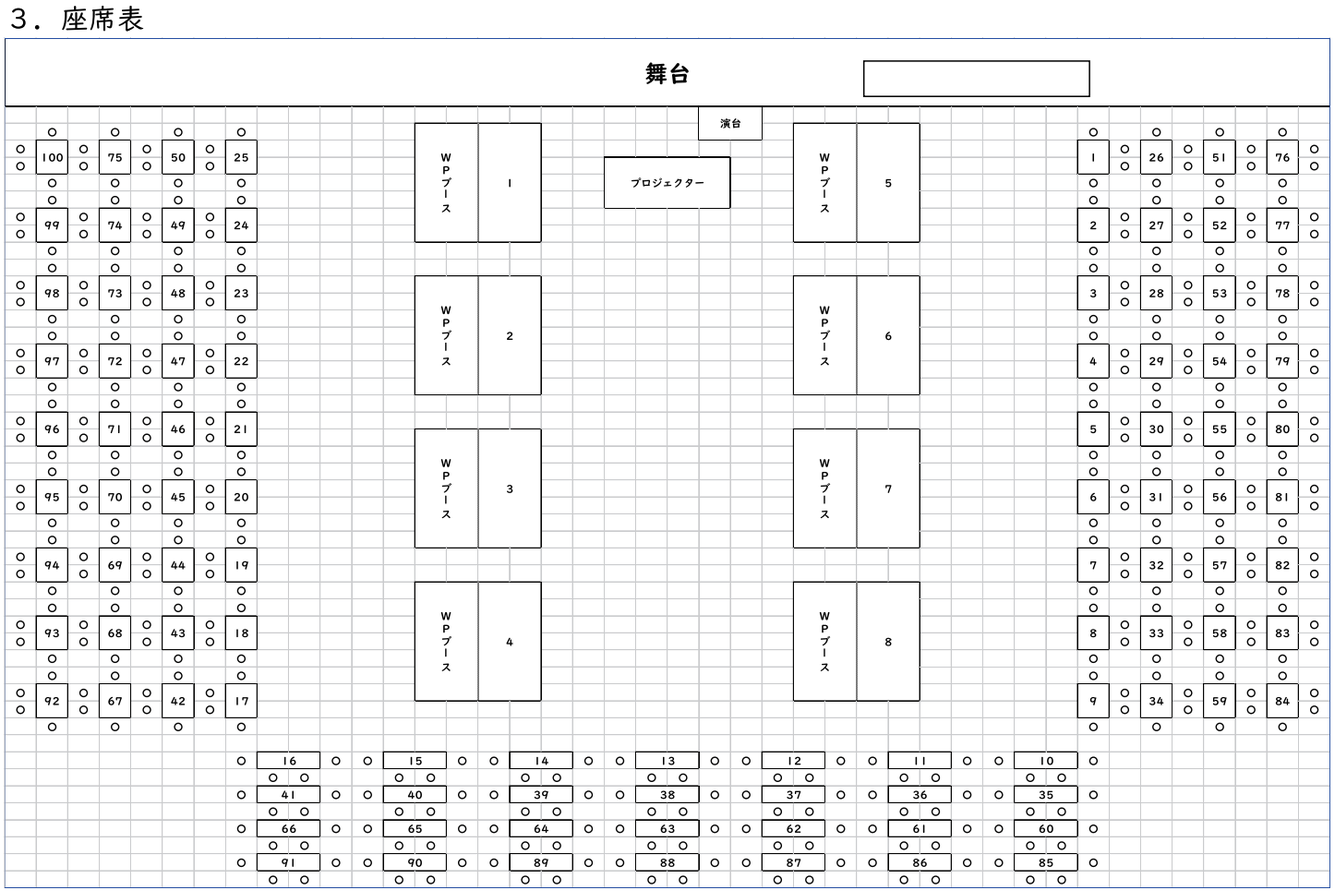
月	日	曜日	時限	会議	内容	備考
4	28	土	③	模擬国連立ち上げ	TV放映でのﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ、各ｸﾗｽ国決め	
6	2	土	② ③	PP作成	PPの書き方の説明、ﾘｻｰﾁ、PP作成→提出　（早いところはｸﾛｰｽﾞ作成）	提出：ｸﾗｽﾙｰﾑ(6月25日まで)
7	11	水	① ②	ｸﾛｰｽﾞ作成	①ｸﾛｰｽﾞの説明　②ｸﾛｰｽﾞの作成 (2~3/各国)	提出：ｸﾗｽﾙｰﾑ
7	12	木	① ②	ﾎﾟｽﾀｰ作成	①ﾎﾟｽﾀｰの説明、ｸﾛｰｽﾞの完成　②ﾎﾟｽﾀｰ作製	
7	13	金	① ② ③	ﾎﾟｽﾀｰｾｯｼｮﾝ	①ﾎﾟｽﾀｰ完成　②③地域別（ｸﾗｽ別）ﾎﾟｽﾀｰｾｯｼｮﾝ	
夏休み				模擬国連部メンバーによるクローズチェック		
9	15	土	① ② ③	WP作成	地域ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ作成→提出	提出：議長　ﾁｪｯｸ：議長団
9	22	土	④	DR説明	ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰの訂正と再提出、DRの作成方法の説明、10月6日の進行に関して	
10	6	土	① ② ③	第1回会議	地域ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ発表(ﾌﾞﾛｯｸｽﾋﾟｰﾁ)、説明→交渉→DRｸﾞﾙｰﾌﾟ作成	
10	19	金	① ② ③		JICA	
10	27	土	② ③ ④	ﾌﾞﾛｯｸﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	DRｸﾞﾙｰﾌﾟでDRを作成→提出→ﾁｪｯｸ→共有	提出：議長　ﾁｪｯｸ：議長団
11	10	土	① ② ③ ④	第2回会議	DRの説明→交渉→修正DRの作成→修正DRの提出→修正DRの発表→投票	

２．２０１８年度国割り

２０１８　関西創価高校　SGH　模擬国連　国割り

	1組	2組	3組	4組	5組	6組	7組	8組
	アラブ・中東	東ヨーロッパ	東南アジア・東アジア	アフリカ	北米・カリブ海	南米・オセアニア	西アジア・南アジア	西ヨーロッパ
1	アラブ首長国連邦	ウクライナ	インドネシア	ガーナ	アメリカ	アルゼンチン	アフガニスタン	アイスランド
2	アルジェリア	ギリシャ	韓国	ケニア	カナダ	ウルグアイ	イラン	アイルランド
3	イスラエル	クロアチア	カンボジア	コートジボワール	キューバ	エクアドル	インド	イギリス
4	イラク	スロバキア	シンガポール	コンゴ民主共和国	グアテマラ	コロンビア	ウズベキスタン	イタリア
5	エジプト	チェコ	タイ	シエラレオネ	コスタリカ	チリ	カザフスタン	オーストリア
6	カタール	トルコ	中国	チャド	ジャマイカ	ブラジル	キルギス	スイス
7	サウジアラビア	ハンガリー	日本	中央アフリカ	ドミニカ共和国	ペルー	スリランカ	スウェーデン
8	スーダン	ブルガリア	フィリピン	ナイジェリア	ハイチ	オーストラリア	ネパール	スペイン
9	チュニジア	ベラルーシ	ベトナム	南アフリカ	パナマ	サモア	パキスタン	デンマーク
10	モロッコ	ポーランド	マレーシア	南スーダン	バハマ	ツバル	バングラデッシュ	ドイツ
11	ヨルダン	ルーマニア	ミャンマー	ルワンダ	ホンジュラス	ニュージーランド	ブータン	ノルウェー
12	リビア	ロシア	ラオス		メキシコ	パプアニューギニア	モルディブ	フィンランド
13						フィジー		フランス
14								ベルギー
15								ポルトガル
16								ルクセンブルグ
国数	12	12	12	11	12	13	12	16
生徒数	42	43	43	43	43	48	40	48

３．座席表



４．クローズ一覧（一部抜粋）

クラス	国名	Aに	Bするために	Cで	Dすることを要求する
1組	**アラブ首長国連邦**	世界銀行	飲水設備がない地域の人々を助ける	河川や降水量が乏しい地域	淡水化施設を建設するための資金の援助
1組	**アルジェリア**	先進国	飲料水の質を向上させる為に	中東地域に	2030年までに浄化器を提供することを要求する
1組	**イスラエル**	海に面してる国	海水を淡水に変えるため	技術を持っている国	技術提供をすること
1組	**エジプト**	先進国	ナイル川への依存を減らすため、雨水の利用、水の再生利用のため	ナイル川流域	地下水を引く井戸の設置
1組	**カタール**	先進国	飲み水設備が普及されていない地域の人々を助ける	降水量が少ない地域	海水を淡水化するためのポンプとRO膜の技術支援
1組	**スーダン**	先進国	川からの大量の水を浄水する設備を作って、その水をそのまま飲料水として使用できるようにするため	浄水設備が足りていない国、またはその設備の精密さ、強度に欠けている国	川の増量があっても浄水が追いつく設備を作る技術の支援と、それを管理する人材の育成
1組	**チュニジア**	世界銀行	淡水化プラントの設置またそこで出来た水を供給するためのパイプを建設	水不足の地域	資金援助
1組	**ヨルダン**	世界銀行	水資源が少ない中東地域での、「紅海・死海プロジェクト」をするため	中東地域	資金援助を要求する
1組	**リビア**	世界水会議	衛生的な飲料水のない国の人々を助ける	降水量が少ない	淡水化技術を広める援助
2組	**ウクライナ**	水道普及率90%の先進国	浄水施設をつくるため	配管の老朽化が見られる国	資金支援
2組	**クロアチア**	先進国	水資源の格差をなくすために	東ヨーロッパで	技術援助と経済支援(270万ドル)を要求する
2組	**スロバキア**	先進国	浄水設備をつくるため	ヴィシェグラードに	浄水設備の技術を提供することを要求
2組	**ブルガリア**	EU	各国の水供給の格差を減らすために	水道普及率が20%以下の国に	水を供給することを要求する
2組	**ベラルーシ**	国際原子力機関	放射汚染された水を浄化する	ウクライナ周辺諸国	ろ過装置を設置する
2組	**ポーランド**	先進国	飲料水が確保できない発展途上国を援助するために	アジア地域、カリブ海沿岸諸国に	2030年までに飲料水を確保するための技術を提供することを要する
2組	**ルーマニア**	先進国	浄水設備をつくる	水道水が飲めない地域	2030年までにろ過技術の向上
2組	**ロシア**	自国を含めた、資金援助が可能な発展国	飲料水不足で苦しむ地域の人々に水を手に入れる手助けをする	水資源も水を浄化する技術もない地域	空気などから水を作り出す装置を設置するための経済支援をする
3組	**インドネシア**	ADB	パペイパーレーション法を実施するために	海に近いWHOの飲料水水質ガイドラインを満たしていない国に	資金の提供を要求する。
3組	**カンボジア**	先進国	安全な水を手に入れるため	浄化設備が完全でない都市部	浄化設備、上下水道の技術支援
3組	**タイ**	UNDP	水道の水がのめる基準値にない地域の水道管や貯水槽を光触媒飲料水システムを利用して、基準値を満たせる水を手に入れられるようにするために、	特に水道管や貯水槽の設備に不備があるとおもわれる地域で、	2030年までに光触媒飲料水システムを利用できている国からの技術提供、また利用許可をもらうことを要求する。
3組	**フィリピン**	ASEAN	安全な飲料水確保するために	飲み水設備が普及されていない地域	ウォーターデリバリーの設置
3組	**ベトナム**	UNDP WHO	安全かつ安定した衛生基準を満たす水の供給を実現	ベトナム国内全体	浄水設備の新設及び浄水技術の伝授を
3組	**マレーシア**	UNDP	飲料水の運搬を衛生的にするために	発展途上国で	ステンレス製などの錆の出ない水道管普及に努めることを要求する。
3組	**ミャンマー**	UNwater	飲み水設備が普及されていない地域の人々を助けるために	安全でない井戸水を飲料水として使用している地域で	水道設備を設置するための資金を要求する
3組	**ラオス**	UNDP	飲料水が十分にない国に提供	水はあるが、お金がない国	飲料水用の浄水設備設置への支援
3組	**韓国**	水道水を飲料水として使用できている国々	最も効率的な海水淡水化施設を設置	水資源は豊富にあるが水質改善が必要な地域	永続的な淡水化技術を伝える
3組	**中国**	インフラ整備が整っている国	飲料水が汚染され飲めない地域を助けるため	工場の廃棄物質の汚染水で困っている地域	下水、汚染水処理の技術者の派遣、技術の伝達を要求する
4組	**ガーナ**	IWP(International Water Project)を中心	安全な水を飲めない人たちを助けるために	アフリカ諸国に	井戸掘りの技術を提供することを要求する
4組	**ケニア**	アジアの先進国	アフリカの農村部の人たちがきれいな水を簡単に手に入れるために	アフリカの農村部の水源地から離れた地域で	浄水施設と水道管などを作るための資金と技術を要求する。
4組	**コートジボワール**	OECD加盟国	都市部と農村部の格差を無くすため	アフリカ農村部	浄水施設を建設することを要求する
4組	**コンゴ民主共和国**	先進国	飲料水を手に入れにくい地域の人々を助ける	貧困率50%以上の近隣国	水道設備を整備するための技術支援を要求する
4組	**シエラレオネ**	UNDP	海水を飲み水にするために	沿岸部に	2030年までに海水を淡水にして、その水を貯めるダムを建設することを要求する。
4組	**チャド**	UNDP	浄水設備を増やし、雇用を増やす	貧困率60%以上の国	技術提供を要求
4組	**ナイジェリア**	OECD	水へのアクセスをたやすくするため	水源が遠い地域に	2030年までに井戸を建設することを要求する
4組	**ルワンダ**	UNDP	清潔な水に簡単にアクセス	アフリカ諸国の農村部	各農村部に井戸を設置するための資金と技術援助
4組	**中央アフリカ**	OECD	飲み水設備が普及されていない地域の人々のため	水道がない地域に	2030年までに浄水設備を建設することを要求する。
4組	**南アフリカ**	先進国	水資源を得る	水を得られない地域	海水を淡水に変える技術
4組	**南スーダン**	アフリカ開発銀行と世界銀行グループと先進国	飲料水の安全を確保するために	アフリカ全域で	2050年までにアフリカ巨大水路「潤」をつくる
5組	**アメリカ**	高い質の水の供給が可能な地域	より良い水質の水を供給するために	水源があるにも関わらずろ過技術が発達していない地域に対し	ろ過技術の提供を要求する
5組	**カナダ**	水資源か豊富なことによって制限なく水を使っている地域	節水意識をたかめるため	その地域	高性能な節水技術の導入を要求する
5組	**キューバ**	IMF	老朽化した水道を直す	水道の老朽化の進む国	資金を提供
5組	**グアテマラ**	UNDP	飲料水として利用できる安全な水道水を提供するために	水質汚染が進んでいる地域に	浄水設備を設置する技術と資金の援助を要求する
5組	**コスタリカ**	ろ過装置を開発している先進国	より水質の高い水を供給するために	安全な水資源を利用できる人口の割合が50%以下の国で	ろ過技術の提供を要求する
5組	**ジャマイカ**	UNDP	一般家庭の水道普及率を上げるために	普及率が100位以下の国々に	2025年までに各国に応じた資金援助を要求する
5組	**ハイチ**	世界銀行	浄水設備を整えるため	汚染された水が原因で感染症などが起こっている地域	資金
5組	**パナマ**	OECD加盟国	汚染を解消するために	安全な水が飲めない地域で	水をろ過する技術を要求する
5組	**バハマ**	UNDP	汚水問題を解決	ハリケーン被害を解決	2030年までに汚水処理施設を建設する
5組	**ホンジュラス**	IMF	上下水道のしっかりしている浄水場をつくるために	インフラが無い地域に	巨額の支援を要求する
5組	**メキシコ**	IMF(国際通貨基金)	水道管理を民営化することによって起こる混乱、または戦争をなくすために	水道管理が確立していない地域に	水道管理、水道設備に対しての資金援助の継続を要求する
6組	**アルゼンチン**	先進国	飲料水へのアクセスを容易くするため	設備の有無に関わらず、水道水が直接飲めない地域への	浄水設備の強化に向けての技術支援を要求する。
6組	**ウルグアイ**	JICA	経済発展に伴う水質汚染をなくすために	中南米に	環境対策の技術支援を要求する
6組	**エクアドル**	先進国	水道水を飲める状態にするために	発展途上国で	2030年までに浄水器をつくる技術を提供することまたは浄水器を輸入することを要求する
6組	**コロンビア**	UNDP	安全な水を届けるために	飲み水の供給がされていない地域に	地方に浄水場を設置すること
6組	**サモア**	UNDP	都市部と農村部の経済格差のある国を少なくするために	飲み水設備が普及されていない地域に	2030年までにパーペイパレーションの完成を急ぐことを要求する。
6組	**チリ**	OECD加盟国	飲み水が普及されていない地域の人々を助けるために	南米諸国内で飲み水が普及されていない地域に	飲み水を提供、配給していくことを要求する
6組	**ニュージーランド**	UNEP(国連環境計画)	飲み水が普及されていない地域の人々を助ける	水道管が通ってない地域	2030年までに水道管を通る
6組	**パプアニューギニア**	先進国	飲料水を確保しづらい人々を助ける	人口の半分以上が安全な水を確保できていない地域	5年以内に海水、雨水を飲料水に浄化する技術支援
6組	**フィジー**	先進国	安全な水を確保するために	インフラ整備の整っていない場所に	技術・経済支援をすることを要求する
6組	**ブラジル**	OECD	浄水場の設置	水質基準の低い国	経済支援
6組	**ペルー**	先進国	安全で最低限のきれいな水を提供するために	最低限の水の普及率が低い地域で	各都市ごとに貯水槽を設置して水を3つに分けて利用可能にすることを要求する
7組	**アフガニスタン**	先進国	飲料水へのアクセスをしやすくするために	比較的紛争が激しくない地域で	飲料水が確保できる避難キャンプを建設することを要求する。
7組	**イラン**	ステップ気候の国	水資源提供	水不足に陥っている国	パイプライン建設
7組	**インド**	先進国	下水道の設備を充実させるために	川の汚染により飲料水確保が困難となっている地域で	2030年までに下水道の普及率を50%に引き上げることを要求する。
7組	**ウズベキスタン**	先進国	老朽化したインフラを改善するために	旧ソ連の諸国に	資金と技術を援助することを要求する
7組	**カザフスタン**	先進国	地下水源を開発するために	中央アジアに	資金援助をすることを要求する
7組	**キルギス**	先進国	配水設備の補修	水道の整備が行き届いてない国	技術支援、経済援助を要求する
7組	**スリランカ**	先進国	上水道の設備を増加させる	農村地、山間部、貧困地域	経済援助
7組	**ネパール**	ODA加盟国	地下水の汚染を解消	南アジアや東アジアの一部	人口に応じた経済援助
7組	**パキスタン**	UNDP	清潔でない水環境の中で、清潔でない水を使い病気な死亡してしまう人を助けるため	水質環境が劣悪な地域に	浄水設備を建設することを要求する
7組	**バングラデッシュ**	先進国	地下水から安全な水を供給できるようにするために	ヒ素汚染など地下水汚染が深刻化している地域に	汚染物質を除去できる浄水装置の早期設置を要求する
7組	**ブータン**	ヒマラヤ以南諸国	汚水処理上の不足による飲料水の不足を解消するために	汚水処理上が少ない地域で	汚水処理上を建設することを要求する
7組	**モルディブ**	先進国	貯水タンク増設	郊外	２０３０年まで
8組	**アイスランド**	UNESCO	水に対する正しい知識を与えるために	安全な水が得られない地域に	教育の機会を与えることを要求する
8組	**アイルランド**	資金または技術力を保有するEUの国々	少しでも水資源を無駄にしないために	漏水率30%以上のヨーロッパ諸国	資金援助または技術提供することを要求する。
8組	**イギリス**	ヨーロッパ諸国	不衛生な水を飲んで亡くなるひとを減らすために	水の質が悪く、衛生管理ができない国に	上下水道の技術や水道管の交換などバックアップする
8組	**イタリア**	水が豊富なヨーロッパの先進国	水道設備が普及されていない地域の人を助けるために	水で困っている発展途上国	水道設備の技術支援を要求する
8組	**オーストリア**	ヨーロッパの水の豊富な国々	飲料水が確保できない地域の人々を助けるために	コンゴ盆地以北の地域に	各自国の飲料水を輸送して供給することを要求する。
8組	**オランダ**	先進国全体	安定した安全な水の供給をするために	世界全体で	水を運ぶパイプラインを建設する事を要求する。
8組	**スイス**	OECD加盟国	十分な飲料水を確保できていない地域の人々に飲料水を供給するために	東南アジア地域で	パーペイパレーション研究を促進する計画の立案、資金援助を要求する。
8組	**スウェーデン**	資金提供が可能な国	水問題が発生している国への地域自治体単位での支援を可能にする	自国	フランス「オーディン・サンティニ法」をモデルとする法設計
8組	**スペイン**	淡水処理技術のある国	淡水化技術を得るために	アフリカ諸国沿岸	風力発電を使った沖合フローティング淡水化プラットフォーム建設をすること
8組	**デンマーク**	EU	浄水設備を機能させる	開発途上国	水道設備を管理するための資金援助
8組	**ドイツ**	EUに	水の汚染を無くすために	南アジアに	ヨーロッパの浄水技術を提供することを要求する
8組	**ノルウェー**	技術・資金援助のできる国	沿岸部の飲料水を飲めない人を助けるために	水道普及率の低い地域に	淡水処理技術の提供を要求する
8組	**フィンランド**	資金がある国	水問題が深刻な国の水道インフラ整備	技術を持つ国	資金を提供
8組	**ベルギー**	EU諸国	中央アジアの水不足を解決するため	現地(中央アジア)	パイプラインの設置
8組	**ポルトガル**	ヨーロッパ西部の水資源の豊かな国	飲料水へのアクセスを確立するために	アフリカ北部の飲料水の乏しい国で	飲料水を適切な価格で売ることを要求する

5．Position and Policy Paper （例）

Position and Policy Paper

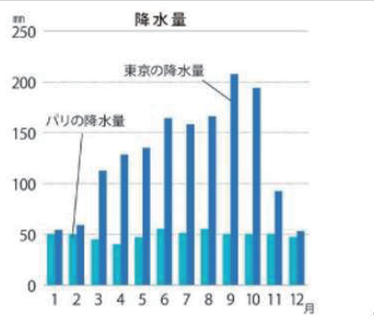
学年模擬国連

担当国名	フランス
メンバー	

第1部　自国の基本情報

今回の議題	**安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス** **2030年までに、すべての人々の、安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスを達成する。**（注：衛生問題ではないです。） 水不足の影響は、全世界の人の40%に及んでいます。 また安全な飲み水の供給量減少は世界中で深刻な問題となっています。 安全で手ごろな飲み水への普遍的なアクセスを確保するためには、インフラの整備に投資し、衛生移設を提供するとともに、あらゆるレベルで衛生状態の改善を促すことが必要です。
周辺地図	

第2部　自国の現状把握

首都	パリ
人口	約6718万人
政治体制	共和制
主な宗教	カトリック、プロテスタント、イスラム教、ユダヤ教
民族	多民族（主にケルト人、ラテン人など）
言語	フランス語
内政状況	(1)2017年4･5月の大統領選挙の結果，エマニュエル・マクロン前経済相が第五共和政第8代大統領に就任。マクロン大統領は，前オランド政権（社会党･左派）で経済相を務めたものの，既成政党の枠外で改革派の結集を目指すとして，自身の政治運動「前進！」（現在は政党「共和国前進」）を立ち上げた後，閣僚を辞任し，大統領選挙に独立系候補として出馬。 (2)マクロン大統領は，共和党（右派）からフィリップ首相を指名し，左派，中道，右派，環境主義者といった政治的多様性を考慮しつつ，男女同数，民間から半数を登用した内閣を任命。同年6月の国民議会選では，「共和国前進」が単独で過半数を獲得。労働法制改革，社会保障改革，税制改革等が目下の重要課題。
国のGDP	2兆5840億米ドル（世界7位） 一人当たり39869米ドル
貧困率	約7.9%(2011年) 151位
気候	主に西岸海洋性気候
降水量	
主要産業	(1)化学，機械，食品，繊維，航空，原子力等。 (2)農業は西欧最大の規模。工業においては宇宙･航空産業，原子力産業などの先端産業が発達。
援助している・されてる機関	EU、JICA

第3部　自国の問題点

論点１	**その国における、水の設備（水道、浄水設備）について**
1.設備状況はどうか、十分であるか	
フランスの地中には延べ90万km以上（地球20周以上）の水道管が張り巡らされ、年間約60億㎥の水が浄水処理を経て供給されている（2008年）。	
2.設備状況に関する問題点	
水は病原菌や寄生生物などを含んでいてはならず、また人体の新陳代謝機能を妨害する恐れがあってはならないことから、血液疾患を引き起こす硝酸性窒素や、鉛や水銀のような重金属、発がん性要素とされる放射線物質などは除去されている。 **ところが今年3月、消費者団体UFC-Que Choisirが2年間にわたって保健省の調査を分析した結果により、フランスでも都市部と農村部で水の質が違うことが明らかになった。それによると、フランスでは年約200万人が汚染された水を使用しているという。都市部では安定した良質の水が供給されるのに対し、人口3万人以下の町で衛生基準に合致しない水道水が供給されていた。また、パリ盆地のパ・ド・カレやシャンパーニュ地域圏、ロワレやセーヌ・エ・マルヌ県の農業が盛んな地域で、農薬や基準値を超える硝酸塩、セレンが水の中から見付かった。これは処理上の欠陥や自然汚染によるものだそうだが、何とも気になる分析結果だ。**

論点２	**その国における、水のアクセスについて**
1.国民は平等に設備を利用出来ているか	
1.（そもそも設備がない場合）どのようにして水を得ているか	
飲料用の水は、地下水約60%、湖水や川など地表に流れる水40%を水源としているが、どんな方法で集水されても、すべて同等に水質分析が行われ、どの家庭にも均一の水質、水圧で蛇口から供給される。	
2.水のアクセスに関する問題点	
地中海周辺、フランス南西部は乾燥するため、住民は時期により節水を心がけなければならないなど、水事情に地域差はある。	

論点３	**その国における、水問題に対する経済的な立場**
1.他国に援助をすることができる立場にあるorない	
援助をすることが できる・できない	
2.（出来る）具体的にどのような援助が出来るのか ex；経済・技術援助	
2.（出来ない）どのような援助が必要なのか	
・地方自治体単位での給水支援及び技術提供が可能	

Position and Policy Paper

学年模擬国連

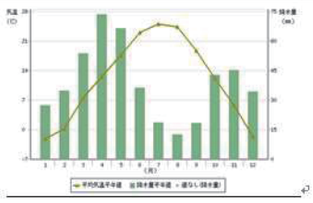
担当国名	**キルギス**
メンバー	

第1部　自国の基本情報

今回の議題	**安全で安価な飲料水の普遍的かつ衛平なアクセス** **2030年までに、すべての人々の、安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスを達成する。**(注:衛生問題ではないです。) 水不足の影響は、全世界の人の40%に及んでいます。 また安全な飲み水の供給量減少は世界中で深刻な問題となっています。 安全で手ごろな飲み水への普遍的なアクセスを確保するためには、インフラの整備に投資し、衛生移設を提供するとともに、あらゆるレベルで衛生状態の改善を促すことが必要です。
周辺地図	

第2部　自国の現状把握

首都	ビシュケク(Bishkek)
人口	600万人(2016年:国連人口基金)
政治体制	共和制
主な宗教	主としてイスラム教スンニ派
民族	キルギス系(72.6%),ウズベク系(14.5%),ロシア系(6.4%),ドゥンガン系(1.1%),タジク系(0.9%),ウイグル系(0.9%),その他タタール系,ウクライナ系など(キルギス統計委データ)
言語	キルギス語が国語。(ロシア語は公用語)
内政状況	バキーエフ政権の下でも,政治・経済改革は進まず,政情不安定が続いた。 2010年4月,国民の不満が高まり,大規模なデモが発生した。治安当局との衝突(犠牲者86名)の末,バキーエフ大統領は出国し,辞任。オトゥンバエヴァ元外相を議長とする「暫定政府」が発足した。その直後の2010年6月10日,南部オシュにおいて,キルギス系及びウズベク系の住民の間で民族衝突が発生した(死者300名以上,難民・国内避難民約40万人)。 2010年6月27日,キルギス新憲法案の是非など(オトゥンバエヴァ移行期大統領の信任を含む)を問う国民投票が実施された(投票率70%以上,賛成票90%以上)。オトゥンバエヴァ大統領は同年7月3日に就任(任期2011年末)。2010年10月10日に議会選挙実施。 2011年10月,大統領選挙が実施され,アタムバエフ候補(当時首相)が当選,同年12月1日に大統領に就任した。 2017年10月に大統領選挙が実施され,ジェエンベコフ候補(前職:首相。大統領選出馬のため2017年8月に辞任)が当選,同年11月24日に大統領に就任した。
国のGDP	65.5億ドル(2016年:IMF推計) 一人当たり…1,072ドル(2016年:IMF推計)
貧困率	約33.7%(貧困率の高さ世界55位)
気候	地中海性気候

降水量	
主要産業	1)輸出 貴金属,鉱物製品,繊維製品,野菜・果物 (2)輸入 鉱物製品,運輸関連製品,機械設備,化学製品 (キルギス共和国統計委員会)
援助している・されてる機関	国連開発計画など

第3部　自国の問題点

論点1	**その国における、水の設備（水道、浄水設備）について**
1.設備状況はどうか、十分であるか	
ビシュケクの水道水には細菌・汚濁は見られない（一部市街地を除く） キルギスの上下水道施設のほとんどはメンテナンスがなされないまま老朽化が著しく、上水道の多くは水質基準を満たしていないことに加え、配水パイプや蛇口からの漏水も目立つ。	
2.設備状況に関する問題点	
一部市街地では古い配管からの鉄錆が混入。また、破裂した水道管では陰圧により雨水や地下水を引き込むこともある。 下水処理施設の充実・改修や運営・管理などが必要。	

論点2	**その国における、水のアクセスについて**
1.国民は平等に設備を利用出来ているか　　上水道普及率は全体で50%	
1.（そもそも設備がない場合）どのようにして水を得ているか	
井戸水や表流水をそのまま利用している。	
2.水のアクセスに関する問題点	
キルギス共和国は天山山脈の西側斜面に横たわる山国であり、国土の大半が高原や山地である。暖房や給油等のため冬期に集中する電力需要は水力発電に頼っているが、冬期発電放流による下流国での洪水発生と夏期の渇水発生などの被害が顕在化するようになっている。	

論点3	**その国における、水問題に対する経済的な立場**
1.他国に援助をすることができる立場にあるorない	
援助をすることが できる・できない	
2.（出来る）具体的にどのような援助が出来るのか ex；経済・技術援助	
2.（出来ない）どのような援助が必要なのか	
浄水施設の充実 配水設備の補修 住民の節水意識の向上 下水処理施設の充実・改修や運営・管理	

6．ワーキングペーパー（例）

関西創価模擬国連　WP8組

2018年9月15日

総　会

言語：日本語

提出国：Sweden（笹川 幸男）

スポンサー：Austria, Belgium, Denmark, Finland, France, Germany, Iceland, Ireland, Italy, Luxemburg, Norway, Portugal, Spain, Switzerland, United Kingdom

＜前文＞

国連総会は、

世界の安全な水を手に入れることができない人が20億人を越していることを問題視し、

世界各国地域で飲料水確保のための水道、浄水施設環境の格差が拡大していることを懸念し、

2018年から28年までの10年間を「国連行動の10年『持続可能な開発のための水』」と宣言したことを再確認し、

＜主文＞

1. スポンサー国全体に、水支援の効率良い資金提供を行うために、支援を必要とする国に、資金提供部門、硬水を軟水に変換する、または、海水を淡水に変換する技術部門、パイプライン建設管理部門、漏水防止部門のいずれか最低一つに参加したスポンサー国による支援をすることを要求する
2. クローズ1に示した資金提供部門に参加したスポンサー国に対し、水インフラの整備をするため、整備が必要な国に、必要な資金提供を要求する、
3. クローズ1で示した硬水を軟水に変換するまたは海水を淡水に変換する部門に参加したスポンサー国に、当該水問題解決及び技術普及のため、水問題が起こっている国で、技術提供を要求する、
4. パイプライン建設管理部門に参加したスポンサー国に、水源を提供するため、水源が不足している当該国に、技術提供及びパイプライン建設を要求する、
5. 漏水防止部門に参加したスポンサー国に、漏水問題の解決をするために、漏水問題が起こっている当該スポンサー国に、漏水防止に関する技術提供を要求する。

関西創価模擬国連　WP3組

2018年9月15日

総　会

言語：日本語

提出国：Thailand（吉川 倫花）

スポンサー：Cambodia, China, Indonesia, Japan, Laos, Malaysia, Myanmar, Philippines, Singapore, South Korea, Vietnam

＜前文＞

国連総会は、

世界の安全な水を手に入れることができない人が20億人を越していることを問題視し、

世界各国地域で飲料水確保のための水道、浄水施設環境の格差が拡大していることを懸念し、

2018年から28年までの10年間を「国連行動の10年『持続可能な開発のための水』」と宣言したことを再確認し、

＜主文＞

1. 光触媒飲用水システムの技術を持っている国に、上水道を飲料水として利用するために、水源の水質汚濁により上水道を飲料水として利用できない国に、光触媒飲用水システムの技術提供を要求する、
2. ステンレス資源を持っている国に、長く使用できる水道管の材料を得るために、十分な水道管設備がない国で、ステンレスを用いた水道管設備のステンレス提供を要求する、
3. 水道管設置技術を持っている国に、永続的に各国で水道管を設置できるように、十分な水道管設備がない国で、水道管設置技術を要求する、
4. 電気透析技術を持っている国に、海水を淡水化するために、海水資源はあるがWHOの飲料水水質ガイドラインを満たす飲料水が確保できない国で、電気透析の技術提供を要求する、
5. 資金援助ができる国に、水道設備や浄水技術、電気透析技術の普及を推進するために、資金のない国に、資金のない国に、ODAによるニ国間協力による有償援助することを要求する。

7ａ．決議案（Draft Resolution）（スウェーデン提出）

関西創価模擬国連　　DR

2018年11月10日

総会

言語：日本語

提出国：Sweden

スポンサー：Afganistan, Austria, Bahamas, Bangladesh, Belarus, Belgium, Bhutan, Brazil, Bulgaria, Cambodia, Central, China, Croatia, Cote d'Ivoire, Central Africa, Chad, Denmark, Dominican, Egypt, England, Fiji, Finland, France, Germany, Ghana, Guatemala, Haiti, Hungary, Iceland, India, Indonesia, Iran, Irelkand, Israel, Italy, Japan, Jordan, Kazakhstan, Kenya, Kyrgystan, Laos, Luxembourg, Malaysi, Maldives, Morocco, Myanmar, Nepal, Nigeria, Norway, Pakistan, Panama, Peru, Portugal, Poland, Rwanda, Samoa, Sierra Leone, Singapore, Slovakia, South Africa, Spain, Sri Lanka, Sudan, Switzerlad, Thailand, Turky, Tunisia, Uzbekistan, Vietnam

国連総会は、

世界の安全な水を手に入れることができない人が20億人を越していることを問題視し、

世界各国地域で飲料水確保のための水道、浄水施設環境の格差が拡大していることを懸念し、

2018年から28年までの10年間を「国連行動の10年『持続可能な開発のための水』」と宣言したことを再確認し、

1、支援国の負担を軽減し、水支援を効率的に行うため、全国連加盟国に対し、自国のできることに応じて、以下の部門のうち一つ以上に加入することを要求する。

対象国は、()内を条件とする。

A.水インフラ部門(水インフラの建設・管理に関する技術提供が可能な国)
B.飲料化部門(水の飲料化に関する技術提供が可能な国)
C.資金援助部門(支援にかかる資金提供が可能な国)
D.将来的支援部門(ABCいずれもできない国)、

2、水インフラの建設・管理の技術が不十分である国の水の供給安定化のため、クローズ1の水インフラ部門に属する国に対し、対象国の要求に応じた、できる範囲での技術支援と技術者教育を行うことを要求する、

以下、該当する技術をならべる。

a.水道設備の建設・管理(水道管普及と安全性の確保、老朽化の改善)
b.井戸の建設・管理(老朽化の改善など)
c.パイプラインの建設・管理(沿岸部や水資源がある地域からひく)
d.貯水タンクの建設・管理(雨水をなどを貯め管理する)
e.その他の水インフラに関連する技術・管理、

3、現在利用できる水源(地下水や川の水など)を飲料水として利用可能にするため、クローズ1の飲料化部門に対し、自国の水源を飲料化する技術が不十分である国を対象とした、可能な範囲での技術支援と技術者教育を行うことを要求する、

以下、該当する技術をならべる。

a.汚染水の浄水(有害物質の除去を含む)
b.海水の淡水化
c.硬水の軟水化
d.その他水の飲料化に関連する技術
e.以上に関係する施設の管理、

4、クローズ2、3での技術支援を実行可能にするため、クローズ1の資金支援部門に対し、以下に列挙する、対象国へのできる範囲での資金援助を行うことを要求する、
なお、資金源は企業と国のどちらでもよいとし、援助のやり方は、低金利での資金の貸し出しの原則とする。(ただし、返済国の返済能力が著しく低い場合などは、別途無償資金援助を行う場合がある。)

a.水インフラ部門、飲料化部門に対する資金提供
b.支援対象国の技術導入に関する資金提供
c.自然災害(地震, 津波など)による水関連設備の被害を被った国に対する補助金交付、

5、水支援を行う国のさらなる負担軽減のため、クローズ1の将来的支援部門に属する国に対し、水インフラ部門、飲料化部門の技術支援、資金援助部門からの資金援助を積極的に受け、将来的に他の部門に対するできる範囲での支援協力を行うことを要求する、

以下にその方法をならべる。(いずれかをすればよい)

a.育成を受けた技術者の他の国への派遣
b.将来的支援部門から他の支援部門への将来的な移行(支援する側に回る)
c.支援された国の水道代の一部を使っての援助を受けた資金の返済。

7ｂ．決議案（Draft Resolution）（アメリカ提出）

関西創価模擬国連　　DR

2018年11月10日

総会

言語：日本語

提出国：America

スポンサー：Argentina, Chile, Tuvaru, Australia, Colombia, Uruguay, Costa Rica, Honduras, Greece, Canada, Romania, Mexico, Czech Republic, Philippines, Jamaica, Korea, Ecuador, Papua New Guinea, Russia, Ghana

国連総会は、

世界の安全な水を手に入れることができない人が20億人を越していることを問題視し、

世界各国地域で飲料水確保のための水道、浄水施設環境の格差が拡大していることを懸念し、

2018年から28年までの10年間を「国連行動の10年『持続可能な開発のための水』」と宣言したことを再確認し、

1.水源はあるが汚水を飲料水に変える技術がない国に、浄水技術が発展している国は、浄水技術の提供を要求する、

2.水源はあるが海水を淡水に変える技術がない国に、海水を淡水に変える技術を持つ国に、技術提供を要求する、

3.光触媒の技術を持つ国は、浄水技術のない国に対して、汚水を飲料水に変えるための技術を提供することを要求する、

4.途上国と発展国との需要供給を平等にし、水問題解決と同時に、お互いが利益追求をできるように、支援をする側になったすべての国に、各国の希望を、アメリカに対して主張することを要求する、

5.利益の還元については、提供する側からの利益の過剰な搾取を防ぐため、またより多くの国が浄水技術を手に入れるために、GDPなどの経済的指標などの基準から、利益の割合を決めることを要求する、

6.提供する側からの利益の過剰な搾取を防ぐため、技術の提供はGDPや経済的指標が高い国から行っていき、その国は自国のGDPよりも低い国に技術提供をしていくことを要求する、

7.技術提供される側からする側に変わった国もまた、提供した国に対して売上の何%かの還元を求むることができる、
ただし、技術提供をした一番最初の国は、一番最初に提供した国からのみ利益を受け取ることができる　後者の国が技術提供する側に変わった場合、その国が一番最初に技術を提供した国からのみ利益を受け取ることができる

8.DR加盟国で１人あたりのGNI10,000ドル以上の国に、突発的に発生する飲料水不足のために、年に１人あたりGNI0.05%の支援金を要求する、

9.災害が発生したDR加盟国に隣接する国内情勢の安定したDR加盟国に、水インフラが復旧するまでの飲料水へのアクセス手段確保のために、当該被災国に対し、DRの支援金を財源とする軍を用いた陸海空いずれかまたすべての経路での飲料水の運搬を水インフラ復旧まで要求する、

10.DRに、災害発生後の水インフラ復旧のために、被災したDR加盟国に、水インフラ復旧のための支援金の送金を要求する、

11.後発開発途上国及び低所得国、低中所得国(以下開発国)に、災害発生後の水インフラ復旧の促進のために、当該被災国に対し、DRの支援金を財源とした技術者、工事車両の派遣並びに、現地の水道局と連携をとっての水インフラ復旧に勤めることを要求する、

12.以下の企業を有する高所得国に、途上国の上水施設及び水インフラ敷設のために、開発国に対し、国内の水道公社、水道会社、土木会社、建設会社、飲料メーカー、浄水技術を有する企業の現地での(子会社設立→子会社設立または、提携･買収)及び技術者育成を目的とした研修の実施を要求する、

13.高所得国に、低所得者が(水を得る事を可能にする程度→食費、光熱費、被服費を自力で稼げるほど)まで所得をあげて水を得ることを可能にするために、開発国に対し、自国における所得の低い国の移住労働者の就職枠の取り付け及び労働者に対する中等教育後期の再教育を要求する、

14.高所得国に、低所得者が(水を得る事を可能にする程度)まで所得をあげて水を得ることを可能にするために、開発国に対し、現地での海外工場の建設並びに、現地住民の雇用を要求する、

15.高中所得国に、他の高中所得国の上水、水インフラの技術向上及び、水問題解決のための資金調達のために、当該高中所得国に対し、国内の水道公社、水道会社、土木会社、建設会社、飲料メーカーの現地での提携･買収並びに、期限付きの返済義務のある資金の貸与を要求する、

16.以下の企業を有する国に、高中所得国内の企業どうしでの水問題解決が困難な場合のみそれらの水問題を解決するために、例外として高所得国内の企業に対し、企業間提携を組むことを要求する、

17.沿岸部地域の水源があるにも関わらず、パイプラインの設備が不十分なために水を確保することができない国に対し、水確保のために、水道普及率50位以上なおかつパイプライン建設の技術が長けている国に、パイプライン建設の技術の提供を要求する、

18.1人当たりのGDPが30位以上の国に、パイプライン建設のために、1で技術をもらった国に、パイプライン建設時の資金の提供を要求する、

19.海水を淡水に変える技術を持つ国に、得た水資源を飲料水にするために、1.2でパイプライン建設ができる国に、その技術の提供、また人材派遣を要求する、

20.援助をもらった国に、この制度での国際間関係の友好を保つために、1.2.3で技術または資金を提供した国に、飲料水を得たことによって豊かになる産業の売上金または農作物を、還元または安く輸出することを要求する、

21.飲料水を得たことによって豊かになる産業の売上金または農作物を、還元または安く輸出することを要求する、

22.IMFに、安定した飲料水の供給のために、緊急の災害時に復旧が困難な地域に、災害発生後から1年間の資金援助を要求する。

8. 注意事項及び用語集

注意事項

- 今年度の取り組みでは、昨年度の模擬国連をさらに発展させるため、『修正案の提出』を最終日に行い、修正決議案に対する投票を行う。
- 各国最大 3 つのクローズを作成する。作成に関しては、Google Form を使い、「A に、B するために、C で、D することを要求する」という形式で作成させる。
- ワーキングペーパー（以下、WP）は、地域ごと（クラスごと）に最大 1 つを作成する。WP の提出には、参加国の半数以上のスポンサー国が必要とする。
- 決議案（以下、DR）は、最大 3 つまでとし、提出に必要なスポンサー国数は 20 か国以上とする。
- 修正案（アメンドメント）は、各 DR につき最大 1 つまで提出できるものとする。また、本会議では、すべて友好修正案であることを前提とする。そのため、修正案の内容は、事前に DR 提出国の賛同を得るものとする。
- 決議に必要な賛成国数は 3 分の 2 以上とする。本会議では 100 か国あるため、67 か国以上の賛成を要する。

用語集

・着席討議（moderated caucus　モデ）

各国大使が着席したまま、他国への質問や、話し合いを行うこと。

・ロビー活動（unmoderated caucus　アンモデ）

全ての大使はこの間に席を立って移動し、他国の大使と自由に交渉を行うことができる。

・モーション（動議）

文言提出、会議の停止・終了など、会議中の議事進行に伴い各国大使が挙げる提案。着席討議やロビー活動を行いたい時に、モーションをかける。動議をかける際は、”motion!”と大きい声で言いながら、自国のプラカードを高く上げる。

Motion で希望できることは、本会議では以下の 4 つとする。

①着席討議（informal debate）
②ロビー活動（caucus）
③DR の提出・撤回
④修正案の提出

クローズ

決議案に含まれる個別の条項のこと。関連する幾つかのクローズをまとめて「決議案」が作られる。

・ワーキングペーパー（WP）

各国大使が自国の主張を記述し、議場に公表するもの。クローズを集めたものであり、決議案の草案となる。

・スポンサー

決議案の提出に賛同した国。決議案に記載された文言に対して説明責任を負う。

・決議案（Draft Resolution　DR）

各国大使の主張を文言化して記載したもの。これを基にアメンド（修正案）交渉などが行なわれる。可決されると決議となる。

・修正案（アメンドメント）

修正案。決議案が公式になった後、提出期限までに各国大使と交渉しあい、決議案の文言に変更・削除を加えたものを言う。修正案には提案国すべての支持を得た「友好修正案」と全提案国の支持を得ていない「非友好修正案」の２種類が存在するが、本会議では「友好修正案」のみを提出できる。

・アウトオブアジェンダ

議題との関連性が薄く、今会議では話すことが不適切と判断されるもの。不適切だと判断された場合には、その内容を議場で話し合うことはできなくなり、決議案からも削除される。

9．会議での様子



いよいよ開会です。



会議の進行は模擬国連部が務めます。



大使になりきり、担当国の現状や政策を伝えます。



動議を提出し、ロビー活動へと移ります。



協力を得られるよう、至る所で熱論が交わされます。



交渉内容をホワイトボードで整理しています。



ICT を使って、決議案を作成していきます。



作成された決議案は、最終的に 96 か国からの
賛成を獲得しました。

１０．決議（修正決議）

関西創価模擬国連　　DR

2018年11月10日

総会

言語：日本語

アメンドメント
提出国：フランス
スポンサー国：オーストラリア、フィジー、オーストリア、キューバ、ペルー、ルクセンブルク、アイルランド、アイスランド、ベルギー

提出国：Sweden
スポンサー：Afganistan, Austria, Bahamas, Bangladesh, Belarus, Belgium, Bhutan, Brazil, Bulgaria, Cambodia, Central, China, Croatia, Côte d'ivoire, Central Africa, Chad, Denmark, Dominican, Egypt, England, Fiji, Finland, France, Germany, Ghana, Guatemala, Haiti, Hungary, Iceland, India, Indonesia, Iran, Ireland, Israel, Italy, Japan, Jordan, Kazakhstan, Kenya, Kyrgyzstan, Laos, Luxembourg, Malaysia, Maldives, Morocco, Myanmar, Nepal, Nigeria, Norway, Pakistan, Panama, Peru, Portugal, Poland, Rwanda, Samoa, Sierra Leone, Singapore, Slovakia, South Africa, Spain, Sri Lanka, Sudan, Switzerland, Thailand, Turkey, Tunisia, Uzbekistan, Vietnam

国連総会は、

世界の安全な水を手に入れることができない人が20億人を越していることを問題視し、

世界各国地域で飲料水確保のための水道、浄水施設環境の格差が拡大していることを懸念し、

2018年から28年までの10年間を「国連行動の10年『持続可能な開発のための水』」と宣言したことを再確認し、

1、支援国の負担を軽減し、水支援を効率的に行うため、全国連加盟国に対し、自国のできることに応じて、以下の部門のうち一つ以上に加入することを要求する、
対象国は、（）内を条件とする。
A.水インフラ部門(水インフラの建設・管理に関する技術提供が可能な国)
B.飲料化部門(水の飲料化に関する技術提供が可能な国)
C.資金援助部門(支援にかかる資金提供が可能な国)
D.将来的支援部門(ABCいずれもできない国)、

2、水インフラの建設・管理の技術が不十分である国の水の供給安定化のため、クローズ1の水インフラ部門に属する国に対し、対象国の要求に応じた、できる範囲での技術支援と技術者教育を行うことと、短期的な解決策としての給水車の提供と管理を行うことを要求する、

以下、該当する技術をならべる。
a.水道設備の建設・管理（水道管普及と安全性の確保、老朽化の改善）
b.井戸の建設・管理（老朽化の改善など）
c.パイプラインの建設・管理（国内、国家間問わず沿岸部や水資源がある地域からひく）
e.貯水タンク・ダムの建設・管理（雨水をなどを貯め管理する）
f.その他の水インフラに関連する技術・管理、

3、現在利用できる水源（地下水や川の水など）を飲料水として利用可能にするため、クローズ1の飲料化部門に対し、自国の水源を飲料化する技術が不十分である国を対象とした、可能な範囲での技術支援と技術者教育を行うことを要求する、
以下、該当する技術をならべる。
a.汚染水の浄水(有害物質の除去を含む)
b.海水の淡水化
c.硬水の軟水化
d.その他水の飲料化に関連する技術
e.以上に関係する施設の管理、

4、クローズ2、3での技術支援を実行可能にするため、クローズ1の資金支援部門に対し、以下に列挙する、下記４-aに列挙する、対象国へのできる範囲での資金援助を行うことを要求する、

4-a　援助内容について
i)水インフラ部門、飲料化部門に対する資金提供
ii)支援対象国の技術導入に関する資金提供
iii)自然災害（地震，津波など）による水関連設備の被害を被った国に対する補助金交付

4-b　資金の分配方法について
まず、資金援助部門に属する全ての国が、年度ごとに、可能な額を拠出する。集まった資金は、上記4-aの支援に分配される。支援を受けた国は、経済状況に基づいて分類された後、それに応じた妥当な額を返済金として定められ、年度ごとに返済する。返済金として集まった資金は、それまでの拠出総額に占める拠出割合に応じて、拠出した資金援助部門の国に、年度ごとに返済される。ただし、調整の各段階において、判断が困難な場合は、当事者間で交渉の場を設ける。

5、水支援を行う国のさらなる負担軽減のため、クローズ1の将来的支援部門に属する国に対し、水インフラ部門、飲料化部門の技術支援、資金援助部門からの資金援助を積極的に受け、将来的に他の部門に対するできる範囲での支援協力を行うことを要求する、
以下にその方法をならべる。(いずれかをすればよい)
a.育成を受けた技術者の他の国への派遣
b.将来的支援部門から他の支援部門への将来的な移行（支援する側に回る）
c.支援された国の水道代の一部を使っての援助を受けた資金の返済。

グローバルシチズンシップセミナー

関西創価高校では、グローバルリーダーの育成を目指して、全校生徒を対象としたグローバルシチズンシップセミナーを実施しており、2018 年度は 4 回実施した。内容は、国内外より講師を招き、環境や人権など世界的な問題について講義をいただくものである。講演の最後の質疑応答では、どの回も生徒からの質問が次々と飛び出すなど、大きな触発を与える機会となっている。

【第 1 回　2018 年 5 月 28 日　夏目　勝弘氏】



元在ノルウェー日本大使館大使を務められた夏目勝弘氏をお招きし、「グローバル化時代の人材」をテーマに講演を行っていただいた。
夏目氏は韓国・アメリカ・イスラエルの大使館や国連代表部で外交官として活躍してこられた。グローバル化時代の人材とは、地球的規模問題に対処しうる人材のことで、必要な要素として、(1) 行動を律する 5 つのレベル（①知識（情報）②戦術（技術）③戦略④歴史観⑤哲学（宗教））、(2) 語学力（英語力）、(3)師弟、(4)勇気、(5)高い志しについて、お話してくださった。また、職業選択の基準として、好きであり、得であり、社会にとっても為になるような職業が理想であるということもお話してくださった。

○生徒の感想

「日本人の語学力、英語力の話は特に耳が痛い部分もありましたが、それ以上に心に響きました。今までテストや試験のためにしか英語を勉強していませんでしたが、「英語なくしてこれからの世界は生きていけない」との言葉に学園生活最後の 1 年、SGH の学園で学ばせていただけていることに感謝して英語も初心に帰って勉強したいと決意しました。(3 年女子)」

「これからの時代に求められる人材像を多角的に示されていて、とても感動し、共感しました。自分は、将来教育の道を考えているので、日本の教育水準を高めていけるように頑張りたいです。また、もう一度自身の行動を見直していきたいと思います。(3 年男子)」

「このセミナーに僕はとても感動しました。いかに世界へ貢献できるようになるかなど、考えさせられました。でも、すごい人は謙虚でおごらず、すごく輝いていました。僕はこのセミナーを聞いて、しっかりと今、努力をして、勉強に挑もうと思いました。また将来、世界に羽ばたき、貢献できるような人材に成長したいです。言われていたように、他人と比較せず、また自分を卑下せず、堂々と生きたいと思いました。(2 年男子)」

「世界平和を実現する為にはまだまだ日本でも多くの問題があるのだなと改めて思いました。私たちは学生時代で何ができるのか、アジア最低の英語力ということなので、しっかり勉学に励み、語学力を身につけていきたいです。(1 年女子)」

【第２回　2018 年 7 月 18 日　新井　勝大氏】



国立成育医療研究センター消化器診療部診療部長を務める本校 13 期卒業の新井勝大氏が「関西から世界へ！－医師としての挑戦－」と題し、講演を行った。学生時代、親戚の死をきっかけに医学部を目指すようになり、創立者の励ましから「人のために生きたい」と決意され、宮崎大学医学部に進学。卒業後はアメリカに渡り、その後はアジアを舞台に活躍。２００１年、アメリカにおいて研修医として学び働いていた頃、同時多発テロを経験した。２００４年帰国。２００６年より、現在の国立成育医療研究センターに勤務している。「病気は子どもたちを不幸にしない。病気を乗り越え幸福になる力を子どもたちは持っている」「足は大地につけて、目は希望の未来に向かって」など、指針とされている言葉を紹介されながら、感動的な講演であった。

○生徒の感想

「しっかり強い心を持つことで、運命をも変えることができると分かりました」（２年女子）

「自分の決めたことは、必ずやり遂げるまであきらめなければやり遂げられることを知りました。私たちの学園生の先輩が今こうやって活躍していて本当にすごいと思うし、私自身にとってもこれから頑張れるきっかけになりました。挑戦していきます」（２年女子）

「“未来をつくるには、努力が必要”との言葉にすごく感動しました。私に今足りないのは努力だと思っています。新井さんのように、自分の経験を語れる方はすごくかっこいいなと思いました。私もいつか学園に帰ってきて、語れる存在になりたいです」（１年女子）

「医学部に進むことに、無理だと現実的にいわれてもあきらめずに勉学に励んだことに感動した。いろんなことに苦しみ悩みながらも自分を信じ、人のために尽くしていこうという強い思いが伝わり、私も将来そのような職業に就きたいと強く思った。また、話を聞いていて、世界は狭く、海外の方と私たちは身近な距離にあるんだなと感じた」（１年女子）

「僕は医療の道に進もうとは思っていませんが、『自分の使命の道で世界平和に貢献する』という面から、とても学ばせていただきました。今は徹して学びの時、鍛えの時なので、勉学（特に英語）、クラブ、読書等に悔いなく挑戦します」（１年男子）

【第３回　2018 年 10 月 6 日　藤原　宏宣氏】

NPO 法人 GOODEARTH 株式会社の代表取締役社長藤原宏宣氏をお招きし、高校１年生対象に講演を行っていただいた。藤原氏はご自身で、西アフリカのギニア共和国初の日系企業として製氷販売の株式会社 P&S を設立、また女性の地位、教育力の向上を目指し、学校 HIMAWARI を設立するなど、貧困問題を解決するために尽力してこられた。講演では、現在 GOODEARTH でギニア、ネパール、バングラデシュでサポートを行っている様子をビデオや写真を用いて詳しく説明してくださるとともに、貧困問題を解決できるだけの財力や資源を持っている日本が貧困問題に目を向けられていない事実を述

べ、貧困問題を解決するには人間の内面にある無関心や無気力を変えていかなければならないと語ってくださった。

○生徒の感想

「今回のセミナーは本当に考えさせられました。いつも、私たちはゲームをしたり、遊んだり、おいしいものを食べたりしていることはすべて、地球の裏ではあたりまえではないし、すごく“ぜいたく”なことだと気付きました。日本は島国だからもあるかもしれませんが、閉鎖的で、すごく無関心なので、このような人に将来なら内容にしようと思いました。今、日本のこの学園で学ばせて頂いていることは、すごく幸福なことなので、この時を大事にします。(1 年女子)

「今の自分はまだまだ無知で、まだまだ関心も低いと感じました。そして今世界中で起きている悲惨な現実は、僕が想像しているようなレベルではなく、違う国だから仕方がないとか、それが現実だから仕方がないでは済ませられない、済ませてはならないと改めて強く感じました。(1 年男子)」

【第 4 回　2019 年 1 月 12 日　久保　友明氏】

九州大学理学研究院地球惑星科学部門で教授を務める、久保友明氏をお招きし、講演を行って頂いた。現在は地球について研究をされており、地球の内部構造や様々な物質の性質について、お話して頂いた。

高校生の時は、勉強と陸上部の両立に挑戦し、すぐに結果は出なかったが、努力を重ねる中で、近畿インターハイに出場したことを紹介。

高校生の時に学んだことが、現在の研究や仕事に生きていることを教えてくださった。



○生徒の感想

「ダイヤモンドの話で“金剛不壊”という言葉がありました。ダイヤモンドの様な、何事にも壊されない心を持つことが大切とありました。最後に今回の講演を聞き、自分もやろうと思ったことは、「“自勝者強”･･･自分に勝てる者は強い」とあるように、自分にかえるようにクラブと勉強の両立をやりたいと思いました。(1 年男子)」

「最初地球の内部構造から始まってとても興味を持ちました。深層部にはかんらん石やダイヤモンドがあることにもびっくりして相転移と言う言葉も初めて聞きました。温かい氷と呼ばれるものが気圧でできるのもすごく面白かったです。自分の使命をみつけて、貢献できる人材に成長していきたいと思いました。(1 年女子)」

「「目の前の課題に取り組むこと」や「失敗しても可能性を見出すこと」「最後は必ず勝つこと」を学びました。これから勉強で落ち込むこと、挫けることも多くなると思いますが、今日学んだことを胸にこれからも頑張って努力を積み重ねていきます。(1 年男子)」

The Tokyo Times

Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork — Thursday, July 12, 2018 —



Amnesty International

By Atsushi Saito, Arisa Tatsumi and Rei Hagihara

Amnesty International(アムネスティ インターナショナル）は難民やLGBT・死刑制度など様々な問題に取り組んでいる世界最大の国際人権NGOです。彼らが意見を強く主張できるのは「すべての人が人権を持っている」との軸を根本としているからです。私たちは、難民や犯罪者など、どんな人に対してもその人の立場に立って考え、その人の人権を守ることを優先するという彼らのぶれない姿勢を学びました。また、質疑応答を通して、今まで私たちが真実を知ろうとリサーチしてきたものが、実際は間違った情報も含まれており、証拠を元に真実を知る事の難しさを改めて感じました。

Amnesty International is the largest international human rights NGO in the world, which protects various people's human rights such as refugees and LGBT. The reason why they can strongly advocate their opinions is that they are based on the idea "All humans have equal human rights". We learned their strong faith that they must put themselves in each person's position, and protect all human's rights at any occasion.
We have been researching in order to know the truth, but from the Q&A session we noticed that few of them was incorrect, so we could learn the importance of learning the truth based on evidence.



Save the Children Japan 川上園子国内事業部長とセッション



Amnesty International Japan 石田城孝元理事長とセッション

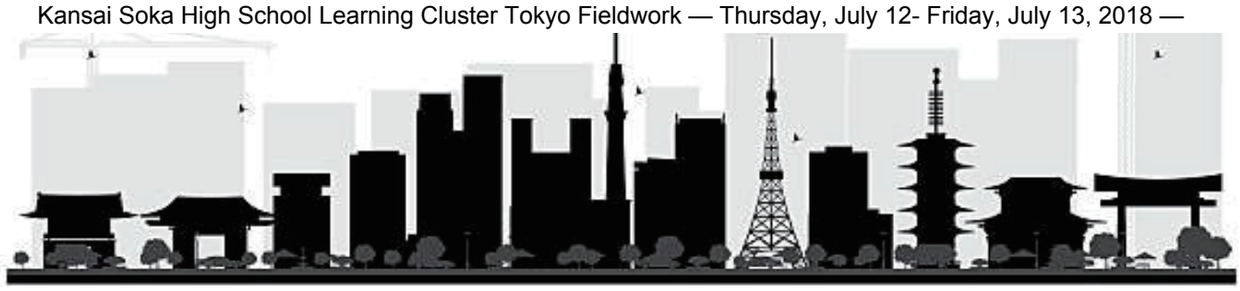
Save the Children

By Hiromi Hashide, Marine Uemura, and Kazuyo Mizuta

Save the Children（セーブザチルドレン）は「生きる・育つ・守られる・参加する」の4つの権利を基本とする「子どもの権利」が実現された世界を目指して活動する国際NGOです。児童労働や早婚、子供の難民問題などについて学び、世界の子どもたちが直面する深刻な現状を知りました。講義では、学校が近くになく家事や水汲みなどに一日の時間をとられ、教育を受けられないアフリカの子供たちに教育の機会を与えるための解決策を皆で考え、次から次へと出されました。ある生徒は子供たちに自転車を提供することを提案しました。これに対し、講義をしてくださった川上園子さんから、自転車を導入することで教育の機会を与えると同時に雇用の機会を生むことができるためとてもいい案だと、お褒めの言葉をいただきました。複雑な地球的課題でも、若い世代の私たちの斬新で新しい視点により、解決へと導くことができるということを実感しました。

Save the Children is an international NGO, working to create a world in which every child can attain the right to survival, protection, development, and participation. Through learning the activities which Save the Children does internationally, we were able to know the reality of the severe situation children are facing right now. In the session, Ms. Kawakami challenged us to think of a solution to help children who have no chance to take education in Africa. One student suggested introducing bicycles for those children, and Ms. Kawakami said that it is a very nice idea. Even if it is a complicated global issue, we thought we can contribute to solve them by giving many ideas from our own creative and practical perspectives.

The Tokyo Times
Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork — Thursday, July 12- Friday, July 13, 2018 —



Human Rights Now

By Sakura Naka and Hiroto Tamura

ヒューマンライツナウは、日本を拠点とした初の国際人権NGOです。2006年に弁護士を中心に創立され、人権侵害を受けている世界中の民衆を救うために世界を舞台に活動しています。深刻な現状にある人権侵害を根本から解決するために、事実を探求する調査・報告、社会に働きかけるアドボカシー、コミュニティの団結力を高めるエンパワーメントの3つの視点を講義で紹介していただきました。まずは人々の人権への意識を高めることが大切であり、「高校生の発言は影響力が大きいこと知ってもらいたい」とわたしたちに期待を込めて講義してくださいました。国際社会の一員として自分たちの責任と使命を自覚し、これからも情熱を燃やして探求し続け、声を上げていきます。

Human Rights Now is the first international Human Rights organization in Japan. It was founded by mainly lawyers, and takes actions to save citizens around the world. In this lecture, we learned three philosophies to solve human rights violations. The first step is to research and reports to find fact, advocacy to approach society, and empowerment to reinforce solidarity. Human rights now said it is essential to raise people's awareness about human rights as an initial step. They told us that the voice of young people will be valued because we are the future. It became an opportunity for us to realize our own responsibility and mission as members of international society. All of us were strongly determined to keep learning with passion.



JOICFP 事務局長　勝部まゆみさんとセッション



Human Rights Now 伊藤和子事務局長とセッション

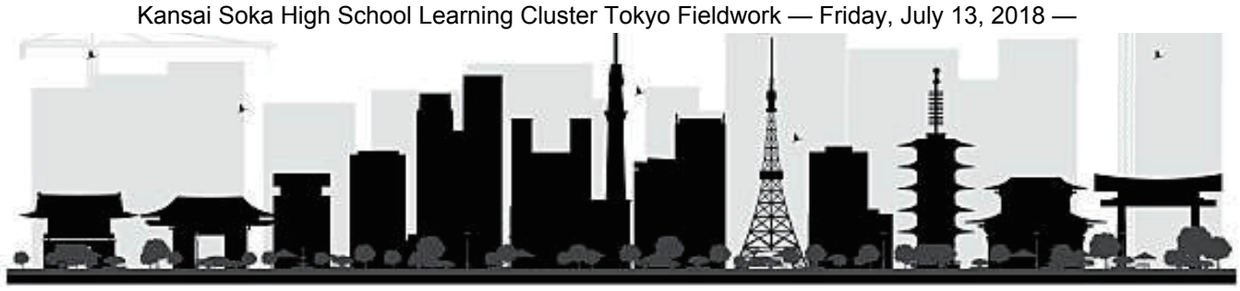
JOICFP

By Yuichi Matsuna, Takuto Yoshii

「性と生殖に関する健康と権利(SRHR)」を守っていくため、人道的な家族計画を推進する活動をしているのがJOICFP（ジョイセフ）です。設立当時、国は子どもを減らすための家族計画を推進しており女性の人権は差別されていましたが、JOICFPは、女性の健康や人権を守るための家族計画を推進していました。SRHRは性や生殖に関して同じ喜びや、安全を人々が共有することで、危険などからは守られているということです。だれも搾取することはできません。また、日本ではまだまだ女性の社会的地位が低く、女性のSRHRが守られていないことを学びました。その後の質問会では、男女平等社会を実現するために高校生のできることについて伺いました。私たちは、未来があり、男女平等へのアピールを地域社会で行っていくことが重要だと回答してくださいました。

JOICFP is an organization to promote “humanistic family planning” to protect “Sexual Reproductive Health and Rights (SRHR).” In establishing JOICFP, government promoted “family planning,” but this purpose was to reduce children, so the women’s rights were ignored. However, JOICFP continued promoting family planning that will protect women’s health and rights. The definition of SRHR is that people are able to enjoy a mutual satisfying and safe relationship, free from error or violation. No one can exploit this right. We also learned that women’s SRHR are not protected in Japan since most administrative positions are run by men. In the Q&A session, one student asked about how to promote rising women’s position as a high school student. She said that high school students have very long future. We can discuss about that and appeal gender equality to school, society, and around the world.

The Tokyo Times
Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork — Friday, July 13, 2018 —



United Nations University

By Emi Kuroda, Yuichi Sakemi

国連大学では地球規模の課題の解決のために共同研究や教育、政策に対して助言などを行っています。また多様な機関と連携し、多くの事業や研究を進めています。講義では、インドネシアでの津波災害やシエラレオネの内戦などを例に、世界の苦しんでいる方々の思いや生活など衝撃的な現状を目の当たりにしました。講師の今井夏子さんは、国際協力には人命救助やインフラの整備など様々な形があるので、世界に貢献するために一番興味のあるものを見つけ、信念、会話力、言語力を磨いてほしいと鼓舞していただきました。「皆が幸せになれる平和はどうすれば実現できますか？」という生徒の質問に対し、「初めは世界平和の実現ではなく、周囲の人を幸せにすることで叶えられるはずです」と答えていただきました。

United Nations University (UNU) is trying to solve global issues by educating, researching collaboratively, and giving advice on policies. In addition, UNU cooperates with various organizations and implements various projects. In the session, we saw videos about the tsunami disaster in Indonesia, civil war in Sierra Leone and witnessed the unbelievable reality of severe life and thoughts of people who are suffering from such issues. Ms. Imai, the speaker of the lecture, encouraged us to find interesting things and have strong belief, communication ability and several languages to contribute the world. During Q&A session, a student asked Ms. Imai how to realize peace that makes everyone happy. She answered that it can be realized by making people around you happy, not trying to realize global peace at first.



日本ユニセフ協会 学校事業部の山口鮎美さんとセッション



国連大学の今井夏子さんとセッション

UNICEF

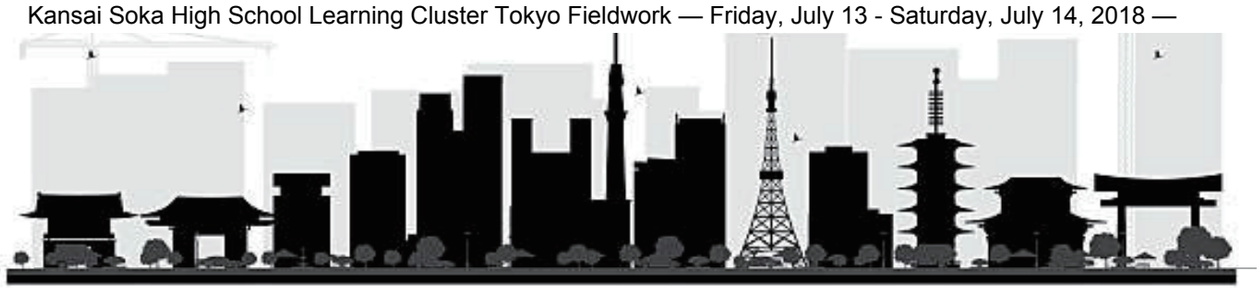
By Ayumi Otsuji, Shota Kuwabara

UNICEFは子どもを守ることを目的とした国連機関です。ルドウィク・ラフマンの提案の元、1946年に創設されました。UNICEF は、世界の国に呼び掛け、子どもの権利条約に加盟する国を増やしました。

講義の中では子どもの権利条約に関するワーショップを行い、人権侵害が日常に存在することに気付くことができました。また、ビデオを通して、ユニセフは、栄養失調で亡くなる子どもの数を減らすために、1袋で500キロカロリーを摂取できるナッツや、1粒で6ヶ月分の栄養価があるビタミン剤を食の行き届いていない国や地域に届けていることを学び、貧困問題解決のための対策例を知ることができました。

UNICEF is an organization to protect children and was founded by Rajchman Ludwik in 1946. In 1989, the United Nations declared ‘Convention on the Rights of the Child’ to save persecuted children. Through workshop, we realized that violation of child’s rights exit in our ordinary life. Also, we were able to learn an example of solutions to cope with poverty from this session. UNICEF has invented and sent plumpy nuts which have 500 kcl per one package and a vitamin A medicine which can stay in a body for 6 months per one pill to countries where people are suffering from malnutrition.

The Tokyo Times
Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork — Friday, July 13 - Saturday, July 14, 2018 —



JICA

By Kazuyo Nishida, Ryoma Masutani

JICA(独立行政法人国際協力機構)は日本のODA予算から、青年海外協力隊事業などで相手国のニーズに合わせた途上国支援を行っています。フィールドワークでは、アフリカの少女が8時間かけて毎日運んでいる15リットル分の重さのバケツなどの様々なSDGsを体験できる展示があり、実際にバケツを持ち上げたときはその重さに驚きました。また、エチオピアで数学を教えた青年海外協力隊経験者の方にインタビューを行いました。エチオピアでは食材を切る包丁や調理で利用する水が汚いため、食事をした際にお腹をよく壊していたそうです。JICAでのインタビューや様々な工夫を凝らした展示を通して、私たちは「伝える」ことの重要性を感じ、伝える姿勢を学びました。私たちはLCの活動で学んだことを親や友達など身近な人から、私たちの身の回りから伝え、意識を高めていきます。

JICA (Japan International Cooperation Agency) provides assistance such as volunteer work to meet the needs of the developing countries based on Japanese ODA budget. We visited JICA's SDG exhibition. In the exhibition, there was a bucket of water that is carried for eight hours by a girl in Africa. Moreover, we were able to interview a JICA's staff member who had taught math in Ethiopia. She said that she often had stomach ache, because knives that cut foods and water was dirty even so she was hungry. Through our interview and JICA's exhibition, we felt the importance of "telling" and learned attitude of telling. We'll tell our familiar people such as parents and friends what we learned in LC activities and raise their awareness of global issue.



JICA地球ひろば



民音研究所オリビエ・ウルバン所長とのセッション

Min-On Research Institute

By Akiko Mihara, Sakiko Ochiai

民音とは、「人々の音楽」という意味です。民音音楽研究所は、平和を実現するための活動を助ける音楽の隠れた力を異なる分野で探求するために創設されました。講義では、音楽が人権運動と深い関わりを持っていること、分断をつなぐ力があり、戦争で傷ついた人を癒す力があることを学びました。世界中で様々な音楽活動が行われている事を知る中で、人種や文化の違いに関係なく音楽は世界共通であることを実感しました。質疑応答では「政策などによってではなく、一緒に歌ったりするなど、同じことを皆でやることで文化などの違いを越え、人権を守ることに繋がっていく。」と教えてくださりました。私たちも、世界の様々な音楽に触れ、文化を知り、そして音楽を共有することを通してたくさんの国の人々と関係を結んでいきたいです。

Min-On means "people's music." The Min-On Research Institute was established in order to pursue multidisciplinary investigation of potential of music in peacebuilding activities. In this lecture, we learned that music is deeply related to the civil rights movement, and music has the power of bridge divides and heal the wounds of war. In addition, we noticed that music is common in the world by knowing various kinds of music activities. In Q&A, Dr. Urbain said that doing same thing with people who are from various countries such as singing together will get over the difference and lead to protect human rights. Through this lecture, we were determined to build good relationships with people around the world by exposing to various music and cultures, and sharing the music.

The Tokyo Times
Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork — Saturday, July 14, 2018 —



SGI Peace Committee

By Tomoaki Esaki, Miwa Sakoda

最後に訪れたSGIでは、河合SGI平和委員会事務局長よりディスカッション形式で講義をして頂きました。ディスカッションでは、私たち高校生が取り組める平和建設のプロセスについてや、各国の宗教的対立・冷戦を通して人権に対する人々の意識がどう移り変わったのかについて学びました。また、異なる宗教や文化を持つ方々と関わる時には、どれだけ迫害を受けても相手の生命の尊厳を信じぬいた不軽菩薩の精神で基礎的な知識と相手に対する敬意を持つことが大切だとアドバイスをして頂きました。同じ地球に住む一人の人間として他の人々を幸せにすべく、これからも勉学に励んでいきます。

We received a lecture in a discussion by Mr.Kawai, SGI director of Peace and Human Rights. Through our discussion, we learned process that high school students can build peace, and how people's awareness of the process of how we can contribute to peacebuilding as high school students and how the awareness of human rights are changed among people through the Cold War, religious conflicts and other incidents. Furthermore, Mr. Kawai gave us advice that when we communicate with people who believe in different religions or have different cultures. It is important to learn basic values and respect them with the spirit of Sadāparibhūta who continued chanting for other person's dignity of life, even if they were continuously persecuted. We will do our best to study to make other people happy as a human beings who lived in a shared world.



河合公明SGI平和委員会事務局長とセッション



東京フィールドワークに参加したラーニングクラスターメンバー20名

東京フィールドワーク

1　行程・概要

7 月 12 日から 3 日間、東京フィールドワークが行われた。

希望者の中から抽選された 10 名が参加した。約一か月前から取り組んだ事前学習では、国連の SDGs について、疑問点を洗い出し、皆で共有をした。また、「ガーナ北部に Stunting（発育阻害）・栄養改善（SDGs Goal2）に向けた、イノベーティブなアイデア創出」というテーマで行う JICA でのワークショップに向けて、1 年生 6 名がガーナ北部に関する基礎情報についてプレゼンテーションを作成した。青山学院高等部での SGH 校同士のワークショップに向けて、2・3 年生 4 名が関西創価高校の SGH の取り組みを紹介するプレゼンテーションを作成した。また、訪問先の JICA，UN GEOC，SDGs 市民社会ネットワークについて事前に調べて情報をまとめた。

12 日早朝の新大阪発の新幹線で東京に向かい、昼過ぎに永田町の参議院議員会館に到着した。杉参議院議員の事務所にて、杉参議院議員と 20 分ほど懇談の場を持った。その後、国会議事堂へ移動し、国会見学を行った。テレビでしか見た事の無い国会議事堂内の見学に、皆興味津々だった。

その後、JICA 市ヶ谷に到着し、JICA に勤務している本校卒業生の岸本茜さん（28 期）、樋口晴子さん（28 期）、加藤真一郎さん（39 期）に担当していただき、「ガーナ北部に Stunting（発育阻害）・栄養改善（SDGs Goal2）に向けた、イノベーティブなアイデア創出」というテーマでワークショップを行った。まず、1 年生 6 名がガーナ北部に関する基礎情報についてプレゼンを行い、その後 2 グループにわかれて課題改善へのアイデア出しを行った。

岸本さんからは、生徒たちから出た新しいアイデアを今後 JICA でおこなう会議に反映していきたいとの言葉をいただいた。

国際協力に携わる中で学んだことや熱い思いを語っていただき、生徒たちは大きな触発を受けた。

続いて、JICA 市ヶ谷の地球ひろばの見学を行った。地球ひろばでは、企画展示「食べるコト　生きるコト」が行われており、世界の食と栄養の問題について、視野を広げることができた。また、世界各地の民族衣装を着られるコーナーでは、様々な文化に触れることができた。

2 日目は、まず、国連大学で SDGs 市民社会ネットワークの唐木さんの講義を受けた。SDGs や国連のことなど、海外経験を踏まえたとても貴重なお話しを聞かせていただいた。終了時間を過ぎても生徒からの質問が止まなかった。

午後は LC 東京フィールドワークのメンバーと合流をし、本校の卒業生で国連大学で勤務されている今井さんの講義を受講した。いま世界で起きている悲惨な現状を映像で見せていただきながら、国際協力の仕事につくために必要なことや、学生のうちに身につけておくべき力など、具体的にアドバイスをしていただいた。

LC メンバーとは別れて、国連大学内を案内していただいたあと、地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）でレクチャーを受けた。GEOC の山口さんから、環境問題、パートナーシップの難しさと大切さについて講義をしていただいた。

その後、GEOC 内の資料を自由に閲覧しながら、山口さんにさまざまな質問をさせていただいた。本当に素晴らしい機会となりました。

最後に、ユニセフハウスに移動し、展示を見学した。

3 日目は、戸田記念国際会館で SGI 平和運動局の河合さんより講義を受けた。世界全体が SDG s に

取り組むに至るまでの歴史的経緯を概括しながら、SDGs についてお話していただき、その洞察の深さに生徒たちは終始、感動していた。

午後は、青山学院高等部に移動し、交流を行った。同じ SGH 校としての取り組みをお互いにプレゼン発表し、その後、青山学院高等部の生徒と一緒に Happiness(幸せ)について、個人の立場と国の立場で考えるワークショップを行った。関西創価高校の生徒と青山学院高等部の生徒を混ぜて 4〜5 人のグループを作り、ディスカッションを行った。各グループでのディスカッションの内容を前半は英語で、後半は日本語で発表した。青山学院大学の留学生も話し合いを活発にするファシリテーターとして入っていただき、素晴らしい内容の交流となった。

その後、新幹線で品川を出発し、新大阪に到着した。

フィールドワーク終了後、学んだ事をレポートにまとめ、報告ポスターを作成し、渡り廊下に掲示した。オープンキャンパスなど各種行事でポスターセッションを行った。

2　生徒感想

１年７組３７番　久野 美明

今回、東京フィールドワークに参加させて頂きましたが、この研修を終えた今、どれだけ自分が世界について無知だったかに気付かされたとともに、自分が何が出来るのか考えることが出来ました。でも今の現実は、SDGs はあまり認知度が低いことです。この気持ちや感じたことを多くの人に伝えたいです。そのために、どんどん活動していきます。

２年７組４２番　藤岡 里桜

初めて知ることだらけで、とても充実した 3 日間だった。特に地球ひろばやユニセフ、今井さんのお話、JICA ワークショップでは現地を実感できる良い体験的な学びだったし、中でも自分たちが暮らしている地域や生活の差を痛感した。今でも、日本以外の国ではあんなに悲惨なことや残酷なことが起こっていると信じられないほど衝撃的で、今回見聞きして知って、自分にできることを積極的に探していこうと思った。また、自分が恵まれた環境で育って、今も生活できていることにもっと感謝していこうと思った。

河合さんの話や、市民社会ネットワーク、GEOC、国会での体験は、SDGs をより深く追求できて今まで GRIT でやってきたことで満足していた所や、知っている気になっていた部分を改めて見直すことができ、世界の問題に対して真っ直ぐ向き合う良い機会になった。特に日本の中で、SDGs を知っている人が少ないんじゃないかと気になり、問題点じゃないかと思ったので、まずは自分の身の周りの人から SDGs について広めていくことを今後の目標として実現のために、貢献していこうと思った。

３年４組３１番　中野 茉琳

この 3 日間は本当に充実していたし刺激のあった時間でした。学園生活最後にこうやって代表として学ぶ機会ができて良かったしみんなに伝えていきたいと思います。初めて知る事ばかりでいまだにまとめ切れていない部分がありますがこれから少しづつ自分のなかで消化していきます。また現地の生活に近い体験や日本では見ることのできない映像など普段とはかけ離れた経験ができ、今まで少し他人事と考えていた世界の問題についてより深く考えさせられました。

2018年度 東京FW
一日目　JICA

私たちはJICA本部に行き、関西校卒業生三人と会いました。そして一年生が、事前に調べたガーナ北部の栄養問題についてプレゼンをしました。
ガーナの北部は乾燥しており農業に適さないことや、味の素がガーナの離乳食の栄養を補う粉を販売することでガーナの女性や子どもを支援していることなどを発表しました。
国内の企業がしていることでしたが、調べるまで誰も知りませんでした。
プレゼンを通し、ガーナという全くイメージのなかった国への関心が深まりました。





その後、2グループに分かれてガーナ北部の栄養問題の原因とそれに対する解決策のアイデアを出しました。
栄養不足の解決策としてcookpadと協力して現地の果物を使ったスムージーを作り、そのスムージーを誰でもシェア出来るようにするスムージークーラーという案や、ガーナの多くの人々が食料を適切に保存出来ていない現状を打破する為にPot In Potという簡単にできる冷却機を使う案。貧困の解決策としてはまず、知ってもらおうということから、発展途上国の現状をtwitterやCM、音楽で人々に発信するという案。直接的な支援として先月の西日本豪雨の際に利用されたラインポイントやTポイント使っての募金の呼びかけをするという案。地球温暖化の観点からはチョコレートを作る際に出るカカオ豆の殻を使ってのバイオマス発電などの意見が出ました。

最後は本校の卒業生でもあるJICA本部の3人の方に講義をしていただき、今実際に行われているプログラムや青年海外協力隊として訪れた国の人との体験など現地を訪れた方ならではのお話を聞かせていただくことができました。





その後、JICA地球広場に行き、世界の食生活や食の問題について学びました。貧困地域では飢餓と肥満の両方の人がいること。生まれてから1000日の食事がどれほど赤ちゃんにとって大事なのかということ。
民族衣装を着ることができるブースでは、皆が色々な衣装を着るという貴重な体験をしました。

SDGs市民社会ネットワーク

SDGsとは？

2015年に開かれたリオ会議で採択された「持続可能な開発目標」のことです。

このSDGsは2000年に採択されたMDGs「ミレニアム開発目標」の延長線上にあり、今生きる世代また未来の世代まで「誰も置き去りにしない」をテーマとして掲げ、17の目標と169のターゲットを2030年までに達成しようというものです。

17のターゲットには貧困、飢餓、男女格差といった現在の深刻な問題のものから平和と公正、パートナーシップという解決策に基づいたものまであります。



SDGs市民社会ネットワークとは？

SDGsの実現に取り組むNGO(非政府組織)やNPO(非営利団体)などの市民社会のネットワークで、「SDGsジャパン」とも言います。

市民の中でのSDGsに対する「声」を集めて、SDGsに取り組む民間企業や学界、国際機関、政府などとの連携を仲介する役割を主に担っており、その他にはSDGsの広報・普及啓発、SDGs達成のための研究を行っています。

私たちは国連の会議がどのように行われているか、SDGsがどういう背景のもとに生まれたのかなどの話を伺いました。



↑SDGs 市民社会ネットワークで働く唐木さん

SDGsについてより深く知ることができました。SDGsは世界の問題であり、自分には遠いものだと思っていたものが、話を聞いて身近なものと感じることができました。

このSDGs市民社会ネットワークの取り組みを知り、私たちのような高校生でもSDGs達成に貢献することができる知りました。これからは私たちしか発揮できない力を活かして、あらゆる問題に積極的に取り組んでいこうと思いました。



国際協力～NGOと国連～

私たちは、2日目の午後に国連大学において、本校卒業生の今井夏子さんからNGOや国連の活動による国際協力の講義を受けました。





今井さんは、NGOのメンバーとして、アフガニスタンとシエラレオネで勤務なさった経験があります。今回は、そこで感じた世界の悲惨な現状や本当のリーダーとしてのあり方を話して頂きました。

シエラレオネ→紛争問題・内戦

・ゲリラによって10万人の人々が手足を切断、3分の2の国民が避難
・少年兵(麻薬によって子供を覚醒させる)、常に戦争の最前線に

アフガニスタン→児童婚、女子への拷問

・1500万人の人(女性人口の90%)が人権侵害
・女性が夫から、耳や鼻を切り取られる
・女性の社会的地位を上げるため、女性省の設置

現場で要される人材になるために

〈ベース〉	〈能力〉	〈知識〉
芯	コミュニケーション力	英語
健康体	柔軟性	第二外国語
人間力	適応性	専門性



今井さんからお話を聞いたり、世界の何も隠されていないリアルな映像を見て、衝撃を受けてしまったけど、世界が、自分が何をしないといけないのか、考える貴重な経験となりました。

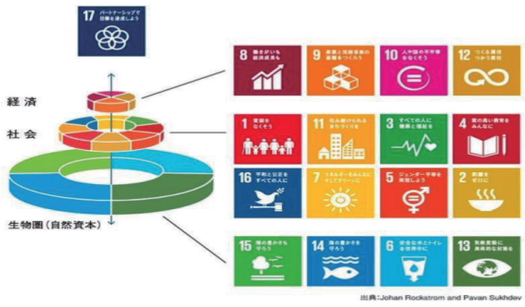
GEOC

GEOCは地球環境問題に取り組む個人、民間団体、事業者、行政等が協力しながら、持続可能な社会を実現するための拠点として設立されました。

国内の活動事例　ローカルレベルからのSDGs達成

・神奈川県相模原市→木の地産地消(学校の机に地元の木を使用)、森の生産
・群馬県富岡市→障害者の方を養蚕工場に雇う、伝統の養蚕工業を発展
・静岡県長泉町→再生可能エネルギー(水車、太陽光)





出典:Johan Rockstrom and Pavan Sukhdev

パートナーシップとは

立場の異なる組織や人同士が対等な関係で連携し、協力し合うことです。
環境問題はSDGsの全ての目標と繋がっており、その中でも「17、パートナーシップで目標を達成しよう」が一番重要になっています。

ユニセフハウス

ユニセフハウスを訪問し、世界の子どもたちの暮らしや、それを支えるユニセフの活動を学びました。
水の大切さや女性への支援、健康のケアを学び、体験しました。そして、ビデオを見て世界の現状を知りました。
この現状を良い方向に変えるためにユニセフは子どもたちに鞄を寄付したり、水の使い方を教えたりなどしています。





SGI平和運動局

～SGIのSDGsの取り組み～

SGI本部の戸田記念国際会館を訪問させていただき、SGI 平和運動局の河合さんにSDGs の話をうかがいました。まず、SGI提言を通して創立者の考えについて学びました。

～今回のSGI提言のポイント～

一人一人の生命と尊厳に根ざした人権の視座について言及されている

また、SDGs が制定された歴史的背景についても話していただきました。
そもそも、SDGsはMDGs(ミレニアム開発目標）の後継として採択されました。



↑SGI 平和運動局の河合さん

第43回1.26「SGI の日」記念提言
「人権の世紀へ　民衆の大河」

彼(山本伸一)は、毎年、「SGI の日」には記念提言を重ねた。 新しい平和の波を起こそうと、世界への発信を続けた。声は、人の心を動かし、社会、世界を変えていく。声をあげることから、新しい一歩が始まる ――「新・人間革命」誓願十八

年表
―SDGsについて―

1972：ストックホルム環境会議
1989：冷戦終結
1992：地球サミット（リオデジャネイロで開催）
1993：世界人権会議（ウィーンで開催）・ウィーン宣言
2000：MDGs採択
2015：SDGs採択

～MDGs のポイント～
・貧困の削減に焦点を置く
・主に開発途上国がターゲット

MDGsは一定の成果が出ましたが、課題もありました。そこで、2015年に採択されたのがSDGsです。

～SDGsとMDGsの違い～
・MDGsは主に開発途上国がターゲット
↓
・SDGsは先進国も開発途上国もターゲット

・MDGsは貧困、教育などの開発問題がメイン
↓
・SDGsは経済面・社会面・環境面など包括的

開発途上国 ✸ 先進国
思惑 経済開発 ✸ 環境保護 思惑

”持続可能”という概念

感想

河合さんは、今までとは違う角度からの、SGI ならではの視点で話してくださり、SDGsの学びがより一層深まりました。また、創立者のSDGs に対する考えについての理解もとても深まり、とても有意義な訪問でした。

青山学院高等部でのプレゼンテーション と共同のワークショップ

最終日に青山学院高等部を訪問。青山学院高等部と我が校のSGHプログラムの研究発表。その後、青学の方々とワークショップ。

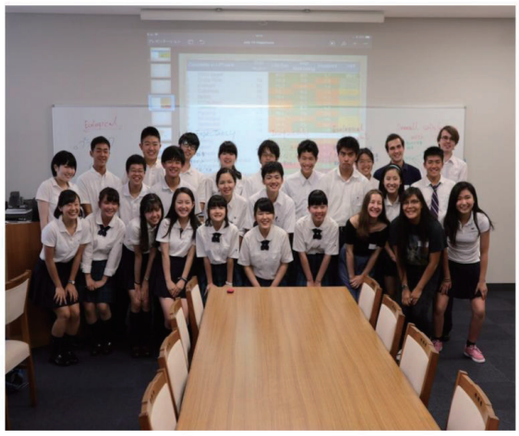
テーマは

「幸福とは何か」

留学生も含めた5つの小グループに分かれ、4つの小テーマについて議論し合いました。

1つ目は、”あなたは幸せの階段のどこを登っていますか”というテーマ。
10段のうち、今、自分はどこを登っているか、自分が思う段数のグループ平均を出し、なぜそうなったか理由を英語で発表しました。大体の班の平均は8段目。何故段数が高いのかという理由は自分は生活に困っていないということ。何故10段ではないのかという理由はまだ自立をしていないということが出ました。

2つ目は、”幸福をはかる尺度”を自分にとって重要な順に4つ出すとどうなるか。班ごとに発表するので、全く別の意見が出ることもありました。このテーマも英語で発表。1つ目よりも難しかったです。

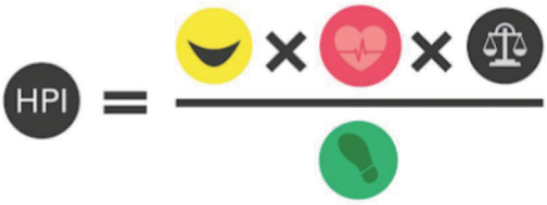


青学のSGH校としての取り組み（一部）
- ・宮古島を訪問
- ・フィリピン研修



3つ目は、2つ目のテーマで挙げた自分たちの班の幸福をはかる尺度に従うと日本の順位は世界で何位になるか。6位の班もあれば、50位くらいの班もあり、尺度によって大きく異なるのが印象的でした。これは、日本語で発表しました。

4つ目は、HPIのそれぞれの要素を向上させるにはどうしたらいいかです。
HPI（Happy Planet Index）は、各国の平均寿命、人生の満足度、エコロジカル・フットプリントのデータを用いて「国の幸福度」を計る指標です。



２０１８年度広島フィールドワーク実施報告

■目的　　平和について学び、探求したことを学園生に伝え、意識啓発をしていくこと、また更に世界へと、先駆をきって世界平和を訴え、伝えていくことを目的とする。核兵器禁止条約が採択され、核廃絶への関心が高まる中、広島を訪れ、大量虐殺のための毒ガスが製造されていた大久野島や資料館を訪れ、日本が加害者としても戦争に大きく加担した事実にも目を向け、実際に見て学ぶ研修とする。そして、広島女学院主催のPeace Forum ２０１８に参加し、ハワイ，沖縄，東京，長崎，広島から集った高校生と核兵器禁止条約に批准しなかった７ヶ国をどうしたら条約に批准させることができるのかとのプレゼンテーション、ディスカッションを通して、核兵器禁止条約可決に向けて、私たち高校生にできることとは何かを考え、またそれぞれの考えを深めていき、世界平和、核廃絶のためにそれぞれが積極的に取り組み、学ぶ研修とする。

■期間　　８月５日（月）～８月７日（水）　までの３日間

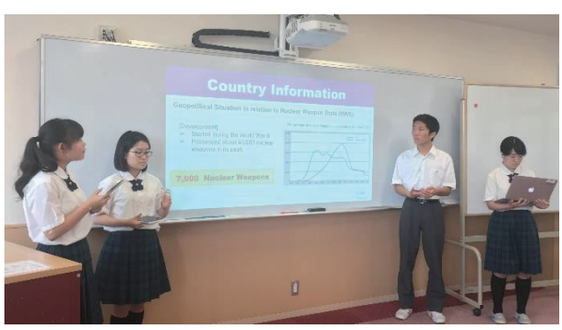
■参加者　　高校１年生６名、２年生３名、３年生５名の計１４名

■事前学習　・DVD『ヒロシマナガサキ』の視聴
・第二次世界大戦についてのリサーチ、メモリーツリーの作成
・全校生徒による千羽鶴作成と、核廃絶に向けての署名活動
・交野高校の生徒と協力し、河内磐船駅周辺とイズミヤ交野店前にて核廃絶のための街頭署名活動
・核兵器禁止条約の批准に向けて、７か国（アメリカ・ロシア・中国・日本・ウクライナ・オーストラリア・マケドニア）についての調べ学習、批准のための提案の作成、プレゼンテーションの練習





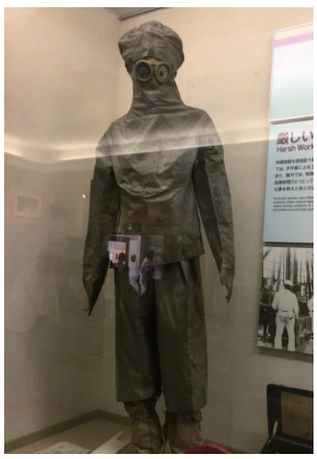




■行程

８月５日（日）

【大久野島】



７時３０分に新大阪駅に集合。出発式、写真撮影を行った後、新幹線に乗車。岡山駅で乗り換え三原駅まで行きここで広島FWメンバー全員集合。フェリーに１５分ほど乗り大久野島へ向かった。到着後、写真撮影をして大久野島毒ガス資料館の見学を行った。毒ガスに関するDVDを見てから各自資料館内を散策。展示物の中には、実際に毒ガスを作っていた時の防護服や防護マスク、政府によって隠蔽されていたことが分かる大久野島が書かれていない地図があった他、毒ガスを遺棄した際の写真などがあった。見学後、行動班に分かれて昼食を取り自転車を使って島内を散策した。毒ガスの実験などが行われていた場所は７３年前からの重々しい雰囲気が漂っており、島内の明るいイメージとは正反対の暗さがそこにあった。島には何百羽のうさぎが生息しており、餌を出すともぐもぐと食べたりする姿がとても愛くるしく、うさぎを求めて訪れる観光客で多く賑わっていた。フェリーが港に来るまでの待ち時間、観光目的で訪れていた外国の方にお話を伺うこともできた。

●生徒の感想

大久野島は南国の雰囲気漂う居心地のよい島でした。しかし戦時中は毒ガス工場として使用され地図から消された島でした。現在はここが毒ガス工場だったのかと疑うくらいに、のどかな島になっていました。それは今日までに多くの人が大久野島を美しい島に戻す努力を重ね、再び平和な島になってほしいとの強い思いを持ち、歩んできた結果だと思います。戦時中はうさぎが毒ガスの動物実験と対象として使用され、犠牲となりました。また、工場で働いていた人は最初の頃は毒ガスを製造していることを知らずに働いていたそうです。真夏でも長袖、長ズボンの防護服に身を包み、マスクをつけ働いていたのにも関わらず、毒ガスの影響で多くの被害を受けました。安全対策は十分ではなく、工場だけでなく島の人々にも毒ガスの被害が広がっていったそうです。また、秘密裏に製造していたため、戦争が終わっても被害を受けた方々は十分な手当を受けられずに今も苦しんでいます。しかし、日本政府はこの事実を公表しておらず、多くの国民がこのことを知りません。日本政府は戦争の被害は伝えていくのに自らの過ちを隠している事実は今すぐにでも変えていかなければならないと感じました。平和な世界を目指していくならば、全ての事実に真摯に向き合っていくことが大切だと実感しました。





【碑めぐり】



碑めぐりでは、広島女学院の生徒の案内で平和記念公園内にある原爆死没者慰霊碑、原爆ドーム、平和の灯など説明を受けながら回った。日本人の死没者だけでなく、強制労働等で広島にいた外国の方の碑や、即死した方や一家全滅などで身元不明となった方々の遺骨が納められている供養塔など、実際に回って説明を受けてみないと分からないものが様々あった。ひと通り公園内を回ったあと、女学院の方とともに学園生一人一人の思いが詰まった折り鶴を奉納し、黙祷をささげた。

●生徒の感想

広島女学院さんにエスコートしていただき、広島平和公園内の碑巡りをしました。私たちの中には修学旅行等で広島を訪れた人もいましたが、広島女学院さんの詳しい解説を聞き、原子爆弾を始めとする核に関する知識をより増やすことができ、その非人道性を身にしみて感じました。特に平和のシンボルである「原爆ドーム」に関する説明では、なぜ原爆ドームが爆心地より２００ｍと近いにもかかわらず、このような状態で現存しているのかということを始め、自分たちの知らない多くの話を聞かせていただきました。広島女学院さんとの交流を通じて、協力すれば、核廃絶は必ず成し遂げられると確信しました。少しの時間しか話すことはできませんでしたが、お互いに「核廃絶」という目的で結ばれているこの関係を継続し、多くの人とともに自他共の幸福のため、活動して行きたいと決意しました。

【広島平和記念資料館】

資料館内は原爆が落ちた際の広島の街並みの写真や、被害を物語る遺物、広島・長崎に落ちた原爆の資料があった。また、核兵器が今の時代に落とされた際、どのような被害が起きるのかなど様々な展示があった。館内は日本人観光客の他、外国人観光客の姿が多く見うけられ、様々な展示物にシャッターを切っていた。

●生徒の感想



今まで核兵器のことをリサーチしてきたので、知っていたこともありましたが、核兵器に関する情報が、多様な角度から一度に展示されており、核兵器のことを包括的に学ぶことができました。特に印象的だったのは、広島、長崎での原爆の悲惨な結果があった後、ロシアや中国で核開発が始まっていったことが、ひとつの流れとして展示されていたことです。非人道的な核兵器が、開発し続けられていることが目に見えてわかり、どんな人間もこんなに残酷な兵器を持つ権利はないと思いました。今の核兵器の現状を知った上で、核兵器がもたらす残酷な結果をより多くの人が知るべきだと思いました。

８月６日（月）

【平和記念式典】



午前６時頃に広島平和記念公園に到着すると、式典が始まる２時間前にも関わらずたくさんの人が並んでいた。式典は８時から始まり、５０か国から５万人が参列。内閣総理大臣や広島県知事、国際連合事務総長からのメッセージや広島市長の平和宣言、こども代表による平和への誓いなどを拝聴した。そのなかで自分たちは無力ではないと改めて思った。また終了後には献花をさせていただいた。

●生徒の感想

初めて平和式典に参加させていただき、貴重な経験となりました。実際に広島の８月６日の暑さを体感し、こんな暑さの中で、多くの人が爆風や熱線に苦しんだと思うと、本当に胸がいっぱいでした。８時１５分に爆心地のすぐ近くで黙祷を捧げさせていただき、７３年前の同じ日、同じ曜日、同じ時間に、今立っている同じ場所で、原爆の被害に遭われた方がいるんだと感じ、恐ろしさを改めて感じさせられました。また、広島市内の小学６年生の平和への誓いを聞いて、自分の小さな１つの行動が平和につながっていくんだと思ったし、平和は難しいことではないとの断言に、今まで難しいことだろうと考えていた自分が情けなくなりました。広島県知事の核抑止論の例えを聞き、核抑止論は間違っているという考えがいっそう強くなりました。



【外国人リサーチ】

広島平和公園内にいた外国人の方たちに英語でインタビューをさせていただいた。事前に質問内容を考え、それについて話した。英語が第一言語ではない方もいたが、しっかりとコミュニケーションをとることができた。やはりどこの国の方も核兵器は悪であるとおっしゃられていていた。

●生徒の感想

アルゼンチン、フランス、オーストリアの３ヵ国、９名の方にインタビューすることができました。どの方もとてもフレンドリーに話してくださいました。どの方も、核兵器は悪だと考えておられ、どの国にも核廃絶に前向きな方がいらっしゃることを感じ、市民がキーになっていくことを実際に感じることができました。アルゼンチンの女性の方は、平和式典があることを知り、平和について学ぶべきだと思ったから広島を訪れたと話していて、海外の方が関心を示してくださることがとてもうれしかったです。フランスの女性は、被爆者でも遺族の方でもありませんが、両親の戦争のことを思い出して思いを馳せ、涙ながらに語ってくださり、心を動かされました。インタビューをする中で、英語の発音で伝わらないことがあって悔しかったので、これをバネに少しでも学びにつなげていけたらと思います。

【大和ミュージアム】

広島港からフェリーで移動し１２時頃に大和ミュージアムのある呉港に到着した。大和ミュージアムでは大和ミュージアムがある呉についてのスライドと、太平洋戦争中の戦艦大和と一人の青年についてのアニメを見た。そのあと、実際に館内をスタッフの方に案内していただき、史上最強と呼ばれた戦艦大和の建造計画やその技術などを学び、実際の１０分の一の縮図の戦艦大和や零式艦上戦闘機、人間魚雷「回天」などを見学した。



●生徒の感想

特攻隊のことは学んだことがあり、悲惨さもわかっていたつもりでしたが、特攻で亡くなった２４００名のうち７００名が２０歳以下の若者だったと聞き、今の自分の年齢で、またはもっと若くして多くの命が失われたと思うと、もっとこの日々は大切にしていかなければならないなと思いました。戦艦大和のビデオを見て、自分と同じ年くらいの人が、死を覚悟した上で家族には隠して、本当に悲しくなりました。また、日本で戦闘のためにつくられた船が存在したという過去も悲しいことだなと思います。日本はやっぱり、大和のことに関しても、アメリカなどへの加害より、日本兵の被害に目を向けがちだったので、日本が被害を受けたとしても、相手の国にも被害があったことを心に置いて、敵、味方関係なく、お互いに国民が被害者なんだというように考えていくべきなのかなと思いました。

【被爆体験記朗読会、会館展示】

この朗読会が行われた広島平和会館で創価高校の生徒と合流した。またこの朗読会には広島平和委員会の３名の方に来ていただいた。初めに、原爆に関するビデオを見て、次に被爆時の状況を何年か経て書かれた被爆体験記や原爆詩を朗読していただいた。
会館内では本校の創立者でもある池田大作先生による海外の首脳との平和外交や世界の識者との対話といった平和への闘争について展示がされていた。

●生徒の感想

子供たちの声はいつの日も純粋でまっすぐに心に突き刺さってきます。朗読をしてくださった方々の声や読み方もすっと心に入ってくるもので心が揺さぶられました。原子爆弾が投下された直後の状況がそのまま私にぶつかってきて、怖かったです。とてもこの世の状態だと思えませんでした。と、同時に、怒りも湧きました。なぜ、小さな子供がこんなに辛い想いをしなければならないのか。何も悪いことをしていない人たちが地獄を見るような世界があることはありえないです。だからこそ、絶対にこれからの世界を平和で、だれもが幸福な人生を送ることができる世界をつくる、決意をしました。また、会館展示では、池田先生の平和への軌跡がかいてあり、本当に感動しました。私も将来、世界の友を対話で結んでいきたいです。

８月７日（火）



【ピースフォーラム】

ハワイから２校、日本から８校の高校が広島女学院に集まり、ピースフォーラムが始まった。リサーチしてきた国ごとに分かれ、各校用意したプレゼンを発表した。例えば、中国リサーチをでは、２つのグループに分かれ、１つ目のグループは国民に、２つ目のグループは国家に焦点を当て、どの様なことを行えば核兵器禁止条約に参加することが出来るかを話し合った。それぞれの国が核兵器禁止条約に参加するためにどうすればいいのかその場で話し合い、意見をまとめた。その後、全員の場で国ごとの結論を発表した。その際に、関西創価高校が代表となって発表を進めた。昼食時にも、関西創価高校は積極的に声をかけて参加者と輪になり、交流のひとときを過ごした。参加者全員で写真を撮り、最高の思い出を残した。出し物をする学校もあり、参加者全員がすぐに打ち解けられる雰囲気ができていた。

●生徒の感想

３日間のなかで一番学び深めたともいえるとても密の濃い時間でした。広島女学院をはじめ、東京校、長崎、沖縄、アメリカから集った高校生達と平和について意見交換を交わす事で様々な発見や、考え方を知ることができました。逆に、関西校の意見でその場がまとまることも多くの場面であり、私たちが今まで真剣に学び深めてきたことが評価されることに大きな喜びを感じました。ですが、これはあくまでも今の私たち高校生にできること、というテーマでもあるかなと思うので将来１０年先、２０年先立場や健闘する場面は違えど皆それぞれの場所で、立場で、平和のために行動していくパイオニアになっていくのだと思います。普段の学びだけでは得られない気付きと、素晴らしい友情を築くことができたピースフォーラムとなりました。

広島フィールドワークで、私が一番印象に残っているのは、３日目の広島女学院で行われたピースフォーラムです。今まで核兵器の恐ろしさは知っていたものの、核兵器禁止条約という言葉は知らなかった私にとって、未知の世界に入った気分でした。１ヶ月以上前からリサーチをし、プレゼンを作成しました。私は日本について調べていたのですが、自分の国の問題ということもあり、客観視出来なかったり、知っているつもりでも知らなかったりすることの方が多く、とても苦労しました。とても忙しい１ヶ月でしたが、今まで触れたことも

なかった核兵器禁止条約というものについて学び、知り、自分の考え方が大きく広がった、充実した１ヶ月でもありました。当日のピースフォーラムでは、全国各地から集まった高校生達と意見交換をすることが出来、自分たち創価とは違う考え方を知ることが出来ました。私達高校生にとって、世界平和に向けて出来ることは限られているかもしれません。でも、ピースフォーラムで、意見を交わし、考え方を広げることができ、自分にも何か出来るのではないかと思えるようになりました。今回広島フィールドワークで学んだことを、たくさんの人に伝えていきます。そして、自分自身も、世界平和のお役に立てる人材に成長できるよう、語学力を付けていきます。

■広島フィールドワークを終えて

大充実の３日間を過ごすことが出来ました。自分の無知さ、また知ったつもりになっていたことに反省の気持ちが芽生えました。原子爆弾の本当の姿、被爆者の方の想いは自分が想像している以上に残酷で、目を反らしたくなるものばかりでした。自分が感じた全てのことを忘れたくないと思ったし、伝えていく使命があると思います。このフィールドワークで私は核廃絶の必要性を、理屈などではなく心の底から感じることができました。また、以前より、「世界が一つになろうとしている今、平和運動はどうあるべきなのか」という疑問を持っていました。そして広島FWで、自分なりの答えを得ることができました。その一つが、「戦争による被害者意識を乗り越えること」です。広島平和委員会の方との交流の際、祖母と母が被爆者である女性の方が涙ながらにこう仰いました。「何の許しがあって、原子爆弾を使えるのか。」と。この時私の胸に迫った思いは、一生忘れられません。私は思わず、心の底からアメリカが憎いと思ったのです。正直なところ、自分がそんな激しい被害者意識・怒りを抱くと思っておらず、むしろ冷静に受け止められるだろうと思っていました。おそらく、被爆体験をお聞きして共感力が強まっており、「許せない！」と感じたのだと思います。しかしすぐに、これが平和運動をする上での課題であると思いました。壮絶な話に心を揺さぶられた後に、その被害者意識を乗り越え、協調の道を選ぶのか。それとも、憎しみを継承し、対立の道を選ぶのか。この選択によって、平和運動が永続的で強靭なものになるかが左右されると思います。

このように、今まで気づかなかった価値観を自分の力で得られ、有意義なFWにできました。「知識と行動の両方で平和を築く人に」との誓いを軸としながら、広島で得た全ての価値をさらに何倍にも創造していきます。



東北フィールドワーク通信 1日目

実施日2019年3月17日　2019年3月19日(火)発行







かなり整地が進んだが、まだまだ残る震災の爪痕を肌で感じた

語り部と歩く3・11

震災から8年という歳月が流れたけれど復興にはまだまだ時間がかかるということを実感しました。地震の被害によってボコボコになっている道路、沢山の空き地や復興住宅、津波の到達点を知らせる看板など、街中の至る所に東日本大震災を伝えるものがありました。テレビのニュースや新聞で観ることと比べ物にならないぐらい心に刺さりました。6.9mの津波。30mなどと比べて言葉で聞くには低いと思いますが、実際にその高さを見て、本当に恐ろしくなりました。私なら助かってないだろうなと思いました。黒沢さんの話を聞いて、一気に東日本大震災が身近に感じました。黒沢さんの活動を聞いて、これから私にもできることを考えていこうと思いました。(奥田)

黒澤さんのお話を聞く中で1番心に残ったのは「寄り添う」という言葉です。難しい。だけど、最も必要なことだと思います。寄り添うとは、隣にいることだけではなく、自分の希望を相手にも分けることだと思います。(太田)

南浜つなぐ館



実際に現地へ行くと、肌でピリピリ感じました。中でも心に残ったのはリュックの展示で、これは高校生の孫とお揃いにしたおばあちゃんの遺品でした。私も近くにおばあちゃんがいるので一番想像ができて、悲しかったです。(粂)

最初につなぐ館で藤間さんのお話を聞いて思ったのは、僕らがテレビの映像で見ていたのは、ほんの一部だったのに過ぎないということです。特に辛かったは、祖母の死体の第1発見者になったお孫さんの体験です。僕自身おばあちゃんっ子なだけあって、当時のお孫さんを自らと置き換えて考えると、とても胸が締め付けられるような思いでした。(堤)

黒澤配管工業にて



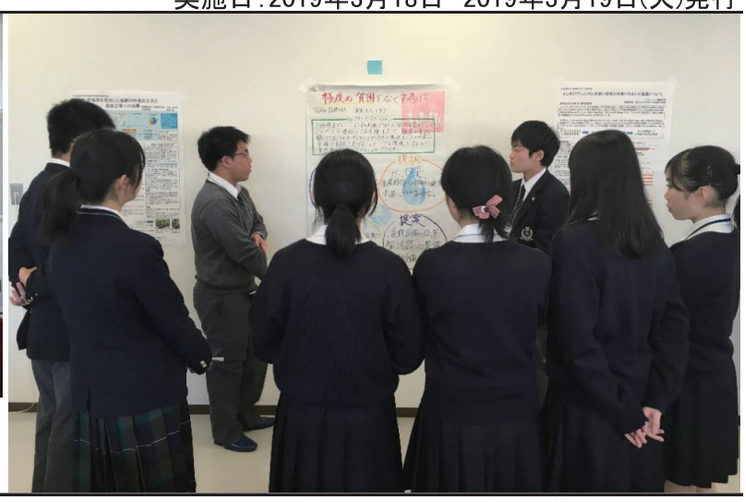
クロスロードワークショップはとても勉強になる取り組みでした。自分だけの意見だけでなく、他人の意見を聞いて気づく事や、取るべき理想的な行動を自分なりに考え、またその行動を震災時にはどう取るべきかというのを楽しみながら学ぶことができました。(堤)

震災シュミレーションでは、しっかりと自分の理由を述べ、災害の状況ごとにしっかりと考えることが出来ました。僕の防災の知識はまだまだ甘くて、知識だけではなくどれだけ臨機応変に対応出来るかが重要なのだとわかりました。(小林)

東北フィールドワーク通信 2日目

実施日：2019年3月18日　2019年3月19日(火)発行





上：東北大学での講義
右：仙台二華高校でのポスターセッション

仙台二華高校での交流

午前中は仙台二華高校に伺い、ＧＲＩＴの内容を発表するポスターセッションや学校紹介をさせて頂きました。仙台二華高校の生徒の皆さんは、過去の先輩方からの研究を受け継ぎとても発表の内容が深かったです。また、質問を受ける中で気づいたのですが、仙台二華高校の皆さんは質問の内容がとても筋が通っており、勉強になりました。（築留）

仙台二華高校では、全員が水問題を軸として活動をしていて、過去５年分の活動を引き継いで次の２年生がさらに内容を深める予定となっています。この学校は実際にメコン川地域へフィールドワークしたり、現地の方と一緒に生活をする中で雨水などに観点をおき、活動されています。特に雨水を貯めて生活用水にしたり、バイオトイレで環境にやさしい街づくりを行う中で語学力も創造力も磨く内容にとても感動しました。

仙台二華高校の先生からアドバイスを頂き、実際に使えそうなものを持ち帰るメンバーや、「関西創価の哲学的な考え方に、共感力を感じた」と言うコメントしてくれる生徒さんもいて、お互いがリスペクトしながらポスターセッションを終えることが出来ました。（太田）





聞いていたとおりのすごい進学校で、活気あふれる学校でした。学校でのＳＧＨの取り組みについての紹介の際、すごく現実的な問題に、具体的に行動されていて、本当にすごいと思いました。また、「再びカンボジアに行ってみると」など、すごく何度も取り組まれていて圧巻でした。また、私達が学校紹介をする際には緊張しましたが、今まで一番良い発表ができたと思います。ポスター発表では、同じ関西創価の発表にもすごく刺激を受けました。また、自分たちが発表し、語り合うことでより学びが深まったと思います。私達の班では子ども兵というあまり身近ではない問題に焦点を当てていたため、仙台二華の方もあまりピンとこられていないようでしたが、お互いどうすれば戦争がなくなったと言えるか、どうすれば平和と言えるのかについて話し合いができて、本当に良かったです。お昼ご飯の際もすごくたくさんの人に話して頂いて、同じ高校生として楽しむことができました。（野崎）

東北大学工学部訪問



環境科学研究科エコラボを見学しました。一番圧巻されたのは、建物の造りです。材料である木を互いに交差して繋げていくことで、強度をさらに強めたり、電気を一旦交流に変換すると無駄が生じてしまうので、すべての電気を直流のまま使っていたりと、感心する事柄がたくさんありました。（青木）

原副学長に、人間は自然の力に勝つことは可能なのか質問したところ、副学長は、津波は止めることはできるかもしれないけど、そんなに大きな防波堤をつくること自体が正しいことなのか、理性が問われる。台風などの他の災害に関しては不可能だろう。すなわち、人類は自然の力に勝つことはできない。と話してくださいました。このことは、僕にとってはとても心に残る言葉でした。（築留）

東北フィールドワーク通信 3日目

実施日：2019年3月19日　2019年3月22日(金)発行



髙橋匡美さんの壮絶な体験に胸を裂かれる思いに

疑似喪失体験プログラム

疑似喪失体験とは、被災された方の体験談を聞きながら、自分の大切なものを書いた紙を、自分の心と向き合いながら破っていくというプログラムです。紙に書く時も、何を書けばいいのか迷ってしまいました。大切なものが多くて、3つに絞りきるのは難航しました。

当日は、被災者の方の体験を聞いて、自分に置き換えて考えてみました。自分の母や父が津波で亡くなっていた状況を想像すると、涙が出そうになりました。その合間で、紙を破っていくのですが、人の名前が書かれた紙は破る時に心苦しくなってしまいました。最後の1枚を破く時は、泣いてしまい、紙がただの紙でなくなる経験をしました。（小林）

明日必ず全員が生きているという証拠はどこにもないのです。だから「今を生きよう」と髙橋さんは訴えていました。明日、明後日、歳をとってもずっと生きられるとは必ずしも言えないけれど、今を生きることはできる。今を生きることが大切なんだ。と。その言葉を聞き、私も今を大切に生き抜いていこうと思いました。そして私自身ももっと苦しい辛い思いをしている被災者の皆さんに寄り添えられる人材に成長していきたいです。（大場）



髙橋さんの体験を聞いて大切なものを失っていくことがどれだけ辛いことかを学びました。大切なものを書いただけの紙なのに破ったり捨てたりすることが本当に辛くて、申し訳ない気持ちとどうしたらいいのかわからない気持ちでいっぱいでした。すぐにでも家族に会いたいのですが私は下宿をしているので、すぐに家族に会えないことが悲しいです。私がもし家族、親を失ったらたぶん耐えられなくなると思います。しかし、「明日を生きるより今を生きる」ことを心に留めて今を真剣に生きていきます。（奥田）

震災遺構仙台市立荒浜小学校



「爪痕」の本当の意味を知ると共に、子供たちの恐怖や避難された方の当時の思いがひしひしと伝わってきて言葉も出ませんでした。ただ、屋上から見た海はとても綺麗で、あの海から来た津波が人々の命と生活を奪ったとは信じられないくらいでした。だからこそ、海と共に生きる東北の皆さんの思いに触れたことは私の一生の宝となりました。（太田）

今でも小さな瓦礫が一階にある状態で、当時のまま残っていました。また、800世帯余りの集落があった町とは思えないほど今では草原になっていました。この3日間で得られたものははかり知れません。何より家族を大切にし今を一生懸命に生きていこうという新たな決意が出来ました。（青木）

California Trail 2019

Written by Takuma Furukawa, Hana Yamabe, Natsuki Oda

DAY 1

1月25日に出発式が行われ、その際 創立者・池田先生より「了解。気をつけて行ってらっしゃい。」とのご伝言を頂き、皆で健康第一と学びの勝利を勝ち取る海外フィールドワークにしようと誓い合いました。そして1月27日、期待と不安を胸に関西国際空港へ集合しました。校長先生を始めとした先生方のお見送りを受け、皆で大成功を誓い合いました。搭乗までの待ち時間の間も、プレゼンテーションの準備を行ったり、創立者と元国連事務次長のチョウドリ大使との対談集や、創立者と核時代平和財団のクリーガー会長との対談集を読み深める姿が見られ、機内でも同じように準備する生徒の姿がありました。そして、現地時間午前10時30分に、アメリカ・ロサンゼルス国際空港に到着しました。日本の空港の何倍もの広さのロサンゼルス国際空港に圧倒され、気分が高揚しながらも、成功に向けて気を引き締め、移動中はなるべく英語を用いるなど、環境に慣れるための努力をしました。



決意とともに　関西国際空港にて



**アメリカの女性問題の現状を交えながら、
リズベス教授（中央）より、講評をいただく**

ロサンゼルス国際空港を後にした私たちは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)を訪問しました。UCLAの学生と交流をし、キャンパスツアーを行った後、私たちは2グループに分かれてセッションを行いました。女性のエンパワーメント（能力開花）、LGBTの2グループがプレゼンテーションを行い、その後、それぞれが別室でセッションを行いました。UCLAのリズベス教授が担当してくださった女性の能力開花に関して行ったセッションで、アメリカで近年子供の責任を取るため結婚を同居後にするカップルが増えていることを通して、教授は文化的な規則や慣習で人々の生活スタイルの良し悪しを決めるのではなく、より人道的な目線、つまり、自分がもしその立場になったらと想像して考えることが女性の能力開花に繋がると教えて下さいました。また、私たちの家庭状況や母のことを一人一人聞いて下さり、女性の能力開花のためには自分たちの家庭から変革しなければならないと、国際問題の解決の糸口は私たちの足元に転がっていることを気づかせて下さいました。

一方、LGBTグループはアレックスさんとトニーさんとのセッションを行い、始めにプレゼンテーションの講評を頂きました。お二人もご存じない内容が含まれていたことに感動され、今後もさらにLGBTについて学んでほしいと言われました。その後、お二人の体験談を通して、LGBTに関するセッションを行いました。その中で、私たちの『LGBTの友人をサポートしたいが「君には私のことは理解できないよ」と断られ、どうすればよいか』という質問に、アレックスさんは「同じ人間である限り、分かり合えない訳がない」と語られ、トニーさんは「自分がLGBTであることで差別は受けたが、自分を認め、支えてくれる人がいたから生きてこれた」と諦めずに友情を築く努力を続けることを強調されました。また、LGBTの人が生きやすい環境について話した際には、性別で制服を分けない等の配慮が世の中には必要だと仰られました。無意識のうちに性による区別をしてしまう事実があることに気付かされ、今後、私たちもそういった配慮を忘れないようにしようと話し合いました。



**アレックスさんとトニーさんの経験を交えたお話に、
生徒は問題解決の決意を更に固めた**

California Trail 2019

Written by Takuma Furukawa, Hana Yamabe, Natsuki Oda

DAY 2

2日目の午前は、2グループに分かれて行動しました。1つは、南カリフォルニア大学（USC）を訪問し、宗教学部長であるバルン・ソニ教授とのセッションを行いました。そこでは、難民をテーマに探究しているグループがプレゼンテーションを行いました。その後、ソニ教授から講評を頂き、日本の高校生の間で難民に対する意識を高めるために手紙を書くというアクションプランを賞賛して下さり、他にも、オンラインで寄付をすることも出来るとアドバイスを頂きました。その後、教授の専門である宗教についての講義を受けました。その中で、一般的に宗教とは観念的なものであると言われていますが、宗教は人々の物事に対する考え方や生き方に活きてくるもので、極めて実践的なものだと指摘され、それぞれの宗教はそれを信仰している人の行動に反映されるから、どの宗教に属するかというよりも、その上でどのような行動をしているかが重要であると語られました。この話を通して、難民に対するネガティブなイメージも、難民を一括りに決めつけるのではなく、一人一人の人格に焦点を当てていくことが大切だと教えて下さいました。



一人一人に焦点を当てることの大切さを
ソニ博士から学ぶ



フランシスコさんからご自身の体験を
真剣に聞き入る学園生

もう一方のグループは、関西創価高校として初訪問となるHomeboy Industriesを訪問しました。ここは、過去に児童虐待を受けていたり、犯罪を犯したことがあったりと、心に傷を抱えた人々の更生と社会復帰を目指す施設です。私たちが訪問した際、案内をして下さったフランシスコさん自身も、この施設で更生をされた方でした。フランシスコさんは、33回も銃で打たれた経験があったり、収監されたこともあったりと、苦労を重ねられましたが、Homeboy Industriesで更生し、今は「人のために尽くしたい」と語っていました。ここで出会った方々は、苦しい過去を持った方ばかりでしたが、皆さん本当に前向きで、自分を変えようとの希望に満ち溢れて見えました。また、そのような方々が自分を変えようとしたとき、可能性を開くことのできる施設があることに感動しました。私たちも日々、様々な悩みを抱えていますが、私たちの想像をはるかに超える苦労をされた方々の前向きな姿に、自分たちも悩みに屈することなく挑戦していこうと決意することができました。

2日目午後は、サンタモニカにあるSGI-USA本部を訪問しました。訪問した際、多くの方々が温かく出迎えて下さり、私たちは心から笑みがこぼれました。マクレイス平和委員会委員長がお越しくださり、核廃絶グループが自分たちの探究成果についてのプレゼンテーションを行い、セッションを行って頂きました。マクレイス委員長は講評の中で、グループのリサーチ力を称えると共に、SGIが行っている活動を紹介していただき、核兵器についての展示などを通して、一人一人の良心に訴えていくことが核廃絶には重要なことだとアドバイスを頂きました。その後のセッションでは、ある生徒の「平和活動をする中で批判を受ける時、どのように対応するか」という質問に対し、委員長は「確かに厳しい意見を頂戴することはあるが、粘り強く対話を根本に相手に向き合っていく」と答えて下さいました。平和活動を進めていくには対話が重要で、反対する人がいても対話を通して一人一人を味方につけていくことが平和につながると、何度も強調をされていました。



忍耐強く、対話をすることの重要性を
マクレイス委員長は強調された

California Trail 2019

Written by Takuma Furukawa, Hana Yamabe, Natsuki Oda

DAY 3 (1)

3日目、私たちはアメリカ創価大学を訪問しました。キャンパスに到着すると、ハブキ学長が温かく出迎えてくださり、セッションを行いました。セッションでは主に、アメリカ創価大学の理念について話していただきました。その中で、アメリカ創価大学がリベラルアーツ大学である理由として、1000年先でも世界の指導者を輩出していくという創立者の構想から始まった大学であり、将来どの分野に行っても活躍できる人材を育むために人間の基礎力を鍛え、どんな時代にも対応できるために、リベラルアーツ大学にしたと教えてくださいました。その構想通り、卒業生の方は医師や教職、音楽業界やコンピューター関係の仕事等をされていたりと、様々な分野で活躍しているそうです。一人ひとりの可能性を開き、その潜在能力を引き出していくリベラルアーツの教育システムに感動しました。英語を勉強している私たちに対して、「母国語じゃない限り、みんな英語力は一緒だから、あとは努力次第でいくらでも伸ばしていけるよ」と励ましていただき、これからの英語学習に向けて、決意を新たにしました。



私たちの可能性は無限大と話をしてくださった
ハブキ学長



アメリカ創価大学の広大で美しいキャンパスを
ウォルドルフ学校の生徒ともにツアー

その後、ウォルドルフ学校（シュタイナー学校）の生徒さんとともに、アメリカ創価大学のキャンパスツアーを行いました。ファウンダーズホールの見学を行ったあと、体育館やプール、教室、また寮を案内して頂きました。大学は自然に囲まれており、また教室棟にはガンジーホールやマータイホールのように人類に貢献した偉人の名が冠されていました。大学構内には、アメリカ創価大学に寄付をされた方々の名前が至るところにあり、たくさんの支えの上にある期待の込められた大学であることを感じさせられました。また、生命科学棟が1年後に完成し、生命科学の分野が開設されるとのことでした。学園の後輩が専攻するのかもしれないと思うと、感動する部分がありました。一緒にキャンパスツアーを行ったウォルドルフ学校の生徒さんは本当にフレンドリーで、日本の有名な曲「さんぽ」なども歌ってくれました。日本に興味を持ってくれていること、日本の文化を知ってくれていることに大きな喜びを感じ、相手の文化を理解すること、相手の国に関心を持つことの大切さを学びました。

午後は各グループに分かれて、90分間のディスカッションを行いました。児童虐待グループにはチャン教授、MUNグループにはバーンズ教授、LGBTグループにはコルドウェル教授、核廃絶グループにはオガタ教授、難民グループにはマクラウド教授、女性のエンパワーメントグループにはイングランド教授がそれぞれついて下さいました。はじめに、グループごとに作成したプレゼンを発表し、フィードバックを頂きました。MUNグループでは、プレゼン後、高校生として、どのように水問題に貢献していけるのかと伺ったところ、バーンズ教授は「Think globally, act locally（思考は地球規模で、行動は身近なところで）」との言葉を教えて下さり、私たちのとるべき行動を示して下さいました。また児童虐待グループは、チャン教授から「児童虐待の原因として、自分たちに行動可能な社会的要因や金銭的要因だけでなく、遺伝子やホルモンの働きで虐待をしてしまう人へのアプローチなど、高校生にも解決が難しいことにも目を向けるべきだ」との指摘を受け、難しい問題にもしっかり向き合っていこうと感じました。



難民グループはマクラウド教授に
探究成果を報告

California Trail 2019

Written by Takuma Furukawa, Hana Yamabe, Natsuki Oda

DAY 3 (2)

アメリカ創価大学の教授とのセッション後、私たちは元国連事務次長のチョウドリ大使とのセッションに臨みました。全6グループがプレゼンテーションを行った後、チョウドリ大使から講評をいただきました。その中で、関西創価高校の3年生が学年模擬国連で採択した飲料水問題に対する決議案について、「とても興味深く、具体的な解決案であるけれども、世界の国々が水の価値を正しく認識することもとても大切なことだ」とのアドバイスを頂きました。私たち先進国の人間は、生活の中で、たくさんの水を毎日当たり前のように使用しています。水の一滴一滴、一部屋の照明に使われているエネルギーを、発展途上国のことを考えながらできるだけ節約していくことが、持続可能な世界を実現するための鍵となることを教えて頂き、思考はグローバルに、行動は身近なことからしていくことの大切さを強く実感しました。

また、質疑応答の中で、チョウドリ大使は女性問題に触れ、国連において政策決定を推進するときに、女性は多大な貢献をしている場面が多いと仰られるとともに、女性の力だけにフォーカスするのではなく、男性と女性、またすべての人を平等に捉えて考えることが大切だと指摘して下さいました。加えて、人口の50パーセントである女性が不平等な立場にあることは、他のどんなグローバルイシューにも共通した課題であると指摘され、男女平等問題は多角的に考えなければならない問題だと教えて下さいました。また、「全く違う意見を持つ人や批判をしてくる人と話す時に、気をつけるべきこと、またそれらの人に対してどのように対応すべきか？」という質問に、「人と意見が違うことは普通のこと。自分が正しいと思う意見を持って話し続けることが大切。意見を非難されることを恐れてはいけない。意見が違うことを恐れてはいけない。一つの花だけの花畑は退屈になってしまう。それぞれの個性があり、様々な色を持った花があるからこそ花畑は美しいんだ。そういう対話の中でいい考えというのは生まれていく。」と様々な考え方を受け入れながらも、正しいものを求めていく姿勢、人と話し合い続けることの大切さを強調されました。



ディスカッション後、
アメリカ創価大学の学生とともに



児童虐待を探究しているグループが
チョウドリ大使に探究成果をプレゼンテーション



チョウドリ大使から
私たちへの期待を込めて、励ましが送られた

3日目の夜は、アメリカ創価大学の学生とグループに分かれてディスカッションを行い、MUNグループは自身の研究テーマに限らず、興味のあることについても質問していきました。生活の中で、文化の違いをどのように乗り越えたかという質問には、文化は違うがそれぞれの人の本質はどの国でも変わらないから、真摯に向き合っていけばいいとアドバイスを頂きました。また、女性のエンパワーメントのグループは、ブラジル出身の学生と女性問題についてディスカッションを行い、ブラジルの状況と日本の状況を比べながら話を進め、性別という枠組みにとらわれずに、人として一つ一つの行動への責任が大切との意見を頂きました。児童虐待のグループでは、子供を持つための免許証を作るという提案をすると、少子高齢化がさらに深刻化するのではないか、金銭面でさらに苦しくなるのではないかなど鋭い視点からフィードバックを頂き、自分たちの研究をさらに深めることができました。どのグループも有意義で楽しい時間を過ごすことが出来ました。

California Trail 2019

Written by Takuma Furukawa, Hana Yamabe, Natsuki Oda

DAY 4

アメリカ創価大学のラーニングクラスター（LC）は、春学期の終わりに3週間の問題探究を行い、そのゴールとしてリサーチや研究を発表するLCフェアを開催しています。私たちはそのLCフェアに参加させて頂き、アメリカ創価大学の先輩方の研究発表を見学しました。研究テーマは、学内でのゴミ問題や、各国の移民、アートと貧困や、ディズニーランド、平和の文化についてなど多岐にわたり、興味をそそられるものばかりでした。ゴミ問題についてのブースでは、見学者に、実際にテーブルに置かれたごみを分別してもらいながら、アメリカでの生ごみの活用の仕方や埋め立て処理場の実態を発表し、リサイクルの重要性を訴えるなど、見学者も楽しめるようになっていて、自分たちの研究発表にも使える工夫があり、とても勉強になりました。アートと貧困のコーナーでは、芸術は、貧困に苦しむ人々の心を癒し、脳にも良い影響を与えるということを学びました。貧困の解決に、芸術が直接関わるとは思ってもみませんでしたが、私たちの周りにも思わぬところに問題解決の糸口があるかもしれないと気づかされました。



多岐にわたる研究と工夫を凝らした様々な発表スタイルを学ぶ学園生



ウォルドルフ学校の生徒とは、同年代の視点から世界の問題に関する活発なディスカッションが行われた

4日目の午後、ウォルドルフ学校を訪問しました。前日にアメリカ創価大学で一緒にキャンパスツアーをした高校2年生と互いに学校を紹介し、グループに分かれてキャンパスツアーを行いました。学校ではディスカッション中心の探究型授業が行われていると聞き、生徒一人一人の能力を引き出しているように感じました。その後、各グループがリサーチしてきたことを発表し、ディスカッションを行いました。児童虐待グループのディスカッションでは、日本とアメリカは児童虐待に対して同じような意識を持っていることを確認し、行動に移していくことを決意し合いました。女性のエンパワーメントメンバーは、ジェンダーギャップ指数の数値を見て、アメリカの男女格差はそれほど大きくないと思っていましたが、ディスカッションの中で、アメリカが多文化社会であるため、家庭によっては「女性は家事をし、男性は働く」という文化が根付いているところもあり、数値だけではわからない実際の問題を知ることが出来ました。最後には、ウォルドルフ学校の生徒さんが歌を歌ってくれ、大感動で交流を終えることが出来ました。

4日目の最後は、カリフォルニア大学アーバイン校（UCI）のリチャード・マシュー博士とセッションを行い、難民グループがプレゼンを発表しました。プレゼン後、マシュー教授は、私たちが高校生として、難民に対する意識向上への取り組みを学校で行っていることを賞賛して下さいました。その後の質疑応答では、「日本は難民の歴史が無いから、意識が低い。この歴史的な問題をどう乗り越えたらいいか。」という質問に、『今、日本が多くの移民を受け入れることで、国民の難民に対する意識も上がる。また、現代の子供が使いこなすSNSなどを利用することで、日本にいながらも世界の人と一対一のコミュニケーションを取る事が出来る。「難民」というくくりで考えるのではなく、一人一人とのコミュニケーションが大切』と教えて下さいました。また、最新技術によって画期的な難民支援方法が開発されていることを述べられ、難民支援にはこんなやり方があるんだと難民問題解決への新たなアイデアを発見することができました。



難民問題のグループは、マシュー博士から問題解決への新たなアイデアをいただく

California Trail 2019

Written by Takuma Furukawa, Hana Yamabe, Natsuki Oda

DAY 5

最終日、私たちはデイビッド・クリーガー氏が会長を務められる核時代平和財団を訪問しました。まず、スタッフの方が財団の取り組みについてプレゼンをしてくださり、財団の掲げる核兵器のための10項目の提言を紹介していただくとともに、「核に人類が滅ぼされる前に、核廃絶を行わなければならない」と呼びかけてくださいました。次に、関西創価高校から核兵器廃絶についてリサーチをしてきたグループがプレゼンを行いました。そのプレゼンに対し、核抑止論は誤解されていること、核抑止論を信じている人とそうでない人が歩み寄ろうとしていないことを繰り返して語られました。核抑止論によってもたらされる平和は、砂上の楼閣であると改めて実感し、核は絶対悪であると再確認し合いました。その後、質疑応答に移り、「平和な世界とはどのような状態を言うのか」という質問に対し、「全員が笑顔というわけではない、もちろん対立や争いはある。しかし、そういった対立を平和的に解決を目指していけるのが平和な世界だと考えている」と答えられました。また、私たちがセッションに向けて読んだ創立者・池田先生とクリーガー会長との対談集『希望の選択』の中で、「欲望に振り回されやすい己の心を統御し、理想を見つめつつ、現実を力強く切り開いていく精神の力こそ、詩心に他なりません」とクリーガー会長が仰ったことから、「会長ご自身は、どのようにして詩心を育まれたのですか」との質問に、クリーガー会長は「自身の経験を踏まえながら、詩を読み、書くことが詩心を育む上で重要である」と答えて下さいました。この言葉を聞き、このときの思いを残そうと、早速、詩の作成に挑戦しています。また、クリーガー会長は、「核廃絶への道のりは、とても険しく厳しいものです。日本でいう『七転び八起き』のように、くじけてもまた立ち上がって下さい」と、核兵器廃絶のために大切なこととして「諦めない心」が大切だと強調されました。セッションの終わりには、ローマ時代に築かれた大聖堂が、一代ではなく、何代かに渡って完成するという例を通して、それぞれの世代が役割を果たさなければならないと仰られました。世界の中で唯一の被爆国である日本に住む私たちは、被爆者の方から直接被爆体験を聞いた世代として、被爆者の方々の思いを継承していく義務があると改めて感じ、できることから核廃絶のために戦おうと全員で心の底から決意しました。



核廃絶グループが探究成果を、
クリーガー会長へプレゼンテーション



クリーガー会長は核廃絶のために、
「あきらめない心」の大切さを強調された



「平和な世界は私たちが創る！」と改めて決意した
フィールドワークとなった

私たちは、この海外フィールドワークを通して、高校生が日本では経験することの出来ない貴重な経験を積ませて頂きました。元国連事務次長のチョウドリ大使や核時代平和財団のクリーガー会長、アメリカ屈指の大学の教授等、一流の識者との語らいは、私たちの視野を更に大きく広げて下さいました。また、同年代の学生との交流では、同世代の多様な考え方を知り、大いに触発を受けました。この海外フィールドワーク中で、数多くの識者が、私たち青年の一人一人に世界平和に貢献する力が備わっていることを強調され、私たちに期待されていました。私たちは、その期待に応えるために、行動を起こさなければならないと痛感し、そのために、今は徹して学ぼうと決意しあいました。また、そのための語学力も更に磨く必要があると認識し、英語を始めとした言語の習得にも挑戦しようと決意しました。海外フィールドワークに向けての準備から当日までの全てを通して、新たな発見や学びがたくさんあり、大きく成長することが出来ました。私たちはこれからも、世界平和のために英知を更に磨いていきます。

Kansai SOKA Senior High School



Learning Cluster

2018-2019

SGH Learning Cluster Program

【Program Overview】

The Learning Cluster Program (LC) is part of Kansai Soka High School's Super Global High School (SGH) program, where students study global issues in English. The foundation of this program is based on our school founder Dr. Daisaku Ikeda's Annual Peace Proposal, which called upon the need for educators to foster global citizens, through lessons that explore the four areas of development, environment, human rights and peace. Over the course of one year, students develop their language and research skills, and deepen their understanding of global issues in these four areas. Students also learn and research about the Sustainable Development Goals (SDGs) proposed by the United Nations, and initiate projects with support from a team of international teachers.



Picture: Students practicing their presentation skills

The purpose of this program is to provide students with the opportunity to deepen their understanding of current pressing global issues, and to nourish a sense of responsibility and hope through student-led research and autonomous learning. Through this program, we hope that students will discover passion in their learning which will continue into their future university studies, professional career and lifework. In this way, this program hopes to foster the next generation of global leaders who will live contributive lives for the betterment of humanity.



Picture: Students at an exhibition on the SDGs at JICA during the Tokyo fieldwork

【High School Peace Proposal (HSPP)】



Picture: From left, High School Peace Proposal 2018, 2017, 2016

As part of the Learning Cluster Program, in the second half of the academic year, students are divided into groups of four or five students and conduct a final research project on one global issue, with support from a team of international teachers. The research project typically includes a detailed literature review, background research and an analysis of the issue, followed by an action plan or a proposal for concrete solutions. The final product is created by the students, based on class discussions, student feedback during presentations, and comments from experts during local and overseas fieldwork throughout the year.

【History of Learning Cluster】



Picture: Students during LC class

<u>1st Class (2014-2015, SGHA)</u>

- 15 students selected from grades 10-12
  - Group Research Topics (4 Fields)
    - Development: Renewable Energy
    - Environment: Water
    - Peace: Collective Self-Defense Act
    - Human Rights: Refugees in Japan
  - Tokyo Fieldwork

<u>2nd Class (2015-2016, SGH 1st Year)</u>

- 16 students selected from grades 11-12
  - Group Research Topics (4 Fields)
    - Development: Bullying in An Education
    - Environment: Peace Proposal for Environmental Education for the Future
    - Peace: Actions for High School Students Towards the Abolition of Nuclear Weapons
    - Human Rights: Suggesting Concrete Actions to Provide Basic Human Rights to Syrian Refugees
  - Tokyo Fieldwork, Overseas Fieldwork

3rd Class (2016-2017, SGH 2nd Year)

- 24 students and 2 student advisers selected from grades 11-12
  - Group Research Topics (SDGs)
    - No Poverty (SDG 1): Child Poverty in Japan
    - Zero Hunger (SDG 2): Equalizing Food Distribution to Achieve Zero Hunger
    - Quality Education (SDG 4): Education for Nuclear Abolition
    - Gender Equality (SDG 5): Gender Equality through Education
    - Decent Work (SDG 8): An Educational Program for Japanese High School Students against Child Labor
    - Peace and Justice (SDG 16): Using Dialogue to Counter Terrorism and Create Inclusive Communities
  - Tokyo Fieldwork, Overseas Fieldwork

4th Class (2017-2018, SGH 3rd Year)

- 25 students selected from grades 11-12
  - Climate Change Research Group:
    - Adaptation to Climate Change in Maize Production in the Sahel
    - Peace-Building and Climate Change
    - Sustainable Tourism to Combat Climate Change
  - Nuclear Abolition Research Group:
    - Environmental Damage of Dismantling Nuclear Weapons
    - Protecting Human Rights from the Fear of Nuclear Weapons
    - The Role of Religion for Nuclear Abolition
  - Tokyo Fieldwork, Overseas Fieldwork

5th Class (2018-2019, SGH 4th Year)

- 22 students selected from grades 11-12
  - Women's Empowerment – The Situation Game
  - Child Abuse Awareness Project Proposal
  - LGBTQ+ Research in Kansai Soka High School
  - Nuclear Abolition: A Humanitarian Perspective
  - Understanding Refugees in Japan

6th Class (2019-2020, SGH 5th Year)

- 22 students selected from grades 11-12



Picture: Students during LC class



Picture: Q&A session with special guest Former Ambassador Professor Hisao Yamaguchi

Learning Cluster 2018-2019: Yearly Course Outline

【Aim】

This course is designed for students to deepen their understanding of global issues by conducting thorough research on a variety of topics, including the United Nations SDGs, throughout the year. All classes, discussions, and presentations were conducted in English.

【Context】

- School Day Saturdays, 1 Year
- 22 students from grades 11 and 12

【Selection Process of LC Students】

All students from grades 11-12 are eligible to apply for Learning Cluster. Students are expected to have an English fluency level of Eiken 2 or above with a strong interest in global issues research. Completion of SP during grade 10 is also required. The selection process includes the following tests:

- **Paper Test**
  - Assesses Basic English ability
  - Reading, listening, and essay writing questions (Pre-1 Eiken / TOEFL)

- **Group Interview Test**
  - Assesses English speaking abilities, discussion, creativity, and leadership skills
  - Students discuss together in English to solve a prompt question

- **Individual Interview Test**
  - Assesses students' commitment levels and other extra-curricular responsibilities
  - Students are asked questions about their reasons for joining LC, study habits, club activities, etc.

【LC Teachers】

- Kazunori Yamagishi (Japan, MA: TESOL)
- Kazuhiro Iguchi (Canada/ Japan, MA: TESOL)
- Liang Ye Tan (Singapore, MA: Sociology; Diploma in TESOL & Advanced Cert in IELTS)
- Louis Butto (USA, MA: TESOL; PhD in Applied Linguistics)
- Ramon Paras (USA/ Philippines, MA: TESOL)
- Swati Raj (India, MA: TESOL)

【Materials】

- Annual Peace Proposals
- A Forum for Peace
- Newspaper Articles
- TED Talks
- Library Books
- Online Resources
- Special Guest Lectures



Picture: LC Students interacting with exchange students from Canada

【2017-2018 Yearly Course Plan】

1st Semester: In the first semester, emphasis was placed on team-building, basic research skills, and a broad understanding of key global issues that are relevant in today's world. Students acquired a broad understanding of current global issues through discussions, presentations and lecturers on founder Dr. Ikeda's Peace Proposal, global news, and SDGs. They were then taught research skills, such as finding credible sources of information, how to conduct simple data analysis, data collection, literature review and proper referencing. They were also taught and given the chance to practice their presentation skills through research, class activities and public presentations during open campus days and other SGH-related events.





Picture: Students during LC class



Right picture: Participated as a representatives at the SGH Forum 2018 in Kwansei Gakuin University

2nd Semester: Students were then divided into five smaller groups, based on their areas of interest, and international teachers were assigned to each group to guide the students in their projects. Using the skills that were taught in the first semester, students embarked on their group research, wrote simple literature reviews, defined their research questions, and designed their own research methodologies. Armed with a general understanding of the five chosen topics and proposals for action plans, students participated in a fieldwork to Tokyo to present and discuss their research topics with experts. After gaining professional feedback from professors and experts during the Tokyo fieldwork, students then used the information to come up with creative solutions and action plans for their High School Peace Proposal projects.



Picture: Students during LC class



Bottom picture: Students sharing a light moment with Olivier Urbain during the Tokyo Fieldwork.





Left picture: Students responding to a question with Ms. Imai at UN University during the Tokyo Fieldwork.

3rd Semester: Several students were selected to participate in our fourth overseas fieldwork to California where they presented their completed *High School Peace Proposal* to local high school students, university professors, and experts. After coming back from the fieldwork, students shared what they have learnt and carried out the action plans of their completed High School Peace Proposal at events such as the SGH final presentation session, open campus day and more.



Left picture: Students during LC class



Right picture: Students presenting their High School Peace Proposal to former UN Under-Secretary General Ambassador Chowdhury during overseas fieldwork



Left picture: Students presenting their High School Peace Proposal at Kansai Soka High School's SGH Conference

UP（University Partnership）クラス

UP クラスは、高大連携を中心としたプログラムで、大学の先生や企業でお勤めの方をお招きし、本校がテーマに掲げる「環境」「開発」「人権」「平和」の４分野をさらに深められるよう授業をしていただくクラスである。

毎週木曜日の放課後を軸に、１～３年生の希望者を対象に実施し、2018 年度は計 27 回の授業を行った。その一覧が下の表である。

回	日付	講師		内容
1	4/19	ガイダンス		
2	4/26	事前学習		平和
3	5/24	創価大学	石井教授	平和
4	5/31	創価大学	石井教授	平和
5	6/7	創価大学	石井教授	平和
6	6/14	世界遺産学習会		平和
7	6/21	平和学習		平和
8	7/11	東京大学	藤井博士	経済学
9	7/12	東京大学	藤井博士	経済学
10	7/13	東京大学	藤井博士	経済学
11	9/6	創価大学	掛川准教授	開発
12	9/13	創価大学	掛川准教授	開発
13	9/20	創価大学	掛川准教授	開発
14	10/4	振り返り		
15	10/25	奈良教育大学	森本教授	開発
16	11/1	京都大学	学びコーディネーター	経済学
17	11/7	京都大学	山敷教授	環境
18	11/15	京都大学	山敷教授	環境
19	11/22	京都大学	山敷教授	環境
20	12/11	創価大学	山口客員教授	平和
21	12/12	創価大学	山口客員教授	平和
22	12/13	創価大学	山口客員教授	平和
23	1/10	毎日新聞社	鳴神大平記者	人権
24	1/17	創価大学	神立副学長	人権
25	1/24	創価大学	神立副学長	人権
26	1/31	創価大学	神立副学長	人権
27	2/14	振り返り		

【平和：「貧困・開発・平和」を考える】

2018 年 5 月 24 日（木）、31 日（木）、6 月 7 日（木）　講師：創価大学平和問題研究所　石井秀明　教授

世界の軍事費の現状や、国連が提起する SDGs が制定された背景や、人間開発を優先させ、軍縮を通して軍事化と貧困の連鎖を断ち切る重要性を教えて頂いた。世界平和のために、多角的なアプローチが必要であることや、「人間の安全保障」との考え方を広げていくこと、「平和の文化」を創出していくことの重要性について学んだ。

【人権：世界遺産学習会】

2018 年 6 月 14 日（木）　講師：大阪府魅力づくり推進課　福田賢二　氏

今回は、高校 1 年生の受講者が参加した。百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録を目指す取り組みについてのお話をお聞きした。

【経済学】

2018 年 7 月 11 日（水）、12 日（木）、13 日（金）　講師：東京大学大学院　藤井大輔特任講師

経済学とは、「限られた資源を最適に使う人間の行動を研究する学問」であり、日常のいたるところに経済学があることを、様々な実例を通して、教えて頂いた。また、ノーベル賞受賞者の素顔を紹介。受賞者の共通点として、学問への情熱や飽くなき探求心を挙げた。

【開発】

2018 年 9 月 6 日（木）、13 日（木）、20 日（木）　講師：創価大学経済学部　掛川准教授

世界の現状と SDGs 達成のためのヒントを数多く教えて頂き、「開発する必要があるか」について理由と共に、みんなで考えていきました。

【振り返り】

2018 年 10 月 4 日（木）

【開発】

2018 年 10 月 25 日（木）　講師：奈良教育大学　森本　教授

カンボジアにおける生物教育の支援に携わってこられた森本教授をお迎えした。カンボジアでは 1970 年代の内戦により、教育システムが崩壊したため、長期間、学校が閉鎖されていた。内戦が終わった後も、教員研修のシステムが整っていなかったことから、カンボジアでの教員養成プログラムに携わってこられた経験を通して、学ぶことができることへの素晴らしさを教えて頂いた。

【経済学：これからの観光と地域】

2018 年 11 月 1 日（木）　講師：京都大学　学びコーディネーター　舟津昌平　氏

京都大学大学院経済学研究科より、舟津昌平氏をお迎えして、「Global」という言葉の定義について深く考える機会となった。

【環境】

2018 年 11 月 7 日(木)、15 日(木)、22 日(木)　講師：京都大学大学院総合生存学館　山敷庸亮　教授

奇跡的な惑星である地球の環境を守るために、どう行動すればよいのか、一体何が平和なのかを考えさせられる講義となった。

【平和】

2018 年 12 月 11 日(火)、12 日(水)、13 日(木)　講師：創価大学　山口寿男　客員教授

「私の体験的学問論」と題し、これからの世界で生き抜いていくために必要な要素をお話してくださった。徹底的に勉強をすることの重要性を学んだ。

【人権】

2019 年 1 月 10 日(木)　講師：毎日新聞社　鳴神太平　記者

「新聞で学ぶ多様な考え方」と題し、新聞記者の仕事についてや、報道の使命についてお話をしてくださった。

【人権】

2019 年 1 月 17 日(木)、1 月 24 日(木)、1 月 31 日(木)　講師：創価大学経済学部　神立孝一　副学長

自由と平等について議論を行った。自由と平等の両立は不可能ではないか、自由と平等が併存するためには、どのような条件が必要かなどを考えた。学校教育や、学ぶ意義についても教えて頂いた。

【振り返り】

2019 年 2 月 14 日(木)

◆UP クラスの様子◆








◆年度末アンケートより◆
３月、受講生徒を対象にアンケートを実施。

【生徒の感想】
・自分の近くにあったのに、全く気付かなくて、知らないことばっかりでした。世界の事を見つめる前にもっと身近なものを見つめることが大事ということを知りました。
・基礎を大事にし、ちゃんと身につけていかなければいけないなと思いました。
・諸問題の解決について、可哀想な人々を助けてあげるという認識から、いつもお世話になっている方々への恩返しという認識に変わった。
・国連の話をたくさんしていただき、世界を舞台に活躍していることを聞いて、自分も人のために尽くせる人になりたいと思い、視野が広がったような気がしたからです。

自分自身の変化についての５つの質問項目を1〜4の4段階(値が大きいほど強い)で答えてもらった。以下の表がその結果である。

	4	3	2	1
1.自分自身が成長した、視野が広がったと感じる。	50%	50%	0%	0%
2.世界で起こっている様々な問題への関心が高まった。	50%	50%	0%	0%
3.国連が提唱するSDGsの理解が深まった。	50%	25%	25%	0%
4.ものごとを色々な角度から見たり、考えたりすることができるようになった。	63%	25%	12%	0%
5.地域社会や国際社会に貢献していきたいという気持ちが強まった。	38%	50%	12%	0%

「3.国連が提唱するSDGsの理解が深まった」については、2016年度の年度末アンケートで、高評価（3もしくは4）が75%と全体の4分の3にとどまった反省を生かし、GRITや高校1年生の地理の授業でもSDGsの学習の機会を増やした。今年度は、UPクラスで折に触れて、SDGsに結びつける機会が少なかったことから、2018年度は高評価（3もしくは4）が75%となった。

3.以外の4項目についてはほぼ全員が高評価であった。特に「1.自分自身が成長した、視野が広がったと感じる」と「2.世界で起こっている様々な問題への関心が高まった」は高評価が100%であり、生徒たちのものの見方や考え方を広げることに成功したと自負したい。

来年度以降も、さらによりよいものにしていきたい。

1年生5行英作文の取り組み

教員：井口和弘教諭、スワティ・ラージ講師（チームティーチング）
授業名：英語表現
授業形態：週1、全クラス、44-45名、アクティブラーニング

1学期（4月-7月）

- 5行英作文
  - Listing - Sports / JP food
  - Describing - Sakura / JP culture
  - Reasoning - Sightseeing places

※1学期ではListing, Describing, ReasoningのEssay Typeをもとに5行英作文とそれに伴うロジックを学んだ。5行という短い文の中でも、いかに自分のアイディアを論ずることができるかということを生徒は実感し、一つ一つの単語や文法の大切さを学ぶことができた。Modelとなった5行英作文はリスニングとして確認テストで行い、またスピーキングにもつなげることができた。

更に、9月に行われたGlobal Campでは創価大学の留学生に日本の食文化、流行、観光地を紹介するプレゼンとディスカッションを行った。また、留学生も母国の食文化、流行、観光地を紹介するプレゼンをしてくれた。このようにして、Listing, Describing, Reasoningの5行英作文を発展させることができた。

2学期（9月-12月）

- 5行英作文
  - Similarities（原級）- Apples vs. Oranges / Teacher vs. Student
  - Differences（比較級）- India vs. Japan / Osaka vs. Place
  - Compare and Contrast（最上級）Elementary, Junior, High school / Junior, High, University

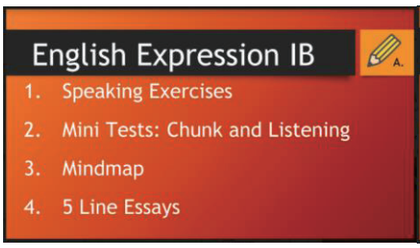
※2学期では比較を用い、一つのことをあらゆる側面から論ずることを重視した。また、中学校で学んだ原級・比較級・最上級の文法事項の復習となった。最初の授業ではModel Essayを一緒に書き、次回の授業でそれをリスニングとして出した。そして、学んだModel Essayの型を使い、自分の5行英作文を作成した。

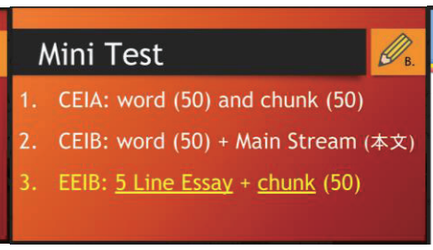
３学期（1月-2月）

- 英検準2級レベルのパラグラフライティング
  - Disagree Model: Do you think parents should let their children play video games?
  - Create: Do you think parents should let their children use smartphones?
  - Agree Model: Do you think high school students should study abroad?
  - Create: Do you think high school students should do part time jobs?

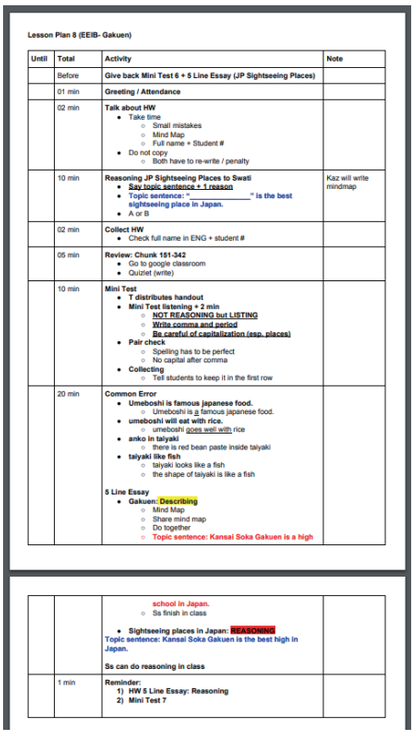
※3学期では1学期と2学期の5行英作文を踏まえて、英検準2級レベルのパラグラフライティングを学んだ。ここでは、5行英作文からパラグラフにつながる文構造などを教えた。基本はModel EssayをDictogloss手法を用い、グループで書き、次回の授業でそれをリスニングとして出した。そして、学んだModel Essayの型を使い、英検準2級レベルのパラグラフライティングの形式で作成した。

1 学期



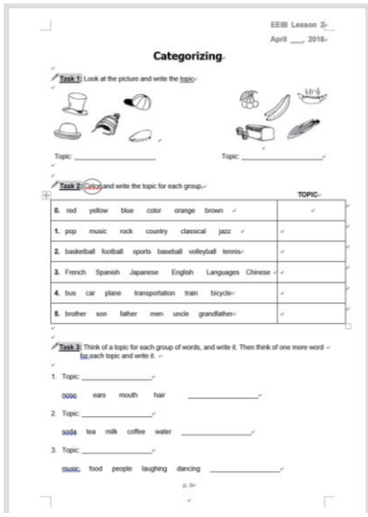






Lesson Plan 8 (EEIB- Gakuen)

Until	Total	Activity	Note
	Before	**Give back Mini Test 6 + 5 Line Essay (JP Sightseeing Places)**	
	01 min	**Greeting / Attendance**	
	02 min	**Talk about HW** • Take time ○ Small mistakes ○ Mind Map ○ Full name + Student # • Do not copy ○ Both have to re-write / penalty	
	10 min	**Reasoning JP Sightseeing Places to Swati** • Say topic sentence + 1 reason • Topic sentence: "_____" is the best sightseeing place in Japan. • A or B	Kaz will write mindmap
	02 min	**Collect HW** • Check full name in ENG + student #	
	05 min	**Review: Chunk 151-342** • Go to google classroom • Quizlet (write)	
	10 min	**Mini Test** • **T distributes handout** • **Mini Test listening + 2 min** ○ **NOT REASONING but LISTING** ○ **Write comma and period** ○ **Be careful of capitalization (esp. places)** • **Pair check** ○ Spelling has to be perfect ○ No capital after comma • **Collecting** ○ Tell students to keep it in the first row	
	20 min	**Common Error** • **Umeboshi is famous japanese food.** ○ Umeboshi is a famous japanese food. • **umeboshi will eat with rice.** ○ umeboshi goes well with rice • **anko in taiyaki** ○ there is red bean paste inside taiyaki • **taiyaki like fish** ○ taiyaki looks like a fish ○ the shape of taiyaki is like a fish **5 Line Essay** • **Gakuen: Describing** ○ Mind Map ○ Share mind map ○ Do together ○ **Topic sentence: Kansai Soka Gakuen is a high school in Japan.** ○ Ss finish in class • **Sightseeing places in Japan: REASONING** **Topic sentence: Kansai Soka Gakuen is the best high in Japan.** **Ss can do reasoning in class**	
	1 min	**Reminder:** **1) HW 5 Line Essay: Reasoning** **2) Mini Test 7**	



EEIB Lesson 3
April ___, 2018

Categorizing

Task 1: Look at the picture and write the topic.

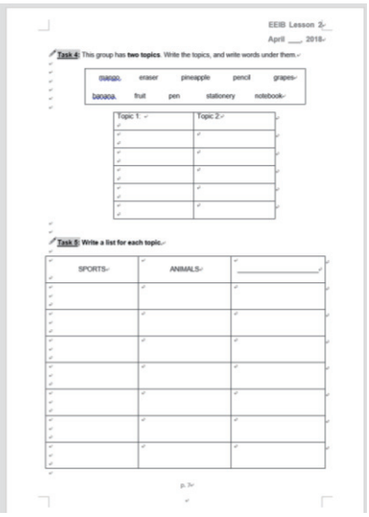
Topic: _____ Topic: _____

Task 2: Circle and write the topic for each group.

	TOPIC
0. red yellow blue color orange brown	
1. pop music rock country classical jazz	
2. basketball football sports baseball volleyball tennis	
3. French Spanish Japanese English Languages Chinese	
4. bus car plane transportation train bicycle	
5. brother son father men uncle grandfather	

Task 3: Think of a topic for each group of words, and write it. Then think of one more word for each topic and write it.

1. Topic: _____
nose ears mouth hair _____
2. Topic: _____
soda tea milk coffee water _____
3. Topic: _____
music food people laughing dancing _____



EEIB Lesson 3
April ___, 2018

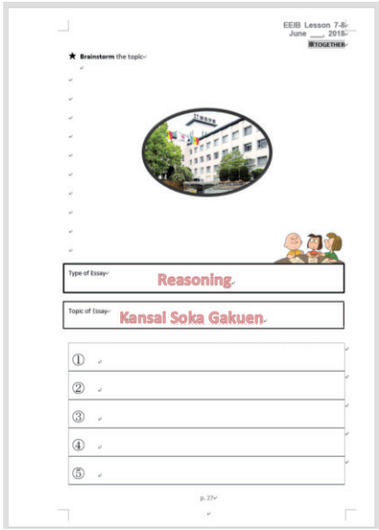
Task 4: This group has **two topics**. Write the topics, and write words under them.

mango	eraser	pineapple	pencil	grapes
banana	fruit	pen	stationery	notebook

Topic 1:	Topic 2:

Task 5: Write a list for each topic.

SPORTS	ANIMALS	_____



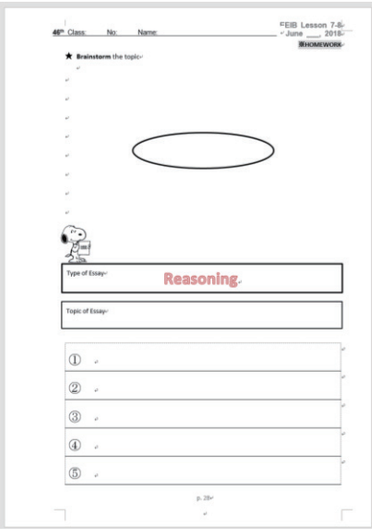
EEIB Lesson 7-8
June ___, 2018
TOGETHER

★ **Brainstorm** the topic

Type of Essay: **Reasoning**

Topic of Essay: **Kansai Soka Gakuen**

① ② ③ ④ ⑤



40th Class No. Name

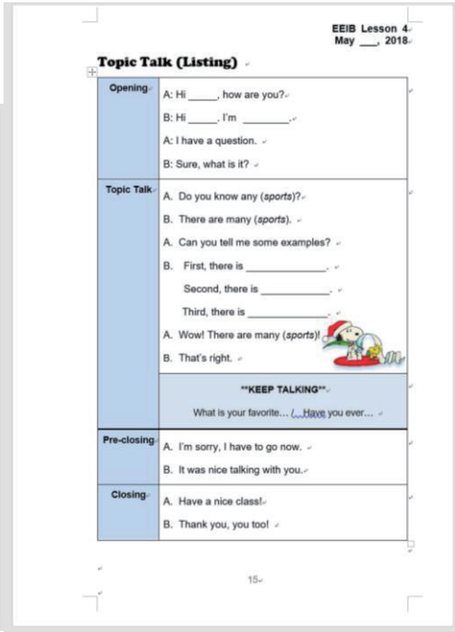
EEIB Lesson 7-8
June ___, 2018
HOMEWORK

★ **Brainstorm** the topic

Type of Essay: **Reasoning**

Topic of Essay:

① ② ③ ④ ⑤



EEIB Lesson 4
May ___, 2018

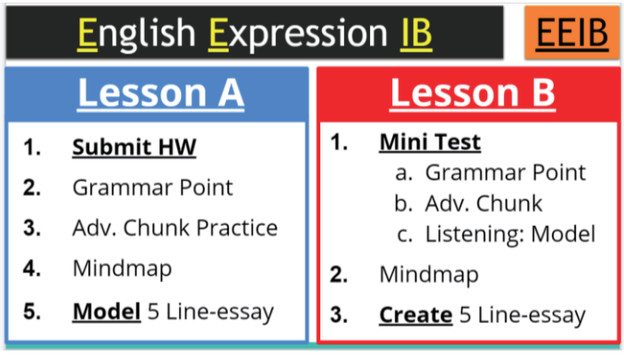
Topic Talk (Listing)

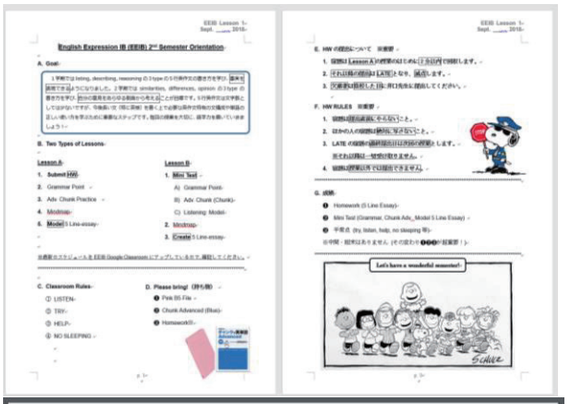
Opening	A: Hi _____, how are you? B: Hi _____. I'm _____. A: I have a question. B: Sure, what is it?
Topic Talk	A. Do you know any (*sports*)? B. There are many (*sports*). A. Can you tell me some examples? B. First, there is _____. Second, there is _____. Third, there is _____. A. Wow! There are many (*sports*)! B. That's right. **"KEEP TALKING"** What is your favorite... / Have you ever...
Pre-closing	A. I'm sorry, I have to go now. B. It was nice talking with you.
Closing	A. Have a nice class! B. Thank you, you too!

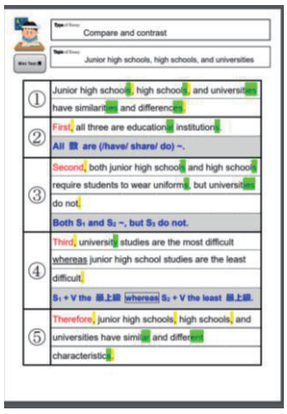
15

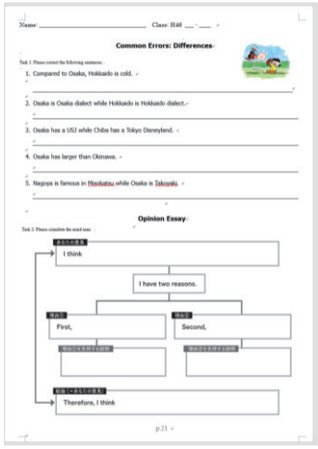
2 学期

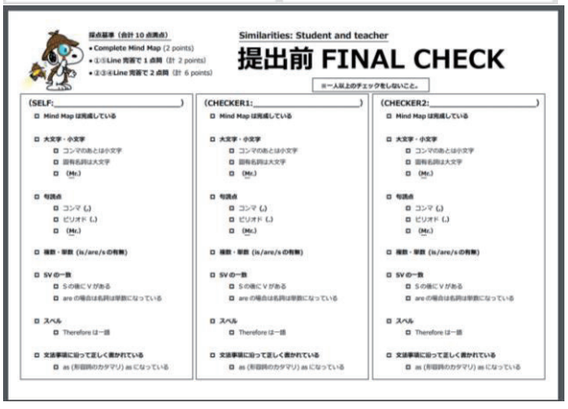








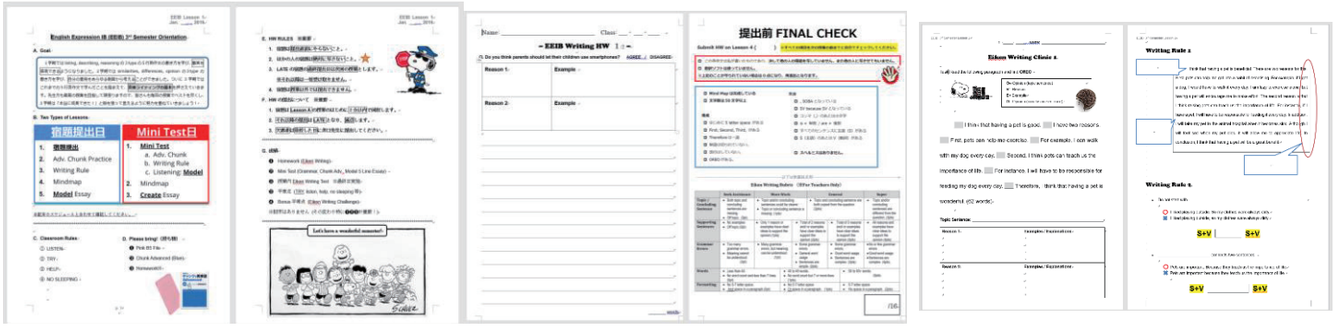


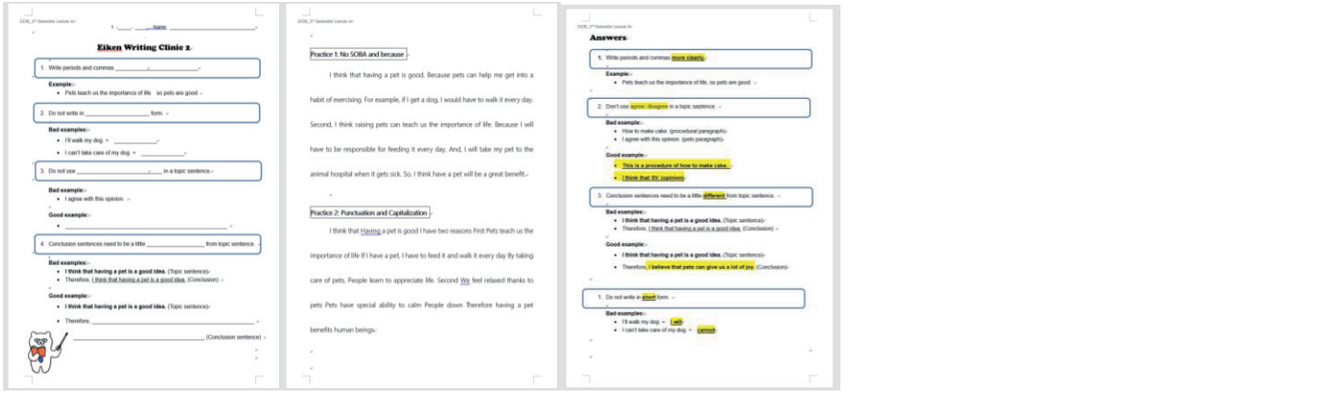


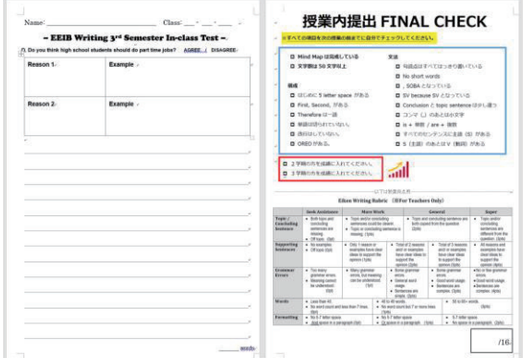
3 学期

Lesson		☆MT/ ★HW			Writing Rule	Type of Essay	Topic
1		なし	421-480	X	X	**Orientation:** 3rd Semester Goals, Schedule, Rules, Grading	
2		なし	481-540	X	OREO/ Formatting / No Soba/ Because	★Eiken Model 1	**Disagree Model:** Do you think parents should let their children play video games?
3		★Mini Test	481-540	★Eiken Model 1	X	★Eiken Create 1	**Create:** Do you think parents should let their children use smartphones?
4		★HW 提出日	601-660		Punctuation, short form, agree, conclusion	★Eiken Model 2	**Agree Model:** Do you think high school students should study abroad?
5		★Mini Test	601-660	★Eiken Model 2	X	★Eiken Create 2	**Create:** Do you think high school students should do part time jobs?
6		★HW 提出日	Review		Review Eiken Strategies	※Eiken Writing Test (In-class)	


Eiken Strategies
大問4：Writing (2級編)
Writing Section: 構成点
Content（内容）課題で求められている内容が含まれているか
Structure（構成）英文の構成や流れがわかりやすく論理的であるか
Vocabulary（語彙）課題に相応しい語彙を正しく使えているか
Grammar（文法）文構造のバリエーションやそれらを正しく使えているか
各項目4点 計16点満点→650点へ換算（2級）
Writing: 時間配分（25分）
1. Mindmap (3-5 min)
2. Write (12-15 min)
3. Check Mistakes (3-5 min)
Step 1: Brainstorming & Outlining
指示文
・QUESTIONについて、あなたの意見とその理由を2つ英文で書きなさい。
・語数の目安は80語～100語です。
Opinion + 2 reasons
語数は守る
QUESTION
Do you think schools should encourage students to use tablets?
Stay on the topic.
問題が聞いているのは、学校のこと。
それ以外のことは＝0点
Step 2: MINDMAP (3-5 min)
QUESTION
Do you think schools should encourage students to use tablets?
Agree
R1: Environment
E1: No paper
R2: Use for Study
E2: Study Supplement
Disagree
R1: Distract Students
E1: Videos and games
R2: Need battery
E2: Trouble in class
Step 3: Writing（書き出し）
Q. Do you think schools should encourage students to use tablets?
I think that tablets should be used more in schools for students.
I thinkやI believeを使って意見を述べる。
I agreeは何に賛成なのかがはっきりしないので、使わない。
Do not copy the TOPIC.
丸写しは減点対象となるかも。
Step 4: Writing (Use signal words)
Use signal words for clear answers.
Introduction sentence
• I think that SVO...
• I have two reasons.
Reason 1
• First,
• For example,
Reason 2
• Second,
• For instance,
Concluding sentence
• Therefore, I think that SVO...
Step 5: Check for Mistakes (3-5 min)
Most Common Errors
• S + V / SOBA / because
• 時制の一致—Yesterday, my friend said the part is wonderful.
• Singular vs Plural (単複の整合性)—My parents often goes shopping.
• Spelling
English Help Center
ENGLISH PLAZA
TEACHERS
【Mon】 Ms. Gisella Donayre
【Tue】 Ms. Louis Butto
【Wed】 Ms. Mieko Shinomiya
【Thu】 Ms. Eddie Estry
【Fri】 Ms. Louis Butto
予約は ENGLISH PLAZA


提出前 FINAL CHECK


Eiken Writing Clinic 2.
Practice 1: No SOBA and because
Practice 2: Punctuation and Capitalization
Answers


授業内提出 FINAL CHECK

五行エッセイと五行作文（国語総合）

１，実施時期

２０１８／１１／１２～１１／２２（英語）

２０１８／１１／１２～１１／２２？（国語）

２，五行エッセイと五行作文

英語

国語

① 評論に対する自分の意見を五行で述べる。

「貧困は自己責任であるか、否か」

② 五行で書いた後、友人と項目ごとにチェックを行い、提出。

３，授業の狙い

○自分の意見を論理的に述べる力をつける。

↑・思考を掘り下げて、深く考える力をつける。

・自分の意見に対し、根拠を述べることができるようにする。

・短い文章で意見を伝える力をつける。

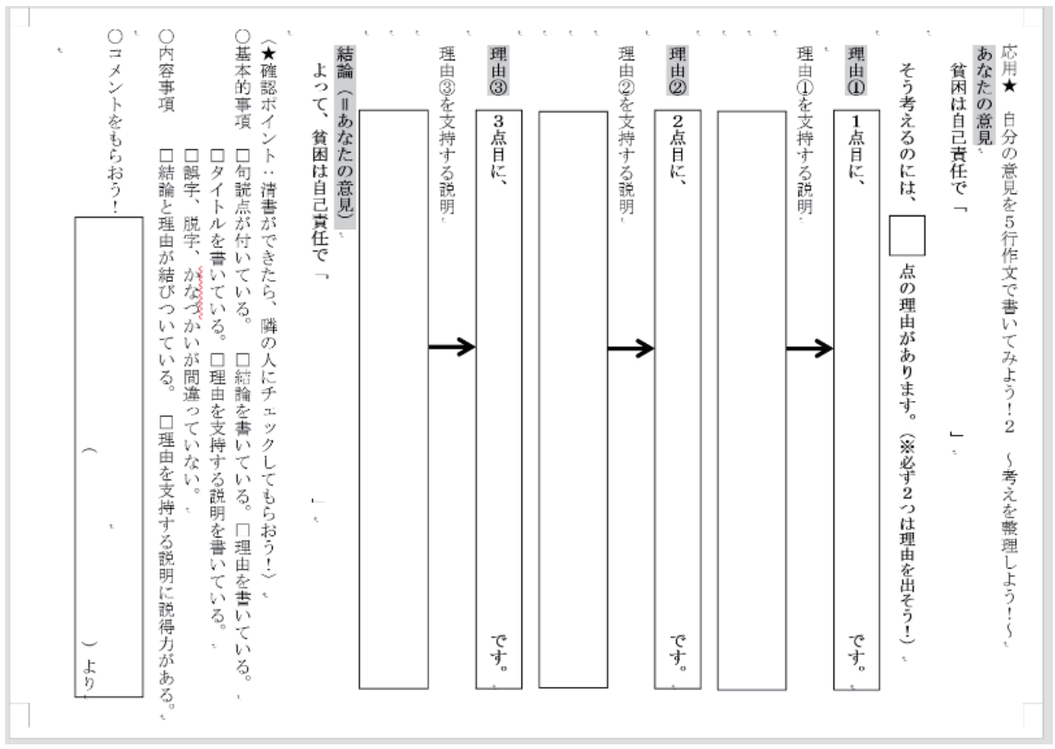
４，効果

・難しいテーマであったが、自分の意見を掘り下げて考えることができた。

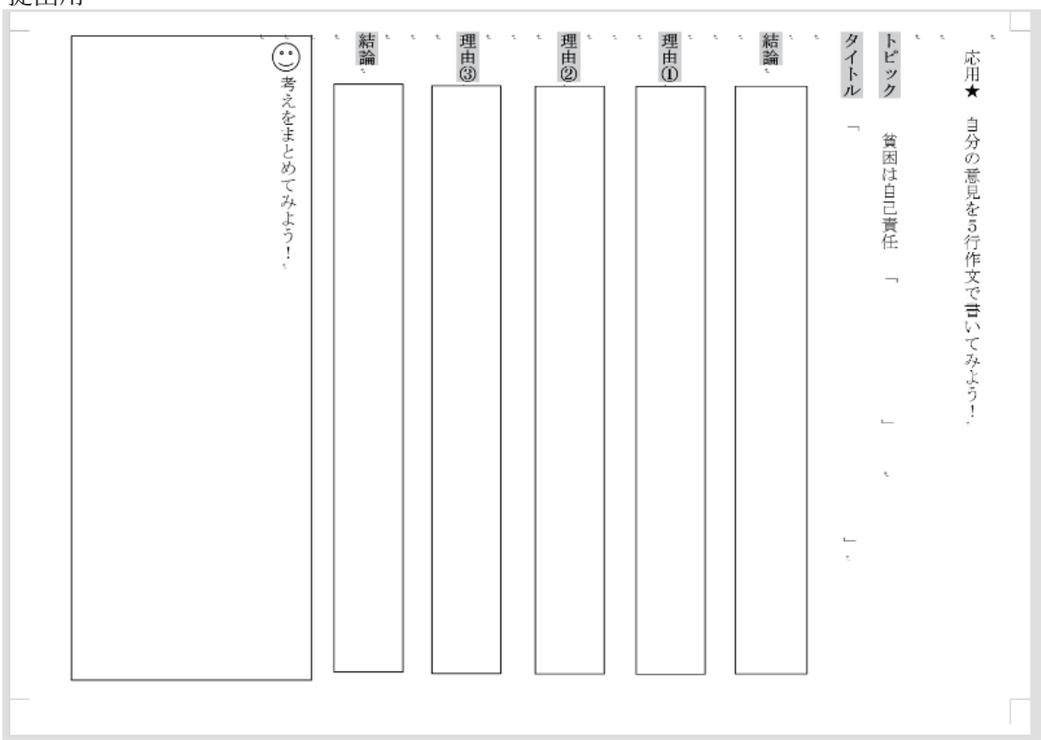
・意見の根拠を明示して発表することができた。



作成用


応用★　自分の意見を5行作文で書いてみよう！2　～考えを整理しよう！～
あなたの意見
貧困は自己責任で「　　」
そう考えるのには、□点の理由があります。（※必ず2つは理由を出そう！）
理由①
1点目に、
です。
理由①を支持する説明
理由②
2点目に、
です。
理由②を支持する説明
理由③
3点目に、
です。
理由③を支持する説明
結論（＝あなたの意見）
よって、貧困は自己責任で「　　」
（★確認ポイント：清書ができたら、隣の人にチェックしてもらおう！）
○基本的事項　□句読点が付いている。□結論を書いている。□理由を書いている。
□タイトルを書いている。□理由を支持する説明を書いている。
□誤字、脱字、かなづかいが間違っていない。
○内容事項　□結論と理由が結びついている。□理由を支持する説明に説得力がある。
○コメントをもらおう！
（　　）より

提出用


応用★　自分の意見を5行作文で書いてみよう！
トピック　貧困は自己責任　「　　」
タイトル　「　　」
結論
理由①
理由②
理由③
結論
考えをまとめてみよう！

高校１年生地理での取り組み

高校１年生では、地理総合への流れも鑑みながら、自分たちで学ぶ時間を大切にしていこうと考えた。今は、教科書以上の内容を、自分たちで検索し、学べる時代。そして、学んだことを自分の言葉で、自分たちの思想を交えて語り、相手に伝える力が問われる時代。

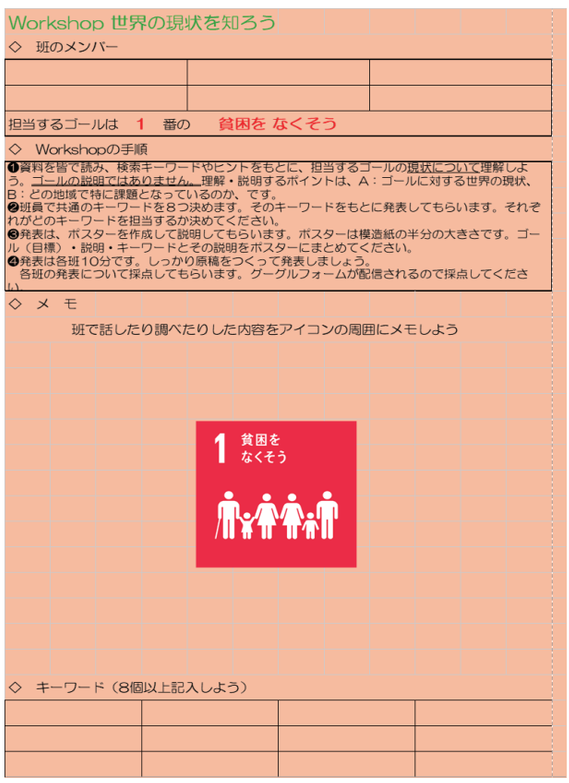
そこで、地理Ｂの４単位を地理と地理Ｓに２単位・２単位に分割し、地理の方では、地理的基礎の地形・気候・農林水産業・食料・エネルギー・資源等を行うこととした。

地理Ｓでは、タブレット一人一台をうまく活用し、民族・宗教・世界地理等に分割し、ＳＤＧｓ、民族問題、難民問題については自分たちで学び合い、自分たちで教え合う協働学習形態にしました。

特にSDGｓは、力を入れて取り組み持続可能な世界を実現するため、世界で取り組んでいる17のゴール・169のターゲットを１年生の段階から学び、地球上の誰一人として取り残さないために、戦うのは自分達なんだとの決意に立てることを目標にした。そのために自分たちでできることを探そうと17のゴールをグループで更に深く学びあった。

まず、プリント１　Workshop　世界の現状を知ろう。プリント２　「ゴールの説明」・「世界の現状」・「ヒント」を配布し、読み合わせの後、各班内で担当を決めて検索。

それぞれ現状説明のための大切なキーワードをあげさせて、最終はチームで８つに絞り、ポスターを作成。同時に、現状説明のための原稿も作成し発表した。



Workshop 世界の現状を知ろう

◇　班のメンバー

担当するゴールは　1　番の　貧困を なくそう

◇　Workshopの手順

❶資料を皆で読み、検索キーワードやヒントをもとに、担当するゴールの現状について理解しよう。ゴールの説明ではありません。理解・説明するポイントは、A：ゴールに対する世界の現状、B：どの地域で特に課題となっているのか、です。
❷班員で共通のキーワードを８つ決めます。そのキーワードをもとに発表してもらいます。それぞれがどのキーワードを担当するか決めてください。
❸発表は、ポスターを作成して説明してもらいます。ポスターは模造紙の半分の大きさです。ゴール（目標）・説明・キーワードとその説明をポスターにまとめてください。
❹発表は各班10分です。しっかり原稿をつくって発表しましょう。
　各班の発表について採点してもらいます。グーグルフォームが配信されるので採点してください。

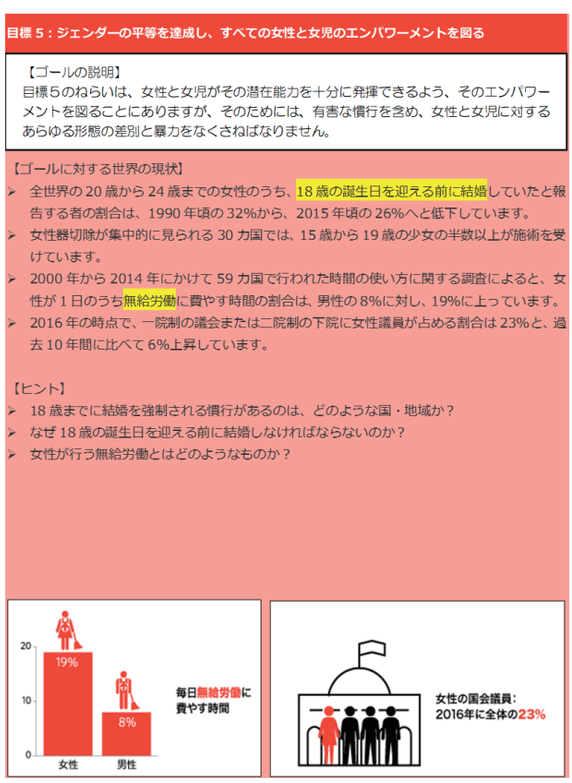
◇　メ　モ

班で話したり調べたりした内容をアイコンの周囲にメモしよう

1 貧困をなくそう

◇　キーワード（8個以上記入しよう）

プリント１　世界の現状を知ろう



目標５：ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る

【ゴールの説明】
目標５のねらいは、女性と女児がその潜在能力を十分に発揮できるよう、そのエンパワーメントを図ることにありますが、そのためには、有害な慣行を含め、女性と女児に対するあらゆる形態の差別と暴力をなくさねばなりません。

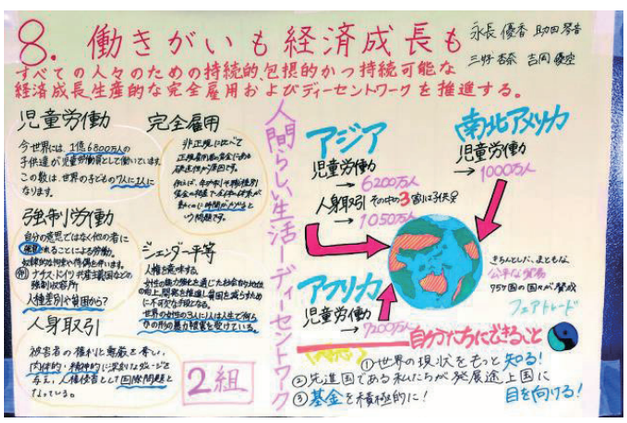
【ゴールに対する世界の現状】
- 全世界の20歳から24歳までの女性のうち、18歳の誕生日を迎える前に結婚していたと報告する者の割合は、1990年頃の32%から、2015年頃の26%へと低下しています。
- 女性器切除が集中的に見られる30カ国では、15歳から19歳の少女の半数以上が施術を受けています。
- 2000年から2014年にかけて59カ国で行われた時間の使い方に関する調査によると、女性が１日のうち無給労働に費やす時間の割合は、男性の8%に対し、19%に上っています。
- 2016年の時点で、一院制の議会または二院制の下院に女性議員が占める割合は23%と、過去10年間に比べて6%上昇しています。

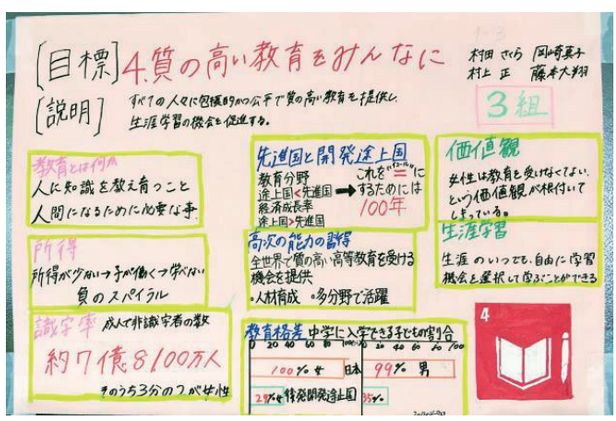
【ヒント】
- 18歳までに結婚を強制される慣行があるのは、どのような国・地域か？
- なぜ18歳の誕生日を迎える前に結婚しなければならないのか？
- 女性が行う無給労働とはどのようなものか？

プリント２　ゴールの説明・世界の現状

また、２学期の校外学習では、京都、奈良、兵庫の方面へ、グループでコース設定をし、それぞれの都市の SDGs の取り組み、訪れる地域の SDGs の取り組みを事前に学習し、低酸素・循環型街づくり、環境貢献都市、環境未来都市の構想などの取り組みを現地で確認した。終了後は、文化財の価値や、都市やその地域独自の SDGs の取り組みを発表し合い、更に学びを深めた。外国の方へのインタビューなども行い、外国の方の SDGs に対する意識なども確認したが、その意識の高さに驚いている生徒が多くいた。
現在は、それぞれの地域の難民問題を皆で学び、解決方法を模索し、自分たちにできることを創造しあっている。

一人一人の心に、SDGs が掲げる「誰も置き去りにしない」とのビジョンは、いつか成し遂げるべき未来のゴールではなく自分たちの挑戦であり、喜びを分かち合う社会を築いていくことだとの意識が芽生えてきた。苦しむ人々の立場に自分の身を置く経験を重ねる優しい心。世界市民として共に生きる社会を築くための創造。皆で力を合わせて安心、安全の地域を作り出していく決意。生徒たちに、自分自身こそ時代の主体者との自覚をさらに強く芽生えさせる授業を目指していきたい。





作成した発表用ポスター



ポスター発表



フィールドワーク京都方面

高校１年生物基礎 校内フィールドワークの実施

＜目的＞

『実際の植物に触れ、植物の特徴や様子を確認する』という目標を掲げたが、そこには普段、植物を見ることはあっても、その植物が何という植物なのか、考えることは少ないという現状が見受けられたためである。植物の名前を知ることで、身近に感じ、植物を大切にする心を養ってほしいと思い、このフィールドワークを計画した。

生徒の目標とは別に、授業者としての目標として、ICT を活用した授業を目指しており、フィールドワークでは全生徒が１人１台のタブレットをもっているため、それを活用した授業づくりを意識した。

＜概要＞

校内フィールドワークでは学園校内の指定の場所から課題の植物等を探し、写真を撮り、GoogleClassroom の課題に投稿する。植物の同定には『六甲山系電子植生図鑑』を用いた。

＜本時までの流れ＞

生物基礎の教科書では植生を扱う単元は４章であるが、４章・５章を１学期に行い、１章・２章を２学期、３章を３学期に行った。これは校内フィールドワークを１学期に行うためであるが、順当に行うと、４章は２学期末にあたり、冬のため、多くの植物が葉を落とす時期になる上、寒く、生徒のモチベーションも上がらなかったため、初夏の緑豊かな時期に行うことにした。

４章の内容を中間試験で行い、試験返却の残り時間で事前準備を行った。GoogleClassroom はすでに登録済みであったので、課題で写真を投稿する練習を行った。また、六甲山系電子植生図鑑を提示し、課題の植物を事前に調べ、オフラインで見られるように、web ページのダウンロードや、スクリーンショットなどをしておくように指示し、準備とした。

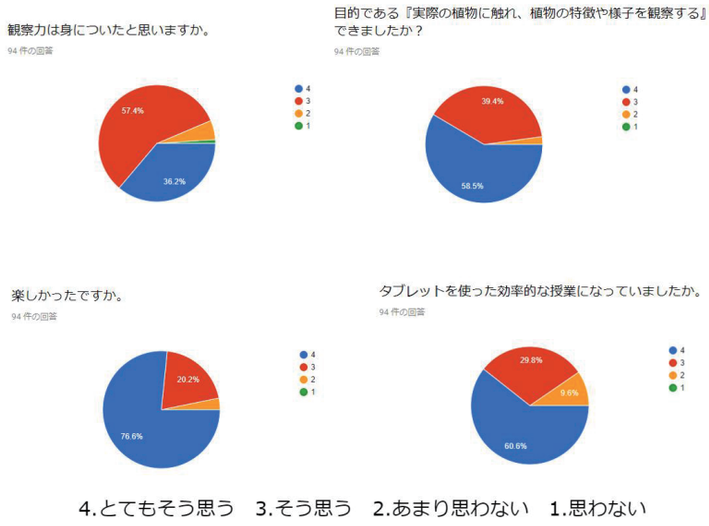




＜本時の活動＞授業時には開始５分までに今日行うことを説明し、その後、30 分の活動時間を設けた。その後、教室に戻り、撮った写真を GoogleClassroom の所定の場所にアップロードさせた。活動中はタブレットを持ち歩き、周囲の植物と手元の写真とを見比べながら注意深く観察している様子が見受けられた。また、自主的にお互いと協力し合い、深い学びを行っていた。

＜アンケートより＞

授業後のアンケートでは、「『実際の植物に触れ、植物の特徴や様子を観察する』は達成できましたか」について98%もの生徒が「とてもそう思う」または「そう思う」と答えた。「観察力は身についたと思いますか」の項目では、93%の生徒が「とてもそう思う」または「そう思う」と答え、「楽しかったですか」の項目では 77%もの生徒が「とてもそう思う」と答えた。さらに感想では「学園は緑が本当に豊かなので、いいフィールドワークができたとおもいました。葉っぱがいっぱいあるなかから、課題の葉っぱを見つけたときは、単純に「あ！あった！！」と思って楽しかったです！また学園の緑に触れたいと思いました」「想像した以上の植物が校内にあることに驚きました。 知識が少なくてなかなか課題を達成することが出来なかったことが悔しかったので、少しでも見分けられるようになりたいと思いました」「学園が自然豊かであることをこれまで以上に感じることができました。日頃から感謝の気持ちを持っていきます」など、好意的な意見ばかりで、非常に高い関心が伺える。中には「次にやるときはもっと行動範囲を広げ、例えば桜源郷や竹林で行いたい。班ごとに区画を設け、そこで見られた植物をまとめ、ポスターとして掲示したら面白いと思う」というように授業を発展させるためのアドバイスを提案した生徒もおり、他の教科の学びが活かされていることを感じた。



＜創立者の提言より＞

『創価学会の牧口常三郎初代会長は、“郷土は世界の縮図である”と述べ、人間の歴史と自然と社会の交差点ともいうべき「郷土」に根差した学習を通し、「世界」への目を開くことが重要であると訴えていました。この「郷土(地域)」から「世界」を見て、「世界」から「郷土(地域)」を見ていく往還作業こそが、生活実感に根差した自然観と倫理観を養う上で、欠かせないと、私は考えます。』と『教育の力で持続可能な未来を(2002.8.26)』で述べられている。現在、SGH の活動で、世界に目を向けた環境問題やグローバルイシューについて勉強をしている中で、この地域に密着した授業で、身近な自然を大切にする心を育む自然教育をこれからもしていきたいと思っている。自然豊かな交野の特性を最大限に活かし、これからも様々な教材を開発していこうと思う。

1. 実施時間（期間）

2019 年 1 月 8 日(火) ～ 2 月 12 日(月)

授業回数しては、8 回分

2. 実施内容

授業 1 回目： 【学習】サマリーとはどんなものかを学ぶ

2 回目： 【学習】昨年度の日本語論文を用いて、サマリーの作成手順の説明及び日本語論文をまとめ、英訳しやすい簡単な日本語への書き換え。

Steps to make an English summary from Japanese essays

A. Read Japanese essay carefully ＜日本語の論文を丁寧に読み込む＞

B. Pick up important points and make 5 line essay＜日本語の 5 ラインエッセイを作成する＞

C. Simplify your 5 line essay (imagine that junior high school students will read it)
＜中学生でもわかるようなシンプルな日本語にする＞

D. You can add some supporting information to your 5 line essay＜必要があれば情報を付け足す＞

E. Make English summary based on your simplified Japanese 5 line essay
(シンプルな日本語の 5 ラインエッセイを基に、英語サマリーを作成する)

重要な点を抜き出すなどし、5 ラインエッセイを作成する。

1.
2.
3.
4.
5.

5 ラインエッセイを中学生でもわかるようなシンプルな日本語にする。

1.
2.
3.
4.
5.

シンプルにした日本語の 5 ラインエッセイを基に、英語サマリーを作成する。

3 回目：　【学習】昨年度のサマリーを用いて、簡単に書き換えた日本語を英語に翻訳。
4 回目：　【学習】英語に翻訳されたものを、ピア・チェッキング及び推敲し、昨年度のサマリーと比較。
5 回目：　【作業】今年度、自分たちで作成した日本語論文をまとめ、英訳しやすい簡単な日本語への書き換え。
6 回目：　【作業】英訳しやすい簡単な日本語から英語への翻訳
7 回目：　【作業】英訳しやすい簡単な日本語から英語への翻訳の続き及びピアチェッキングと推敲
8 回目：　【作業】推敲の続き及びタイピング、提出

3.　授業の狙い・目的

日本語論文から英語サマリーの作成にあたり、

- サマリーの構成を理解するとともに、作成手順を理解する
- 自分たちが英訳しやすい日本語への変換を通して、必要な語彙力や表現力を身に着けさせるとともに、自分たちが英訳しやすい単語や表現に気付かせる。
- 日本語から英語への直訳を意識するのではなく、文章全体の意味や大意を意識して翻訳する習慣を身に着けるきっかけとさせる。
- お互いでチェックすることで、作成時に意識することを更に定着させる

4.　効果

- サマリーの作成手順の理解と定着
- 語彙力と表現力の増強
- 日本語から英語にする際に、わからない表現があっても、様々な別の表現を使用して伝えられるということの理解とそのための姿勢

アカデミックライティング入門

1，実施科目　　現代文演習

2，実施時期
　２０１８／１２／４～１２／１４

3，アカデミックライティング入門授業
①作文とレポートの違い
②情報検索の方法
③引用とは
④引用のルール
⑤参考文献リストの書き方
⑥アイデア出しの方法（マインドマップ作成）
⑦問いの設定

4，授業の狙い
１２／１５実施のアカデミックライティング講座のための事前の準備。

5，効果
いきなり、１５日を迎えるよりは理解がしやすかったのではないかと思う。

１２／１５ニューセンチュリーホールでの様子。





GRIT 政治経済としての取り組み

関西創価高校　地歴公民科　教諭　大井　宣弘

・本校の教育プログラム『学年模擬国連』と関連付けて、政治経済の授業を展開

本校の特色でもある、教育プログラム『学年模擬国連』の立ち上げから運営を 2 年間担当し、さらに充実した形で『学年模擬国連』ができないかと考えた。さらに充実のためには、生徒が担当国のことを、より深く知ることにより、より深く議論できるのではと考え、地歴公民科の教科会で検討し、高校 3 年次で履修する政治経済の授業を『GRIT 政治経済』と名打ち、以下のように授業展開した。その成果が功を奏し、2020 年度より『国際理解』という科目設定し、カリキュラム化することに成功した。さらなる充実した科目に発展できるようにしていきたいと考えている。

・1 学期・・・政治



世界各国の代表的な政治体制を学習したのち、担当国の政治体制リサーチを開始した。また、それぞれの国が抱える問題点を討議し、模造紙 1 枚にまとめ、ポスターセッションを実施した。聞いている生徒はメモを取り、地域共通の問題点を探る。評価は、教員と生徒がルーブリックに基づいて行った。

・2 学期・・・経済

経済の基礎知識（専門用語や経済の変容）を学んだ後、それぞれの担当国の経済状況、また今後の見通しを、リサーチ＆ディスカッションし、グーグルスライドにまとめ発表した。それぞれの担当国の経済状況や、今後の見通しを知り、大使としてどのような発言をすればよいかとの見通しがついたとの声が多かった。



・3 学期・・・GRIT 政治経済論文の提出



1 学期にリサーチした担当国の政治体制と問題点、2 学期にリサーチした経済状況と今後の見通しを、それぞれ 1500 字程度（合計 3000 字）、さらに GRIT の課題である学年模擬国連のテーマついて 2000 字程度を加え、それぞれを項目に分け、まとめ論文を作成した。ルーブリックに基づき評価したのち、その点数を 3 学期の成績とした。

成果と分析

1. 2018 年度卒業の海外大学進学者数　１０名（３月現在）

アメリカ創価大学　（ブリッジプログラム含む）

2. 2018 年度主な外部コンクール（全国大会）での活躍

日米露３国による核不拡散会議　参加（２０１８年　３月）

『「世界津波の日」高校サミット in 和歌山　参加(２０１８年　１０月)

第 9 回「ESD 国際交流プログラム」参加決定（全国８名中）

第 22 代「高校生平和」大阪代表に選出（全国 20 名中）

第 12 回全日本高校模擬国連大会出場

第 23 回全国中学・高校ディベート選手権　全国大会ベスト８

3. 英語外部検定成績

英語能力検定試験合格者数（単位：人）

２０１８年度	１級	準１級	２級	２級以上
1053 名中	6（0.57%）	39（3.7%）	320（30.4%）	365（34.7%）

高校44期　英語成果報告(最終)

2019/3/20 44期英語教科担当

１. CEFR/ TOEIC/ 英検　レベル別人数

CEFR	TOEIC	12月	英検	1年次3学期	2年次3学期	3年次3学期
C1(945～)	900-990	1	1級	0	2	4
B2 (785～)	800-899	5	準1級	5	11	23
	700-799	7				
B1 (550～)	600-699	14	2級	52	107	161
	500-599	33				
A2 (225～)	400-499	47	準2級	66	58	17
	300-399	68				
	200-299	51				
A1(120～)	100-199	2	3級以下	232	174	145
	10-99	0				
計		228		355	352	350

*英検の合格者数は、1次試験のみの合格者数も含む。

*2級以上の最終合格者数は、1級4＋準1級30＋2級158＝192名

２. SGH 英語到達目標　達成度

43期B1以上到達度	54%

○英検1級、準1級、2級の1次試験合格者もしくはTOEIC IPの
リスニングもしくはリーディングもしくはその両方で
275点以上の場合、CEFRのB1レベル以上とする
○この内、B2レベルは23名、C1レベルは4名となります。

３. アメリカ創価大学合格者　人数及びSATスコア

Early出願者	4	Early合格者	2
Regular出願者	8	Regular合格者	1
		Bridge合格者	7
		合格者　計	10

※各セクション200-800

	Reading & Writing	Math
800-700	0	8
699-600	3	3
599-500	5	1
499-400	4	0

3.1. アンケート結果（生徒アンケート・教員アンケートより）分析（抜粋）

１年間を通してのSGH活動に対するアンケートを全校生徒対象（高３・１２月、高１、２・２月）に行った。今年度は結果を掲載し、特筆すべき点を記載する。

問１：ＳＤＧｓに関してはどの学年も８０％以上の生徒が知っているという状況である。１年生は現在知っていると答えた生徒が９０％を初めて超えた。入学前では７８％が知らなかったが、ＧＲＩＴや授業など学校の学びの中でＳＤＧｓを理解している。特に地理の授業でそれぞれがグループワークに励んだことが大きいと思われる。１００％をめざし取り組んでいきたい。

問２～７：本校ＳＧＨのテーマである「環境」「開発」「人権」「平和」について関心を問うたが、基本的にはどの学年も７０％以上近くの生徒が関心をもっている。入学前の「あまり関心がない」「関心がない」という項目合わせると５０％を超えるものが多いのに対して、入学後は「関心がない」は軒並み５％以下である。関心をもつきっかけで最も多いのがGRITであり、学校の学びによって、関心を持たせることには成功している。しかし、「あまり関心がない」と合わせると、いまだ４分の１の生徒は関心がないという結果になった。したがって、この層が少しでも関心があるに変わるような授業・問いかけをさらに増やしていきたい。また本年度の模擬国連テーマであった「水問題」に対しては、３年生の関心は高い。

問８～９：国際的合意形成について、高校３年生の結果が高いのは、ＧＲＩＴ模擬国連のおかげだと推測される。

問１０～１１・１４：「（絶対に）留学したい」の割合が、入学前が５０％→高１　６９％→高２　７１％→高３　７８％と学びが深まるにつれて留学への希望が増えているという結果になっている。海外で活躍したいというアンケートでも高校３年生は６０％を超えているので、海外志向につながっている。これは、問１２で国際機関にかかわる仕事がしたいとの意識が（１年生の）入学前が２５％→１年３４％と増えている。元来入学前の２５％も高いのが本校の特色であるが、さらに入学後に減らすことなく、増やすことができた。

問１５～１７：さまざまな課題に対して、入学前から比べると関心が高まった生徒が多くなっている。高３は８０％程度が高まったとなっている。グローバルイシューにかかわりたくないという理由でもっとも多い項目が「自分が生きることで精いっぱいだから」とのことなので、その生きづらさをかかわりによって解消していきたい。しかし、関わりたいと思った理由の「他国で起こることは自分と関係がある」との項目が５０％を超えているので、本校のモットーである「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことをしない」との内容が生徒の中に浸透していると感じる。

問２０：奉仕の気持ちが高い。特に「ある」と答えた生徒が学年があがるにつれて増えていたのは特徴的である。

問２１・２４・２６・２７：どの能力の向上も３年生が高い。模擬国連や授業での経験が生きたのだと

感じる。

問２９～３３：ＧＲＩＴに積極的に取り組んだ生徒とプログラムの評価・触発を受けたかという問いの答えが８０％とほぼ同じような値を示している。相関性を分析したわけではないので、層が同じかはわからないが、積極的に取り組んだ生徒は触発を受け、ＧＲＩＴがよかったと評価しているのではないかと推測できる。今後、細かく分析をしていきたい。ほぼ消極的の層が少しでも積極的になるような内容を作成していきたい。

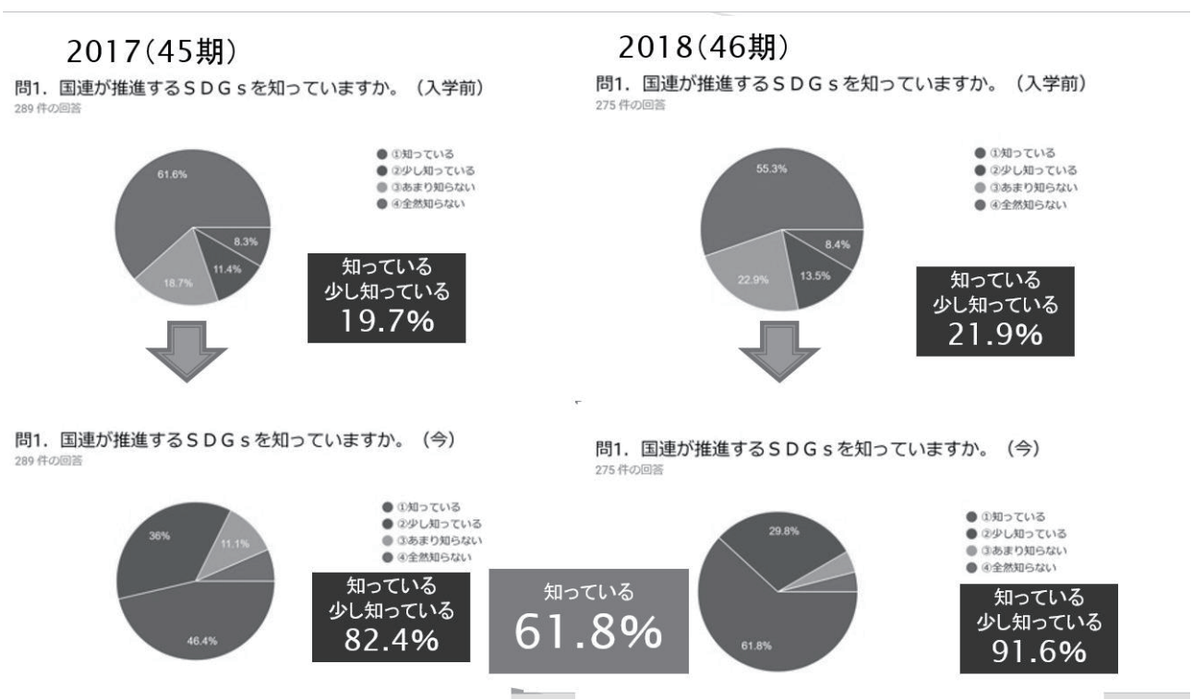
問３６：３年生の進路にSGH・GRITの影響が５０％以上あったということは高い値である。

問３９・４０:進路だけではなく、成長や考え方や行動に影響を与えたという声は大切にしていきたい。

3.2. ＳＧＨ最終報告会における分析スライド（抜粋）

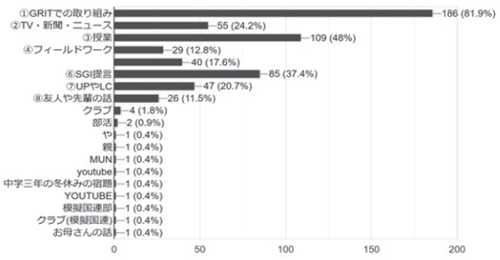




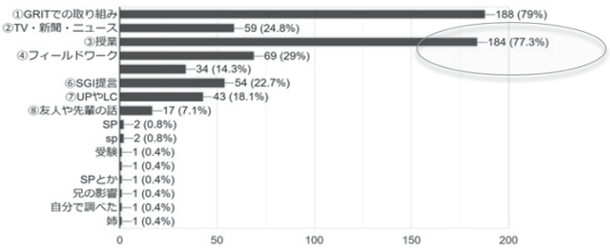


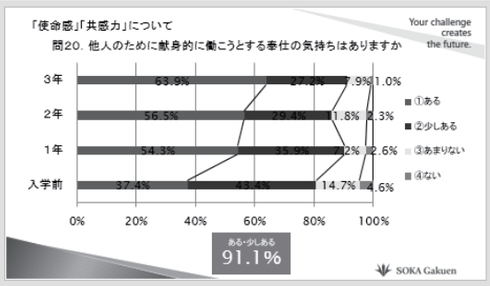
次のどのことから、国連が推進するSDGsを知りましたか。
（複数回答可）

2017

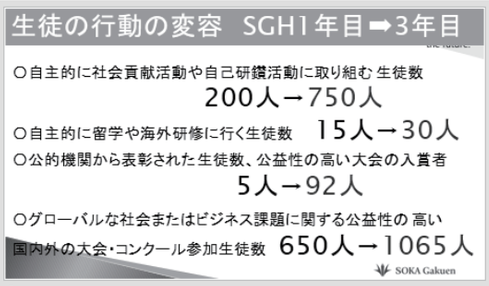


2018

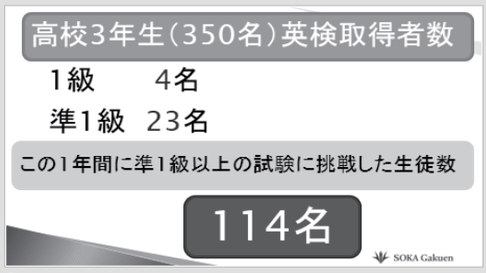




5



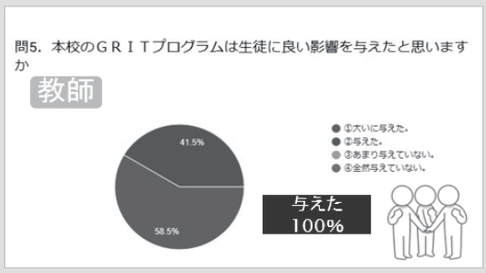
6



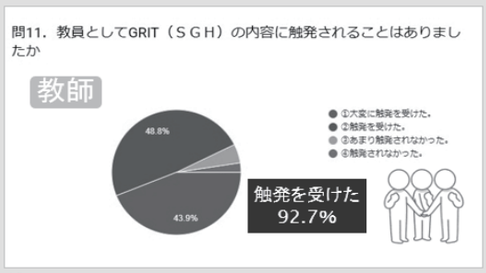
9



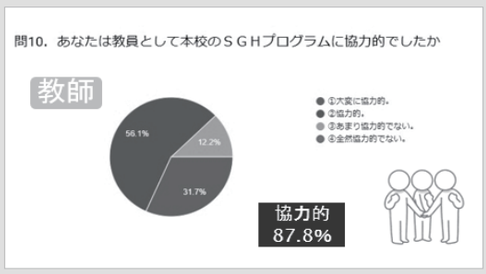
10



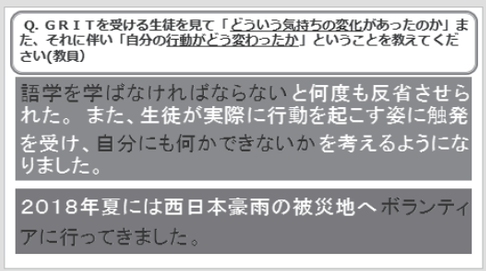
11



12



13



14

（別紙様式３）

平成３１年　3月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　東京都小平市たかの台２番１号
管理機関名　学校法人　創価学園
代表者名　　理事長　　原田　光治　　印

平成３０年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

平成３０年　４月２日　（契約締結日）～平成３１年　３月３１日

２　指定校名

学校名　　関西創価高等学校
学校長名　　杉本　規彦

３　研究開発名

TRY 人(じん)の郷・交野から
平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム

４　研究開発概要

関西創価高校がＳＧＨを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。Active Learning の土台の上に、全校生徒を対象とした「環境・開発・人権・平和」の 4 分野について学ぶ探究型総合学習 GRIT（Global Research and Inquiry Time)や Global Citizenship Seminar、希望者を対象とした知的好奇心を高揚させる高大連携プログラムの UP(University Partnership)Class、希望者から選抜された生徒がオールイングリッシュで徹底した探究を行う LC（Learning Cluster）で、確かな知識と広い教養の涵養を目指す「世界市民教育」の教育課程を高大連携して研究開発する。

５　管理機関の取組・支援実績

（１）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会の開催					○			○			○	

（２）実績の説明

○運営指導委員会を、朝野富三氏、梶田叡一氏、米田伸次氏ら三氏が出席し、3回開催した。1回目は8月22日に実施。2回目は11月の中間研究発表会終了後、3回目は2月の最終研究発表会終了後に開催。議事録を作成し、今後の研究開発についてご助言を頂いた。

○研究発表会ならびに運営指導委員会に、管理機関より、創価教育センター長、副センター長を派遣し、研究開発が適正に行われているか確認した。

○SGHに関わる経費について、管理機関より260万円の経費を計上し、研究開発が円滑に進むように支援を行った。それによりフィールドワークの生徒負担金軽減や外部講師・大学院ＴＡの費用を賄うことができた。（全校生徒対象に実施）

6　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施期間（平成２９年４月１日　～　平成３０年３月３１日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
GRIT 1	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
GRIT 2	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
GRIT 3	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
Global Citizenship Seminar			○	○		○	○					○
GRIT Field Work				○	○							○
University Partnership Class	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
Advanced English Class	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
Advanced Math Class	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
Learning Cluster	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
Field Work in Tokyo				○								
Field Work in America										○		
Active Learning	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
Global Camp			○			○						
Newspaper in Education	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔
Feel Japan Program	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔	⇔

（２）実績の説明

○GRIT（探究型総合学習、「環境・開発・人権・平和」について探究）については3年間で行うプログラムをさらに精査し、主体的で対話的な深い学びの中で、世界市民としての使命感・共感力・問題解決への創造力を培う学習内容へと発展させることができた。具体的には、1年生ではSDGsの内容を「地理」で、環境分野の「校内フィールドワーク」は「生物」の授業で行うことにより、より深い学びとなった。また、論理的思考を養ったり、言語技術的な内容を教えるための5行エッセイを「国語」と「英語」で同時に行

った。2 年生では、プレゼンテーションで必要な「いかに伝えるのか　どのように伝えるのか」という知識と技術を習得するための講義を実施。3 年生では「模擬国連」の内容を深めるためのリサーチの時間を GRIT の時間だけでなく、「政治・経済」の授業の中で、各自の担当国のリサーチする時間を確保し、政治や経済についてのプレゼン発表を行った。「数学」の授業では、データ分析やエビデンスを示すのに必要な数値を読み取る、統計学を用いた分析の力の育成を行った。「現代文」の授業においては、本校 SGH の根幹となる、創立者の平和提言を用いて、論説文の読解力と、表現力を育成する授業を行った。論文作成を踏まえ、アカデミックライティング講座の前には「現代文」の授業でも論文作成の授業を行った。昨年に引き続き、GRIT を深めるための教科横断の授業が大きく進んだ。学習評価においても、「政治・経済」の授業の中で、GRIT で各国大使としての視線で作成した論文を、ルーブリックを用いて生徒と教師で評価し、成績に反映した。そして作成した論文を基に、「英語」の授業では英語サマリーの作成を行い、その内容を成績として評価した。このように各教科の中で GRIT の取り組みを評価できたことで、GRIT に取り組む生徒の意識がさらに向上した。

○Global Citizenship Seminar として外部講師を招いての講演を 3 回行った。

○GRIT Field Work として 7 月に東京 10 名、8 月に広島 14 名、3 月に東北 12 名での Field Work を一般公募し実施した。特に「平和」をテーマに核廃絶について探究活動を行った広島 FW では、本校が所在する交野市の交野高校生徒会と協力して、市内各所で「核兵器禁止条約締結」に向けての署名活動を実施することができた。昨年黒田市長と語り合った「今後、交野市で行っている平和教育や核廃絶の取り組みについて、市内の中高が交流して平和学習、核廃絶署名などを推進していく」ことについては、本校の GRIT で行った「平和」「人権」のプログラムと実施方法を交野市内の中学校に共有することで実現できた。

○SOKA Progress Class については、University Partnership (通称 UP)Class を開設し、大学などから講師を招き地球的課題の基礎講座を開催した。Advanced English &Math Class は継続して実施。どの講座も生徒から高い評価を得た。

○Learning Cluster については、高校 2,3 年生より 22 名を選抜し、Field Work in Tokyo、Field Work in America を実施。年間を通して英語での探究が進み、高校生による平和への提言「Peace Proposal」を完成させた。生徒たちは「環境・開発・人権・平和」の四分野を SDGs に照らして徹底的に学んだ後、「世界人権宣言 70 周年」ということを踏まえ、「人権」に焦点を当て、「児童虐待」「LGBT」「女性のエンパワーメント」「難民」「核廃絶」の 5 つのトピックから研究を続けた。

○Active Learning については、校内で研究授業ウィークを 2 回開催し、お互いの授業内容の研鑽に努めた。現在、ほぼすべての授業で、座学のみでなく主体的で対話的な深い学びを意識した授業が展開されている。各教科においても、GRIT の内容を教科横断でさらに深めるための研究が進み、取り組みが大きく向上した。

○Newspaper in Education については、年間通して各クラスで取り組み、コンクールでも多くの入賞者が出た。

○Feel Japan Program については、ほぼ例年通りの計画で進んだ。

○その他の取り組みとしては、本校で進める GRIT の四分野の一つである「人権」について、多くの卒業生の弁護士を招き、現実社会を踏まえての「人権研修」を行った。

また、本校の SGH 運営指導委員でもある、梶田叡一氏を招き、講演会「真の国際性を育てるために」を全教職員で受講。「活力・積極性」「対話力」「語学力」「イノチとしての平等感」という 4 つのキーワードから理解を深めた。

○SGH 後のカリキュラムについては、新教育課程を見据えて、「新カリキュラム検討委員会」を発足させ、集中討議の職員会議を何度も開催し、全教員で「育てたい力」についての議論を重ねた。

7　目標の進捗状況、成果、評価

○SGH4 年目、SGHA を入れると 5 年目となり、ほとんどの教員が 3 年間での GRIT のカリキュラムの流れを認識・理解・経験することで、さらに精査が進んだ。流れとしては 1 年次は「グローバルイシューとの出会い」をテーマに、「環境」「開発」「人権」「平和」に関する知識のインプットとディスカッションを中心としたプログラムを、SDG s に照らして様々に行った。全生徒がタブレットを持ったことで、本校が NASA と共同で行う「アースカムプロジェクト」に全員が参加可能となり、タブレットから国際宇宙ステーションを遠隔操作して、宇宙から地球を撮影し調査する英語でのプログラムを全生徒が体験。宇宙から俯瞰的に地球を見つめる目線を持たせるとともに、自分たちの撮影した写真が「世界の学者の研究材料」となり、研究者としての実体験を積めた。また、GRIT の大きな柱である SDGs については、「地理」の教科の中に落とし込んだ。そのことで、SDG s の学びの深さを授業の成績として評価が可能となり、生徒たちの意識が向上した。その上で、例年秋に行っていた校外学習を SDGs フィールドワークに変更し、学びの内容別に 3 か所で実施。チームで別れて日本国内における SDGs の推進を行う行政や企業に調査に行き、その振り返りを授業で行ったり、お互いにプレゼン発表することで、身近なところにも、自分たちにできることがあることを学んだ。その結果、「国連が推進する SDGs を知っていますか？」の質問では「知っている」「少し知っている」が入学前は 21.9%だったものが、91.6%にまで向上した。2 年次は「グローバルイシューとの戦い」をテーマに、「環境・開発・人権・平和」の 4 分野からトピックをチームで選んで探究活動を行い、それぞれのチームが 6 月には大学教授に探究成果と提言を発表。大学院生によるブラッシュアップを受けて、全チームがパワーポイントを使って SDGs に照らし合わせたそれぞれの研究・提言を保護者会や各所で発表。3 月には自分たちの探究をポスターにまとめ、「学年ポスターセッション」を全学年 64 チームで開催。発表の対象として高校 1 年生を招待し、総勢 700 名を超える大規模なポスターセッションとなった。高校 2 年生にとっては、後輩である 1 年生に、1 年間の学びを自分の言葉で全員が発表する機会となり、1 年生にとっては、来年自分たちがあるべき学びの姿を確認することができ、質疑応答も活発に行えた。このポスターセッションは、教育関係者や一般の方々にも公開し、訪れた公立中学校の教員からは「生徒たちが生き生きと自分の言葉で発表する姿に感動した」「聞いている 1 年生の姿も素晴らしく、質疑応答が活発なことに驚いた。ぜひ自分たちの中学でも関西創価のシステムを取り入れたい！」との感想をいただき、関西創価の GRIT プログラムを共有することが決定した。今後も共同で様々な活動を進めることが確認された。3 年次は「世界を一つにする力」をテーマに、合意形成の力を培った。その集大成として、3 年生 350 名全員が、100 ヶ国を分担して取り組んだ模擬国連では「安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス」の議題で総会を 2 回開催。第 1 回総会では、高校 2 年生全員を

会場に招き、総会の模様を見学させるとともに、ロビー活動の際には2年生から3年生への質疑応答も可能とすることで、来年度に自分たちの行うプログラムのイメージを持たせることができ、来年担当する学年の教員団にも模擬国連の総会のイメージを持たせることが可能となり、3年次に行う模擬国連のプログラムへのスムーズな移行が実現している。第2回目の総会をSGH中間報告会の日に行うことで、関西創価の学びの成果を大きく教育関係者や行政にも公表している。SGH終了後も一般公開並びに他校との交流も検討しており、さらに発展させていきたい。本年度も、アメリカFWでは、代表生徒が採択された決議案を元国連事務次長のチョウドリ大使に直接提出。その模様は全校生徒にライブ中継され、チョウドリ大使からのアドバイスも全校生徒で共有された。今年はさらに、SGH委員会の集中討議の際に、1年次、2年次、3年次に行うGRITプログラムの内容や時期、反省点や引き継ぎ事項をグーグルドライブのチームドライブに各期（入学年）ごとにまとめ、全教員が昨年度のどの時期にどのようなプログラムを、どのような教材で行ったかが確認でき、反省点や改善点を共有しながらPDCAがスムーズに行える環境が整備された。高校3年生対象の、大学教員を招いての「アカデミック・ライティング講座」は継続して行ったが、その前に大学教員と国語科教員が連携を取りながら、「国語」の授業でも事前学習を行い、さらに内容の濃いものとなった。個人のGRITの学びの集大成として、全員が模擬国連の中で各国大使としての目線で、「安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス」について探究と提言をGRIT論文としてまとめ、その内容は「政治・経済」の授業の中で成績として評価することができた。完成したGRIT論文を基に、「英語」の授業の中で「英語サマリー」を作成させ、その内容を授業の成績として評価することで、模擬国連の総会終了後の生徒の集中力の持続に成功。ほぼ100%の生徒が論文・英語サマリー共に提出することができ、成果物の内容も大きく向上した。

○GRITを全校生徒対象に全教員で取り組んだため、生徒も教師もGRITで行われているActive Learningの様々な手法や効果を熟知している。その為、全教科に渡ってストレスなくActive Learningの様々な手法が活用され、主体的で対話的な深い学びがほぼすべての教科・授業で行われた。（95.2%の教員が実施）また、GRITで学ぶ内容やGRITを通して育てたい人間像を全教員が把握しているため、各教科の中でその力を育むための教科横断が進んでいると考えられる。

○全校生徒にタブレットが貸与されて2年目となり、ICTを活用したActive Learningや協働作業が飛躍的に進んだ。「本校がＳＧＨとなって、生徒のICTの取り組みが進んだと思いますか」の質問に、全教員の97.6%の教員が「進んだ」と答えた。全生徒が使うICT使用に関するルール作りに関しては、教師が決めるのではなく、生徒たちが「タブレット審議会」を立ち上げ、自らガイドライン作成に立ち上がり、「やっていいこと」「いけないこと」を生徒のリーダーで協議して運営している。校内の各所で合意形成の力を発揮し、「問題解決への創造力」を発揮した。

○高3アンケートでは「海外で通用する語学力は必要であると思いますか。」の質問で、「必要」が91.2%となり、「どのような場面で、海外で通用する語学力は必要であると感じるようになりましたか」の質問に、複数回答可ではあったが、59.9%の生徒が「授業」と答え第一位となった。このことからGRITプログラムだけでなく、授業の充実が生徒の語学習意欲を大きく向上させたと考えられる。エビデンスとしては、3年生においては350名中114名の生徒が、この1年間で英検準一級以上の試験に挑戦した。3人に1人が準一

級以上のハイレベルな語学習得に挑戦したことは、気持ちの変容が行動の変容に移ったと考えられる。「他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちはありますか」が 91.1%「身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちはありますか」が 81.2%と高い数字を示した。「ディスカッション能力(討議力・対話力)は向上しましたか」の質問に 75.7%の生徒が「向上した」と答え、「ディスカッション能力(討議力・対話力)が向上したことで、日常生活で解決できたことはありますか」の質問に「喧嘩腰の会話がほぼなくなった」「寮生活での揉め事も相手のことを考えて冷静に判断することで解決できた」「論理的に説明出来るようになって、相手を説得することができた」「語彙が増えたことや発想や着眼点の向上があり、友人との会話も楽しくなった」など、日常の生活の中で GRIT を通じての学びの力を実感している。「世界の平和に貢献したいと思いますか」の質問には、81.6%の生徒が「貢献したい」と答え、「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」という質問には、「世界でどれほどの人が紛争や差別で苦しんでいるかを知り、何ができるかを考えるようになった」「とにかく勉強をして、力をつける。語学の勉強！政治・経済の勉強！」などの答えが見られた。「大学を選ぶときに国際化に重点を置く大学への進学を希望しますか」の質問に、73.8%の生徒が「希望する」と答え、進路にも大きな影響を与えた。世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」につながる、グローバルリーダーとしての心を育んだと考えられる。

○生徒の意識の変容は各種のコンクールや大会にも表れた。Newspaper in Education では大阪奨励賞、JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストでは特別学校賞を受賞するなど、多くの生徒が自主的に参加活躍し、多数の受賞者を輩出した。

○米国ミドルベリー大学院モントレー校大量破壊兵器不拡散研究所での「日米露の高校生による核不拡散教育会議」（CIF）に 2 名が参加、高い評価を受けた。

○Learning Cluster については、Field Work in America において元国連事務次長のチョウドリ大使とのセッションや、核時代平和財団のデビッド・クリーガー博士とのセッション、南カルフォルニア大学や UCLA での教授とのセッション、シュタイナー教育のウォルドルフ学校の生徒との交流など充実したものとなった。ウォルドルフ学校において、関西創価高校とウォルドルフ学校の生徒で、初の国際フォーラム「Discussion on Global Issues」を開催した。高校生による平和への提言「Peace Proposal」については、本年度は学びをまとめて論文として発表するのでではなく、プロジェクトの作成を掲げ、高校生としてどのようなアクティビティや学びを行えば、実感としてグローバルイシューを体感できるのかを考え、生徒たちは様々なプログラムを開発した。その内容は GRIT プログラムとしても採用を検討している。

○University Partnership Class を受講した生徒は、各界で活躍する 11 名の様々な分野の講師から、1 年間にわたり講義を受け、主体的で対話的な深い学びとなった。

○「世界津波の日」高校サミット in 沖縄に 3 名参加。日本を含む世界 49 カ国、約 400 名の生徒とともに調査を行い、自然災害に対する知識を深め、アクションプランのプレゼンテーションを行った。

○トビタテ！留学 JAPAN に 2 名が選出され韓国のソウルとオーストラリアのパースへ留学した。

○世界に興味を持ち、多くの生徒が海外に旅立った。世界大会ならびにＳＧＨとしての

フィールドワークで 13 名、個人留学で 19 名、合計 32 名がこの 1 年間で海外に実際に足を運び探究活動を行った。

○GRIT の取り組みについて、教員に対するアンケートで「本校のＧＲＩＴプログラムは、国連が提起する地球的課題の探究に取り組む内容になっていますか」の問いは、昨年に引き続き 100%の教員が「よくできている」「たいへんによくできている」と答えた。「SGH の諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導法・内容に影響を与えましたか」の問いには、「影響を与えた」と答える教員が、昨年の 97%から、71.4%と下がった。この数字はマイナス的な要素というよりは、新たな授業の研究開発というよりも SGH に影響を受けた指導法が定着し、安定して行われていると考えられる。アンケートでは「生徒だけでなく、教員が海外で自由に研修を受けたり、ボランティアに参加できる機会がほしい」「世界市民教育のさらなる深化と洗練化を学校全体で取り組むことが必要」など、教師自身の成長や SGH 後を見据えた建設的な声がたくさん聞かれた。

○運営指導委員会を 3 回開催し、運営指導委員からは「関西創価としての取り組みとしては大きく成功している。今後はこのプログラムをどれだけ多くの学校や教育機関に普及させ、実行していくのかが今後の課題」「多くの生徒の心の変容や、行動の変容は確認できたが、100%の生徒が変わったわけではない。変われない生徒は、なぜ変わろうとしないのかという研究が必要」とのお言葉をいただいた。

○昨年度よりユネスコスクールにも認定され、ユネスコスクールとしての取り組みも開始している。ユネスコスクールのネットワークを活かして、本校の取り組みを地域や世界へ広げていきたい。

○高校 3 年生の模擬国連では、大学院生ＴＡによるアドバイスや JICA 関西によるアドバイスなど、国内にいても世界を感じる取り組みができた。

＜添付資料＞目標設定シート

８　次年度以降の課題及び改善点

○GRIT 授業の満足度は上がっているが、全員を対象としているため、さらに満足度を上げる必要がある。運営指導委員の「多くの生徒の心の変容や、行動の変容は確認できたが、100%の生徒が変わったわけではない。変われない生徒は、なぜ変わろうとしないのかという研究が必要」との言葉を受けて、「グローバルイシュー(世界で起こっている様々な問題)に対する関心がある」と答えた生徒の中で、関心はあるが、「グローバルイシューに自分が関わりたくないと思った理由」について聞いてみると、第一位が「自分が生きることで精一杯だから」で 20%、第二位が「世界平和なんて大きすぎるから」で 18%、「自分には苦しむ人を救えないから」16%となった。意外なことに「自分には関係ないから」は 4%、「自分や家族に危険が及ぶから」は 2%となり、行動に対してネガティブであっても、自分勝手や自己中心的な考えがそうさせているのではなく、ネガティブな生徒の中に、日常で精一杯になっている様子や、自分の力を信じきれない自己肯定感の不足が見受けられた。あくまでも 100%の生徒が GRIT を学ぶことに意義を感じ、積極的に取り組めるよう、内容の精査と時間配分の工夫をさらに行う。生徒の変容にこだわり、変容の要因となる心の変化にまでこだわるプログラムとしたい。

○SGH プログラムを柱として、生徒が持った興味・関心をさらに深めるために、先生

方の協力で、各教科においての GRIT 内容を補足はもちろん、持たせたい力の育成に向けた研究開発が進んだ。学びを深めるための内容や時期を精査し GRIT の教科横断がカリキュラムとして大きく進んだ。

〇SGH 後を見据えて、SGH で完成させた GRIT プログラムの科目化と、生徒たち自身が時にはクリティカルに考え、時にはロジカルに考えてまとめ、発表できるプログラムとして、「TOK」（知の理論）などの科目化、言語技術的要素の習得と学術的文章を書く力を育成する「アカデミック・ライティング」の科目化など、GRIT を通して「育てたい人物像」である「世界の平和に貢献する、使命感・共感力・問題解決の創造力を持った人物」の育成カリキュラムの完成に着手したい。

〇本校生徒はクラブ活動の参加率が 90％であり、学校の諸行事などの活動も盛んなため、活動時間の制約があるのも課題である。生徒の負担を少なく、なおかつ多くの生徒が積極的に活動できる抜本的な時間割、授業科目のカリキュラム設定に全教員で取り組む。

〇学びの部分での探究や知識は深まったが、実際に地域に参加して取り組むプログラムや、社会で体験するプログラムが弱いとの指摘があった。今年は「核兵器禁止条約の締結」を目指す署名活動の取り組みを、地元の交野高校生徒会を行うことができた。また、本校の GRIT プログラムを交野市内の中学校にも共有し、共同で活動することも計画を始めている。交野市長や教育委員会も巻き込んだ、生徒の交流を進め、ユネスコスクールとしてのネットワークも活用し、地域から世界へ発信するプログラムを開発する。

【担当者】

担当課	経理募金課	ＴＥＬ	072-891-0011(代)
氏　名	坂井俊仁	ＦＡＸ	072-891-0015
職　名	主任	e-mail	sakai@soka.ed.jp

関西創価高校SGH GRIT全校アンケート結果

問1. 国連が推進するＳＤＧｓを知っていますか。

	①知っている	②少し知っている	③あまり知らない	④全然知らない
(入学前)1年	8.4%	13.5%	22.9%	55.3%
(現在)1年	61.8%	29.8%	4.4%	4.0%
2年	70.8%	15.9%	9.2%	4.1%
3年	72.3%	18.8%	5.0%	4.0%

問1a. 次のどのことから、国連が推進するＳＤＧｓを知りましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
85.0%	23.8%	56.2%	18.5%	17.9%
⑥創立者の提言	⑦UP・LC	⑧友人や先輩の話		
27.9%	15.2%	8.5%		

問2. 世界で起こっている環境問題について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	14.2%	38.9%	32.0%	14.9%
(現在)1年	35.6%	43.6%	16.7%	4.0%
2年	42.4%	32.9%	19.3%	5.4%
3年	43.1%	33.7%	19.3%	4.0%

問2a. 次のどのことから、世界で起こっている環境問題について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
65.0%	45.9%	54.8%	14.6%	1.2%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
15.3%	8.4%			

問3. 世界で起こっている開発の現状や問題点について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	13.8%	31.3%	38.9%	16.0%
(現在)1年	33.8%	37.1%	24.7%	4.4%
2年	37.3%	26.8%	29.8%	6.1%
3年	36.6%	30.7%	29.2%	3.5%

問3a. 次のどのことから、世界の開発の現状や問題点について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
64.6%	45.2%	54.6%	15.4%	1.7%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
17.3%	9.0%			

問4. 世界で起こっている人権問題について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	16.0%	33.8%	34.9%	15.3%
(現在)1年	34.5%	36.4%	25.1%	4.0%
2年	39.0%	27.1%	29.5%	4.4%
3年	41.1%	33.2%	22.3%	3.5%

問4a. 世界で起こっている人権問題について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
61.1%	49.6%	52.6%	11.5%	0.4%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
15.2%	10.7%			

問5. 世界で起こっている紛争や平和に向けての活動について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	25.1%	33.8%	30.5%	10.5%
(現在)1年	43.6%	33.1%	20.4%	2.9%
2年	48.8%	24.1%	23.1%	4.1%
3年	46.5%	28.7%	22.8%	2.0%

問5a. 次のどのことから、世界で起こっている紛争や平和への活動について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
58.0%	55.7%	54.3%	14.9%	0.7%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
15.1%	10.4%			

問6. 世界の水事情について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	12.4%	25.5%	46.5%	15.6%
(現在)1年	31.6%	32.7%	30.5%	5.1%
2年	27.1%	27.5%	39.0%	6.4%
3年	44.1%	25.7%	25.7%	4.5%

問6a. 次のどのことから、世界の水問題について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
64.1%	42.2%	47.0%	11.7%	1.5%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
14.2%	8.1%			

問7. 核兵器廃絶について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	27.6%	33.5%	29.1%	9.8%
(現在)1年	42.9%	32.7%	20.4%	4.0%
2年	47.5%	25.4%	22.4%	4.7%
3年	47.5%	23.8%	25.7%	3.0%

問7a. 次のどのことから、核兵器廃絶について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
53.4%	53.4%	52.4%	13.8%	1.1%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
14.8%	12.9%			

問8. 国際的な合意形成の方法について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	6.9%	9.5%	47.3%	36.4%
(現在)1年	10.2%	21.1%	51.3%	17.5%
2年	17.3%	18.6%	49.8%	14.2%
3年	25.7%	22.8%	41.6%	9.9%

問9. 国際的な合意形成の難しさを認識していますか。

	①認識している	②少し認識している	③あまり認識していない	④全く認識していない
(入学前)1年	11.6%	17.5%	37.8%	33.1%
(現在)1年	22.2%	20.7%	38.5%	18.5%
2年	28.1%	15.3%	42.0%	14.6%
3年	40.1%	22.3%	31.7%	5.9%

問9a. 国際的な合意形成を成功させるには、どのような能力が必要と感じましたか。（３つまで複数回答可）

①語学力	②異文化理解力	③リーダーシップ	④使命感	⑤共感力
54.8%	57.8%	16.9%	14.8%	2.4%
⑥ディベート力	⑦誠実な姿勢	⑧幅広い知識	⑨したたかさ	
10.5%	38.7%	26.6%	0.3%	

問10. 将来留学したいと思っていますか。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	20.4%	33.5%	27.6%	18.5%
(現在)1年	28.0%	41.1%	20.7%	10.2%
2年	36.3%	35.9%	16.3%	11.5%
3年	34.2%	44.1%	12.4%	9.4%

問11. 将来海外で活躍したいと思いますか。。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	16.4%	36.7%	29.1%	17.8%
(現在)1年	22.2%	41.1%	26.2%	10.5%
2年	22.4%	35.6%	31.9%	10.2%
3年	20.8%	43.1%	26.2%	9.9%

問11a. 将来海外でどのような立場で活躍したいと思いますか。（複数回答可）

①国連職員・国際機関	②NPOやNGO団体	③グローバル企業	④医療関係	⑤教育関係
10.1%	8.9%	21.1%	12.9%	19.8%
⑥科学者・研究者	⑦企業・実業家			
5.5%	9.3%			

問12. 将来、国際機関（UNDP、国連他）に関わる仕事がしたいと思いますか。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	6.2%	19.3%	46.5%	28.0%
(現在)1年	7.6%	27.3%	44.7%	20.4%
2年	7.1%	20.7%	44.4%	27.8%
3年	6.4%	21.8%	45.0%	26.7%

問13. 世界の平和に貢献したいと思いますか。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	30.2%	50.2%	14.5%	5.1%
(現在)1年	41.8%	44.0%	10.5%	3.6%
2年	44.1%	37.6%	14.6%	3.7%
3年	45.0%	36.6%	17.3%	1.0%

問13a. 次のどのことから、世界の平和に貢献したいと思いましたか。（複数回答可）

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾘﾝｸﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
43.6%	52.0%	49.5%	15.4%	1.7%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
14.8%	14.6%			

問14. 海外で通用する語学力は必要であると思いますか。

	①絶対に必要だと思う	②必要だと思う	③あまり必要ではないと思う	④必要ではない
(入学前)1年	46.2%	38.9%	10.5%	4.4%
(現在)1年	61.1%	26.9%	9.1%	2.9%
2年	58.6%	30.8%	8.1%	2.4%
3年	62.9%	28.2%	7.4%	1.5%

問14a. 次のどれから、海外で通用する語学力は必要であると感じるようになりましたか。(複数回答可)

①フィールドワーク	②Global Camp	③海外の方の講演	④海外の方と話して	⑤授業
25.5%	36.2%	27.4%	41.6%	55.2%
⑥友人や先輩の話	⑦UP・LC			
26.5%	12.5%			

問15. 世界で起こるニュースに対する関心は高まりましたか。

	①関心が高まった	②少し高まった	③あまり高まらなかった	④全然高まらなかった
(入学前)1年	15.6%	32.4%	41.5%	10.5%
(現在)1年	38.2%	40.4%	17.5%	4.0%
2年	39.3%	33.9%	22.0%	4.7%
3年	40.6%	34.2%	20.8%	4.5%

問15a. 次のどのことから、世界で起こるニュースに対する関心は高まりましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
49.6%	64.8%	46.1%	15.6%	25.6%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
14.4%	10.1%			

問16. グローバルイシューに対する関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	14.9%	27.6%	40.4%	17.1%
(現在)1年	28.4%	37.8%	26.2%	7.6%
2年	32.9%	33.9%	29.2%	4.1%
3年	37.1%	31.7%	27.2%	4.0%

問17. グローバルイシューに自分が関わりたいと思っていましたか。

	①絶対に関わりたい	②関わりたい	③あまり関わりたくない	④関わりたくない
(入学前)1年	8.0%	24.7%	46.5%	20.7%
(現在)1年	13.1%	39.6%	38.2%	9.1%
2年	17.8%	51.8%	28.9%	3.6%
3年	20.9%	54.7%	19.4%	2.2%

問17a. グローバルイシューに自分が関わりたいと思った理由は何ですか。(複数回答可)

①他国で起こることは自分と関係があると感じた	②苦しむ人を救いたい	③世界平和に貢献したい	④自分の可能性を試したい
58.7%	64.9%	63.3%	23.8%

問17b. グローバルイシューに自分が関わりたくないと思った理由は何ですか。

①他国で起こることだから	②自分には苦しむ人を救えないから	③世界平和なんて大きすぎるから	④自分や家族に危険が及ぶかもしれないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
7.1%	13.8%	15.6%	10.3%	25.0%
⑥自分には関係ないから	⑦自分の利益を優先したいから			
2.2%	4.9%			

問18. 日本や世界の歴史に関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	24.7%	28.4%	34.5%	12.4%
(現在)1年	33.8%	31.3%	27.3%	7.6%
2年	39.7%	30.8%	24.4%	5.1%
3年	36.1%	33.7%	24.8%	5.4%

問19. 身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちはありましたか。

	①ある	②少しある	③あまりない	④ない
(入学前)1年	16.4%	40.7%	34.9%	8.0%
(現在)1年	25.8%	46.9%	23.3%	4.0%
2年	23.1%	43.4%	27.5%	6.1%
3年	34.2%	47.0%	16.8%	2.0%

問19a. 身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちを持った理由は何ですか。(複数回答可)

①身近な問題が世界につながると感じたから	②まず行動することが大事だと思うから	③さまざまな体験をしたから（失敗や成功）	④人は助け合うことが大切と感じたから
53.0%	61.4%	33.8%	51.1%

問19b. 身の回りで起こる問題に自分が関わりたくないと思った理由は何ですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分には苦しむ人を救えないから	③忙しいから	④自分に被害がが及ぶかもしれないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
18.9%	13.7%	9.4%	8.0%	19.8%
⑥自分には関係ないから	⑦自分の利益を優先したいから			
6.6%	9.0%			

問20. 他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちはありますか。

	①ある	②少しある	③あまりない	④ない
(入学前)1年	32.4%	43.3%	20.4%	4.0%
(現在)1年	49.5%	37.5%	11.3%	1.8%
2年	54.2%	30.8%	12.5%	2.4%
3年	63.9%	27.2%	7.9%	1.0%

問20a. 他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちを持った理由は何ですか。(複数回答可)

①人に支えてもらったことがあるから	②人は助け合うことが大切と感じたから	③心を合わせることが大切だから	④クラブや諸活動
62.8%	62.8%	33.2%	39.6%

問21. ディスカッション能力(対話力)は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	13.5%	50.2%	29.5%	6.9%
2年	15.6%	45.1%	28.8%	10.5%
3年	27.2%	48.5%	20.3%	4.0%

問21a. 次のどの場面で、ディスカッション能力(討議力・対話力)が向上したと感じますか。(複数回答可

①ＧＲＩＴ	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UP・LC
62.3%	47.5%	52.7%	47.3%	9.7%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
36.9%	11.6%			

問21b. ディスカッション能力(討議力・対話力)が向上した理由は何ですか？(複数回答可)

①相手の話を聞くようになった（受容）	②知識や語彙（ごい）が増えた（知性）	③相手の立場に立つようになった（共感力）	④たくさんの人と話す機会が増えた（経験）	⑤自分の生き方が前向きになった（使命感）
39.4%	27.7%	31.0%	41.7%	17.1%
⑥感情をコントロールできるようになった	⑦発想力が豊かになった（創造力）			
13.1%	21.9%			

問22. 英語の全般的な能力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	14.5%	49.5%	29.1%	6.9%
2年	14.9%	39.7%	32.5%	12.9%
3年	23.3%	46.5%	23.8%	6.4%

問23. 語学習得に挑戦したいという意欲は向上しましたか

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	32.7%	41.8%	19.6%	5.8%
2年	29.2%	40.3%	24.1%	6.4%
3年	39.1%	41.1%	13.9%	5.9%

問23a. 次のどの場面で、語学習得に挑戦したいという意欲は向上しましたか。(複数回答可)

①フィールドワーク	②Global Camp	③海外の方の講演	④海外の方と話して	⑤授業
22.0%	37.9%	23.4%	37.2%	56.8%
⑥友人や先輩の話	⑦UP・LC			
23.8%	12.9%			

問24. プレゼンテーション能力について(発表する表現力)は向上しましたか

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	12.7%	52.4%	30.9%	4.0%
2年	19.7%	40.0%	31.9%	8.5%
3年	26.7%	45.5%	22.8%	5.0%

問24a. 次のどのような場面で、プレゼンテーション能力(発表する表現力)が向上したと感じますか。(複数回答可)

①GRIT	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UPやLC
70.1%	30.9%	57.9%	20.0%	9.2%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
10.0%	12.0%			

問25. ＩＣＴ（タブレット、PCなど）の活用力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	33.8%	44.4%	17.8%	4.0%
2年	33.2%	36.3%	23.4%	7.1%
3年	34.7%	42.6%	16.3%	6.4%

問25a. 次のどのような場面で、ICT（タブレット、PCなど）の活用力が向上した理由は何ですか。(複数回答可)

①GRIT	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UPやLC
60.2%	34.0%	71.2%	25.5%	11.5%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
6.9%	10.9%			

問26. 自分と意見の違う人の話や考え方を認める力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	26.2%	57.8%	13.1%	2.9%
2年	28.1%	47.1%	19.3%	5.4%
3年	38.6%	46.0%	11.9%	3.5%

問26a. 自分と意見の違う人の話や考え方を認める力が向上した理由は何ですか。(複数回答可)

①相手に対する共感力が増したから	②多様性を認める心が芽生えたから	③話を聞くことの大切さを知ったから	④答えは一つではないから	⑤さまざまな体験をしたから(失敗や成功)
53.2%	53.7%	52.2%	57.1%	37.8%
⑥協調性の必要性を学んだから				
35.9%				

問27. グループで活動するときにグループをまとめ課題を進める力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	13.1%	53.8%	28.0%	5.1%
2年	15.3%	42.4%	34.9%	7.5%
3年	23.8%	48.5%	23.8%	4.0%

問27a. 次のどのような場面で、グループをまとめ課題を進める力が向上したと感じましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UP・LC
68.4%	41.6%	59.2%	34.2%	7.8%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
11.8%	11.2%			

問28. 何か困難なことにぶつかったときに解決方法を探そうとする力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	25.8%	56.0%	14.2%	4.0%
2年	25.1%	45.4%	24.1%	5.4%
3年	37.6%	42.6%	16.8%	3.0%

問28a. 何か困難なことにぶつかったときに解決方法を探そうとする力が向上した理由は何ですか。(複数回答可)

①さまざまな体験をしたから(失敗や成功)	②答えは一つではないから	③協力すれば道が開けることを知ったから	④先輩や仲間の姿を見て	⑤困難を乗り越えた時に大きな結果が出ると知った
69.6%	31.8%	39.2%	41.7%	42.5%
⑥努力と信念の大切さを知った				
42.0%				

問29. あなたはGRITに積極的に取り組みましたか

	①積極的	②ほぼ積極的	③ほぼ消極的	④消極的
1年	21.8%	56.0%	20.0%	2.2%
2年	27.5%	50.2%	17.6%	4.7%
3年	33.2%	49.0%	15.3%	2.5%

問30. GRITに取り組んだあなたのクラスを評価してください

	①積極的	②ほぼ積極的	③ほぼ消極的	④消極的
1年	20.0%	63.3%	14.9%	1.8%
2年	34.9%	48.5%	13.6%	3.1%
3年	36.1%	52.5%	8.9%	2.5%

問31. GRITのプログラムを全体で評価してください

	①大変によかった	②よかった	③よくなかった	④まったくよくなかった
1年	22.9%	64.0%	10.9%	2.2%
2年	22.0%	59.3%	14.6%	4.1%
3年	26.2%	56.4%	13.4%	4.0%

問32. GRITの内容に触発されることはありましたか

	①大変にあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	22.9%	55.6%	17.5%	4.0%
2年	30.8%	45.1%	17.3%	6.8%
3年	33.2%	47.5%	14.4%	5.0%

問33. GRITでの友人の意見や姿に触発されることはありましたか

	①大変にあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	24.4%	52.7%	17.5%	5.5%
2年	32.5%	45.4%	16.9%	5.1%
3年	43.6%	40.6%	10.9%	5.0%

問34. 今までのグローバルシチズンシップセミナーの内容に触発されることはありましたか

	①大変にあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	20.0%	45.5%	26.5%	8.0%
2年	30.2%	41.4%	20.7%	7.8%
3年	34.2%	39.1%	20.8%	5.9%

問35. 今年度のグローバルシチズンシップセミナーの内容はよかったですか

	①大変によかった	②よかった	③よくなかった	④まったくよくなかった
1年	22.9%	57.1%	14.5%	5.5%
2年	32.2%	49.5%	14.2%	4.1%
3年	33.7%	53.5%	8.9%	4.0%

問36. GRITや本校のSGHの取り組みは、あなたの進路に影響があったと思いますか。

	①大いにあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	18.2%	41.8%	28.7%	11.3%
2年	19.7%	30.8%	32.5%	16.9%
3年	21.8%	32.2%	31.2%	14.9%

問37. 大学を選ぶときに国際化に重点を置く大学への進学を希望します（しました）か

	①強く希望する	②希望する	③あまり希望しない	④希望しない
1年	41.8%	30.9%	20.0%	7.3%
2年	34.2%	32.2%	18.6%	14.9%
3年	41.6%	32.2%	11.9%	14.4%

問38. 海外大学（ＳＵＡ含む）への進学、海外大学院(大学卒業後)への進学を希望しますか

	①強く希望する	②希望する	③あまり希望しない	④希望しない
1年	8.7%	13.1%	42.9%	35.3%
2年	9.5%	10.5%	29.5%	50.5%
3年	10.4%	16.3%	25.2%	48.0%

問39. GRITや本校のSGHの取り組みを通して、成長できたと思いますか

	①大いにできた	②できた	③あまりできなかった	④まったくできなかった
1年	23.3%	62.9%	10.5%	3.3%
2年	25.8%	50.5%	15.6%	8.1%
3年	32.7%	48.0%	12.4%	6.9%

問40. GRITや本校のSGHの取り組みはあなたの考え方や行動に影響をあたえましたか

	①大いにあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	21.8%	56.4%	17.5%	4.4%
2年	27.8%	42.7%	20.7%	8.8%
3年	35.6%	43.6%	13.4%	7.4%

問41. 今年の創立者の平和提言は読みましたか

	①読んだ	②少し読んだ	③これから読む	④読まない
1年	23.3%	46.2%	22.5%	8.0%
2年	19.7%	39.0%	29.2%	12.2%
3年	35.6%	30.7%	19.3%	14.4%

問42. あなたの取得している英語技能検定は何級ですか

	①準1級以上	②2級	③準2級	④３級以下	⑤もっていない
1年	1.1%	12.7%	46.2%	33.1%	6.9%
2年	3.4%	36.6%	29.2%	21.7%	9.2%
3年	7.9%	44.6%	20.3%	17.3%	9.9%

問43. 入学してから今までに何回海外に渡航しましたか

	①0回	②1回	③2回	④3回	⑤4回以上
1年	89.1%	6.9%	2.9%	0.4%	0.7%
2年	79.0%	12.2%	5.1%	1.7%	2.0%
3年	78.2%	16.3%	2.0%	2.0%	1.5%

問44. ＧＲＩＴで培った力は何ですか。（複数回答可）

①リサーチ能力	②発表力	③交渉力	④仲間を思いやる気持ち	⑤行動力
64.2%	58.5%	25.1%	33.0%	44.8%
⑥真剣さ・情熱	⑦根性	⑧世界を俯瞰する力	⑨リーダーシップ	⑩使命感
31.0%	23.4%	18.1%	19.0%	29.3%
⑪共感力	⑫問題解決への創造力	⑬論理的思考	⑭ｸﾘﾃｨｶﾙｼﾝｷﾝｸﾞ	
29.8%	38.5%	29.4%	18.9%	

生徒アンケート自由記述分（抜粋）

◯環境問題について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・フードロスを学び、「私たちが廃棄する食糧によって地球、また他国の人に多大な影響を及ぼしている」とわかり、気を付けるようになった。

・水の大切さを知り、こんなに自由に水が使えてるのは当たり前ではないと改めて思い、水の出しっぱなしを無くそうと思った。

・GRIT の授業で僕がいままで知らなかった世界の諸問題について学び、調べ、問題意識が向上しました。そして学んだことを親に話して教えることができました。

・GRIT や UP を受ける中で問題の大きさを実感した。どうにかしないといけないとより思うようになった。安すぎるものを買うのをやめた。

◯開発について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・自分が恵まれた環境にいることに気づき、感謝できるようになった。

・学年模擬国連を通して他国の利益も考えて行動することを学びました。

・LC で行かせてもらった東京 FW で、紛争地に住む、義足の少女が「勉強のこと嫌いな人なんていませんよね」と微笑む姿を見て、こんなにも恵まれた環境に居させてもらえる自分が勉強しないでどうする、と思い、将来こういった生まれた地域で将来の幅が決められてしまわない世界を作りたいと思った。だからその力をつけるべく、勉強だけでなくいろんなことを身につけるため、様々なことに挑戦出来るようになった

・今までは、なんでゴミを、沢山そのままにしているのかと、おもっていましたが、発展途上国は先進国のまねをしてしまっているのだな、と思うようになりました。

◯人権問題について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・小さな子どもたちが学校にいかず働いていることを知って、将来そうゆう現状を無くすためにも頑張って勉強に取り組もうと思いました。

・「もし、自分にこのようなことが将来起きたら」という不安や危機感、また児童労働や難民問題、少数民族の迫害などを知り、こういうものがずっと続いてはおかしいと思った。性差別的、人種差別的な言動や人を馬鹿にする言動をすまいと思った。

・出身県とか方言の話題で不快な思いをさせないように気をつけている。

・色々な人権に関しての動画を見るようになった

・身近に人権問題(男女の問題など)を感じるようになった。他の性の人を尊重するようになった。

◯紛争・平和について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・自分には関係ないと思えなくなった

・核兵器はいじめと同じ原理であるという話を聞いて、自分が何気なく行った行動や、考えなしに人を傷つける行動は、自分にとってはなんでもない事でも、相手にとっては命を奪われるのと同じ苦しみであること、また相手の家族も同じ苦しみを感じるということを理解した。どうすれば世界が平和になるかなんて分からないけど、身近な人の心や命を大切にすることが第一歩だと心から思う。

・核兵器禁止条約に関心を持つようになった

・最近特にテロが増える中で、2020 年に行われる東京オリンピックに向けて、日本の戦争に対する低い意識を変える必要があると考え、海外で起こる戦争やテロについて、友達と話すようになりました。

◯模擬国連を行う上で苦労したこと、気を付けたことを書いてください。

・自分の担当する国を好きになっていってほしい。
・他国を思う気持ち
・リサーチすればするほど楽しくなる
・自分は運営として参加させて頂きましたが、模擬国連の複雑なルールをどうにかみんなに分かりやすいように工夫したりすることが大変でした！でも、最後にみんなが楽しかったと言ってくれて本当に嬉しかったです！

◯核兵器廃絶について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください

・核抑止論に関する資料や対談集を読んだりして、関心を持ち、知識を蓄えようとしている。
・核兵器禁止条約について調べ、核のことについてより興味を持つことが出来た
・核兵器の処理方法が難しいことで未だに戦争の頃に作った核兵器を保持している国があるということから、国際情勢に関心を持ちニュースを積極的に見るようになった。

◯世界の平和に貢献したいと思いに関して「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください

・貢献する形は沢山あると思ったので自分なりの考えをするようになった。
・とにかく勉強をして、力をつける。英語、語学の勉強。政治・経済の勉強。
・世界の難民の人とか生きるのに精一杯な人達のことを知ってその人の暮らしをちょっとでも改善したいと思うようになった。
・世界の平和とは、何を持って世界平和が成し遂げられるのか。という事を考えています。身近にあるイジメなども無くならないと、真の世界平和は訪れないと思いました。自分は１人１人が身近な事から行動を変えていくことで、世界平和は訪れると、思い自らの行動を毎日見直し、世界のため「不幸」の2字をなくしてまいります

◯GRIT を通して学んだこと、考えたことを書いてください。

・常に人のために行動することが大事だとおもいました。
・世界の現状について知ることが出来たのが一番だと思います。どんなこともまず知ることから始まると思うのでそこからクラスメイトと意見を交換しあえたことがすごく勉強になりました
・GRIT はほかの学校では学べないことも学ぶことができ、世界への考えもガラッと変わります。絶対に学ぶべきだと思います。
・本気で真剣に、本気で主体的に取り組めば、この GRIT は、本当にやりたいこと、興味と使命感が強く揺さぶられるもの、生涯かけて心から取り組みたいと思うことに出会わせてくれます。
・書ききれないほど自分の考えが良く変わったり、概念が覆されたりととてもよい学びのばでした。平和や世界問題への関心も高まり、私も少しでもそれに貢献し将来役に立ちたいという気持ちが湧き、がんばろうと決意させられる場でした。
・すべての問題に共通しているのはやはり互いを思いやる心が欠けていることだと思う。だから自分たちから多くの人にこれを発信できたらいいなと思う。
・はじめはどうしても GRIT に前向きになれなかった。GRIT リーダーを何回かすることで、GRIT の大切さや積極的に学ぶことで他人が過ごす時間より濃い時間を過ごせることがわかった。
・1 年生の GRIT から積極的に行うと日々の生活で学んだ事が繋がって、素晴らしい高校生活になると思います！

関西創価高校SGH GRIT教員アンケート結果

実施日:2019/2/16

回答者数 42

問１．本校のＧＲＩＴプログラムは、国連が提起する地球的課題の探究に取り組む内容になっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	47.6%	52.4%	0.0%	0.0%

問２．本校のＧＲＩＴプログラムは、「生徒自ら地球的課題に挑み、解決する『使命感』を向上させるプログラムの取り組みになっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	42.9%	57.1%	0.0%	0.0%

問３．本校のＧＲＩＴプログラムは、「世界の現状を知り、苦しみを分かち合う『共感力』向上させるプログラムの取り組みになっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	38.1%	59.5%	2.4%	0.0%

問４．本校のＧＲＩＴプログラムは、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての問題解決への創造力を向上させるプログラムの取り組みになっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	35.7%	61.9%	2.4%	0.0%

問５．本校のＧＲＩＴプログラムは生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	59.5%	40.5%	0.0%	0.0%

問６．あなたは本校のグローバルシチズンシップセミナーの内容が生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	64.3%	35.7%	0.0%	0.0%

問７．本校がＳＧＨとなって、生徒のＩＣＴの取り組みが進んだと思いますか

	①大変に進んだ	②進んだ	③変わらない	④後退した
回答	54.8%	42.9%	2.4%	0.0%

問８．あなたは本校のＬＣ(ラーニングクラスター)の内容が生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	61.9%	35.7%	2.4%	0.0%

問９．あなたは本校のＵＰ(ユニバーシティー・パートナーシップ)クラスの内容が生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	38.1%	61.9%	0.0%	0.0%

問10. あなたは教員として本校のＳＧＨプログラムに協力的でしたか

	①大変に協力的	②協力的	③あまり協力的でない	④協力的はない
回答	33.3%	54.8%	11.9%	0.0%

問11. 教員としてGRIT（ＳＧＨ）の内容に触発されることはありましたか

	①大変に触発を受けた	②触発を受けた	③あまり触発されなかった	④触発されなかった

回答	45.2%	47.6%	4.8%	2.4%

問11-1. ①②と答えた人はどのような内容で触発を受けましたか?(複数回答可)

①GRITでの取り組み	②フィールドワーク	③ＵＰ	④ＬＣ	⑤グローバルシチズンシップセミナー
74.4%	35.9%	43.6%	23.1%	64.1%
⑥模擬国連	⑦生徒プレゼン			
33.3%	53.8%			

問12. 教員としてGRIT（ＳＧＨ）での生徒の意見や姿に触発を受けましたか

	①大変に触発を受けた	②触発を受けた	③あまり触発されなかった	④触発されなかった
回答	50.0%	42.9%	7.1%	0.0%

問12-1. ①②と答えた人はどのような場面で触発を受けましたか?(複数回答可)

①GRITでの取り組み	②フィールドワーク	③ＵＰ	④ＬＣ	⑤グローバルシチズンシップセミナー
69.2%	48.7%	23.1%	38.5%	30.8%
⑥模擬国連	⑦生徒プレゼン			
38.5%	51.3%			

問13. GRITや本校のSGHの取り組みはあなたの教師としての考え方や行動に影響を与えましたか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	26.2%	64.3%	9.5%	0.0%

問14. 自分の授業でアクティブラーニングの要素を少しでも取り入れましたか

	①ほぼ毎回	②週１～２回程度	③学期に１～２回程度	④実施していない
回答	45.2%	21.4%	28.6%	4.8%

問15. 自分の授業に探究学習の要素を少しでも取り入れましたか

	①ほぼ毎回	②週１～２回程度	③学期に１～２回程度	④実施していない
回答	14.3%	16.7%	33.3%	35.7%

問16. ＳＧＨの諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導法・内容に影響を与えましたか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	26.2%	45.2%	26.2%	2.4%

問17. 自分の行っている授業の中で、GRITで活用している手法で用いたものがあれば教えてください。（１回でも構いません。複数選択可です。）

ピアエデュケーション（二人一組で話し合う）	ポスターツアー	ジグソー法	プレゼンテーション	ルーブリック評価
70.3%	2.7%	18.9%	43.2%	29.7%
ミニッツペーパー（振り返りの記入用紙）	ディベート	群読	論文作成	サマリー作成
10.8%	10.8%	8.1%	16.2%	5.4%

教員アンケート自由記述分（抜粋）

◯あなたは教員として本校のＳＧＨプログラムに関して「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・SGH プログラムに伴い、生徒の英語力をどう向上させるかということに関してより具体的に取り組みを進めることができるようになった。また、海外フィールドワーク、LC などのプログラムによって、大きく英語力を向上させる方途も模索できていると感じています。

・学園が SGH になったことが私が学園で勤務したいと思った直接的なきっかけの 1 つであるためです。

・GRIT 授業の内容に常に建設的意見を申し上げより良いものを目指そうとした。国語の授業を通して求められる力の補完に努力した。

・GRIT の内容を通し、世界の諸問題に対し、どう向き合っていくのかを真剣に考えていく姿勢に感動しました。GRIT は教員が中心となり一生懸命に考え、生徒と共に作りあげ、改善を加えてきたものだからこそ、誇りをもって授業していきたいと思い、協力しています。

・海外 FW に同行し、思考はグローバルに。行動は身近なところからとの見解を聞き、代表の生徒だけではなく全学園生が身近なことに平和意識を持つことが大事だと感じた。自分の教科としてどう取り入れるかは模索中。

◯GRIT（ＳＧＨ）の生徒の意見や姿に触発され「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・全員参加は難しいと思っていたが、実現可能であることに驚きました

・生徒の成長の早さに驚くとともに、その生徒を指導できる自分になれるよう、知識の吸収に努めた

・自分よりレベルの高い生徒が普通にいることを意識するようになった。逆に専門性を高めて自分にとっての武器が必要だと感じた。

・生徒への関わり方に対する意識が変化し、生徒が抱えている問題が身近に感じられるようになり、前よりも話がよく聞けるようになった。

・語学を学ばなければならないと何度も反省させていただきました。

また、自分にできることは何かを考え、実際に行動を起こす姿に触発を受け、自分にも何かできないかを考えるようになりました。２０１８年夏には西日本豪雨の被災地へボランティアに行ってきました。

・多角的な面（角度、意見、傾向など）で、物事を考えながら、目標を立て、作り上げることの大変さを感じることができる。継続して取り組むことによって、自己実現の過程（目標・行動・結果・評価→新たな目標）を経験できると感じた。

◯本校の目指すグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」を育みことを実現するために行った授業（研究開発）はありますか？

・ＳＤＧｓの学びでチームを組んでポスターセッションを行った。フィールドワーク（秋の校外学習）のプレゼン発表を行った。難民問題でグループによるフリップ発表を行う予定。

・世界の問題群をテーマにし、授業で取り上げることは何度もあります。そのアプローチは、常に同じで、「自分の普段の生活の中に、解決法がある」とのメッセージを訴えています。その問題・解決を意識するかしないかで、世界の問題群の「問題を作り出す側」か、「問題を解決する側」かが決まると伝えています。解決法も持続可能であるべきである故に、普段の心がけをするように授業の中で伝えています。

・現代技術の功罪について調べ、考え、発表させる授業および論述試験を定期試験で課した。

・授業の冒頭で、時事問題や本の内容を紹介しながら問題意識や使命感を育てるよう心掛けています。

・「共感力」については、国語の授業でとり上げる作品を通して、さまざまな環境の中で生きる人々の生き方を想像することを通して、磨くことを意識した。「使命感」については、自分たちが今おかれている環境に感謝すること、そして「自分なんか」という生き方では「自分にでも」できることがないかと考える大切さをことあるごとに語った。「問題解決への創造力」については、日々のアクティブラーニング

形式の授業を通して、「困ったときに助けて」といえる意識づくり、関係づくり、「困っている人をみつけたら行動できる」意識づくり、関係づくりを念頭に授業をした。

○ＳＧＨの取り組みについて通じて感じたことを書いてください。

・準備が大変。教師も成長する。世界で起きている問題を自分の問題として落とし込めている。
・今後に向けて総括を携わった人みんなでやるべきだと思う。
・関西創価学園の未来を開く取り組みであると思います。時代が激烈に進歩している中において、学校現場において同じことを繰り返しているだけでは、価値を創造しているのではなく、価値をリサイクルしているだけだと思います。GRIT などのように、探究型の授業を「授業」としてカリキュラムの中に組み込んで、評価を行い、更に生徒たちの探究の学習を強烈に進めていくべきだと思います。
・生徒に何を学ばせるのか、あえて外すプログラムはないのか、を改めて精査すべき。コンテンツばかりが増えて、何のためにそのプログラムをするのか、が教員間で共有されていないと感じています。
・実際に高校でＳＧＨの取り組みにふれる中で、外から見ていた以上に、考えられているプログラムだと思った。ＵＰの取り組みについて、せっかくの機会なのに、他の様々な行事と重なって参加できる生徒が少ないことがとても残念だと感じた。生徒だけでなく、教員が実際に海外で研修をしたりボランティアに参加できる機会があれば、もっともっと生徒に生の実感を伝えられるのに、と時にもどかしく感じることがある。
・難しい部分ではあるが、GRIT も何かしらの評価基準を設け、生徒にとって学ぶ意欲を高める評価制度を導入していければ、より一層に目的感を持って取り組めるのではないかと考える。

○ＧＲＩＴの影響について感じたことを書いてください。

・生徒・教員ともに学ぶことが多く、実りあるものになっていたと思う。しかし、教員側の予備知識が少ない・または学ぶ時間がない、と感じた。
・世界に目を向けるいい機会だと思うので、いいと思いますが、地域の事や日本の事を学ばなさすぎという批判にどう応えるかが課題だと思います。
・単なる学習から探究へと発展させたことで、生徒の学ぶ姿勢が変わったと思います。
・全校生徒を対象にできたことが良かった。全員が少しでも触れられた事が重要だと思う。
・GRIT の影響はかなり大きいと思います。大きすぎて生徒の進路を変える力まであります。卒業生や現生徒の中で、将来の夢ややりたいことが GRIT を通して変わったという生徒を何人か聞いています。それだけに内容をきちんと精査しないといけないと思いました。

○ＧＲＩＴの運営について感じたことを書いてください。

・毎回、準備してくださる先生方の多大なるご努力によって成り立っていると思います。そのおかげで、担任や所属として、GRIT の授業に取り組むときにはスムーズに行うことができると感謝しています。ただ、そのような先生方のご負担が大きすぎるのではないかと感じることがあります。
・多くの教員が積極的に関わっていると思いますが、負担の偏りなどがあるように見えるため、持続可能な運営のために負担のバランス、他の校務との兼ね合いなどを鑑みた運営がされていくことに期待しています。
・毎回、たくさんの教員の汗と努力で、本当によいものを作ってくださりありがとうございました。何がよくて、何を残し、これは減らすなど、行ったことを精査し、残していくものがはっきりとすれば、本当によい教育カリキュラムができると感じています。

2018 年度第 1 回 SGH 運営指導委員会

日時：2018 年 8 月 22 日（水）10:30～13:00
会場：理事室
参加者：梶田叡一 桃山学院教育大学学長
米田伸次 帝塚山学院大学国際理解研究所顧問
朝野富三 宝塚大学特任教授
武田学園長・木下副学園長・杉本校長・大月副校長・本房教頭・流田教頭
千葉参事・桝田参事・小山 SGH 委員長
太田創価教育センター長・中西副センター長・狩野参事　15 名
式次第：あいさつ　　杉本校長
関西創価高等学校 SGH の取り組みについて　　小山 SGH 委員長
2018 年度前半の取り組みについて　　大月副校長
運営指導委員の先生方より
あいさつ　　武田学園長
議事録：

○GRIT（探究型総合学習）は、人類が直面している地球的問題に目を向けさせた。この教育効果は大きいと思う。日本は島国のため、自国の枠を超えて海外に目を向けることがなかなか難しいが、このような閉ざされた日本的な視野を大きく開いた点は評価できる。今後も「環境」「開発」「人権」「平和」の四つのテーマで取り扱う問題をさらに広げて欲しい。

○言語技術的なものを取り組むのは、とても大切である。日本の教育ではほとんど行っていない。模擬国連を開催した後、取り扱った内容を 5 W1H という枠組みに当てはめてまとめることで書く力が定着していく。言葉の力＝ランゲージアーツはとても大事である。これがないとテキストを的確に読み解く力が身につかない。

○本当の国際化とは、他国との文化交流をすることだ。そのためには自身が日本の文化を語れないといけない。国際的な視野からどのように日本文化を認識しているか。このような視点が大事だ。ドナルド・キーン氏の本を英語で読ませるなど、取り組み方を考えて欲しい。GRIT の中に和文化理解、または体験の要素を入れられないのか。日本の若者が世界に出たときに日本のことを語れない場合が多い。武道が体育で必修となった。武道はスピリチュアルなものである。スポーツではない。「道」である。日本的なものを体得する一つの方法だ。

○文科省に評価されたポイントは GRIT である。オールスクールアプローチ、即ち学校全体で取り組んだ点が評価された。ここで重要なのは、教員の変容だ。教員全員が労を惜しまず関わった。SGH の意義を全体で共有した。これまでの取り組み（記録）を読むと、試行錯誤をして取り組んだことがよくわかる。「深い学びとは何か」を考える、先生たちの苦悩と成長があった。

○GRIT を通して学びの体験を報告し合うことで、「学びの場」となっている。学びを経験化する大切な機会となっている。SGH プログラムにおける GRIT の位置づけは重要だ。これからもこの学習の効果について話し合って欲しい。ぜひ学びのスタイルを究め、深めていって欲しい。

○心が変われば行動がかわる。心がどのぐらい変わったか、その経緯をさらに突っ込み、どのように評価するかが課題だ。

○地域との連携が課題だ。今の動向は、地域との「連携」から「協同」へと変わってきている。SDGsや地域の課題をどう自分化するか、自分の問題としてとらえられるかの問題である。
○次は、ディープ・アクティブラーニングへの移行が必要だ。教育界の話題は、アクティブラーニングが、ディープアクティブラーニングに変わってきている。真の「深い学び」とは何なのか考えること。その過程で、ESD、SDGs を捉え直して欲しい。
○関西創価高校の「世界市民教育」は何を狙っていることなのかをしっかり考えてみることが重要だ。
○教員の参加意識が９７％と高まったこと、地域との交流で近隣の府立交野高等学校との交流が始まったこと、この２点を評価したい。
○高校３年生の意識が高まってきていることは喜ばしい。だが、目立っているのは女生徒の活躍。フィールドワークなどに女子が参加している割合は高いが、男子はどうか。運営委員会は、男性教員で構成されている。管理職の２５％は女性にしないといけないのではないか。SGH 委員会はどうか。女性教員は活躍できているのか。また、参加者の大半が女子生徒ということは、女性教員の指導が大切になるのではないか。
○関西創価の取り組みをさらに広げるには、私学というビハインドを補う「地元意識」を持つことが大切だ。地域に応援してもらうためにも地元の学校と思ってもらうような仕掛けが必要だと思う。
○これだけ多彩な取り組みをし、３年間の大きな積み上げがあるにもかかわらず、４月の GRIT のガイダンスの時間が短くないか？もっと長く時間をとって行ってもよいのではないか。
○大学は、積極的な女の子が多いかどうかをオープンキャンパス等で見ている。その点、関西創価高等学校の女子生徒は、元気で積極的だ。
○私学は、ともすれば地域の中で浮いてしまう。学校の評価委員会に自治会の自治会長に入ってもらうなど、工夫が必要ではないか。仙台の私学では、伊達家の当主に来てもらった。意図的にやらないとうまくいかないと思う。SGH でやってきたことをもとに、地元にネットワークを作るべき。
○四条畷・交野にユネスコ協会ができた。ユネスコスクールとしてぜひ交流してほしい。
○今後、関西創価らしい教育＝命の尊厳を強く訴えていきたい。また、運営指導委員のお一人である梶田叡一先生が訴えておられる「心の教育」をベースにし、創立者池田大作先生が最重要理念として提唱しておられる「命の尊厳」を大きく前面出すべきだ。
○「命」の教育が大切だ。文部科学省は、国家や社会のための教育を考えているが、本来、教育は子どもの幸福のためにあるものだ。子どもたちの「生きる力」を養わなければいけない。自分の人生を充実させて、社会の中で生きていく力を。それが、結果として社会に貢献していくことになる。逆ではない。これは牧口先生の教育論（創価教育）である。「有能」であるとか「有為」なとかではない。「人材」ではない。「人財」ならまだしも、材料ではない。命がある時点で大切なものなのだ。役立つかどうかではない。エリートほど、この感覚がわからない。ESD もそうだが、子供が変われではない。大人が変わらないといけない。どんな人間を育てたいのか？「命の尊厳」という精神を体得した人間を育成することしかない。それを示したのは、創立者池田先生である。もらった命をどう輝かせるかが大事である。役に立つかどうかではない。先生方には、ここで育った子どもたちが自身の人生や社会をよりよく生きるための力の涵養に努めていただきたい。
○対話と議論、論争は違う。対話は傾聴から始まり自己対話につながる。議論、論争は技術である。対話には寛容の精神が必要。知識ではなく生き方をぶつけることだ。ディベートは弁論術の部分が多い。その場だけ切り抜けても時間が必ず証明していく。ぜひ対話を取り入れた教育をお願いしたい。

2018年度　関西創価高等学校

スーパーグローバルハイスクール中間研究発表会

【日　時】　２０１８年１１月１０日（土）10時25分～15時00分

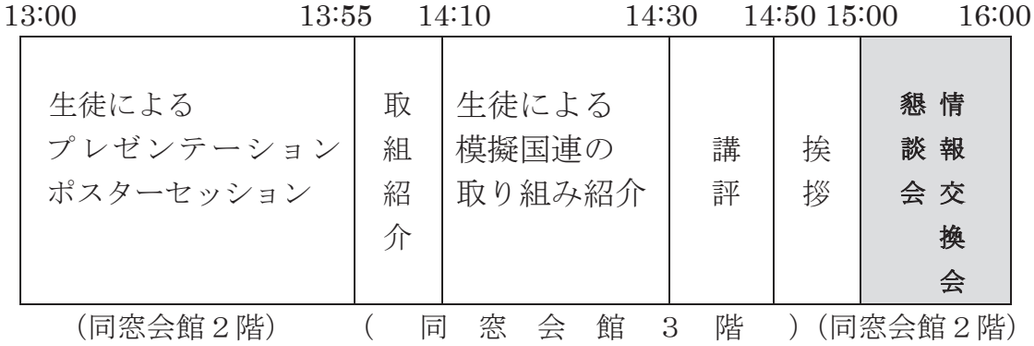
【会　場】　関西創価高等学校
〒576-0063　大阪府交野市寺3-20-1
TEL　072-891-0011　　FAX　072-891-0015

【アクセス】・JR学研都市線「河内磐船」駅下車　徒歩20分
・京阪交野線「河内森」駅下車　徒歩20分
※JR河内磐船駅前からタクシーも利用できますが、本校と
河内磐船駅間を学校車両にて送迎させていただきます。
（9時30分～10時30分）（15時～16時15分）

【研究開発構想名】
「TRY人の郷・交野から　平和の創造に挑戦する
グローバルリーダー育成プログラム」

【発表会の内容】





【校長挨拶】（　10:25 ～10:30　講堂　）

【SGH プログラム GRIT 公開】（　10:30 ～12:20　講堂　）

GRIT とは、全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラムのことで、毎月２回の土曜登校日に実施しています。「Global Research and Inquiry Time（地球的課題の調査と探究の時間）」の略称で、「根性・負けじ魂」という意味もあります。「環境」「開発」「人権」「平和」をテーマに掲げ、地球的課題の問題解決にグループで取り組む学習や、各界で活躍する講師によるセミナーを開催しています。常に自分の意見を持ち、ディスカッションを通して解決方法を探ることで、知識の習得だけではなく、積極性、主体性を育み、生徒同士の意識を向上させ、グローバルリーダーとしての使命感を高めていきます。

この GRIT の授業公開として、３年生全員による**模擬国連**の模様を参観していただきます。今回は、SDGs（持続可能な開発目標）にも取り上げられている「水」をテーマに討議します。

＜**模擬国連**の概要＞

議　題：『安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセス』

参加国：１００カ国（３年生８クラス３５０名を１００のグループに分け、それぞれのグループに国を割り当てています。）

進　行：10:30～10:35　前時の模様をＤＶＤにまとめ放映
10:35～11:15　各決議案説明 ／ ロビー活動
11:15～11:45　各修正案説明 ／ ロビー活動
11:45～11:55　修正決議案提出・説明
11:55～12:05　投票説明
12:05～12:10　投票・開票
12:10～12:20　ベストカントリー賞発表・講評

【昼食】（　12:30 ～13:50　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

ご希望の方は、申込フォームにて、学校のお弁当〔お茶付き〕（500 円）をご注文いただけます。申し込まれた方は、当日、受付にて 500 円をお支払いください。お弁当は、12 時 20 分以降に、受付でお渡しいたします。

【生徒によるプレゼンテーション・ポスターセッション】
（　13:00 ～13:50　　同窓会館２階　会議室他　）

お昼休みに、次の６つの内容について、生徒によるプレゼンテーション並びにポスターセッションを行います。

①広島フィールドワーク報告　　②東京フィールドワーク報告
③東北フィールドワーク報告　　④LC 東京フィールドワーク報告
⑤「世界津波の日」 2018 高校生サミット in 和歌山の報告
⑥日米露３国の高校生による核不拡散教育会議（CIF）報告

【本校の取り組みについて】（　13:55 ～14:10　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

校長より、本校の SGH の取り組みについて紹介いたします。

全ての課題研究推進の土台としての Active Learning を全教科の授業に導入し、①GRIT（全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラム）、②SP（希望者による放課後の特別授業プログラム）、③Learning Cluster（２・３年生の希望者から選抜されたメンバーが英語で地球的課題に取り組むプログラム）という３つの SGH プログラムを実施しています。また、GRIT 等で学び、研究した内容を深めるためのフィールドワーク（FW）も国内と海外で行っています。

【模擬国連の取り組み】（　14:10 ～14:30　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

今回の模擬国連の取り組みについて、中心になって取り組んだ生徒の代表がプレゼンテーションを行います。

※質疑応答

【講評】（　14:30 ～14:50　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

本校 SGH 運営指導委員より。

【挨拶】（　14:50～15:00　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

【懇談会・情報交換会】（　15:10～16:00　　同窓会館２階　Peace Square　）

発表会終了後、本校 SGH 委員との懇談会並びに情報交換会を行います。

茶菓子なども用意しております。お時間のある方はぜひご参加ください。

2018 年度第 2 回 SGH 運営指導委員会

日時：2018 年 11 月 10 日（土）15:30～16:50
会場：理事室
参加者：
＜運営指導委員＞ 梶田叡一 桃山学院教育大学学長・米田伸次 日本ユネスコ協会連盟顧問
・朝野富三 宝塚大学特任教授
＜関西創価高校＞ 武田　豊 学園長・杉本規彦 校長・千葉一夫 参事・桝田尚之 参事
＜管理機関代表＞ 中西　均 創価教育副センター長

議事録：
――― 本日は、長時間にわたり模擬国連をはじめ本校 SGH プログラムの生徒の発表を見ていただき、心から感謝申し上げたい。そして、今日の発表会をご覧になられた感想ならびにご指導を賜りたい。

○今日の模擬国連を見て、１７～１８歳というそれぞれの自己主張もある難しい時期に、学年全員の生徒が参加して、皆で協力し合いながら模擬国連の活動が成立しているというのは稀有なことであると思う。

○FW のプレゼンについては、質疑応答の際、来校者の質問に対してすぐに答えることができていた点にとても感心した。

○来年度は SGH の最終年度になる。SGH が終わってからのその先をどのように考えているのか、方向性などをお聞きしたい。

○これまでも言ってきたことであり、さきほどの米田先生の講評の中でもあったが、地域とのつながりを持つということが大切であると感じている。また、異なった価値観との接点を増やすことにさらなる努力をしていただきたいと思う。というのは、関西創価高校は良い意味で均質化しており、悪く言うと異文化や異なったものを受容していくことに関して、ややもすると学校側がその姿勢を厳しくしてしまうということがあるのではないかという懸念があるからである。

○本校 SGH の取り組みに対する課題として挙げられていた中の１つに、中位～下位層の生徒をどのように底上げしていくかという項目があった。SGH プログラムを全校あげて取り組んでいる故の悩みであると思うが、関西創価の教育方針である「健康な英才主義」、「人間性豊かな実力主義」をもとに、ただ引き上げるというだけではないアプローチの仕方で目配りしてあげてほしいと思う。

○関西創価高校の教育に敬意を表する。教育というのは、生徒の変容が勝負でありすべてであると考えている。今日もそうだが、いつも関西創価高校の生徒たちの素晴らしさを実感している。ところが、毎年出されている報告書を見てみると、その中のアンケートの設問や分析では、生徒の変容をつかみ切れていないと思う。生徒の内面にまで食い込んでいないというもどかしさを感じている。

○模擬国連に関連して言うと、【問８】「国際的合意形成について関心があるか」関心がある４８％、「合意形成の難しさの認識はどうか」６３％が難しいと率直に答えている。ここで一体、模擬国連の何を問いたいのかがはっきりしていない。これだけ素晴らしい取り組みをしているのだが、この模擬国連で何を学んだのかということが見えてこない。報告書には模擬国連のねらいについて、コミュニケーションスキルを学ばせると書いてあるが、合意形成が難しいという実感だけで止まっており、問題解決のために何が求められているのかについて掘り下げがなされていないと感じる。

○【問２１】「ディカッション能力が向上したか」生徒たちは向上したと言っている。しかし、果たして生徒の変容を測るのに、向上したかというその問いかけでよいのかどうかということ。特に気になるのは、設問にディスカッション＝対話力と書かれている。本当にイコールなのか。対話の一つの定義としては、否定しないで相手の話をよく聞いて自分の話をきっちりと伝える、そして違いとともに共通点を発見し、それを強みに変えていくことであると思う。模擬国連の取り組みでは、それぞれの国に違いがありエゴがある、それをうまく調整していくという中で、生徒たちは「難しい」との実感をもったが、それだけでいいのかということ。それをどう突き破っていくのか。模擬国連だけでなく、身近な自分たちの日常生活の中にもある様々なぶつかり合いをどう解決していくのかというところまで落とし込みながら、対話というものの大切さをどう学ばせていくかが課題であると思う。

○GRIT について【問１６】「グローバルイシューについて関心を持ったか」８０％が持ったと答えた。これは高い数値である。これはプログラムの内容が良いから当然であると思う。しかし、【問１７】でグローバルイシューの解決に関わりたいと答えた生徒の割合が、関心を持った生徒の割合に対してかなり低い。これは前の年もそうである。アンケートの分析を見ると、この結果は何故なのだろうというところの詰めがない。関心を持った生徒が多いというところで満足して止まってしまっていると思う。また、関わりたいと思った理由について、他国に起こったことは自分と関係があると感じた、苦しむ人を救いたい、助け合うことが大切だと感じた、というところに○をつけさせている。他人事とまでは言わないにしても、表面的であると思う。これで本当に行動につながっていくのか、掘り下げがなされていないところが課題であると思う。身の回りのことに積極的に関わろうという気持ちをもったわけはとの問いに対しても、感じた・思うというかたちで処理されている。なぜ子供たちは、関心は持ったけれども関わろうとしないのか、つまり頭の方ではかなり理解が進んだが、実際に行動に移すエネルギーにまでなっていないという点が気になる。

○足元の問題を自分事化していくことが世界につながるし、世界市民を育む一番の基本であると思う。深い学びとは、すべて自分事化していく中にあるという視点を指導者に持ってもらいたい。当校の課題として、全体的にもう一つ教育に対する掘り下げが薄くなっているという点がある。知的なレベルは上がってきてはいるが、何かが欠けてしまっているように思う。国際模擬国連に参加した生徒たちは、口々に「大事なことは人間性なんだ。グローバルなリーダーというのは、どういう人間か、その人間の在り方が問われる」ということを学んできたと言っている。当校は、非常によく頑張っておられる。その頑張りを十分わかった上で、あえて今後の課題ということで言わせてもらった。

○関西創価高校が SGH を引き受けられた基本的な目的は、達成されたと思う。日本における一国平和主義を乗り越え、全地球的視野で考える人を育てるために SGH は必要な教育施策である。その意味で、今回の模擬国連の取り組みにおいて、生徒の皆さんが水問題をテーマにいろいろな国の状況を調べ、日本という枠を超えた全地球的視野で一生懸命に考えて交渉している様子を拝見して、問題意識とか視点の持ち方等、日本の当たり前の世界を越えたグローバルな認識が育ってきていると感じた。御校が SGH を引き受けられて取り組んできた大きな目標が実現しつつあると思う。

○次のステップとして、２つ考える必要がある。１つは SGH 後の文科省が提示するプログラムに参画するかどうかも含めて、SGH の指定終了後の取り組みについて。もう１つは、関西創価としての教育の発展についてであり、これがより本質的な問題であると思う。つまり、どのようにしたら受けた教育や学んだことが自分事になるかということである。そのために大切なことは、教育そのものの内容をより一層深めて、その学びが生徒の実感・納得・本音に結びつくようにすることである。知識や思考力・問題解決力といった能力をもつことも大事であるが、その能力を自分の志のために使いこなせる人間になることがより大事なことである。次期学習指導要領の中で謳われている「学びに向かう力・人間性の涵養」というのも、まさしくそのことを言っている。将棋で言うと、有能なコマをつくる教育ではなく、有能な指し手を育てる教育が大切である。将来、国際機関で働きたいという生徒が、約４割に増えたというのは素晴らしいことである。これまで国際教育に取り組んできた関西創価ならではのこと。国際機関で働くにも、英語ができることや様々なことを知っているという知識や能力以上に、人間性が大事になってくる。創価教育の核心的部分でもある「豊かな人間性」とは、自分の志を大切にすること、他人の不幸を見逃さないことであり自らの痛みとして感じること、ましてやその上に自分の幸福は築かないということであると理解している。まさに、創立者池田先生が言われているこのことが大切であり、今後、この点にさらに力を入れた教育を推進していってほしいと思う。

○具体的な提案として、次の２つを挙げたい。

①発展途上国出身の高校生を仲間に入れることはできないかということ。少人数でも入学させることができれば、生徒にとっても教師にとっても世界の実情を知る良い機会を得ることになると思う。そのような生徒がいれば、模擬国連などの際にも実情を語ることを通して、自分にとっての当たり前がいかに違うかということを生徒も教師も実感できると思う。

②新学習指導要領の中にある「探究」という活動を、学校としてどう組織できるかを先生方で真剣に考え取り組んでもらいたいということ。関西創価高校は、国際的な教育の面では大きな成果をあげられたと思う。次に、新学習指導要領に向かって各教科の取り組みも進めていかれると思うが、国際的な面だけでなく「探究」という活動をどう組織できるか、キーコンピテンシーという理念、すなわち「現実性のある問題解決能力」をどう実現するかを考え、取り組んでもらいたい。単なる物知りではなく、普通の活用能力をもっているだけでなく、新たにクリエイティブに手がかりを探し求めながら問題を解決していく力をもった生徒を育てるということ。今日の模擬国連などまさにそうだったが、南スーダンの担当にあたった生徒は大変、調べてもなかなか情報が出てこない、その中で一生懸命頑張っていた。そのような苦労をすること自体が大事なのである。新学習指導要領のねらいは、基本的情報の発掘から始まって、どういう原理原則で追及し解決していったらよいか等を考えていくことのできるたくましい人間を育てる教育である。それは関西創価高校の建学の理念でもあると思うが、新学習指導要領の改訂を機に、今一度、先生方で思いを新たにして取り組まれたらいいのではないか。

○関西創価高校は、SGH とユネスコスクールの両方に取り組んでおられる。SGH は５年間と年限が決まっているが、ユネスコスクールは期限がない。ユネスコという公のネットワークを活用して、これまで積み上げてこられた素晴らしい成果・考えを社会的に広げていく必要があると思う。ポスト SGH の新しい教育を創造する方向性を示すシンポジウムなどを企画してもよいのではないか。

○今日のプログラムでは、午前と午後の内容を入れ替えた方がよいのではないかと感じた。つまり、午前中に GRIT の説明やプレゼンを行い、午後から模擬国連を実施する。その方が、来校者にわかりやすかったのではないかと思う。この素晴らしい教育内容をまず地元に広げていき、世界に広げていってほしい。そのためにも、外から来られた方にわかりやすい発表の仕方を工夫してほしい。

○御校は、広報の仕方も控え目で遠慮しているように見える。内容が素晴らしいので、一度来るとファンになる人が多くいるのは事実である。なので、もっと外に打って出ればよいと思う。

――― 先生方のご期待にしっかりお応えできるように、またよく協議してやってまいりたい。長時間にわたりご指導をいただき、誠に有難く感謝している。いくつか宿題も頂戴したので、今日のご指導を SGH 委員会のメンバーに伝え共有し、皆で練り込んでいきたい。それが、まさにわれわれ教員としての学びに向かう力であり人間性の涵養になると考えている。確認し合っているのは、学びに向かう力、いかに学びをつくるか、学びをどうつなげるか、どう学び続けるかという観点で、いろいろな取り組みを行っているということ。多岐にわたる今日のご指導をしっかりまとめ、今後に活かしてまいりたい。

――― 長時間にわたり貴重なご意見・ご指導を賜り、誠に有難く感謝している。今後も団結してご期待にお応えできるように、改革・刷新という新たな決意で頑張ってまいりたい。

2018年度　関西創価高等学校

スーパーグローバルハイスクール最終研究発表会

【日　時】　２０１９年２月２３日（土）13時 ～ 16時

【会　場】　関西創価高等学校　同窓会館３階（IKEDAHALL）
〒576—0063　大阪府交野市寺 3-20-1
TEL　072-891-0011　　FAX　072-891-0015

【アクセス】・JR 学研都市線「河内磐船」駅下車　徒歩 20 分
・京阪交野線「河内森」駅下車　徒歩 20 分
※JR 河内磐船駅前からタクシーが利用できますが、本校と
河内磐船駅間を学校車両にて送迎させていただきます。
（12 時 00 分～12 時 50 分）（16 時 10 分～16 時 40 分）

【研究開発構想名】
「TRY 人の郷・交野から　平和の創造に挑戦する
グローバルリーダー育成プログラム」

【発表会の内容】

12:30	13:00	13:20		14:00	14:15
受付	挨拶	生徒による課題探究ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ GRIT ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ			休憩

14:15	14:35		15:20	16:00
ﾗｰﾆﾝｸﾞｸﾗｽﾀｰ ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	教科での取り組み紹介 教員による研究まとめ報告 質疑応答		講演	

【挨拶／本校の取り組み紹介】（13:00～13:15 ）

校長の挨拶の後、副校長より本校の SGH の取り組みについて説明させていただきます。

全ての課題研究推進の土台としての Active Learning を全教科の授業に導入し、①GRIT（全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラム）、②UP（希望者による高大連携プログラム）、③Learning Cluster（LC）（２・３年生の希望者から選抜されたメンバーが、英語で地球的課題について取り組むプログラム）という３つの SGH プログラムを実施しています。

【生徒による GRIT プレゼンテーション】（13:20～14:00 ）＜２階会議室＞

GRIT とは、全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラムのことで、毎月２回の土曜登校日に実施しています。「Global Research and Inquiry Time（地球的課題の調査と探究の時間）」の略称で、「環境」「開発」「人権」「平和」をテーマに掲げ、地球的課題の問題解決にグループで取り組む学習や、各界で活躍する講師によるセミナーを開催しています。

今回は、上記のテーマと関連が深い SDGs から選んだものを研究対象とし、今年１年間の取り組んできた研究の成果を発表します。代表生徒による４つのグループが２会場に分かれ、下記のようにプレゼンテーションを行います。

セッション①：１グループ２０分（発表１０分・質疑応答１０分）×２G
セッション②：１グループ２０分（発表１０分・質疑応答１０分）×２G

※　休憩時間（14:00～14:15）や閉会後の時間を利用して、海外フィールドワークのポスター掲示等をご覧ください。

【ラーニングクラスター（LC）プレゼンテーション】（14:15～14:35 ）

ラーニングクラスターのメンバーが、課題研究のまとめとして、高校生の視点から考えた地球的課題の解決への提言を英語で発表します。ラーニング・クラスターとは、２・３年生の希望者から選抜された２２名で実施している特設プログラムで、活動の全てを英語で行い、SDGs よりさらにコアなテーマを設定して１年間課題研究を行います。今回発表するテーマは、「人権」についてです。

【教科での取り組み紹介／教員による研究まとめ報告／質疑応答】（14:35～15:20 ）

教科での取り組みとともに、GRIT を中心にした１年間の学びと、それを通じて生徒がどのように変容したかについて報告をします。

【講演】（15:20～16:00 ）

本校の SGH 運営指導委員をお願いしております**梶田　叡一　先生**に**「真の国際性を育てるために」**と題して、講演をしていただきます。

最終報告会：梶田叡一先生講演「真の国際性を育てるために」（概要）

関西創価学園は深い意味での国際性を育てるために頑張っている。

大事なことを４点にまとめると。
１．活力・積極性　２．対話力　３．語学力
４．イノチとしての平等感
である。

語学はできた方がもちろんよい。しかし、科学技術が発達すれば、機械がすぐにどこの国の言葉にも翻訳してくれる。
したがって、国際性＝語学力と短絡的に考えてはならない。

１．活力・積極性

これが一番大事である。関西創価の生徒は前向きであり、積極的である。
取り組むことが有効であるから取り組むというものではなく、有効であろうがなかろうと取り組むという力が必要である。
結果が出るから物事に取り組むのではない。
たいてい、うまくいかないかもしれないから、やめておこうかとなる。
合意形成・・・なんで必要なのか？
そもそも違う意見なんて言わなければ合意形成なんていらない。
身の回りの幸せ主義から言ったら、１つの人類社会なんて考えなくてよい。
しかし、そこには国際性はない。
よってあえて、そこを考えねばならない。
若い時に異質な文化を考えさせるほうがいい。
すると、なぜだろ？と問いがでてくる。
そこから、違いが見えてきて、
最後には本質は同じであるということに気づく。
それが本当の国際性である。
うまくいくかどうか考えるのではなく、好奇心を持つ、調べてみる、こだわってみる、
関西創価にはそれを実行する活力があふれる教員がたくさんいる。あらゆる場面でこのようなことを養う教育をしていきたい。

２．対話力

これが難しい。話が盛り上がるのと、対話とは違う。話がもりあがるけど、相手の話を聞いていないでは対話ではない。対話は相手の話を聞くところから始まる。傾聴という。
国際的な場面では、自分の主張のみを言って終わることがある。
しかし、そこにどういう根拠、感性があるのか、背景もろとも理解しようとしなければならない。
感性や価値観が違う。それらの違いを認識したのち、どうすれば本当の合意形成できるのかということになる。この解決策が対話である。
模擬国連の活動を何度か見せていただいたけど、生徒は一生懸命対話を考えている。
現実の国連でやっていることをなぞっているわけではない。現実は弱肉強食であるが、ここでは違う。あるべき国際社会を生徒は考えている。
日本人はそういう対話を重んじる伝統である。
わかりやすいのは聖徳太子が「我かならず賢ならず、彼かならず愚ならず、これ共に凡夫であるのみ」といっていることに象徴される。
この原理に立たないとだめである。
自己主張のぶつかり合いの中で、表面的に上手な話をするのではなく、自分の主張を変形しながら、Win-win になるにはどうしたらいいのか、というのを考えるのが対話である
今の指導要領にある「主体的・対話的で深い」というのは、ただの「話し合い」ではない。
日本の新聞・TV のメディアだけ見ていたら、国際問題をとらえることができない。
自分の強い主張をぶつけるのが対話ではないというセンスを若い間に養いたい。
話し合えばいいのではない。相手の立場に立ってどこまで耳を傾けられるのか。自分の論理を磨くのも大切だが、相手の論理を支えているものをどうやって受け止めるかが対話的ということである。

３．語学力

語学は大切である。しかしいろいろな言葉を流暢にしゃべることが国際性であるという誤解をもたないようにしなければならない。

小学校低学年で英語をやるようになったのはなぜか。それは必要だからである。

カンボジアはかつて内戦をし、知識人を殺した。そのため、現在、学校教育は水準が回復しない。読み・書き・計算をどうするかと考えている。

体育・音楽・美術などはやっていない。

しかし、そこに２年前から英語のカリキュラムを入れた。

日本の指導要領は、どこの国でも同じ年齢でやっていることを同じようにやるように作成した。

「ゆとり」から抜け出すための指導要領をつくったとき、どこの国でも学んでいることは日本でも学ばなければならないとした。

日本だけが、円周率がおよそ３でいいわけがない。

英語のことを悪く言っていたのが、フランスとスペインであった。

かつて、フランスで街頭の屋台でハウマッチといっても、無視をされた。しかし今はそのフランスで、小１から英語を始めて、英語で通じるようになった。スペインも同様。

日本も遅ればせながら、世界の共通語である英語を最低限は学ばなければならない。必要不可欠だが、これが国際性と思ってはいけない。

アジアの国は早くから英語をすごく学んでいる。

中国では子供たちと英語で話すことができる。

英語が世界共通語になったので、身につけさせなければならない。しかし、それが国際性ではない。

４．イノチとしての平等感

このことが、一番難しいことである。

例えば、何を食べるかは違っていても、食事という行為が命を支えるということでは同じである、ということである。味付けの工夫は国ごとにある。しかし、食物を組み合わせて、体の中に入れていかないと死んでしまう。

見かけ、生活様式、こだわりなど違っても、みな同じ人間であるということに気づくこと、これが国際性である。

これがわからないと、表面的な合意はあるが、深い意味で世界市民にはならない。世界中が同じだということを実感として言えるようにならなければならない。

音楽であっても、今、日本ではヨーロッパの特定のある地域の音楽をクラシックとしている。しかし、アジア・アラブの国にいけば、いろんな音楽がある。現在、指導要領改訂によって、日本固有の音楽を学ぶようになった。雅楽とクラシックは不協和音の使い方などで大きく違う。

本当の国際性とは好奇心を多くもち、積極的に関心をもっていかなければ養われない。

今、ベネズエラに何が起きているのかを知らなくたって生きていくことはできる。しかし、現実はそこに悲惨なことが起きているということを知っているかである。ほかにも、IS に対しては最後の戦いが今行われている、ということなどは報じられていない。

好奇心を燃やして、いいことだけでなく、いやなことも認識の中に閉じ込めて、お互いにすり合わせて、相手の背景をできるだけ聞き取ることが必要である。

様々な多様性があるが、そこには一つの命がある。このことが国際性ということである。これを小学生から大学生まで育てていきたい。これこそ、SGH の教育的意味であると思う。

文部科学省も、ここまでできるというモデルを出していく。どの学校でやれることではないが、ヒントになる。

人類が同じように手をつないで生きていくために、具体的にどういう活動を行うかは、それぞれの学校のやりようがある。無理してはいけない。でも、この４項目は共通すべきポイントである。様々なヒントを得て、輪が広がっていくといいと思う。

2018年度第3回SGH運営指導委員会

日時：2019年2月23日（土）16:00～16:50
会場：理事室
参加者：
＜運営指導委員＞ 梶田叡一 桃山学院教育大学学長・米田伸次 日本ユネスコ協会連盟顧問
・朝野富三 宝塚大学特任教授
＜関西創価高校＞ 武田　豊 学園長・杉本規彦 校長・大月　昇 副校長
千葉一夫 参事・桝田尚之 参事・小山　弘 教諭
＜管理機関代表＞ 太田総一郎 創価教育センター長・中西　均 副センター長
狩野俊一参事

議事録：
○平和の問題について。日本が第二次世界大戦になぜ負けたか、なぜ戦争が起きたのか、その教訓を生かすことが大事だ。明治の教育は、人間性のないエリート、心なきエリートを育てる教育だったのではないか。そこで得た教訓は、戦後も生かされてはいないのではないかと危惧する。事実、経済でも同じことをしているのではないか。

○関西創価高等学校が、SGHの取り組みを通じて、平和を創造するリーダーを育成していることは、ほんとうにすばらしい。SGHの目標として謳っている「使命感」「共感力」「問題解決への想像力」をどう育てるか。そこが一番重要だ。米田先生がおっしゃっている生徒の変容こそ、その証明となる。生徒に変容をもたらすためにも、まず気づくことだ。そして、わかることだ。意味だったり、時に使命だったり。そこから変化が始まる。

○変化を促すには、「梃子（テコ）」になるものが必要だろう。社会的な課題をどう自分自身に結びつけられるか。他人事ではなく、自分自身の問題にどう関連づけられるのか。自分自身の身近な問題との関連性がわかるようになることだ。身近なところへのまなざしをどう向けていくか。異質なもの（例えば、人、文化、制度）への「理解」、それを受け入れる「受容」、一緒にやっていく「共生」。「理解」と「受容」と「共生」が必要。「分断」と「対立」から「融和」と「連帯」へとどう持って行くか。これが「梃子」になると思う。学園生の特性は、真面目・純粋。それゆえに落とし穴に落ちることもあるかもしれない。そこに気をつけながらどう教育するか。純粋ゆえの危険性がある。エリート教育によくある問題だ。創価学園ならではの価値観の均質性をよくよく踏まえた上での教育が大切だ。

○私学は、地元の学校と感じられることが少ない。地域に根ざし、地域性を広げることだ。また、他校との交流の機会を持つことだ。違う価値観を持つ人との交流を積極的に持つことだ。そして、体験を積むこと。知識だけではなく、体験として持っていることが大事だ。LGBTを探究したプレゼンテーションがあった。男女の役割の違いをどう見ているのか。探究に際しては、他人事として見てやっているのかもしれない。しっかりとグループ内で話し合ったのだろうか。ボランティアに積極的に参加するなど、学校の外で、さまざまなことに触れる機会を設けることが必要なのではないだろうか。

○SGH もあと一年となった。仕上げの一年だ。この後をどうするのか。これまでの成果を踏まえ、開発したプログラムを持続可能なものにすることが大事だ。文部科学省が SGH を設けた狙いは、時代の変化に対応した人づくり（グローバルリーダーの育成）。その教育を具現する・検証するためのＳＧＨであって、そこで教育を開発し普遍化していく。グローバルリーダー養成の教育の内容、方法。さらにそれを進めていく学校の在り方を探る実験だった。それは大きな成果を挙げることができたと思う。それ故に、次は地域社会への貢献・還元が大事なのではないか。国から助成金が出た限り、期待がかかっている。最後の一年のあり方は、地域社会への貢献を考えることだ。

○ポスト SGH について、意識して取り組むことだ。ESD の拠点校としてのユネスコスクール＝関西創価高校。ESD の今は何か。2005 年から 2015 年までの 10 年間、ESD の取り組みが進められた。現在は、ポスト ESD の時代に入っている。ユネスコは、現在、グローバルアクションプロジェクト（GAP）を展開している。グローバルアクションプロジェクト（GAP）のポイントは何か。これからどのような地域社会を作っていくのかということだ。新しい地域社会を作る人間を育成すること。その一人ひとりの人間がどのような地域を作っていくのか、それはどういう地域か。温かいつながりのある地域にどうすればなるのか。17 項目の SDGs の問題解決を図りながらつながりあい、社会を作っていく営み。これがポスト ESD の方向だ。その役割を担っているのが、ユネスコスクール＝関西創価高校だ。

○関西創価高校の SGH のポイントは、GRIT（探究型総合学習）にある。これが大事だ。全校生徒が参加している。これが大きい。さらに 4 つのキーワード（「環境」「開発」「人権」「平和」）は、2015 年に国連が定めた SDGs の先取りをしている。その学びのポイントは、グローバルイシューに対する理解を深めながら関心を高めている点だ。グローバルイシューとしての SDGs の 17 項目を自分事としてどう捉えていくか。生徒達の問題意識、すなわち自分事として捉えるためにどう行動したのか。ここが評価のポイントだ。17 の項目からなぜこれを選んだのか。私の関心はそこにある。

○過去の取り組みでは、グローバルイシューに対して知識は増えたが、問題解決のためにどう関わりたいと思っているのか、その意識はまだまだだった。生徒の内面に変化が起こり、行動に移すまでには、まだまだギャップがあると指摘した。しかし、今年はかなり改善されたのではないか。子どもに変化を促すためには、調査をするためのアンケート（設問）の内容が大事だ。子どもの内面からうまく引き出すいい質問を考えて欲しい。

○中間研究発表会で 2018 年の前半の取り組みを伺った。その際、「グローバルシチズンシップセミナー」が１８回に及ぶと知った。ここで「シチズンシップ」という表現・概念を使っているところがすごい。「グローバルシチズンシップ」をどう捉えるか。グローバル時代の人材を育成すると言っているが、ユネスコが提起した国際理解教育をベースにしながら、ESD の実践をすることが大事だ。これが、ユネスコスクールの役割だ。ところが、2013 年頃から変化が起こってきた。韓国の潘基文氏が、ユネスコ協同学校の世界会議で、ユネスコの国際理解教育を「シチズンシップ教育」と呼ぼうと提言。「シチズンシップ教育」とは、敢えて言うと、人権、命の尊厳だ。1993 年のパリでの会議で日本が提案したこと、コンセンサスを得たのは「共生」という概念だった。「シチズンシップ教育」とは、「平和」「人権」「民主主義」「共生」のための教育。教育国際提言（ドロールレポート）では、21 世紀の教育のあり方は、「知

ることを学ぶ」「為すことを学ぶ」「共生」「to be＝人間として生きることを学ぶ」。これを踏まえながら、ユネスコが２０世紀の後半から出してきたものが「シチズンシップの概念」。その中で大切にしていることは、人権・命の尊厳だった。ESD の中には、この点がしっかり出ていなかった。持続可能な社会を作るだけだった。しかし、ここで確認された四つの学びを中心に据えることになった。まさに「シチズンシップ教育」こそ、関西創価がやっている教育（世界市民教育）だ。関西創価の教育は、先取りしている。誇りとせよ。

○21 世紀の教育の基本。それは、人間としてどう生きるか（＝to be）。それを支えるのは、学園が取り組んでいる 4 つの枠（「環境」「開発」「人権」「平和」）は、人間としてどう生きるかを問いかけるものだ。世界的な動きに学園の取り組みが重なる。ユネスコが提唱した教育は、人間としてどう生きることを前面に出している。「生命の尊厳」をユネスコが国際的に位置づけた。4 つの柱は、人間としてどう生きるか。今の世界には、ESD に取り組むに当たり、もう一つ必要なものがある。世界は ESD として 5 番目が必要だととらえている。「社会をどう変えていくのか」ということ。世界の問題を自分事として取り組む。そうすることで初めて問題解決に向かう。自分事として取り組む学びは何か。それを促すような教育をどうするのか。21 世紀の学びは、SDGs を扱う以上は、世界の諸問題を自分ごととしてどう捉えているのかが大事だ。そのように向かわせる学びは、どのようなものか。考えて欲しい。

○これらのポスト ESD の学びは、SDGs への取り組み。世界市民教育である「生命の尊厳」「生命の平等性」。これは、SDGs の 17 項目を包括したものだ。「誰も置き去りにしない」。17 項目にみんなが注目。SDGs のカードゲームもできている。しかし、「誰も置き去りにしない」が忘れられている。これが落とし穴だ。これを見直すことだ。ここを押さえながら、ポスト SGH を考えること。これが地域を結び、世界をリードしていくことになる。関西創価が今取り組んでいることについて、胸を張るべきだ。地域・世界へと羽ばたく鍵はここにある。他校が学ぶべきことだ。

○どうやって体験を積むのか。それを重視すること。男女同権の問題。女性が妊娠・出産することをどう見るのか。女性にしかない体験だ。これを抜きにして語ることはできない。女性の場合、これは大きな問題だ。これを前提としないと生まない選択になってしまう。これでは社会は成り立たない。妊娠・出産を代わってあげることはできない。社会で頑張る人こそが、自分事として考えること。

○アクティブラーニングを研究している学者のところにアクティブラーニングを教えてくれと言ってくる学校・教員は熱心だ。しかし問題があることに気づいた。表面的なことに流れ、実感・本音などが見えてこないという点。きれいごとだけではダメだ。元気のよい女子に期待したい。運がいいとか、チャンスがあるだけではダメ。人よりも重荷を背負い、頑張る気概がないとダメだ。リーダーとはそういいうものだ。新学習指導要領で示された学力の三要素〈生きて働く「知識・技能」の習得〉〈思考力・判断力・表現力等〉〈学びに向かう力・人間性等〉に「人間性」と出ている。文部科学省が、「人間性の涵養」と言っている。基礎的な学力を踏まえた上での「人間性の涵養」。これはどういうものか。こだわって考えるべきだ。この学校で学んだことが何になるのか。単なる基礎学力、知識だけではなく、人間性を高めたかどうか。「人間性の涵養」というテーマを関西創価高等学校は、もっと考えて欲しい。

平成27年度指定　スーパーグローバルハイスクール　第4年次

研究開発実施報告書

平成31年3月31日

発行　学校法人 創価学園 関西創価高等学校
〒576-0063 大阪府交野市寺3丁目20番1号
電 話：072-891-0011（代表）
FAX：072-891-0015

印刷　萩原株式会社
〒540-0005 大阪市中央区上町 1-4-15
電 話：06-6761-8555（代表）
FAX：06-6761-8553

